P1447（図139・140）

調査区中央南側で検出された土壙である。溝によって上面が削平されている。長さ2.3m前後、幅0.9mの長方形を呈する平面形で、断面形は箱形といえる。遺構検出面は3.6m付近で、最深部は検出面から0.15mである。埋土は１層であるが、ベースとよく似た黄灰色土が含まれており、埋められた

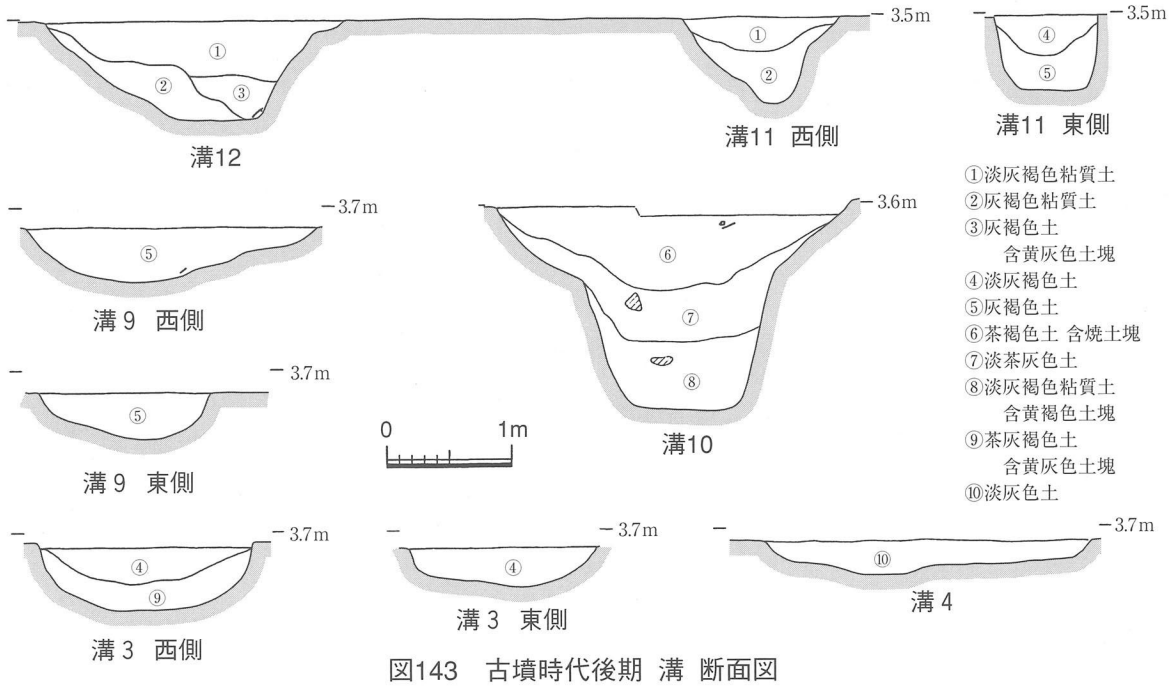


図143　古墳時代後期 溝 断面図

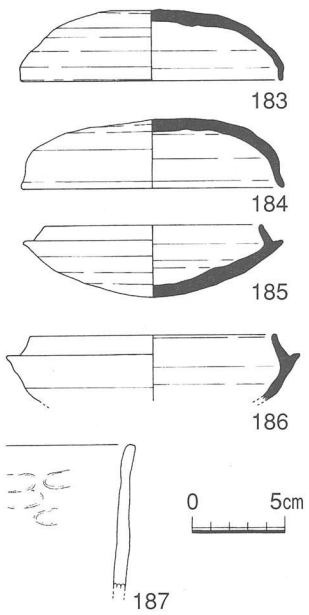


図144　溝３ 出土遺物

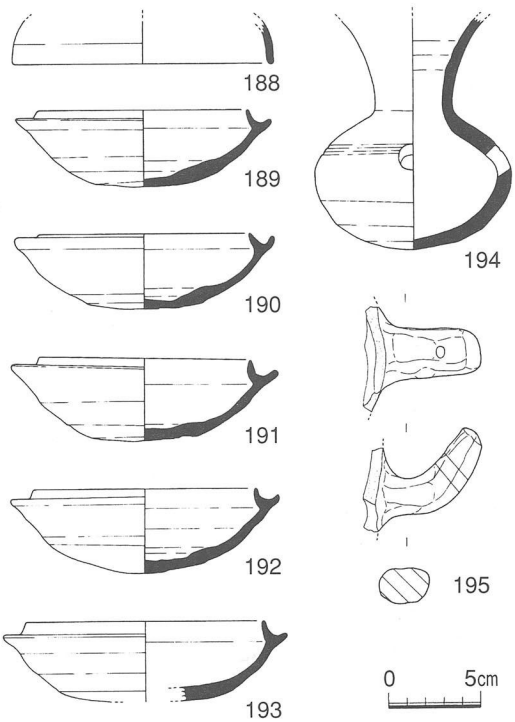


図145　溝９ 出土遺物

ことがうかがわれる。遺構の東端の底面からは須恵器の杯蓋を伏せた状態で2つ重ね、その横に上を向けて1つおいた状態で検出された。本来は3つ重ねていたと推測されるが、いずれにしても意識的に埋納されていたと考えられる。遺構の形状からも、人骨等は残存していなかったが、土壙墓である可能性が高いと思われる。時期は6世紀後半～7世紀初頭である。

P1666（図141・142）

調査区南西コーナー付近で検出された土壙である。径0.6mの円形を呈する平面形で、断面形はほとんど傾斜がなく、直線的に掘り込まれている。遺構検出面は3.4m付近で、最深部は検出面から0.4mである。遺構中央付近は若干窪み状に深くし、その部分を中心に径0.1m前後に小礫を敷き、その上にほぼ完形の須恵器高杯(180)、土師器壺(181)が横倒しで置かれていたような状態で出土した。P1666は溝で区画された空間の中間に位置することからも、境を画する祭祀などの目的で掘られたこともうかがわれる。時期は6世紀末～7世紀初頭である。

溝3（図143・144）

調査区北側を東西に斜め方向に横切る溝である。竪穴住居1・2を切っている。調査区中央に並ぶ掘立柱建物群の北側を画する溝と考えられる。遺構検出面は3.6m付近で、幅1.5～1.7m、深さは検出面から0.3～0.5mである。西側の方が深さが深くなっており、おそらく最も深くて規模の大きい溝10へ水を落とすように設定されていたと推測される。埋土中からは土器などのほかに、馬の上顎と下顎の骨が並んで出土しており、祭祀的な意味が推測させられる。

溝4（図143）

調査区北東コーナー付近で検出した溝である。溝3を切っている。遺構検出面は3.6m付近で、幅2.5m、深さは検出面から0.25mである。遺物は全く出土しなかったが、古墳時代の遺構面で検出したことや、掘立柱建物と方向性が近いことなどから、古墳時代の遺構としたが詳細については不明な点が多い。

溝9（図143・145）

調査区南側で検出した溝である。遺構検出面は3.5m付近で、幅1.4～2.4m、深さは検出面から0.4mである。調査区内では東西方向の溝が溝10へ接続しているものが多いが、溝9は溝10の手前で途切れている。この部分は溝で区画された空間内への出入り口とも考えられる。南側には、溝10を渡るための橋と推測される柱穴が検出されていることも示唆的である。また調査区外になる東側には溝10と平行するような南北方向の溝があり、これが区画の東端を画するとともに、溝9のような東西方向の溝と接続して水を受けていることが予想される。

遺物は須恵器杯蓋(188)、杯身(189～193)、鬶(194)、把手(195)が埋土中から出土した。これらから溝9の時期は6世紀末～7世紀初頭といえる。

溝10（図143・146・147）

調査区西端で検出された南北方向の溝である。調査区中央付近で検出された掘立柱建物群の西側

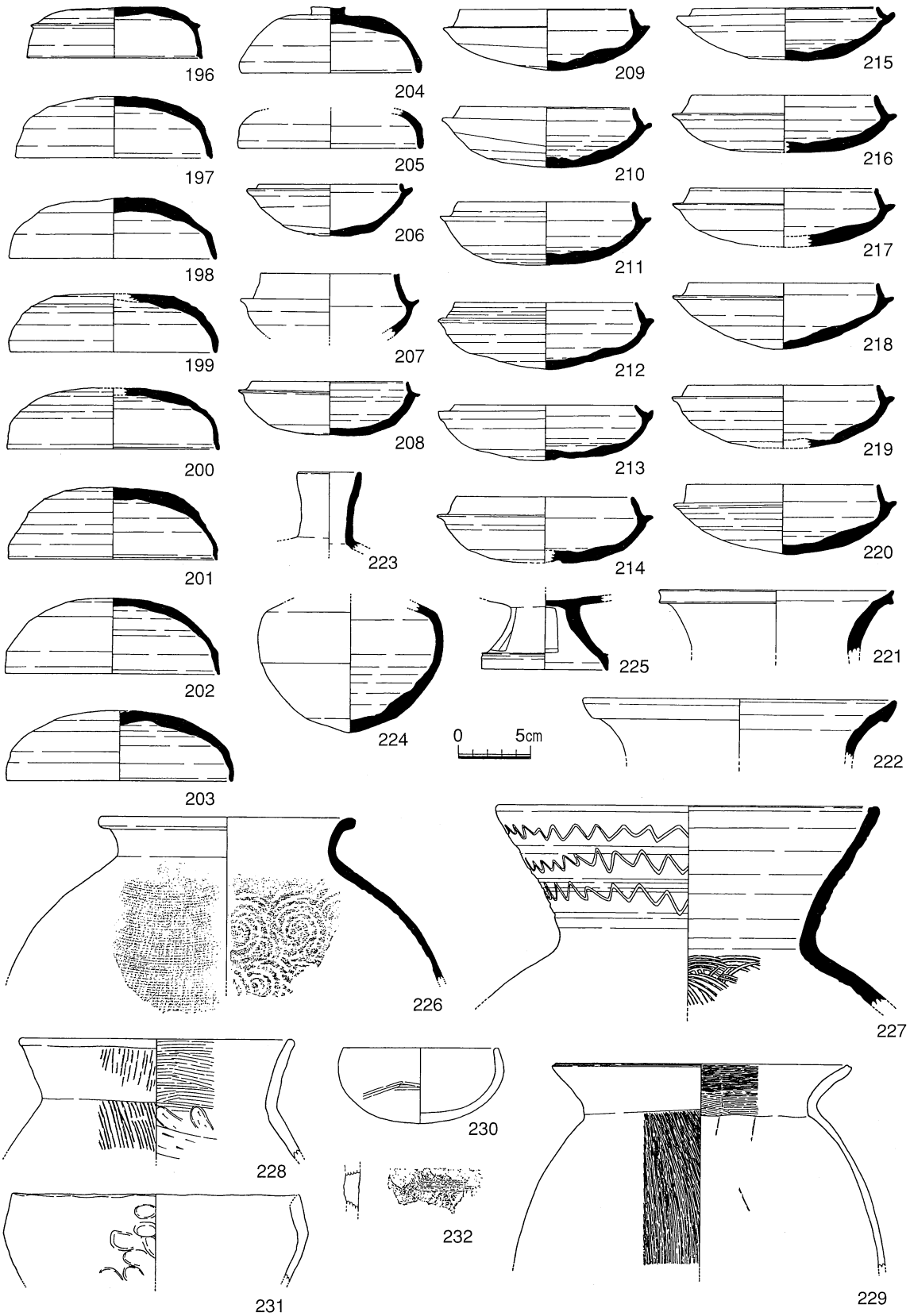


図146　溝10 出土遺物(1)

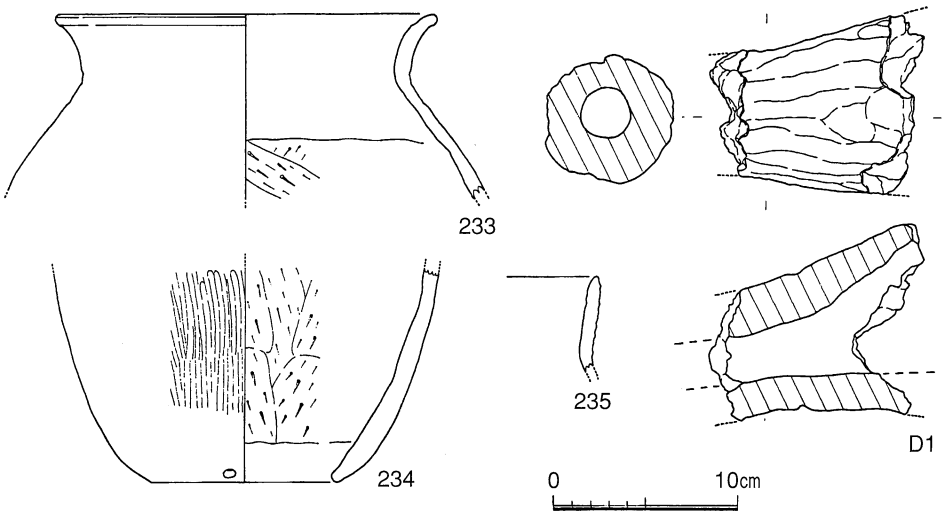


図147　溝10 出土遺物(2)

を画する溝であるとともに、東西方向の溝から落ちる溝を受けて南へ流す役割が考えられる。遺構検出面は3.6m付近で、幅2.8m前後、深さは検出面から１ｍである。底部は幅0.8mで平坦になっている。埋土は３層あり、最下層の⑧層から多くの遺物が出土した。

遺物は、須恵器杯蓋(196～203・205)、有蓋高杯蓋(204)、杯身(206～220)、平瓶(223)、壺(221・222・224)、高杯(225)、甕(226・227)、土師器甕(228・229)、鉢(230)、甑(234)、製塩土器(231・235)、弥生中期の絵画土器(232)、フイゴ羽口(Ｄ１)などである。このほか鉄滓、焼土片なども出土しており、付近で製鉄関連の作業が行われたことがうかがわれる。古い時期の遺物が含まれるが、主体となるものは６世紀末～７世紀初頭である。ただし製塩土器の(231)は、溝検出時に出土したものであり、ほかの土器よりは後出する可能性が高く、絵画土器の(232)は流水文である可能性もある。県北の事例であるが該期に近い時期の土器に流水文が認められる例もある。

溝11（図143・148）

調査区南側を東西に横切る溝である。調査区中央付近にまとまる掘立柱建物群の南側を画する溝で、南北に流れる溝10へ接続している。遺構検出面は3.5m付近で幅0.8m～1.2m、深さは検出面から0.6～0.8mである。埋土は２層あり、遺物の多くは上層から出土した。

遺物は、須恵器の小片と土師器の甕(236・237)、鍋(238・239)である。

溝12（図143・149・150）

調査区南側を東西に横切る溝である。おそらく調査区外で溝10に接続すると推測される。調査区北端に掘立柱建物が認められることから、調査区外北側に展開しているであろうと推測される掘立柱建物群の北端を画する溝である可能性が高い。遺構検出面は3.5m付近で、幅1.5～2.0m、深さは検出面から0.8mである。東側では、幅0.3mにもう一段掘り下げられた二段堀の状況となっている。西側では、幅約1.0mの南北方向の浅い溝によって溝11と連結されており、この部分からは多くの遺物とともに馬の骨が出土した。埋土は３層あり、南側からの流入が想定される堆積状況であった。

遺物は、須恵器杯蓋(240～246・252)、杯身(247～251・256)、堤瓶(266)、甕(255～267)、高杯

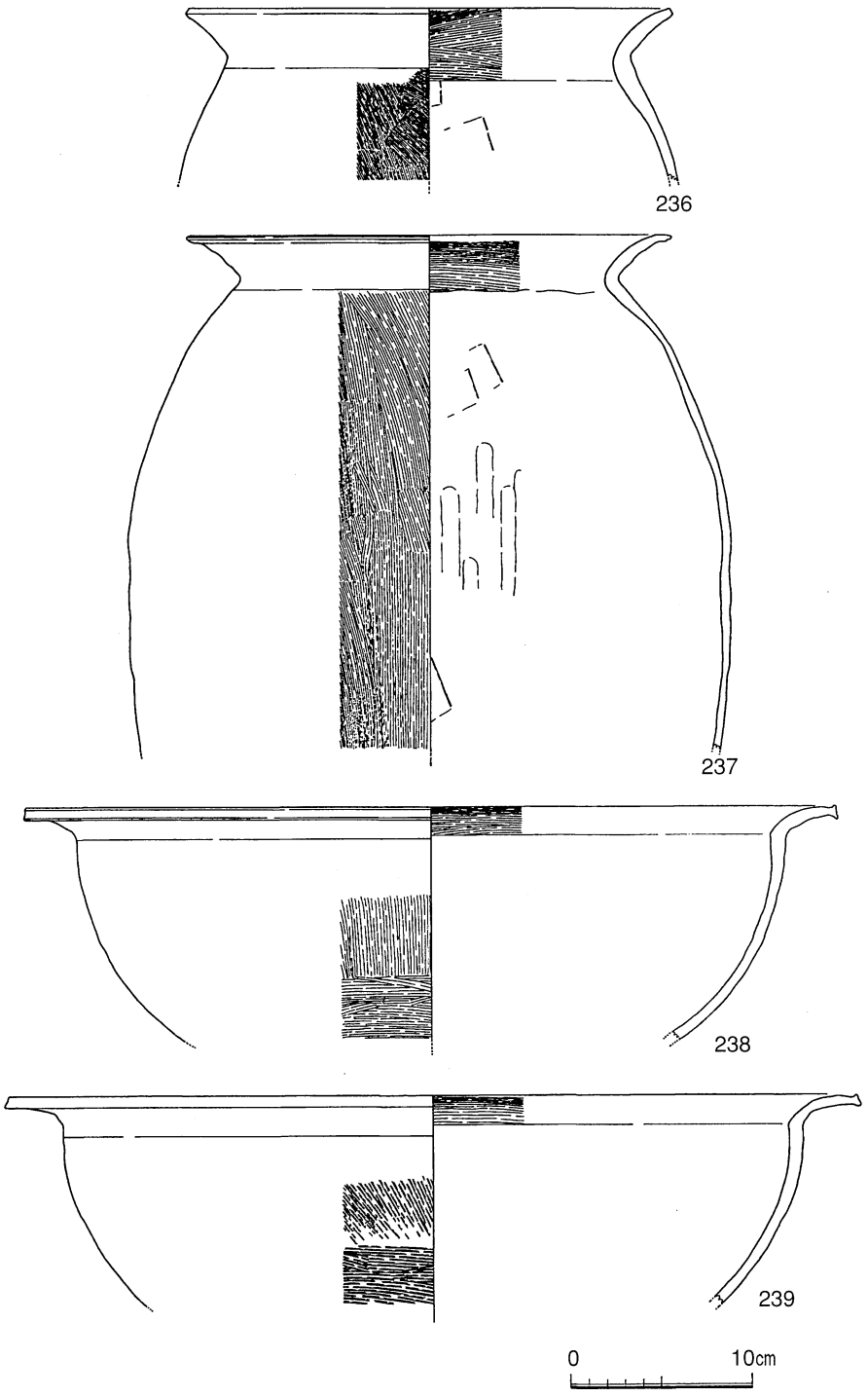


図148　溝11 出土遺物

(268～270)、土師器壺(271)、甕(272・273・275～277)、甑(274)、鍋(278～280)、製塩土器(281)がある。

溝13（図143・151）

調査区南半で検出された溝で、溝９、溝11、溝12を連結させる溝である。遺構検出面は3.5m付近で、幅1.4m～1.8m、深さは検出面から0.2mである。溝９、溝11、溝12よりも浅い。おそらくある程

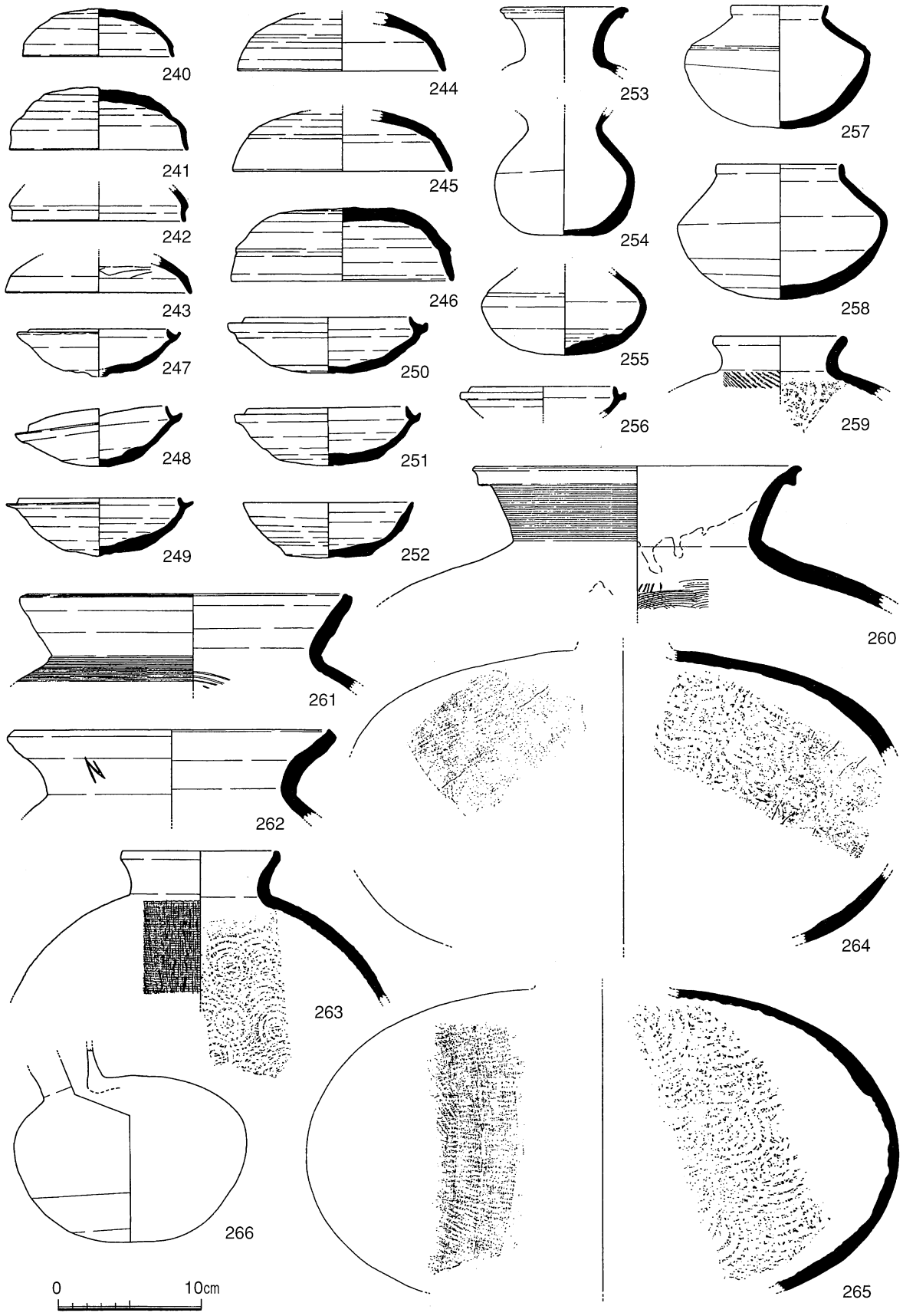


図149　溝12 出土遺物(1)

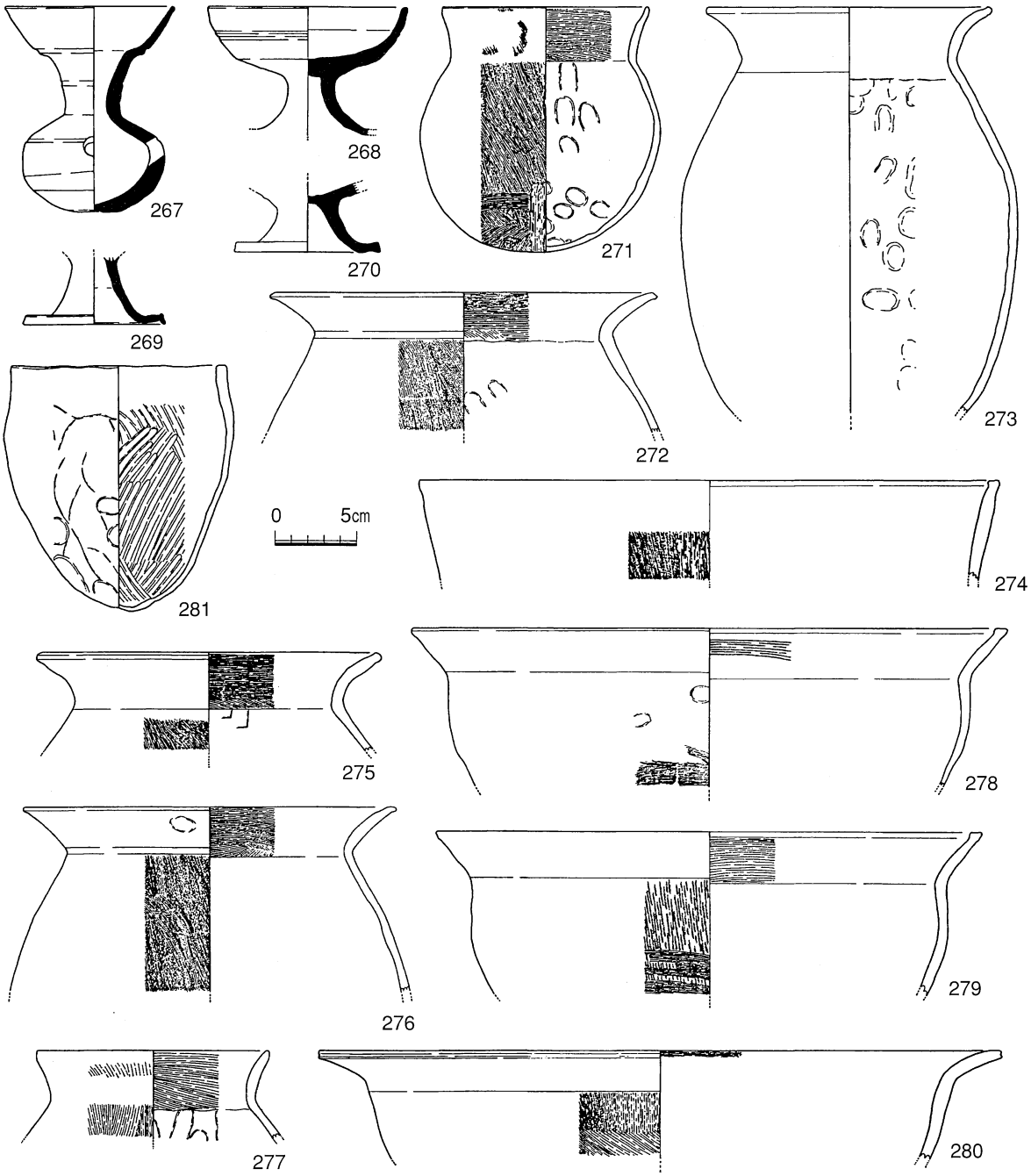


図150　溝12 出土遺物(2)

度以上の水位になると溝13を用いて水を南へ流したのだと考えられる。

遺物は馬の骨とともに須恵器の平瓶(282)が出土した。

溝15（図143・152）

調査区西端で検出された溝で、溝10に連結しており、規模も小さいことから溝10の支水路的な関係が推測される。遺構検出面は3.6m付近で、幅1.0m前後、深さは検出面から0.1mである。

遺物は須恵器の短頸壺(283)である。

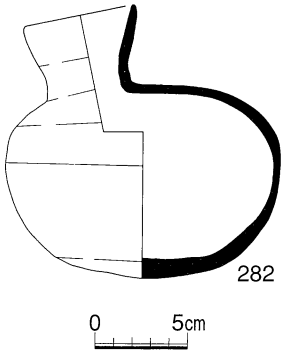


図151　溝13 出土遺物

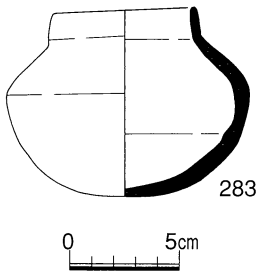


図152　溝15 出土遺物

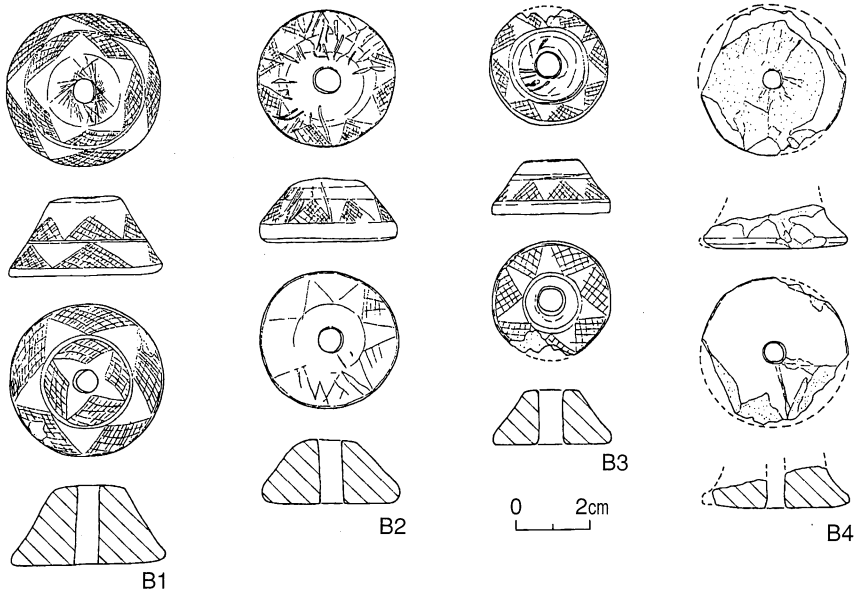


図153　包含層出土遺物(2)

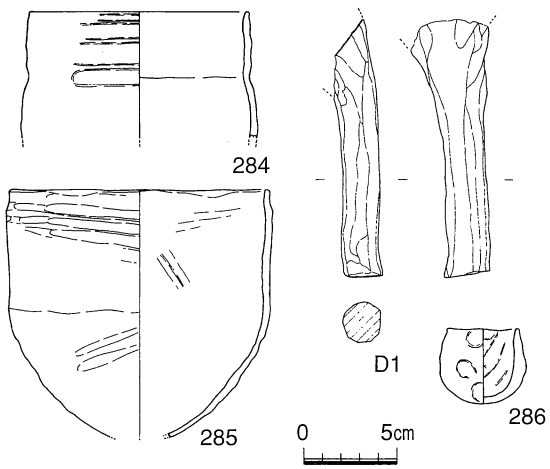


図154　包含層出土遺物(1)

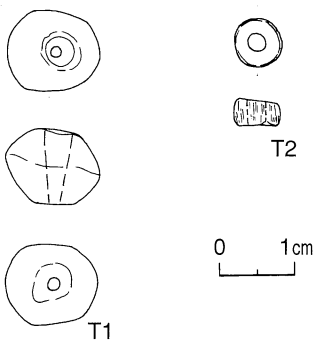


図155　包含層出土遺物(3)

包含層（図153～156）

包含層掘り下げ時、及び遺構精査時には多くの遺物が出土した。一部に古代の時期の遺物が含まれている可能性があるものの、大半は6世紀後半～7世紀にかけてのものと考えられる。まず、(284・285)は製塩土器で、このほか図化できない小片がかなり認められる。（D1）は獣足で、極めてよく似たものが古代の包含層から出土しており、これも古代に属するものである可能性がある。しかし逆に古代の遺構面から出土した獣足が該期のものである可能性もある。(286)は手ずくねである。石製紡錘車は4点（B1～B4）が出土した。（B1）は直径4.2cm、厚さ2.1cmで、側面と底面に鋸歯文を2段に施す。（B2）は直径3.7cm、厚さ1.6cmで側面と底面に鋸歯文を施す。（B3）は直径3.2cm、厚さ1.5cmで側面と底面に鋸歯文を施す。（B4）はかなり破損しているが、直径4.0cm前後に復元され

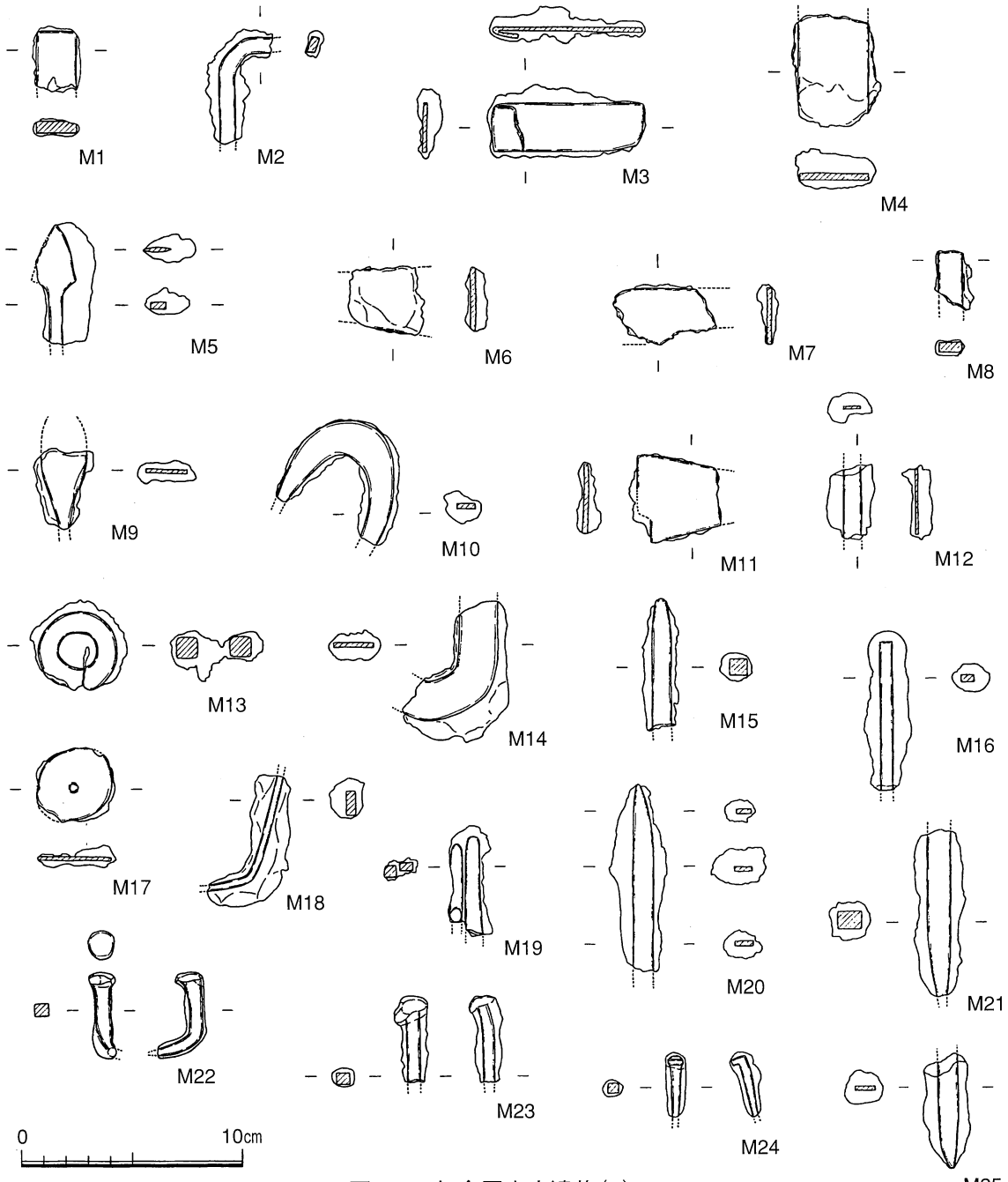


図156　包含層出土遺物(4)

る。施文は施されていない可能性が高い。この4点は豊島編年(豊島2001)の第Ⅲ期に属し、遺構面の時期とも矛盾しない。(Ｔ１)は水晶製の算盤玉で、表面は使用のためかかなり稜線が鈍くなっている。(Ｔ２)はガラス製丸玉で、濃いブルーの発色である。(Ｍ１～M25)は鉄器である。ほとんどが断片であるため、どのような形状になるのか不明なものが大半であるが、鏃(Ｍ５・Ｍ９)や鎌(Ｍ６・Ｍ７・M11)、鋤先(Ｍ３)、紡錘車(M17)などの形状が比較的明確なものも含まれる。そのほか馬具の一部(M13)と思われるものもある。截断痕跡についても観察してみたが、ほとんどが鉄錆に覆われているため明確なものはなかった。このほか鉄滓もかなりの量が出土している。

5　弥生時代中・後期（図158)

弥生時代の遺構は調査区全体に広がっており、上面の遺構密度を考えると、当初はかなりの遺構数があったと推測される。地形的には全て微高地部であり、そこを掘削した溝群に挟まれるように居住域が展開していたといえる。ただそれらの溝群の性格については、居住域を区画するといったものと考えるよりも、水田の開発に用いた溝とすることの方が妥当であろう。地形的に高位部のより生産性や安定度の高い水田の確保を目的に掘削されたのであろう。

竪穴住居４（図157・159・160)

調査区北東コーナー付近で検出された竪穴住居である。３/４以上は調査区外へ出るため、全形は不明であるが、径５～６ｍほどの円形の平面プランである可能性が高い。焼土などの散布状況が稀薄であるものの床面には炭化材が認められることから、焼失家屋と考えられる。遺構検出面は3.6m付近で、床面最深部までの深さは検出面から0.16ｍほどである。柱穴は２つ検出され、いずれも径0.2m前後、柱痕跡から柱の径は0.1ｍである。壁帯溝は途切れながらも外周をめぐっており、幅0.2m、床面からの深さ0.05m前後である。竪穴住居の中央付近に相当する位置からは、長さが1.4m、幅0.4ｍ以上の平面が長楕円形で、床面からの深さが0.4ｍの箱形の断面形の土壙ＰＣが検出された。土壙埋土は２層であるが、いずれからも土器が多量に出土した。床面直上からも土器が若干出土したが、図化できるものはＰＣから出土したものだけであった。

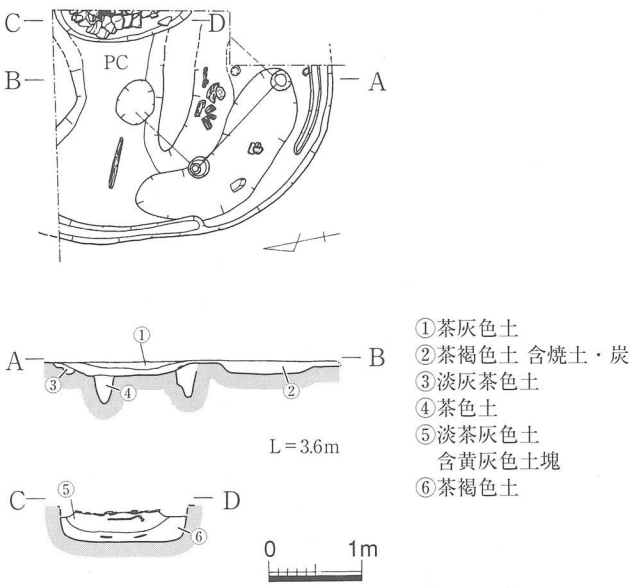


図157　竪穴住居４　実測図

遺物は水差し形土器(287)、鉢形土器(288)、甕形土器(289～291)、底部(292・293)、壺形土器(294)である。後期初頭の時期といえる。

竪穴住居５（図161～163)

調査区北側で検出された竪穴住居である。長径4.6m、短径4.0ｍの長楕円形気味の平面形を呈する。

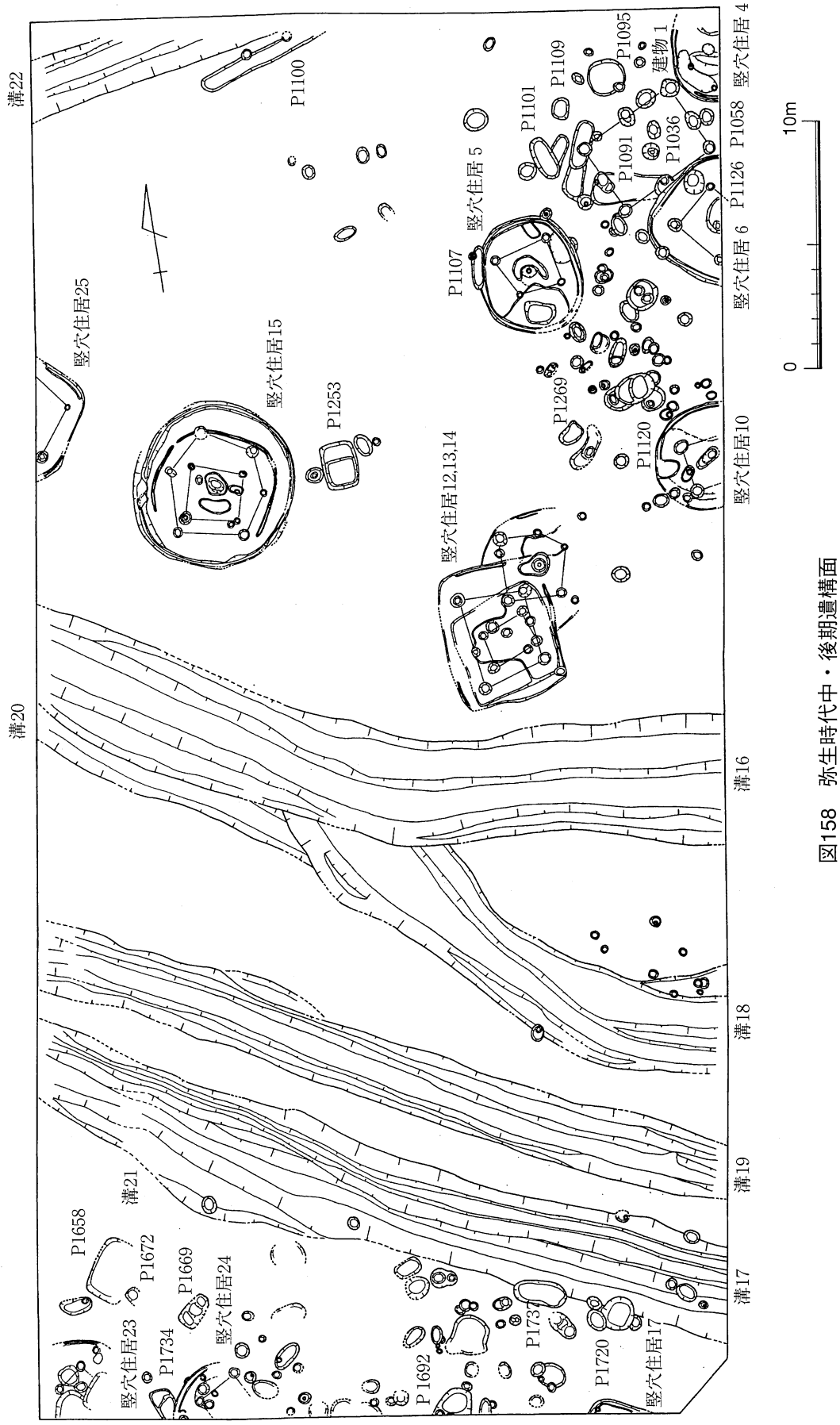


図158　弥生時代中・後期遺構面

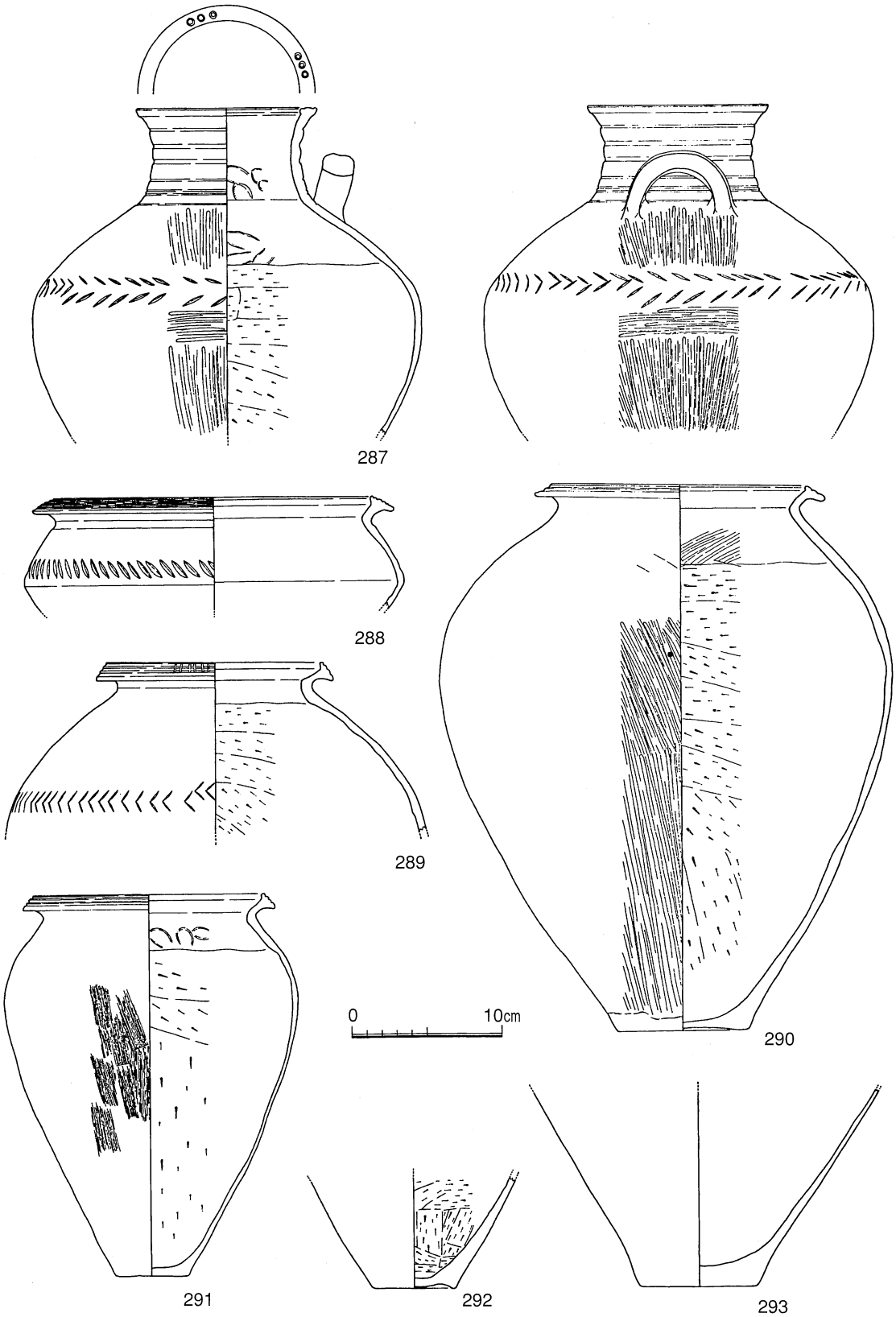


図159　竪穴住居４　出土遺物(1)

遺構検出面は3.6～3.7ｍで、床面最深部の深さは検出面から0.1ｍ前後である。外周には幅0.1～0.2ｍ、床面最深部の深さは検出面から0.1ｍ前後である。外周には幅0.1～0.2ｍ、床面からの深さが0.05ｍほどの段があり、さらに中央ピットＰＡの北半も幅0.2ｍ、高さ0.03ｍほどの高まりが削り残してある。その東側と西側には床面が被熱を受けた焼土面があり、火所と考えられる。柱穴は４つで、径0.2～0.4ｍ、深さは床面から0.6ｍ前後である。断面観察で柱痕跡が認められるものがあることから、柱の径は0.15ｍほどといえる。竪穴住居内中央南端には長さ1.2ｍ、幅0.8ｍの台形気味の平面形を呈し、床面からの深さが0.3ｍで断面箱形のＰＢがあり、その内部東端からは完形品を含む、多くの土器と犬頭大の角礫が出土した。おそらく意識的に埋納されていたものと考えられる。

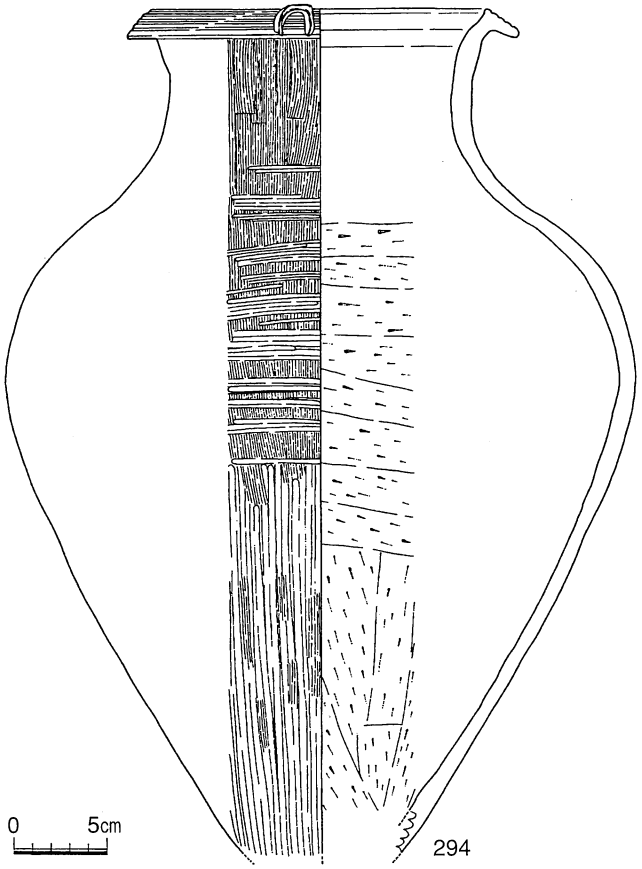


図160　竪穴住居４　出土遺物(2)

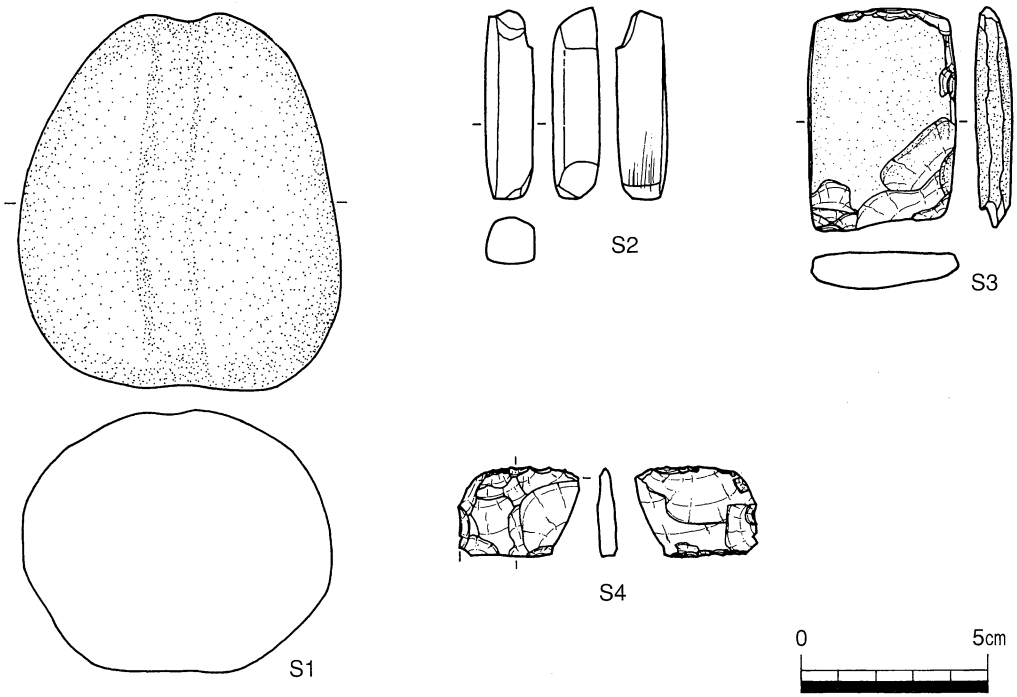


図161　竪穴住居５　出土遺物(1)

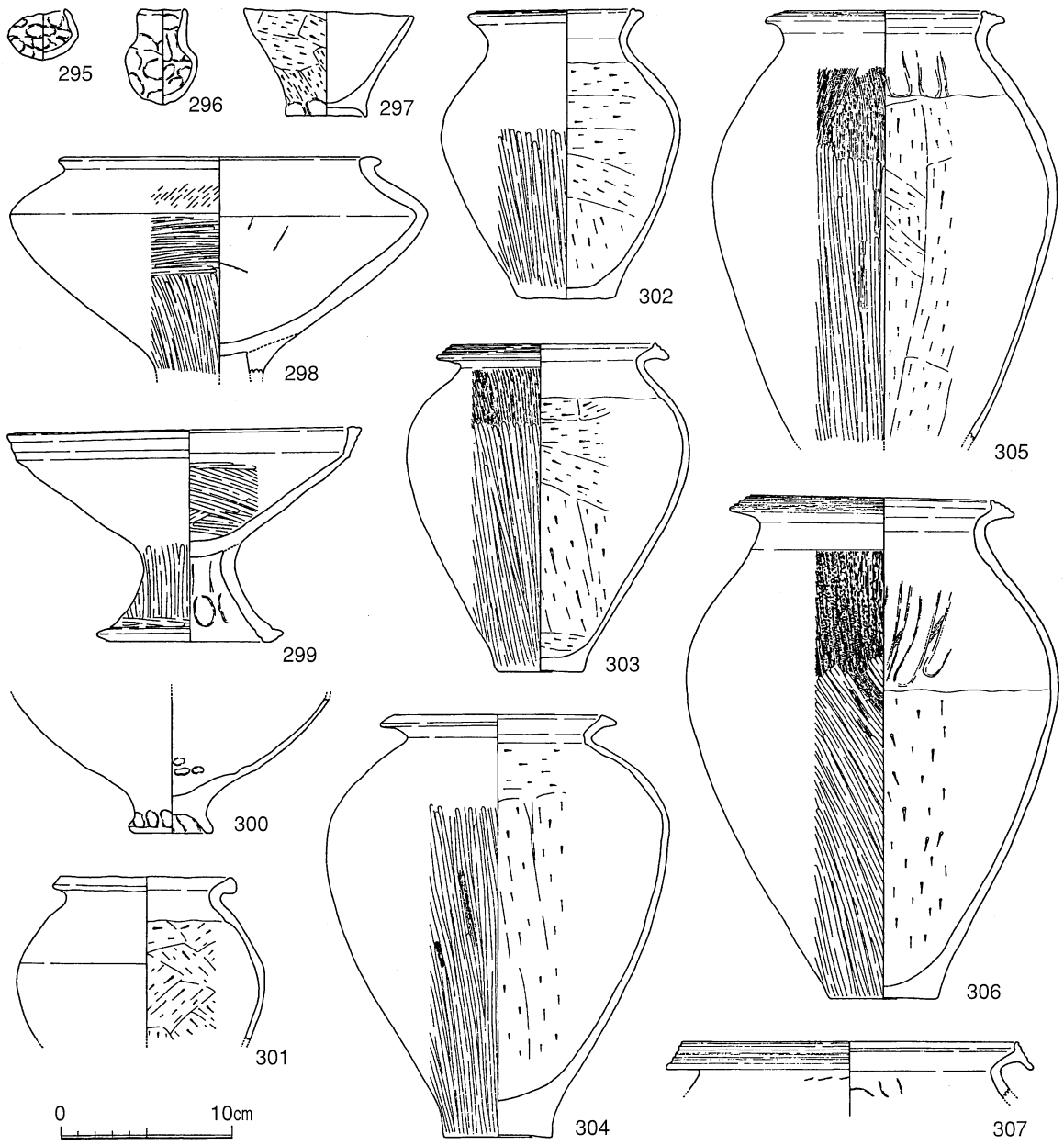


図162　竪穴住居５　出土遺物(2)

遺物は埋土からは手ずくね土器(295)、甕形土器(307)、床面からは手ずくね土器(296)、石錘(Ｓ１)、柱状片刃石斧(Ｓ２)、扁平片刃石斧(Ｓ３)、楔形石器(Ｓ４)が出土した。ＰＢからの出土は鉢形土器(297・298・300)、壺形土器(302)、甕形土器(301・303～306)である。これらの時期は後期初頭である。

竪穴住居６（図164・165）

調査区北東コーナー付近やや南側で検出された竪穴住居である。１/３以上が調査区外へ出るものの、一辺4.6mの隅丸方形の平面形が推測される。外周には幅が0.1～0.18mの壁帯溝がめぐっており、深さは床面から５cmほどである。遺構検出面は3.6m付近で、床面最深部までは12cmである。柱穴は３つ検出され、径0.2～0.6m、深さは床面から0.5mである。柱痕跡から径0.18mの柱が想定される。

住居中央付近には長さ1.0m前後の長楕円形を呈する土壙と、さらに径0.4m、深さ0.2mほどの柱穴状の落ちがあり、半分以上が調査区外へ出るため明確でないが、いわゆる中央ピットである可能性が考えられる。

遺物は西側の床面上でまとまって出土した。高杯形土器(308)、壺形土器(309)、底部(311)、器台形土器(312)である。また柱穴であるＰＢからも高杯形土器(310)が出土した。時期は後期初頭である。

竪穴住居10（図166～168）

調査区北東コーナーから南側中央寄りで検出された竪穴住居である。東半は調査区外へ出るため全形は不明だが、径4.2mの円形の平面形が推測される。外周には幅0.18m前後の壁帯溝がめぐっているが、南側では明瞭でなくなる。遺構検出面は3.7m付近で床面最深部までは0.12mほどである。住居中央付近は舌状に４cmほど低くなっており、周囲にベッド状遺構を削り出しているようにもみえる。柱穴は２つあり、径0.4～0.5m、深さは床面から0.4m前後である。柱痕跡から、径0.18mほどの柱が想定される。住居中央には長さ1.1m、幅0.4mの隅丸長方形の平面形で、東側が柱穴状に深くなる土壙が検出された。最深部の深さは床面から0.4mである。いわゆる中央ピットと考えられる。

遺物は床面から高杯形土器(314)が、埋土から甕形土器(313)、高杯

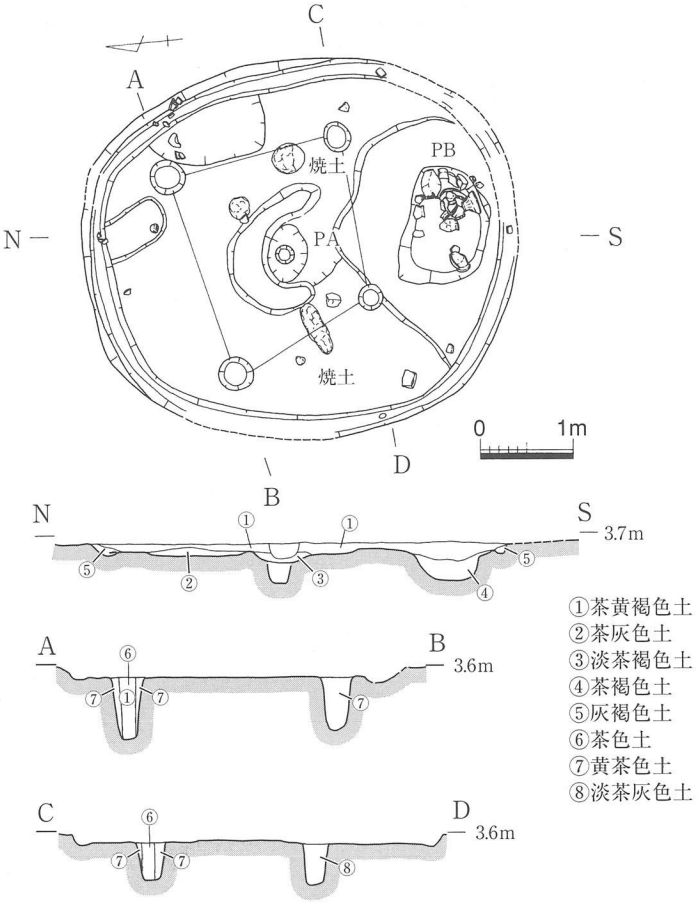


図163　竪穴住居５　実測図

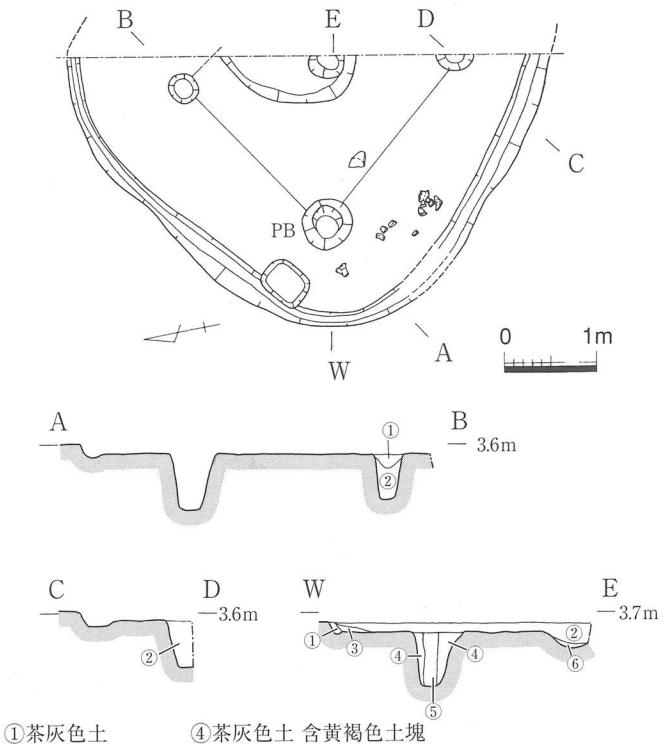


図164　竪穴住居６　実測図

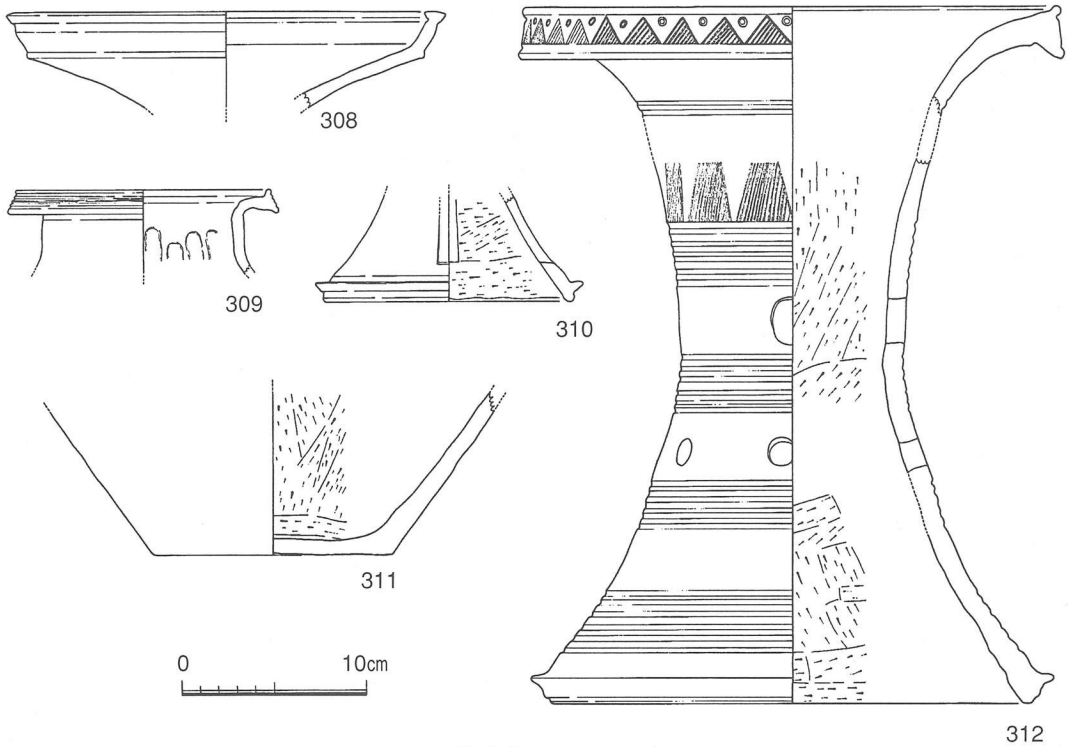


図165　竪穴住居６　出土遺物

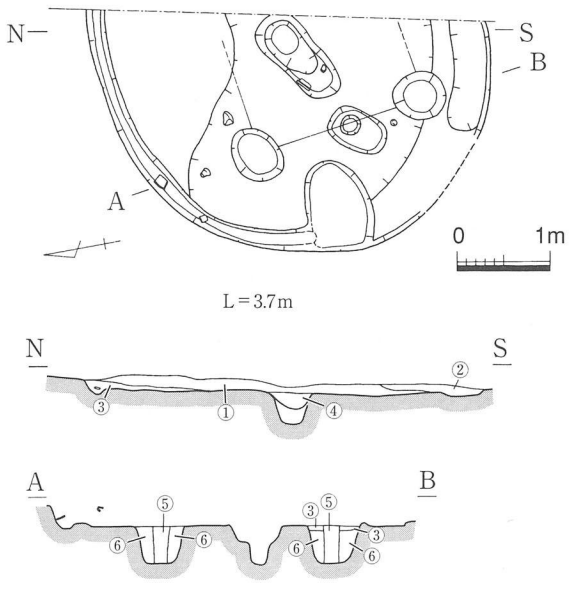


図166　竪穴住居10　実測図

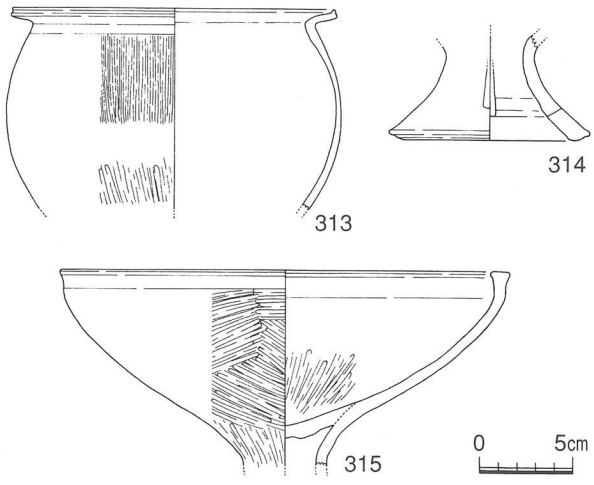


図167　竪穴住居10　出土遺物(1)

形土器(315)、サヌカイトの剥片(Ｓ５・Ｓ６)が出土した。

竪穴住居12・13・14（図169～173）

調査区中央東側で検出された竪穴住居で、その位置で古墳時代の竪穴住居が複数切り合っていた

ことなどから、遺構の精査は極めて困難な状況であったが、3軒の住居が切り合っていることが確認できた。しかしながら、遺物は確実に竪穴住居14の床面上で出土した石器3点（S7～S9）以外は、分離して取り上げることができなかった。切り合い関係からすると、竪穴住居12→竪穴住居13→竪穴住居14の順になるといえる。遺物の時期幅から中期中葉～末にかけてと考えられる。

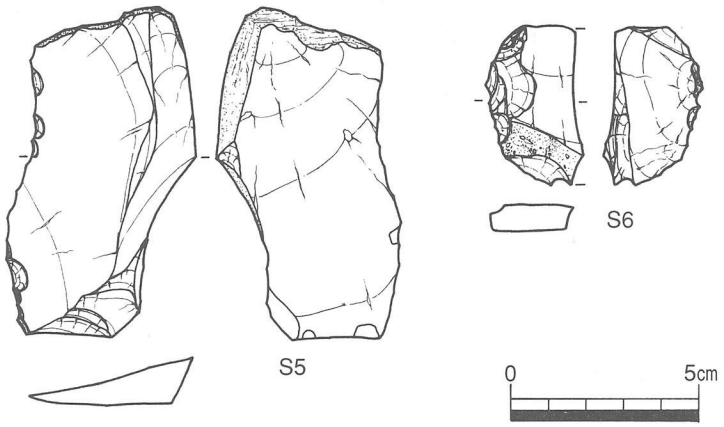


図168　竪穴住居10 出土遺物(2)

まず、竪穴住居12は、径4.8mの円形の平面形が想定される。遺構検出面は3.5m付近で、検出面からの深さは0.05mほどである。幅0.1m弱の壁帯溝も一部認められるが、全周するかどうかは不明である。柱穴は5つ検出され、径0.2～0.6mとややばらつきがある。深さも床面から0.2～0.8mと差が大きい。中央付近は長さ1.2m、幅0.8mの長楕円形の平面形で、中央付近が径0.4mの柱穴状にくぼむ土壙が検出され、いわゆる中央ピットと考えられる。その北側は幅0.8m、深さ0.03mほどの溝状に低くなっており、底に角礫と土器の小片が認められた。

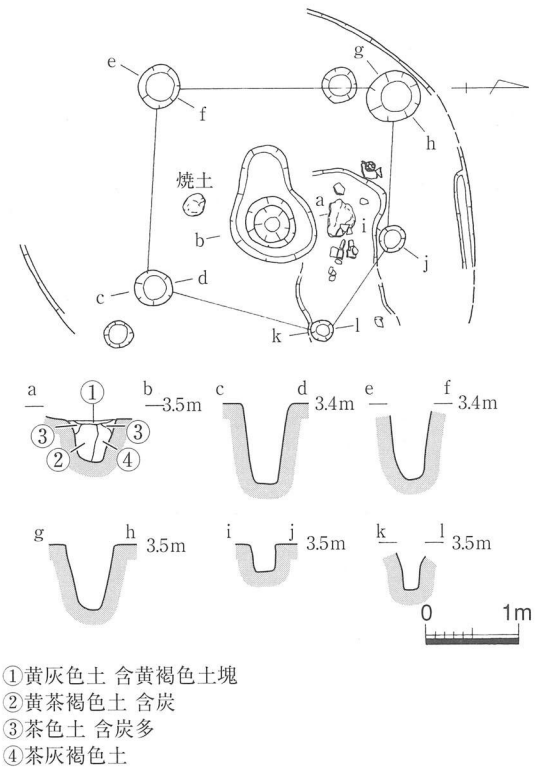


図169　竪穴住居12 実測図

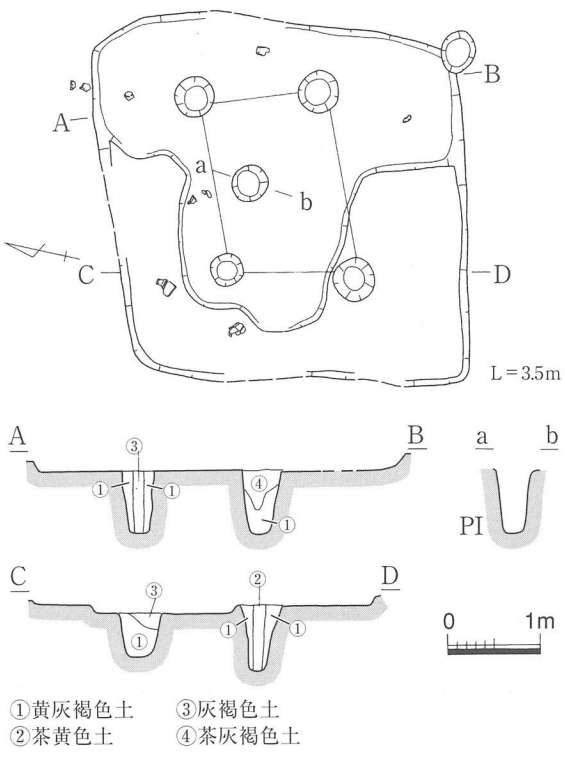


図170　竪穴住居13 実測図

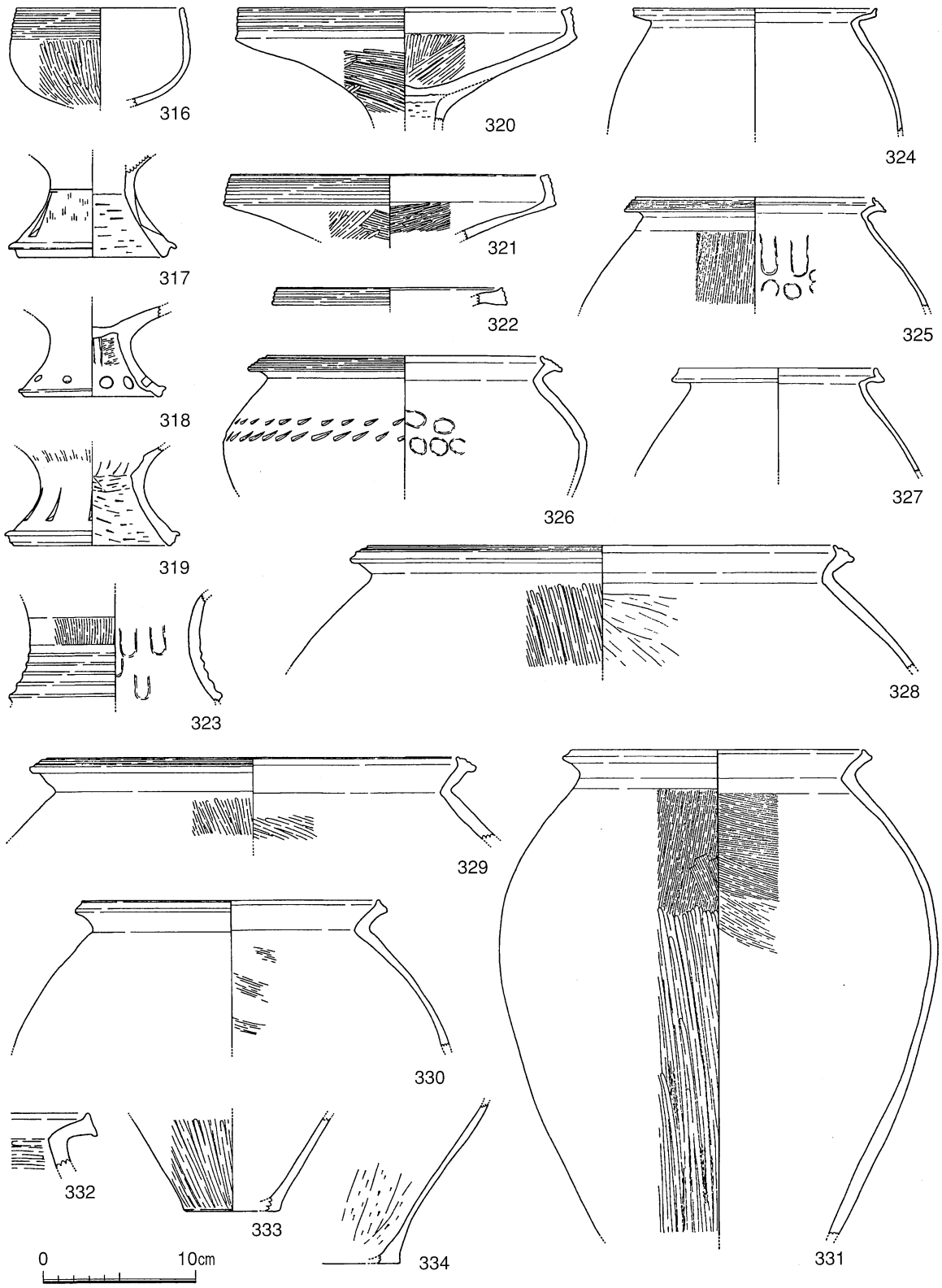


図171　竪穴住居12・13・14 出土遺物(1)

竪穴住居13は一辺4.0mほどの方形の平面形である。遺構検出面は3.5m付近で、床面最深部の深さは検出面から0.2mほどである。住居東半は平面形が凸状に0.05mほど低くなっており、西側はベッド状遺構とでもいうべき段状の平坦面が形成されている。柱穴は4つあり、径0.3～0.4m、深さは床面から0.4～0.7mである。柱痕跡から柱の径は0.06m前後である。中央には中央ピットがあり、径0.38m、深さは床面から0.7mである。

竪穴住居14は長さ5.6m、幅4.4mの長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.6m付近で、検出面から床面最深部までの深さは0.06mほどである。竪穴住居13の基盤層とよく似た黄灰色土で部分的に埋めた後、拡張して竪穴住居14をつくっていると考えられる。柱穴は6つあり、径0.3～0.4m、床面からの深さは0.6～0.8mである。柱痕跡から、柱の径は0.06m前後である。中央には径0.4m、床面からの深さが0.06mほどの柱穴状の遺構があり、かなり浅いものの一応中央ピットと考えられる。周囲には途切れながらも幅0.08m前後、床面からの深さが

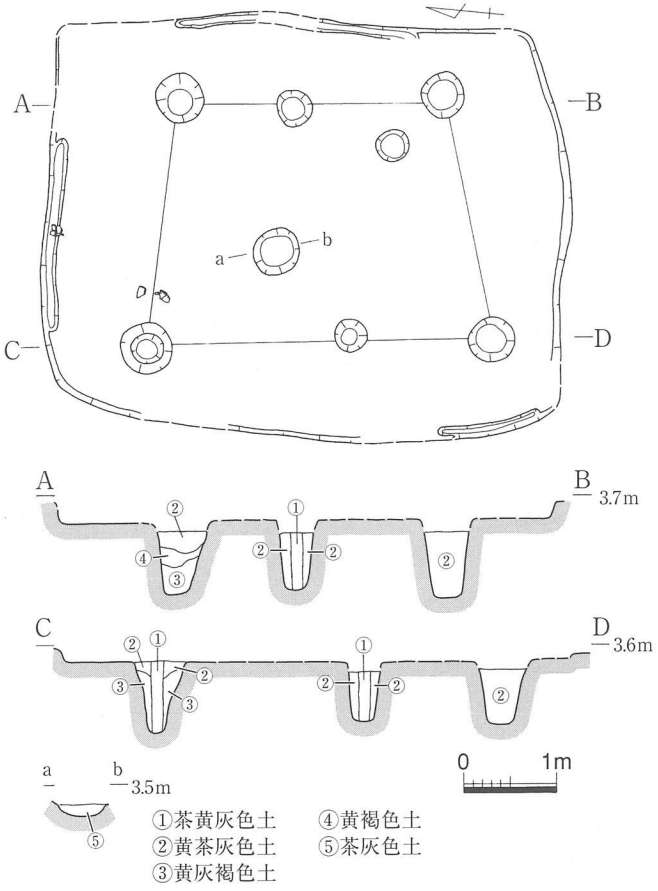


図172　竪穴住居14 実測図

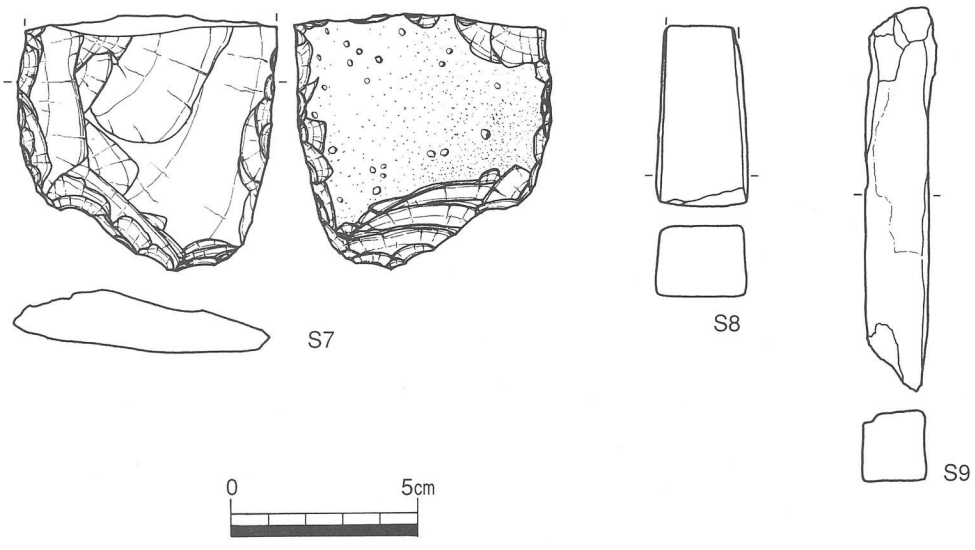


図173　竪穴住居14 出土遺物

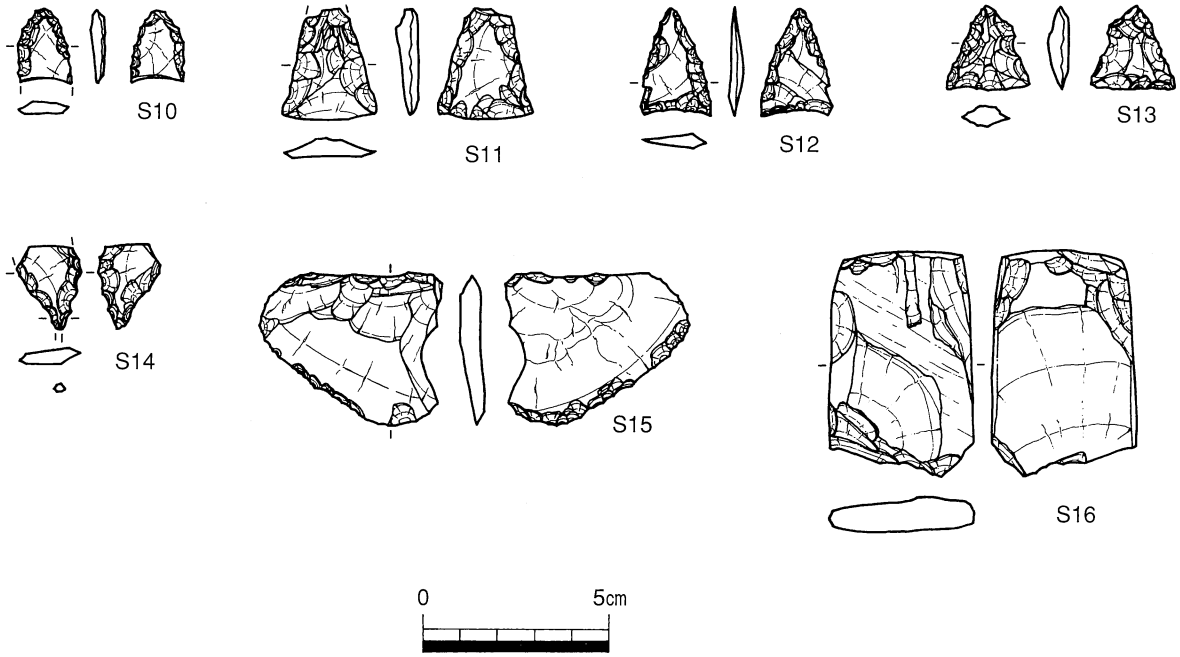


図174　竪穴住居12・13・14 出土遺物(2)

0.02mほどの壁帯溝が認められる。この住居の床面からは、石鏃(S 7)、砥石(S 8)、柱状片刃石斧の未製品(S 9)が出土した。

竪穴住居12・13・14から出土した遺物は、高杯形土器(316～321)、壺形土器(322・323)、甕形土器(324～332)、底部(333・334)、石鏃(S 10～S 13)、石錘(S 14)、スクレイパー(S 15)、扁平片刃石斧(S 16)があり、ほかにサヌカイトの剥片・砕片が多数出土した。これらの時期は中期後葉～末の時期である。

竪穴住居15（図175～179）

調査区中央西側で検出された竪穴住居である。径6.8mの円形の平面形を呈する。遺構検出面は3.7m付近で、床面最深部までの深さは0.4mである。壁帯溝は二重にめぐっており、柱穴もそれに対応することから、径4.6mの4本柱の住居を径6.8mの6本柱の住居に拡幅したといえる。最初の竪穴住居は、柱穴の径が0.2～0.3m、深さは床面から0.4～0.6mである。柱痕跡から柱の径0.06mほどの大きさといえる。住

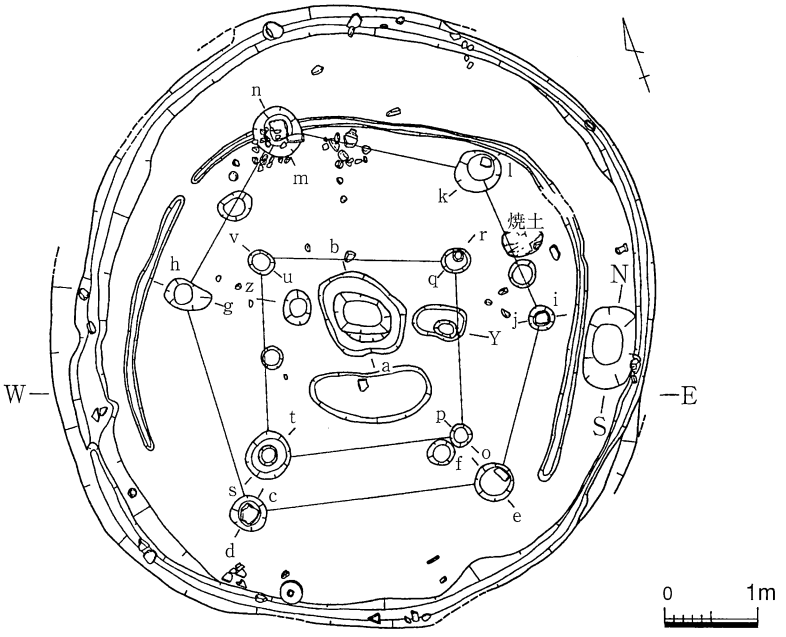
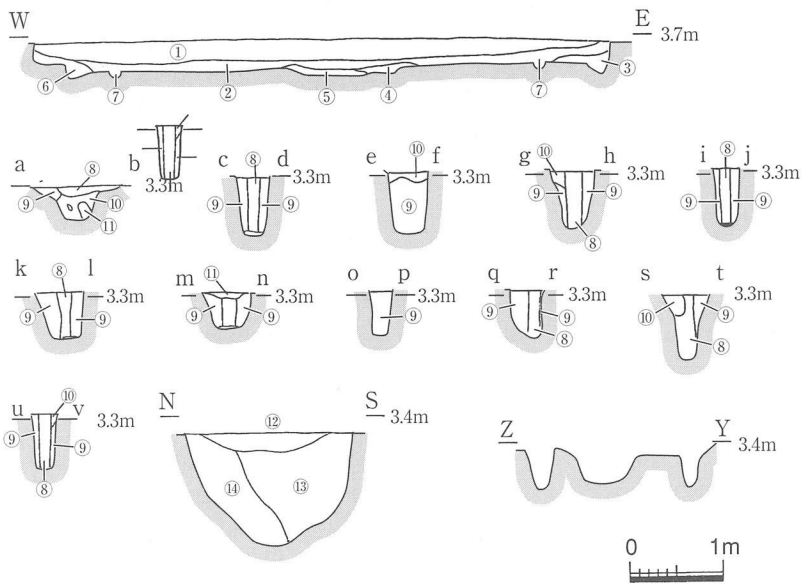


図175　竪穴住居15 実測図(1)

居中央には径0.2mの比較的小規模な柱穴状のピットに挟まれて、長径1.0m、短径0.8mの長楕円形を呈する土壙があり、いわゆる中央ピットといえる。中央ピットは1つだけしか認められないことから、拡幅時も同じピットが使用されたと考えられる。拡幅時の竪穴住居は柱穴の径が0.2～0.6mであり、柱は柱痕跡から径0.06mほどの大きさといえる。ほとんどの柱穴の底には平石が根石として置かれている。中央ピットの東側には床面まで赤化するような焼土塊があり、火所と考えられる。また、南東端部には壁帯溝に沿うように、長径0.9m、短径0.5mの長楕円形を呈する、深さが1.2mの土壙が検出された。住居の入口に関係する遺構との想定もおこない、周囲の床面や壁面等を精査したが、性格を明らかにすることはできなかった。しかしながら、住居の棟の中軸線上にあり、しかもそのラインに柱穴が並ぶことからも、住居施設に関係したピットと考えられる。



①灰褐色土
②灰褐色土 含黄褐色土塊
③黄灰褐色土
④灰色土
⑤炭多
⑥黄茶灰色土
⑦灰黄褐色土
⑧灰褐色土 含炭
⑨淡灰色土
⑩灰色土 含黄灰色土塊
⑪暗灰色土
⑫淡黄灰色土
⑬淡黄褐色土
⑭黄褐色土 含炭多

図176　竪穴住居15 実測図(2)

遺物は埋土から若干の土器片が出土したが、大半は床面上から出土した。壺形土器(335・341)、鉢形土器(339・340)、高杯形土器(342～349)、底部(336～338・351)、甕形土器(350・352～359)、分銅形土製品(D1・D2)、石鏃(S17・S18)、楔形石器(S19)、サヌカイトの剥片・砕片(S20・S21)が多数出土した。これらの時期は後期初頭である。

竪穴住居17（図180）

調査区南東コーナー付近で検出された竪穴住居である。大半は調査区外へ出るため、詳細は不明で、一辺2.0m以上の隅丸方形の平面形が推測される。遺構検出面は3.6m付近、床面最深部までの深さは0.12mである。外周には幅0.2m、床面からの深さが0.04mの壁帯溝がめぐる。

遺物は微細な土器片が埋土から出土したのみである。

竪穴住居23（図181）

調査区南西コーナー付近で検出された竪穴住居である。大半が調査区外へ出て、しかも残存状態

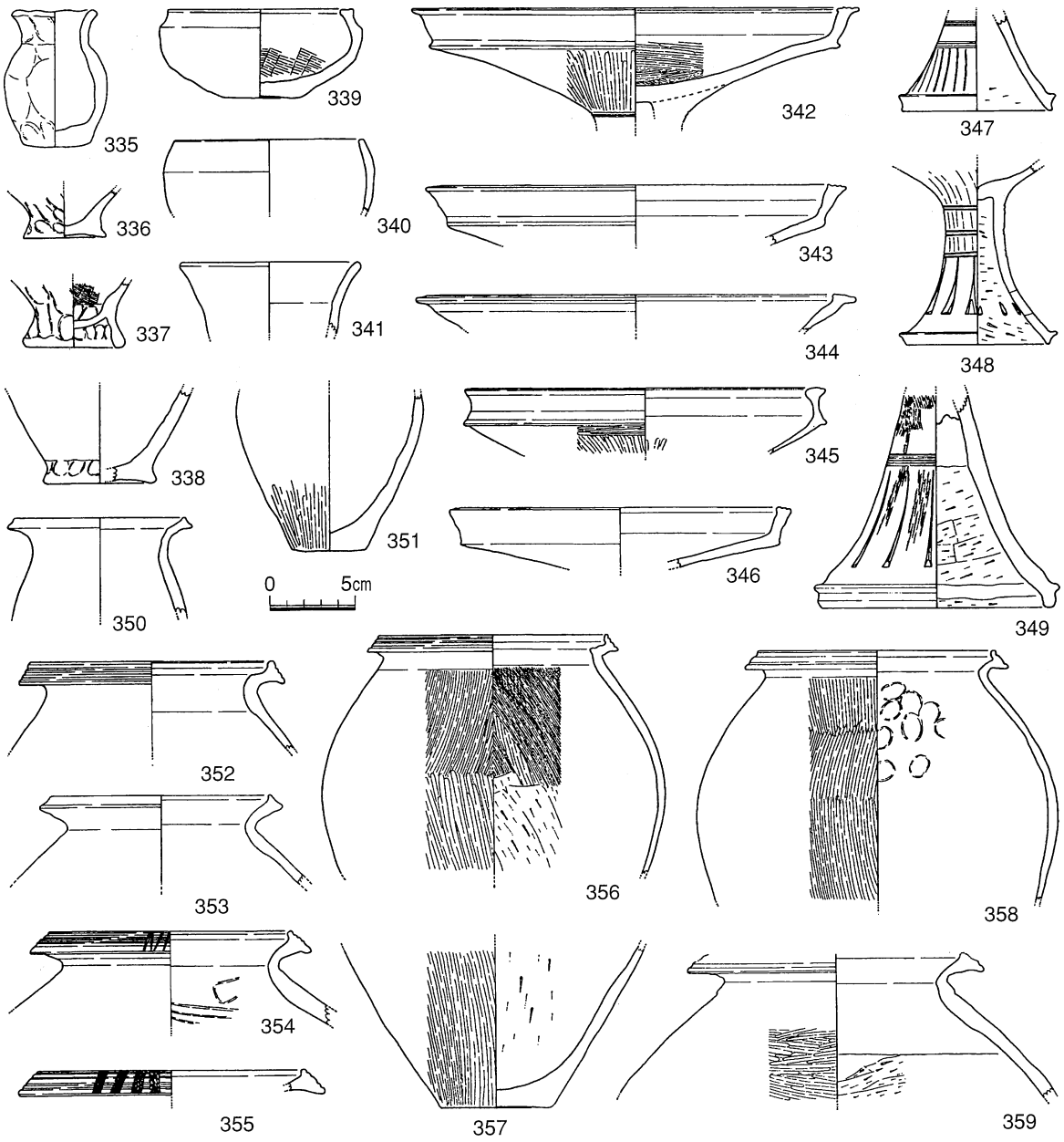


図177　竪穴住居15 出土遺物(1)

もよくないため、全形は不明だが、隅丸方形、あるいは円形の平面形になると推測される。遺構検出面は3.6m付近で、床面最深部までの深さは0.05mほどである。東側の床面上には径0.4m、短径0.2mの長楕円形を呈する焼土面があり、火所と考えられる。また、外周には幅0.06m、床面からの深さが0.04mの壁帯溝がめぐっている。柱穴が2つ検出され、径0.4m前後の円形で、床面からの深さは0.3～0.4m、柱の大きさは柱穴痕から径0.06mである。

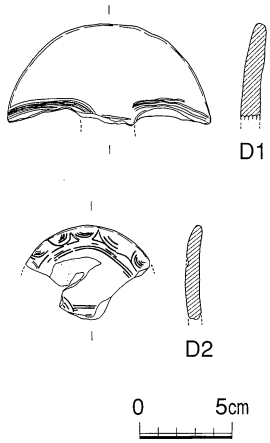


図178　竪穴住居15 出土遺物(2)

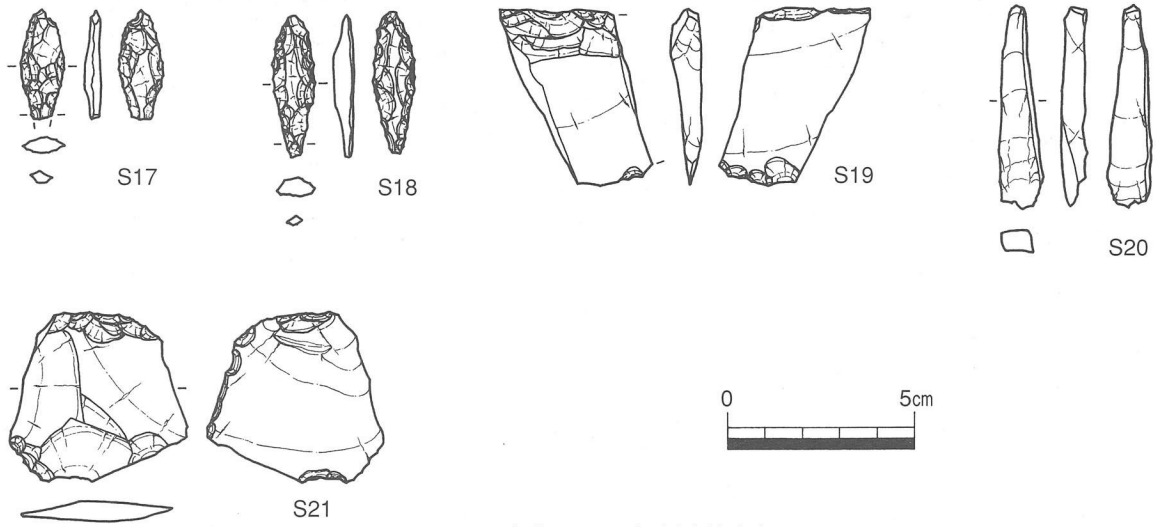


図179　竪穴住居15 出土遺物(3)

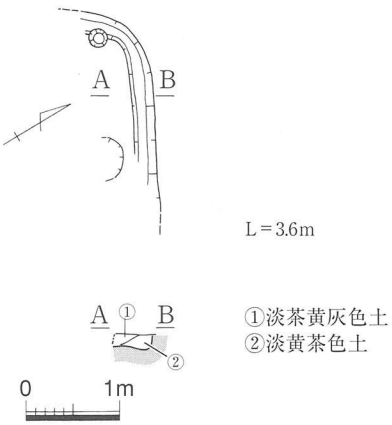


図180　竪穴住居17 実測図

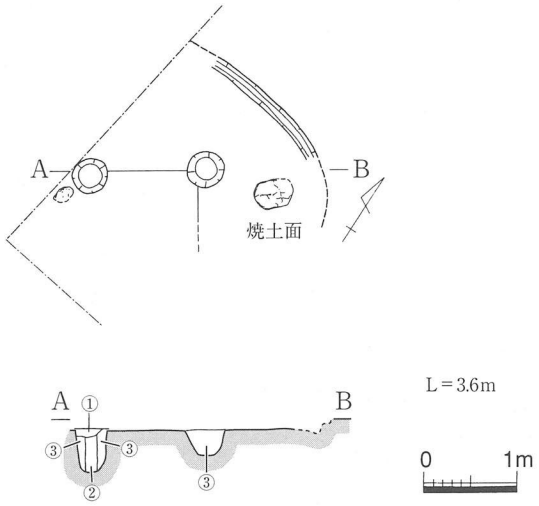


図181　竪穴住居23 実測図

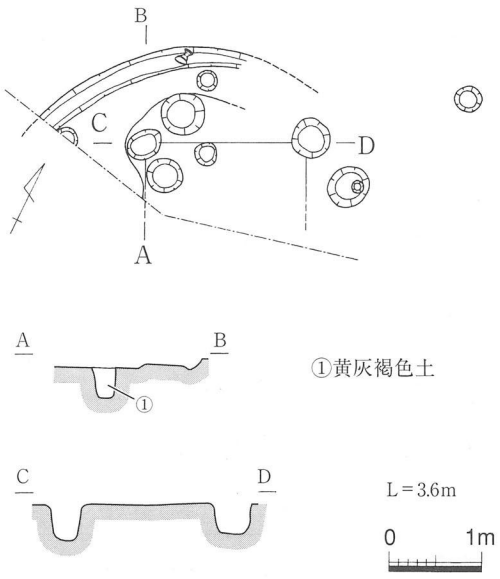


図182　竪穴住居24 実測図

遺物は埋土から微細な土器片が出土したのみである。

竪穴住居24（図182・183）

調査区南端で検出された竪穴住居である。大半が調査区外へ出て、しかもかなり削平も受けていることから、全形は不明だが、残存部から径4.0mほどの円形の平面形になるものと推測される。遺構検出面は3.6m付近で、床面最深部までの深さは0.04mほどである。幅0.2m、床面からの深さが0.04mの壁帯溝が外周をめぐっている。この壁帯溝の埋土中から、完形に近い高杯形土器(360)が出土した。柱穴は２つあり、径0.3～0.4m、深さは床面から0.4m前後である。床面精査時にいくつか柱穴が検出されたが、いずれも深さが0.05m前後で、この住居に伴う柱穴の可能性は低いと考えられる。

遺物は壁帯溝から出土した高杯形土器(360)、埋土から出土した甕形土器(361・362)、高杯形土器(363)、底部(364)などがある。中期末の時期といえる。

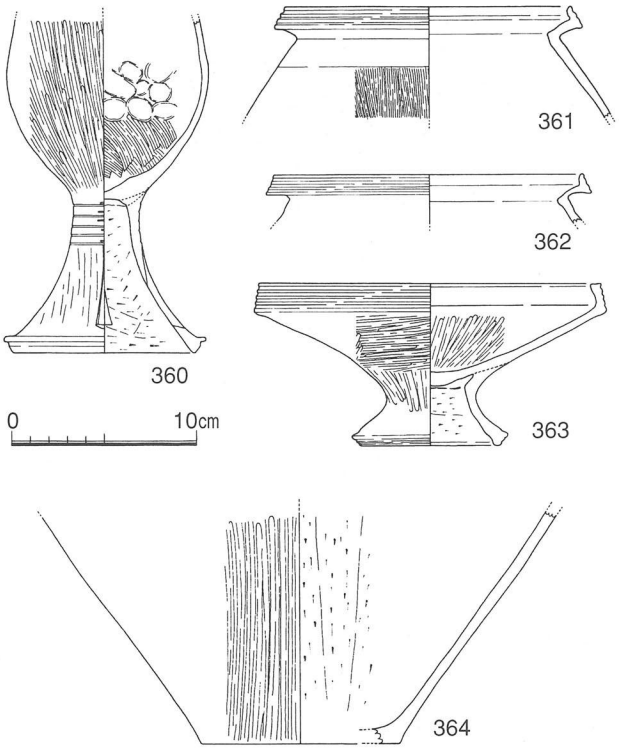


図183　竪穴住居24 出土遺物

竪穴住居25（図184～186）

調査区北西部で検出された竪穴住居である。２/３以上が調査区外となるため、全形は不明だが、一辺4.4m前後の隅丸方形の平面形が推測される。遺構検出面は3.4m付近で、床面最深部までの深さは0.05mほどである。周囲には幅0.2m、床面からの深さが0.04mの壁帯溝が途切れながらもめぐっている。柱穴は３つあり、径0.2～0.5m、深さは床面から0.6～0.8mである。

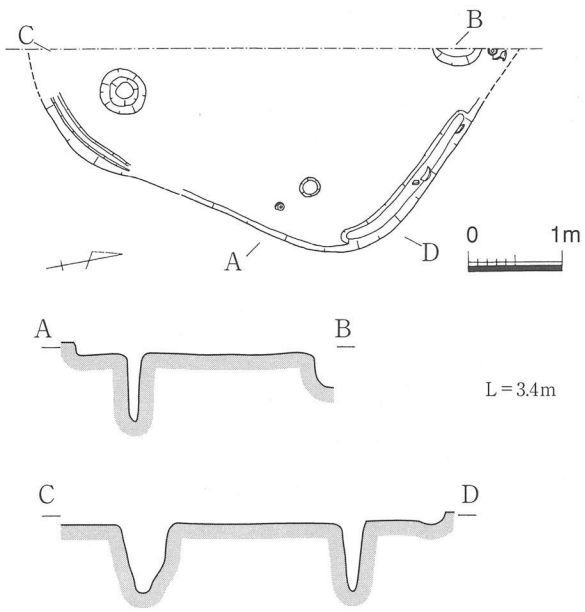


図184　竪穴住居25 実測図

遺物は埋土から高杯形土器(365・366)、打製石包丁(S22)が出土した。中期後半の時期である。

建物１（図187・188）

調査区北東コーナー付近で検出された側柱建物である。ただし、若干軸線がずれる位置ではある

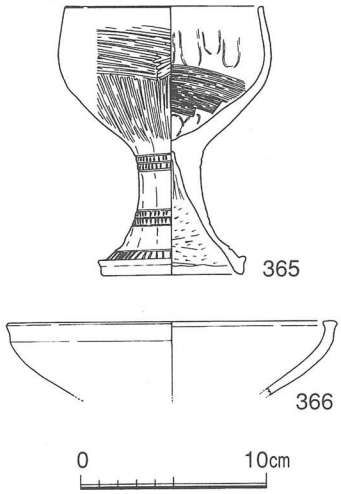


図185　竪穴住居25 出土遺物(1)

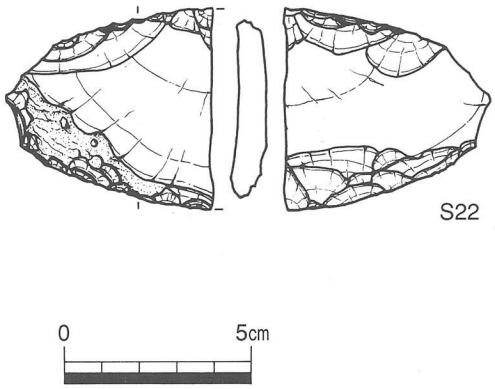


図186　竪穴住居25 出土遺物(2)

が、中心付近に柱穴が2つ検出されており、これを柱穴と考えてよいとすると、総柱建物になる。ただし、ほかの柱が軸線上に並ぶことから、異なる可能性が高いと一応考えた。桁行2間、梁間2間の柱構成である。遺構の検出面は3.5m付近で、柱穴の掘り方は径0.4m前後の円形から、一辺が0.4～0.6mの方形に近いものがある。深さは検出面から0.4～0.6mで、柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後である。建物の軸方向が上面で検出された古墳時代後期の建物と極めて近いことから、当初古墳時代の建物である可能性も考えたが、検出面や柱穴の埋土が異なることや、P1から完形に近い高杯形土器が2個体出土し、これらは意識的に柱の掘り方へ埋納したと考えられることから、弥生時代の建物とした。

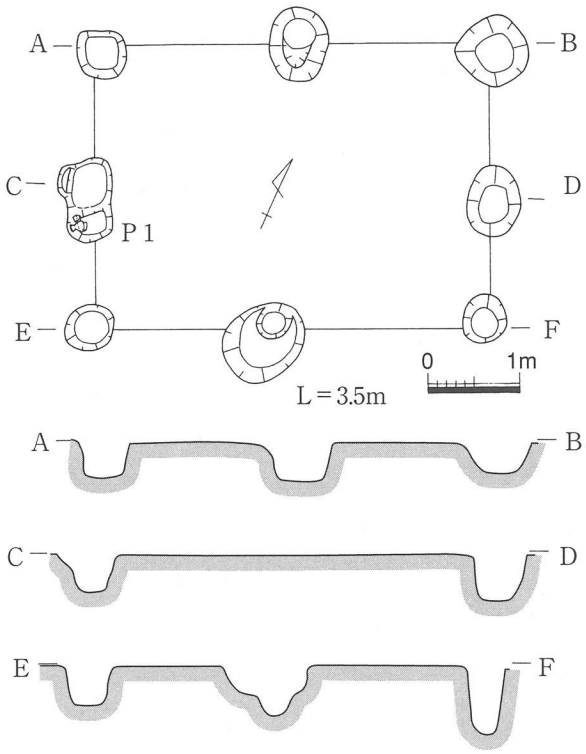


図187　建物1　実測図

遺物は各柱穴の埋土から土器の小片が出土したが、図化できたものはP1から出土した高杯形土器(367・368)だけである。中期中葉の時期である。

P1036（図189～191）

調査区北東コーナー付近で検出された土壙である。長径0.55m、短径0.42mの長楕円形を呈する平面形である。遺構検出面は3.5m付近で、最深部は検出面から0.18mである。U字形の断面形で、埋土は1層である。遺構中央からほぼ完形の水差し形土器(369)が1個体横倒しにした状態で出土し、

埋土中からは打製石包丁(S23)が出土した。時期は中期中葉である。

P1058（図192・193）

調査区北東コーナー付近で検出された土壙である。長径0.78m、短径0.62mの長楕円形を呈する平面形である。遺構検出面は3.6m付近で、最深部は検出面から0.12mである。台形の断面形で、埋土は1層である。遺構内北半で床面から若干浮いた位置から遺物がまとまって出土した。

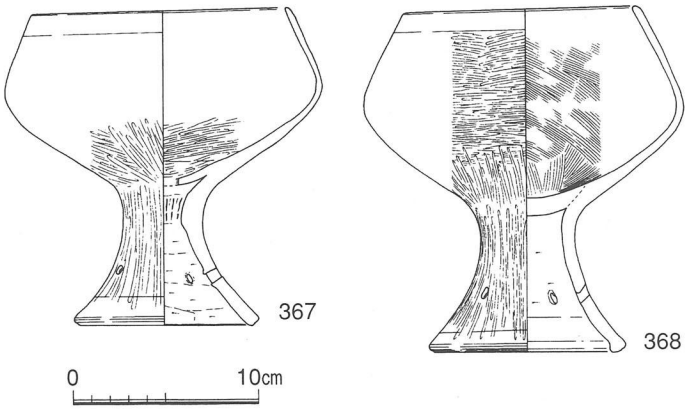


図188　建物1　出土遺物

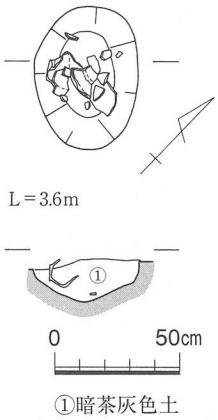


図189　P1036　実測図

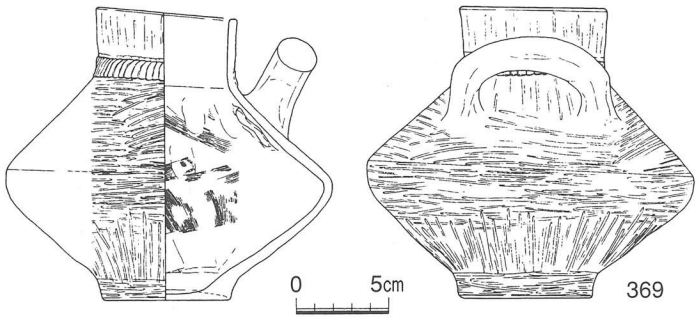


図190　P1036　出土遺物(1)

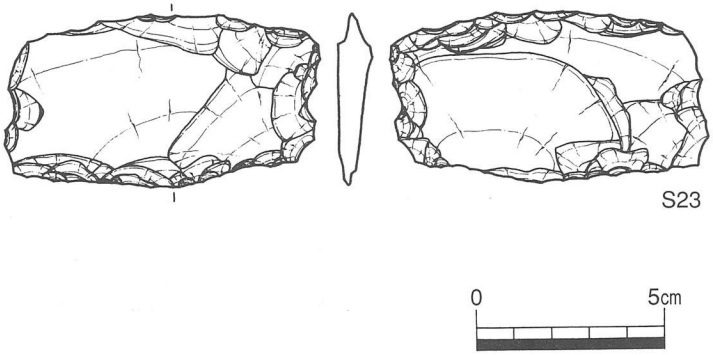


図191　P1036　出土遺物(2)

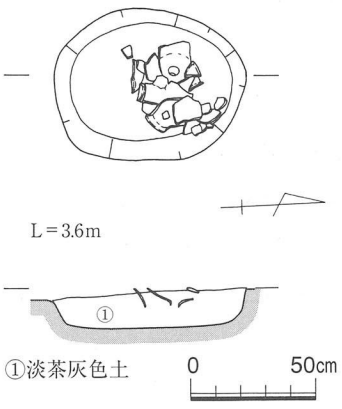


図192　P1058　実測図

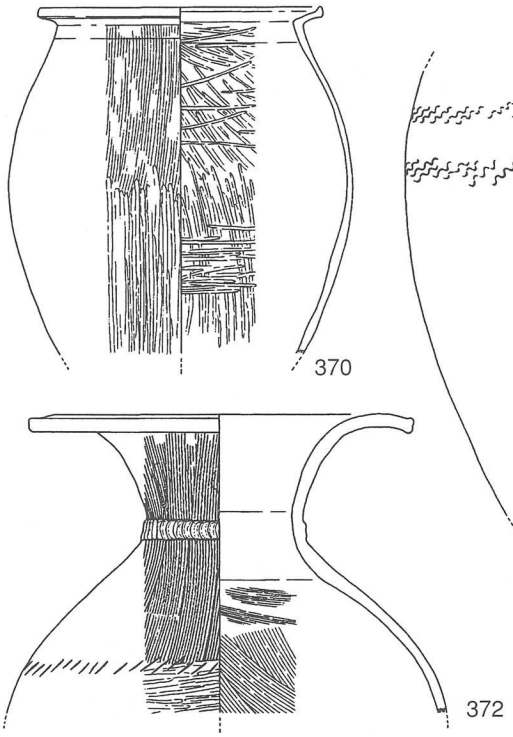


図193　P1058 出土遺物

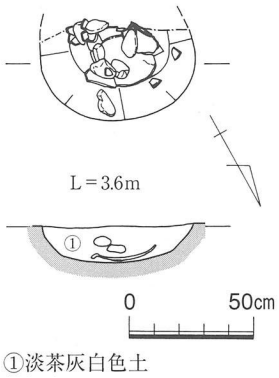


図194　P1073 実測図

遺物は甕形土器(370・371)、壺形土器(372)である。時期は中期中葉である。

P1073（図194・195）

調査区南西コーナー付近で検出された土壙である。南半が削平されているため全形は不明であるが、長径0.6mほどの長楕円形の平面形を呈すると推測される。遺構検出面は3.6m付近で、最深部は検出面から0.16mである。U字形の断面形で埋土は１層だけである。遺構内からは円礫とともに、甕形土器(373)、高杯形土器(374)、壺形土器(375)が出土した。時期は中期末から後期初頭である。

P1101・P1102（図196・197）

調査区北東コーナー付近で検出された土壙である。P1101は長さ1.9m、幅0.9mの長楕円形を呈する平面形である。遺構検出面は3.5m付近で、最深部までの深さ

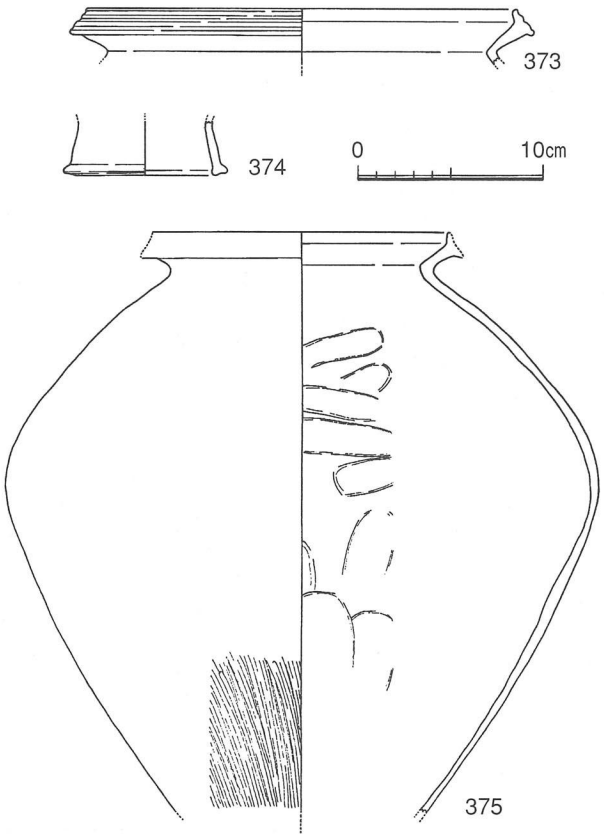


図195　P1073 出土遺物

は0.08mである。断面形は台形で、底面は比較的平坦となっている。形状から土壙墓である可能性が考えられたが、木棺痕跡、骨片などは検出されなかった。遺物が全て底面から浮いた位置で出土し、いずれも小片であるため、図化できたのは底部(376)のみであった。

P1102はP1101によって東端を削平されている。残存している部分から長さ1.2m以上、幅0.7mの長楕円形を呈する平面形と推測される。遺構検出面は3.5m付近で、最深部までの深さは0.08mである。断面形はU字形に近い台形である。土器の小片が底面より浮いた位置で若干出土した。P1101・P1102の東側にも同様に長楕円形を呈する2遺構が切り合ったような遺構が検出されたが、これは検出面からの深さが0.01mほどで、底面も平坦でなかった。平面的にはP1101・P1102と似ているが、遺構というよりも自然地形の影響を受けたくぼみの可能性が考えられた。

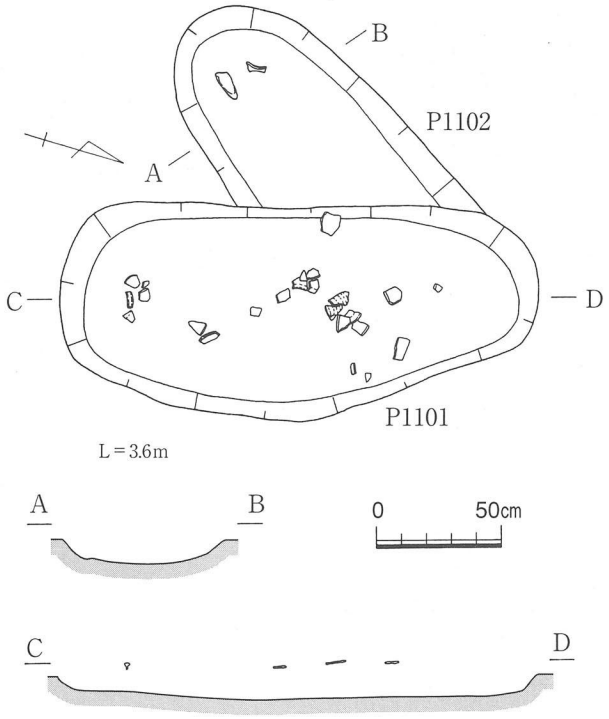


図196　P1101・P1102 実測図

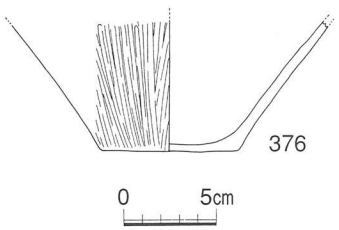
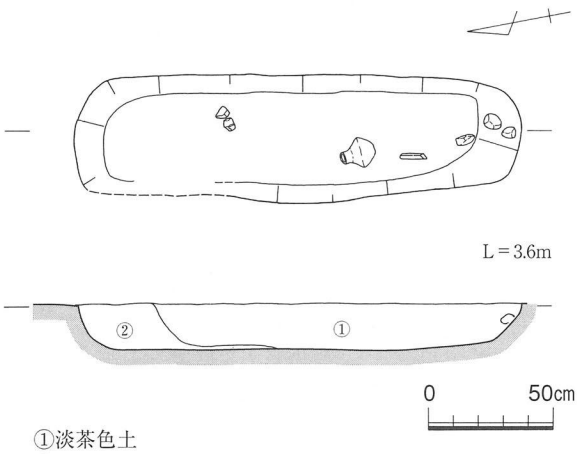


図197　P1101 出土遺物

P1107（図198～200）

調査区中央北側で検出された土壙である。竪穴住居5の一部を削平している。長さ1.8m、幅0.5mの長楕円形を呈する平面



①淡茶色土
②淡茶灰色土 含黄褐色土塊

図198　P1107 実測図

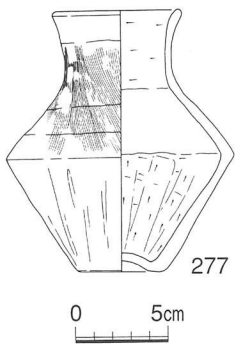


図199　P1107 出土遺物(1)

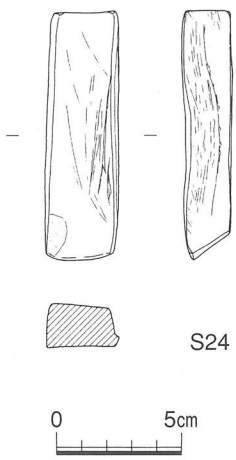


図200　P1107 出土遺物(2)

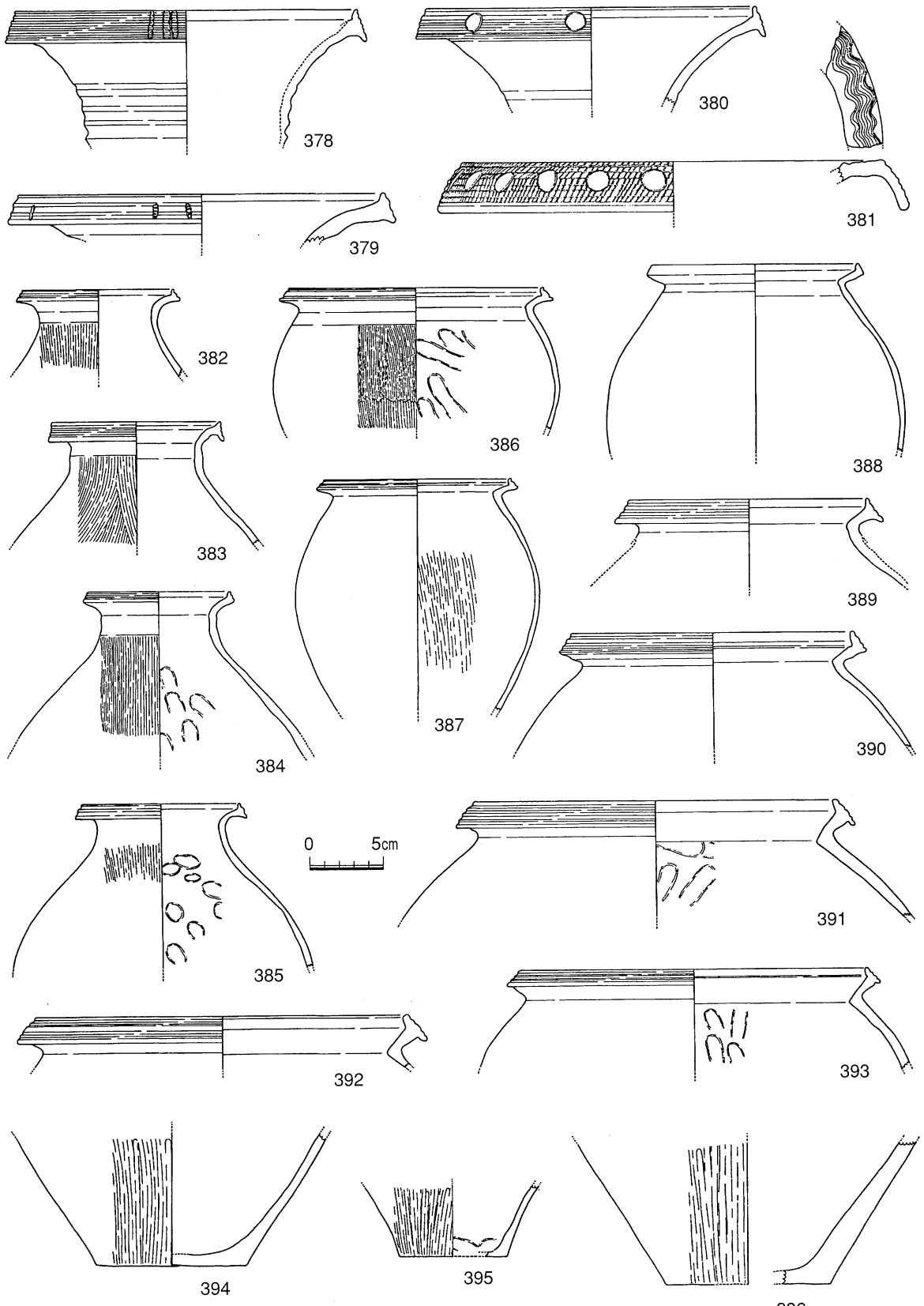


図201　P1108 出土遺物(1)

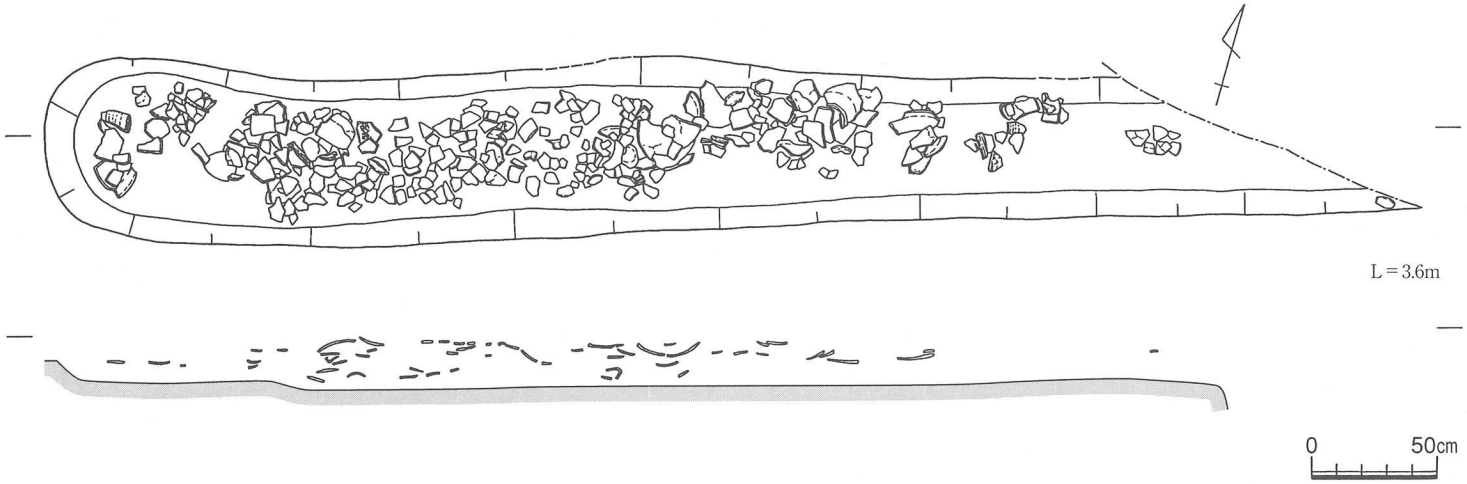


図202　P1108 実測図

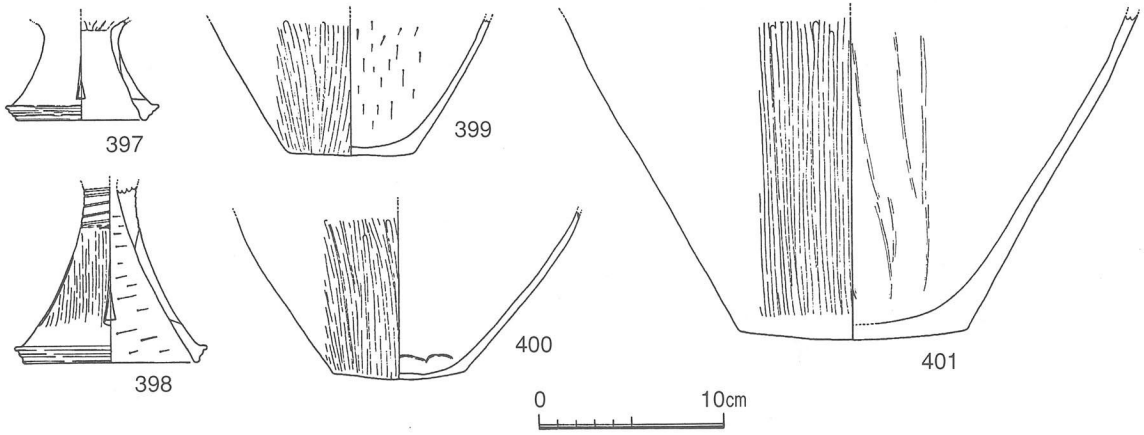


図203　P1108 出土遺物(2)

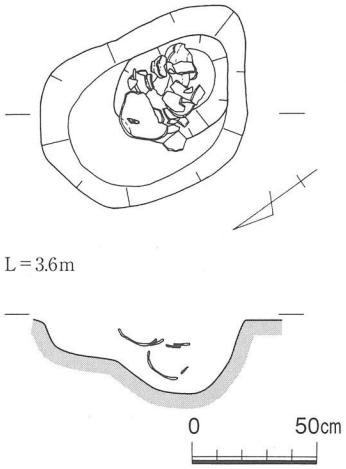


図204　P1109 実測図

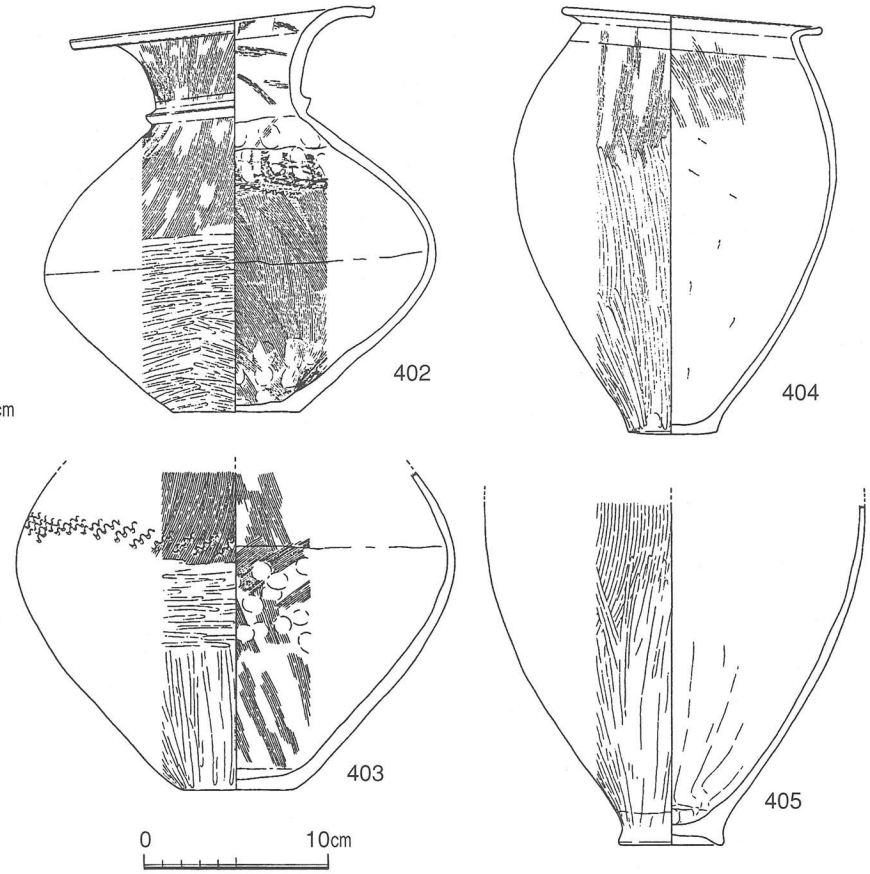


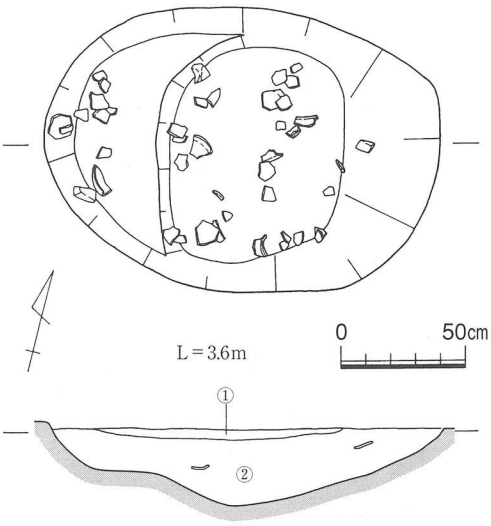
図205　P1109 出土遺物

形である。遺構検出面は3.6m付近、最深部までの深さは0.2mである。断面形は逆台形で、底面は平坦である。埋土は2層で、第①層は遺物が含まれていた。角礫や壺形土器(377)、砥石(S24)は、南側から落ち込んだ状況で検出された。形状から土壙墓などの可能性を想定したが、棺痕跡や骨片などは出土しなかった。時期は後期初頭である。

P1108（図201～203）

調査区北西コーナー付近で検出された土壙である。一応西端で完結しているため土壙としたが、溝状遺構の西端部分である可能性もある。長さ5.5m以上、幅0.7mで、遺構検出面は3.5m付近、底面までの深さは検出面から0.1mである。埋土中には土器がかなり含まれていた。しかしながら、完形に復元できるものはなく、破片が主体といっても過言ではない。

遺物は、壺形土器(378～385)、甕形土器(386～393)、底部(394～396、399～401)、高杯形土器(397・398)がある。焼成時の失敗で破損したのではないかと思われるものもあり、そういったものを主体に廃棄した土壙の可能性が考えられる。



①淡黄灰色土　②暗茶灰色土

図206　P1120 実測図

P1109（図204～205）

調査区北東コーナー付近で検出された土壙で、長さ0.9m、幅0.6mの台形気味の平面形を呈し、遺構南半では径0.5mの円形にもう一段低くなっている。遺構検出面は3.6m付近で、検出面から0.15mのところで平坦な段になり、さらに検出面から0.3mの所まで低くなっている。遺物はこの段から最深部へと落ち込むような状況で出土した。壺形土器(402・403)と甕形土器(404・405)で、そのうち2点は完形であることから、これらの土器を意識的に埋納したことを推測させる。時期は中期中葉である。

P1120（図206・207）

調査区中央北東付近で検出された土壙である。長さ1.6m、幅1.2mの長楕円形を呈する平面形である。遺構検出面は3.6m付近、西側は検出面から0.12mの位置で平坦となり、さらに中央付近は0.16mほど深くなっている。つまり、西側にテラス上の平坦面が認められる。ただし遺構底面は平坦でなく、緩やかな傾斜をもっている。埋土は2層で、第①層はくぼみとなった部分に堆積したもので遺物は含まれていなかった。第②層には土器片がかなり含まれていたが、完形あるいは完形に近いものはなく、破片が主体であった。高杯形土器(406・407)、甕形土器(408)、底部(409～411)である。中期末の時期である。

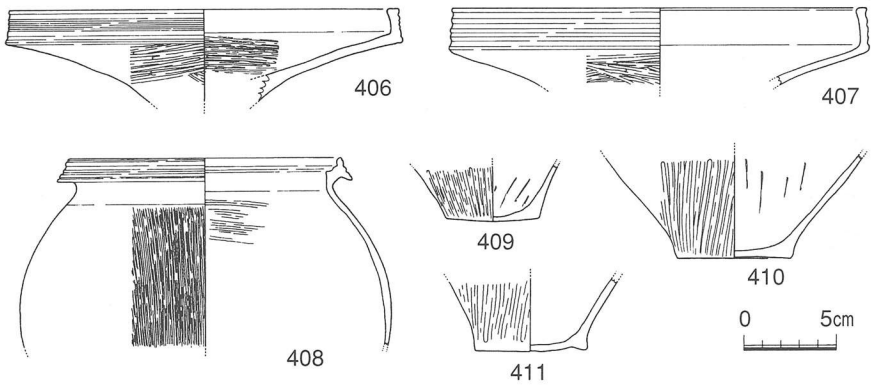


図207　P1120 出土遺物

P1126（図208・209）

調査区北東コーナー付近、竪穴住居6の下面で検出された土壙である。長辺1.0m、短辺0.8mの隅丸方形を呈する平面形である。遺構検出面は3.5m付近で、最深部までの深さは0.4mである。断面形は箱形に近く、埋土は4層あり、最下層には多量の角礫が含まれている。遺構の壁面に被熱痕が認められないことから、ここで火を焚いたのではないといえる。

遺物は第④層から出土したが、いずれも破片であっ

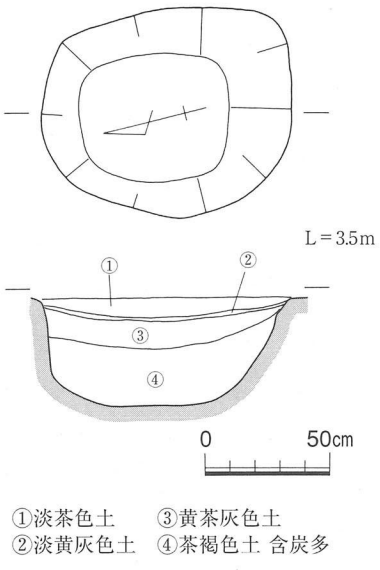


図208　P1126 実測図

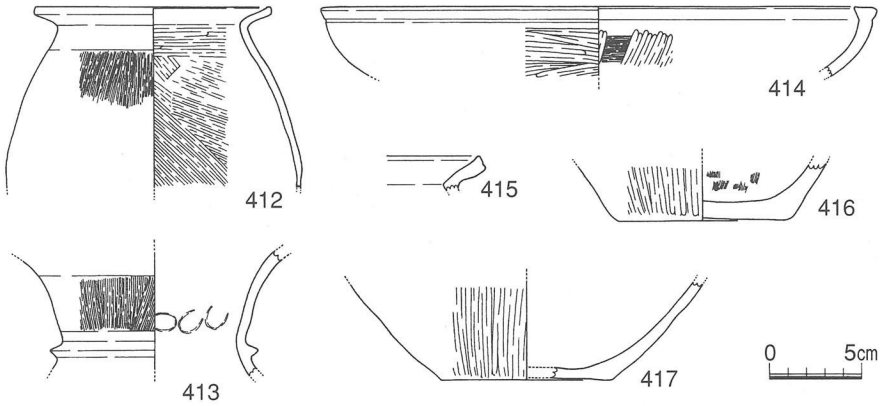


図209　P1126 出土遺物

た。壺形土器(413)、高杯形土器(414)、甕形土器(412・415)、底部(416・417)で、中期中葉の時期である。

P1253（図210・211）

調査区中央やや北寄りで検出された土壙である。長さ1.9m、幅1.4mの長方形を呈する平面形である。遺構検出面は3.6m付近で、検出面から0.2mで平坦となり、さらに南側で0.2m下がる。断面形では二段掘り状になっている。埋土は4層あるが、いずれの層にも含まれている遺物は極めて少ない。第①層からは壺形土器(418)が一点出土したのみで、ほかに第④層からは高杯形土器脚部の小片が出土した。高杯形土器は極めて残存状況がよくなかったことから、取り上げ時に微細な破片となってしまったため図示することができなかった。高杯形土器は中期末であるが、壺形土器は後期初頭の時期である。

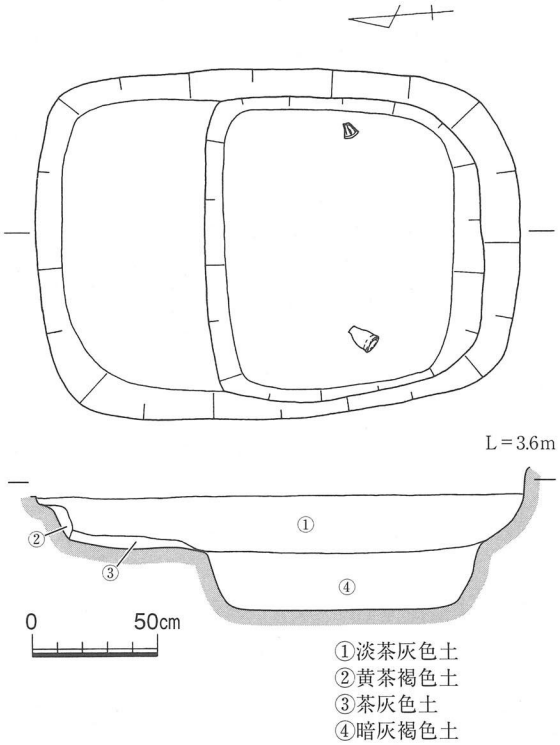


図210　P1253 実測図

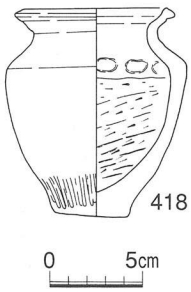


図211　P1253 出土遺物

P1269（図212・213）

調査区中央北寄りで検出された土壙である。長さ1.0m、幅0.9mの長楕円形の平面形であるが、北側に若干突出部状の部分が認められることから、全体としては不整形な形態になるのかもしれない。遺構検出面は3.5m付近で、最深部までの深さは検出面から0.1mである。断面形はU字形で、埋土は1層だけである。

遺物は底面から浮いた状態で、北半に比較的

かたまって出土した。図化できたのは甕形土器(419)だけである。中期中葉の時期である。

P1658（図214～216）

調査区南西コーナー付近で検出された土壙である。東半が上面の遺構によって削平されており、全形は不明であるが、残存部から長さ2.5m、幅1.3m以上の隅丸長方形の平面形と推測される。遺構検出面は3.5m付近で、最深部までの深さは0.3mである。断面形は箱形で、埋土は2層認められる。遺物が出土したのは第①層からだけであるが、いずれも破片である。図化できたものは壺形土器(420)、高杯形土器(421)の2点だけである。ほかに叩石(S25)が出土した。中期末の時期といえる。

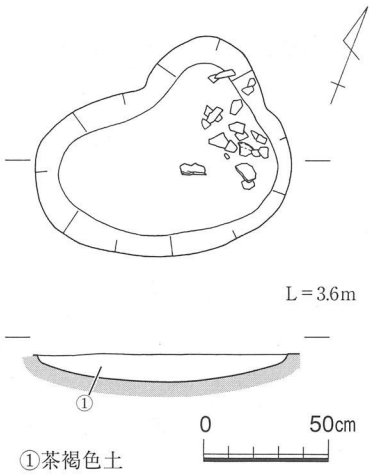


図212　P1269 実測図

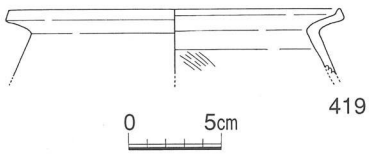


図213　P1269 出土遺物

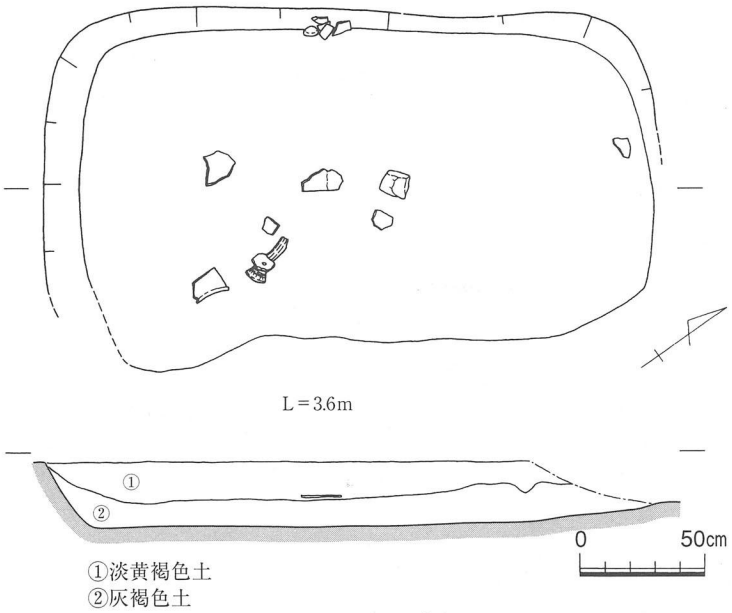


図214　P1658 実測図

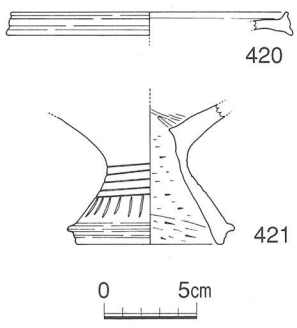


図215　P1658 出土遺物(1)

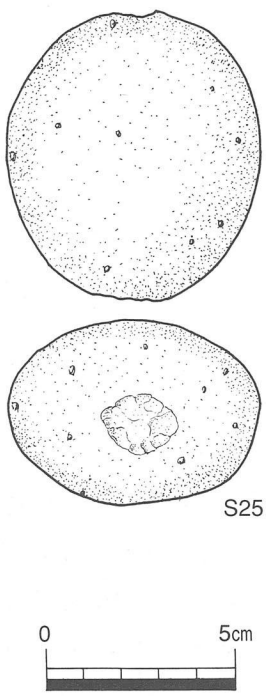


図216　P1658 出土遺物(2)

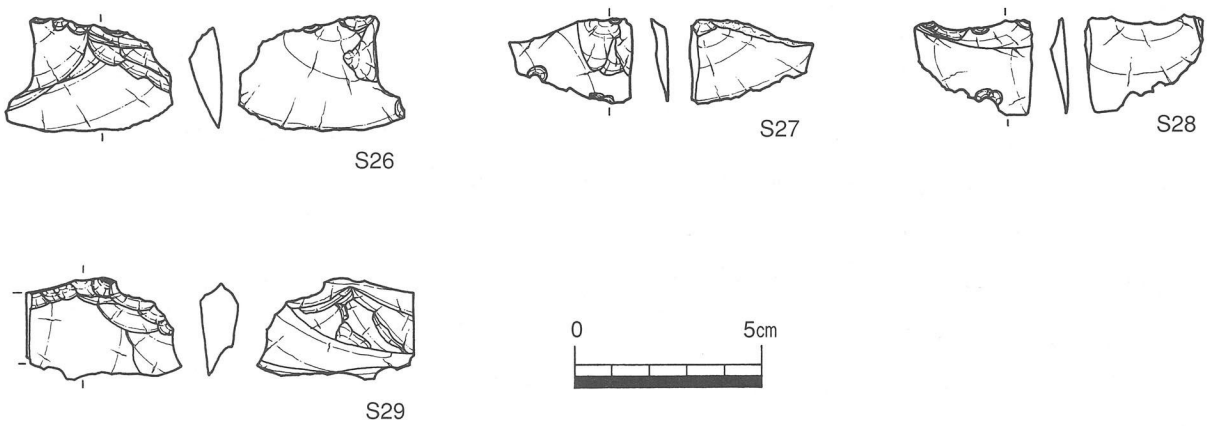


図217　P1669 出土遺物

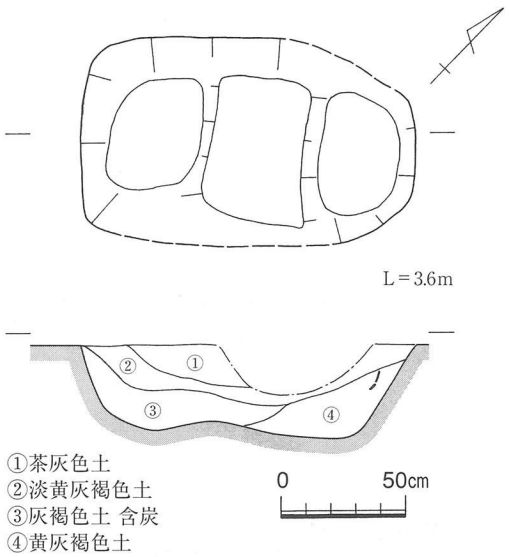


図218　P1669 実測図

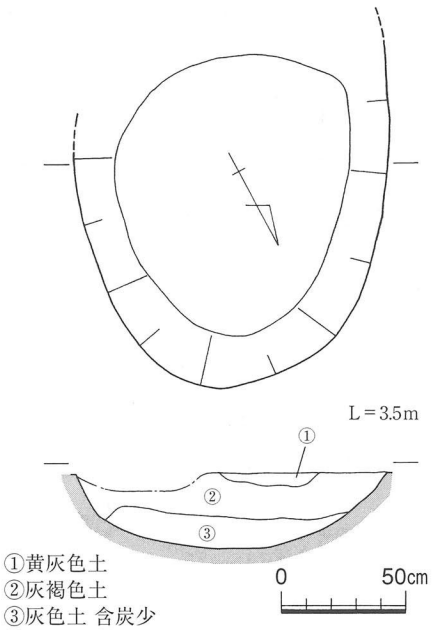


図219　P1692 実測図

P1669（図217・218）

調査区南西コーナー付近で検出された土壙である。長さ1.3m、幅0.8mの長楕円形、もしくは隅丸長方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.5m付近で、最深部の深さは検出面から0.4mである。底面は平坦でなく、中央付近が0.1m前後、両側と比べると盛り上がっている。掘り下げの過程で、別遺構の切り合いも想定したが、断面観察及び平面掘り下げ時の観察からは同一遺構の可能性が高いと判断された。埋土は4層あり、炭が多く含まれる層などがあることからも、自然

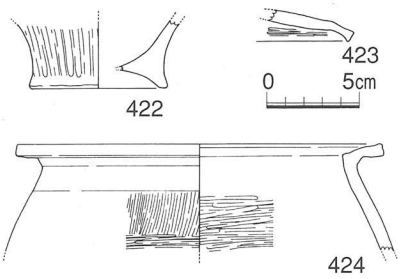


図220　P1692 出土遺物

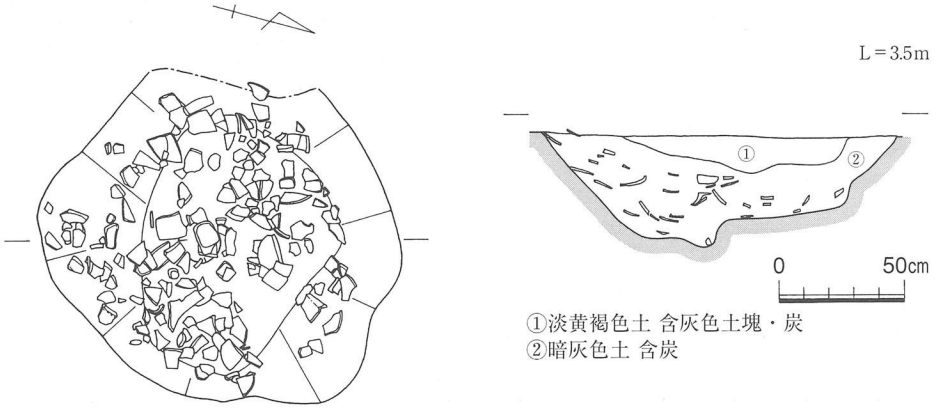


図221　P1720 実測図

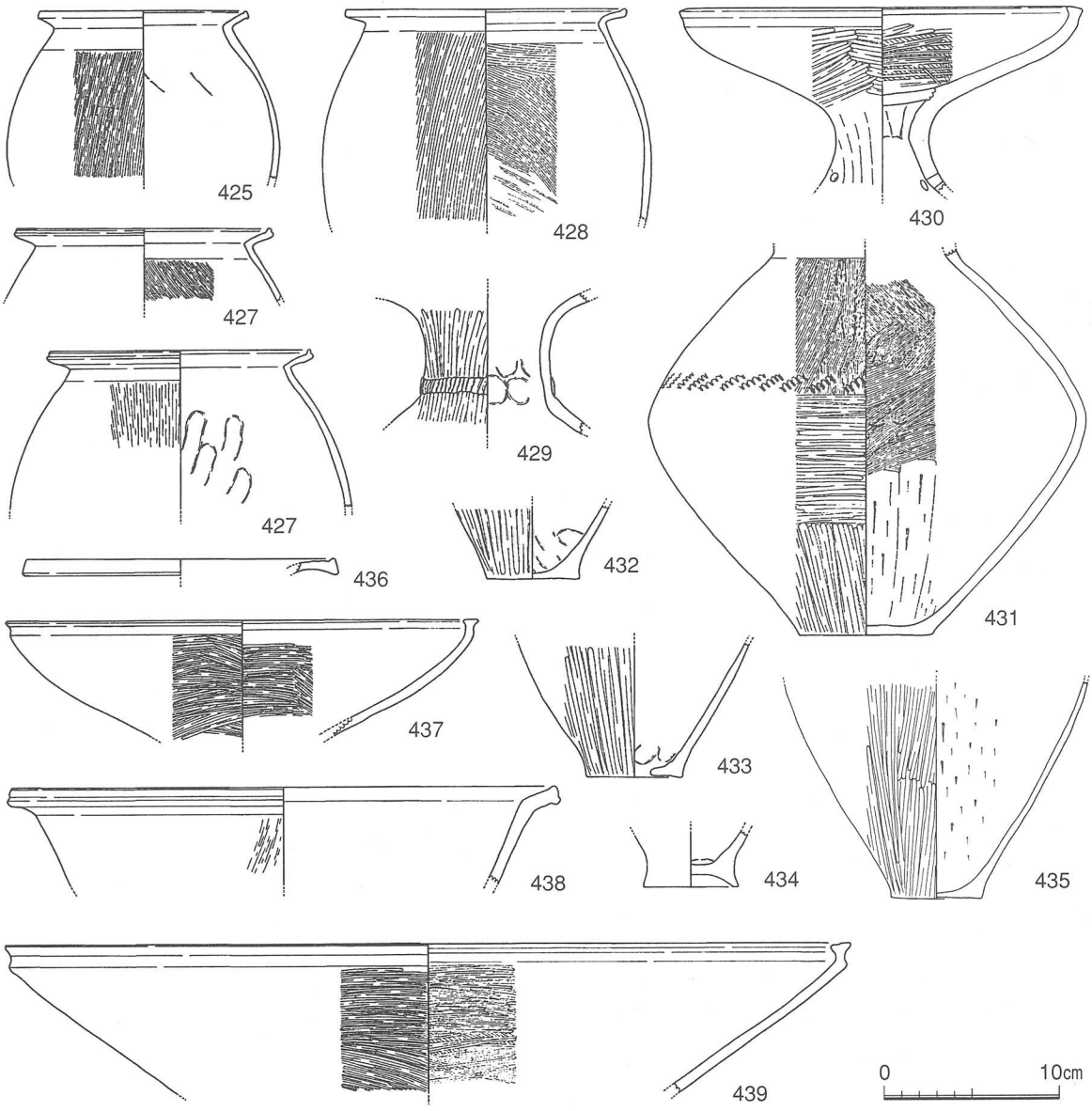


図222　P1720 出土遺物(1)

に埋没したというより、埋められた可能性が示唆される。遺物は若干の土器片と剥片が4点出土した。

P1692（図219・220）

調査区南端の東側で検出された土壙で、南側は調査区外へでるため、全形は不明であるが、長径1.3m前後、短径1.2mの長楕円形を呈する平面形が推測される。遺構検出面は3.4m付近で、最深部の深さは検出面から0.3mである。埋土は3層で、第③層には底面に接して炭が薄く層状に認められる。

遺物は土器の小片ばかりで図化できたものは底部(422)、蓋形土器(423)、甕形土器(424)のみである。中期中葉の時期である。

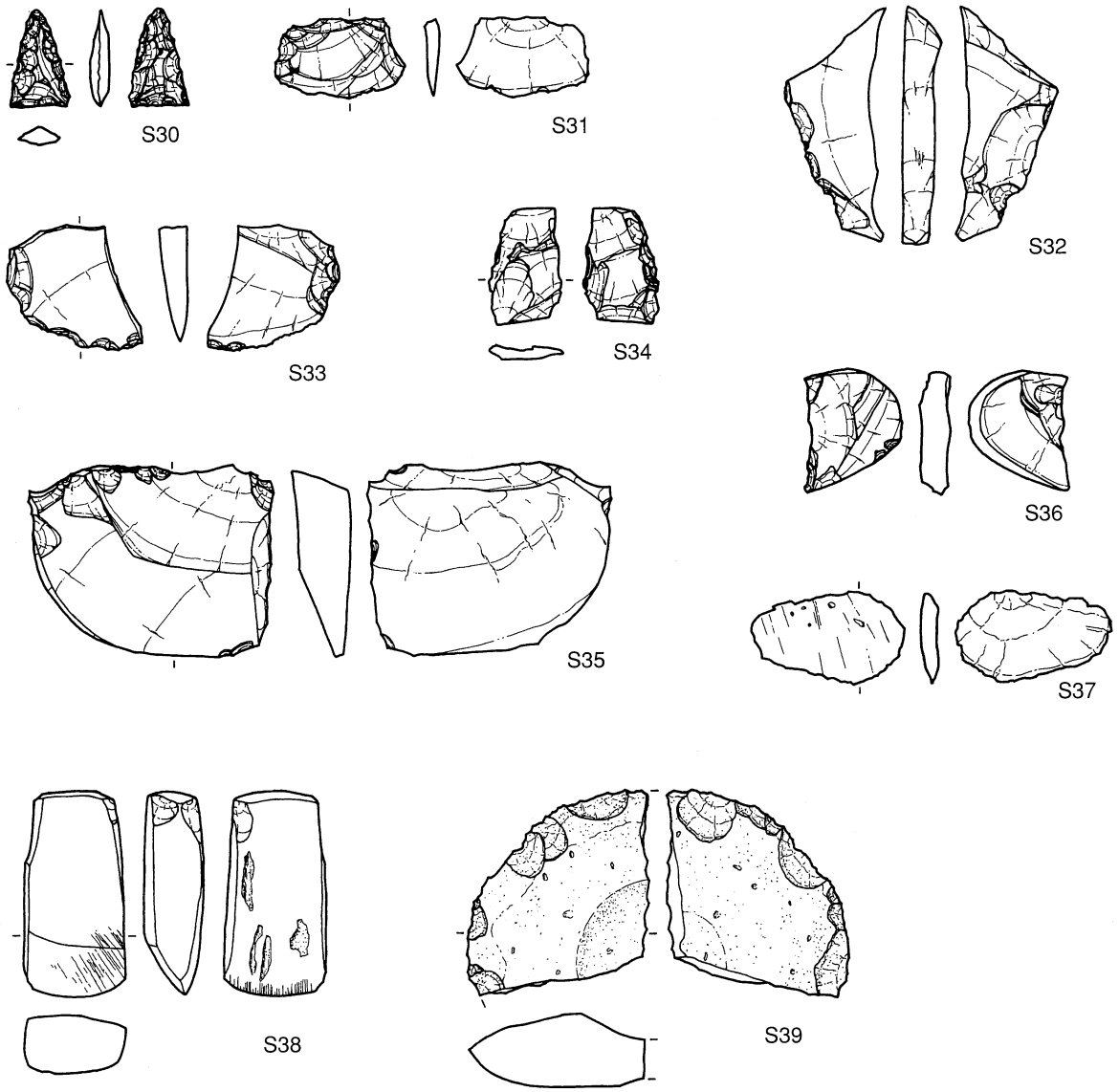


図223　P1720 出土遺物(2)

P1720（図221～223）

調査区南東コーナー付近で検出された土壙である。やや凹凸が認められるものの、全体として一辺1.1mほどの隅丸方形を呈する平面形である。遺構検出面は3.4m付近で、最深部までの深さは検出面から0.4mである。断面形は台形であるが、底面に多少凹凸が認められる。埋土は2層あり、遺物は第②層から出土した。第①層はP1720を掘削し、多くの土器片を投棄した後の自然堆積層である可能性が高い。土器の投棄は出土状況から南側からおこなわれたと考えられる。また、この遺構は溝17を切っている。

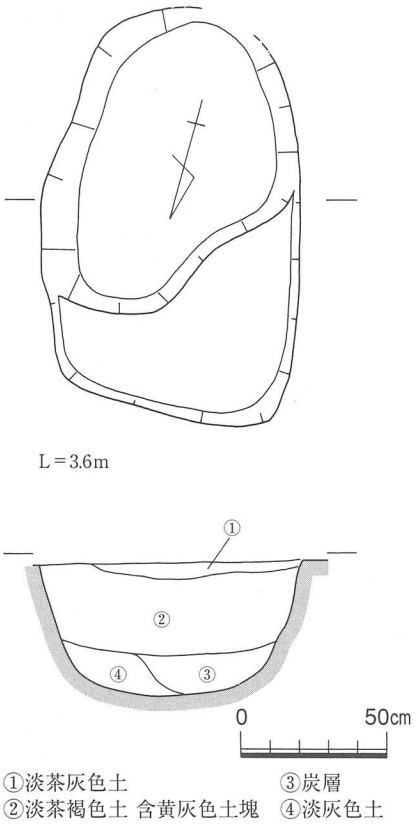


図224　P1734 実測図

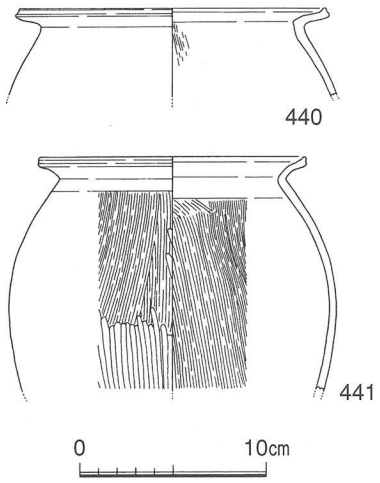


図225　P1734 出土遺物

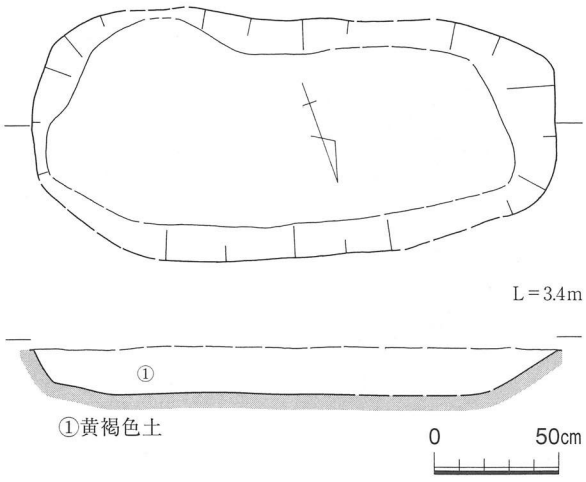


図226　P1737 実測図

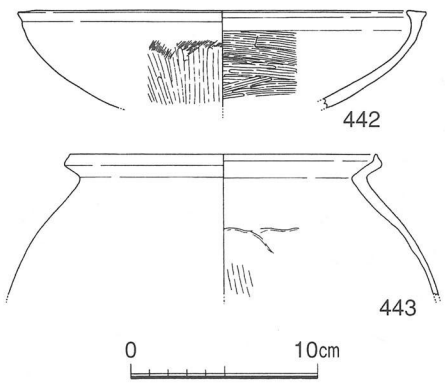


図227　P1737 出土遺物

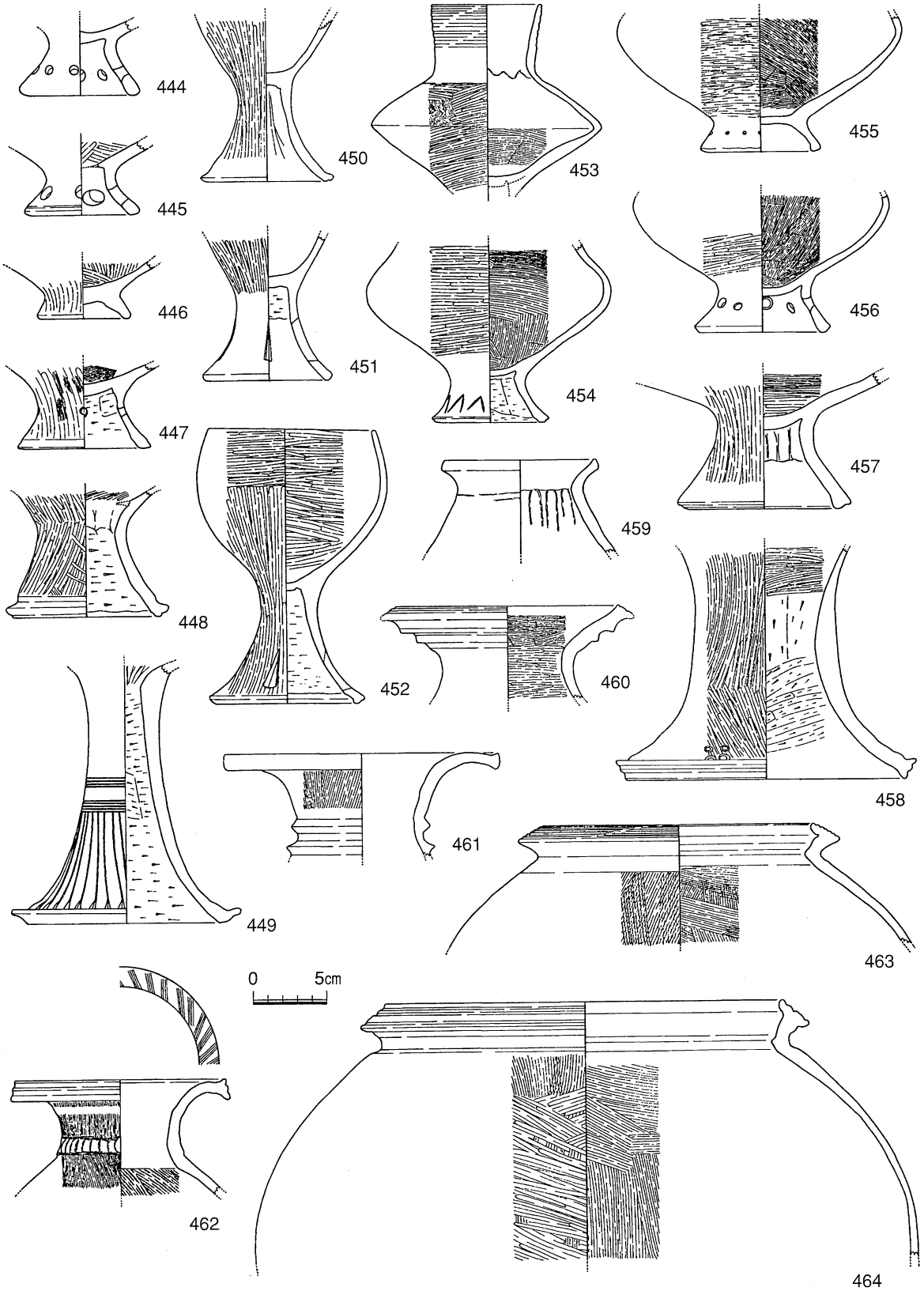


図228　溝16 出土遺物(1)

遺物は土器の破片と石器で、甕形土器(425～428)、壺形土器(429・431・436)、高杯形土器(430・437)、底部(432～435)、鉢形土器(438・439)、石鏃(S30)、スクレイパー(S33)、剥片(S31・S32・S34～S36)、磨製石斧の剥片(S37)、扁平片刃石斧(S38)、環状石斧の未製品(S39)である。時期は中期中葉である。

P1734（図224・225）

調査区南西コーナー付近で検出された土壙である。東側の上面は竪穴住居24によって削平されているが、下面は残存しており、全形をうかがうことができる。長さ1.3m、幅0.9mの方形の平面形である。遺構検出面は3.6m付近で、北側は検出面から0.1mほど下がって段状の平坦面となり、南側は長径1.1m、短径0.8mの倒卵形の平面形で、0.4mほど深くなっている。埋土は4層で、最下層である第③層は炭層であるが、この地点で火を焚いた痕跡は認められない。

遺物は第③層から出土した。甕形土器(440・441)である。中期中葉の時期である。

P1737（図226・227）

調査区南東部で検出された土壙である。長さ2.1m、幅1.0mの長楕円形、もしくは倒卵形の平面形を呈する。遺構検出面は3.3m付近で、最深部までの深さは検出面から0.2mである。埋土は1層である。遺構の平面形や、床面が平坦となることから、土壙墓などの可能性が考えられたが、骨片や棺痕跡などは検出されなかった。埋土に遺物はほとんど含まれず、床面から高杯形土器(442)、甕形土器(443)、が出土した。ただしこれらの土器は、この土壙に切られている溝17に帰属する可能性も考えられる。

溝16（図228～230）

調査区中央付近を東西に流れる溝である。若干流路方向の角度が変わるため、調査区内での平面形は「く」字状にみえる。遺構検出面は3.5m付近で、最深部の深さは検出面から0.8mである。断面形は部分的に段状の平坦面が認められるが、これは流路方向の若干の変化による振り幅で、基本的

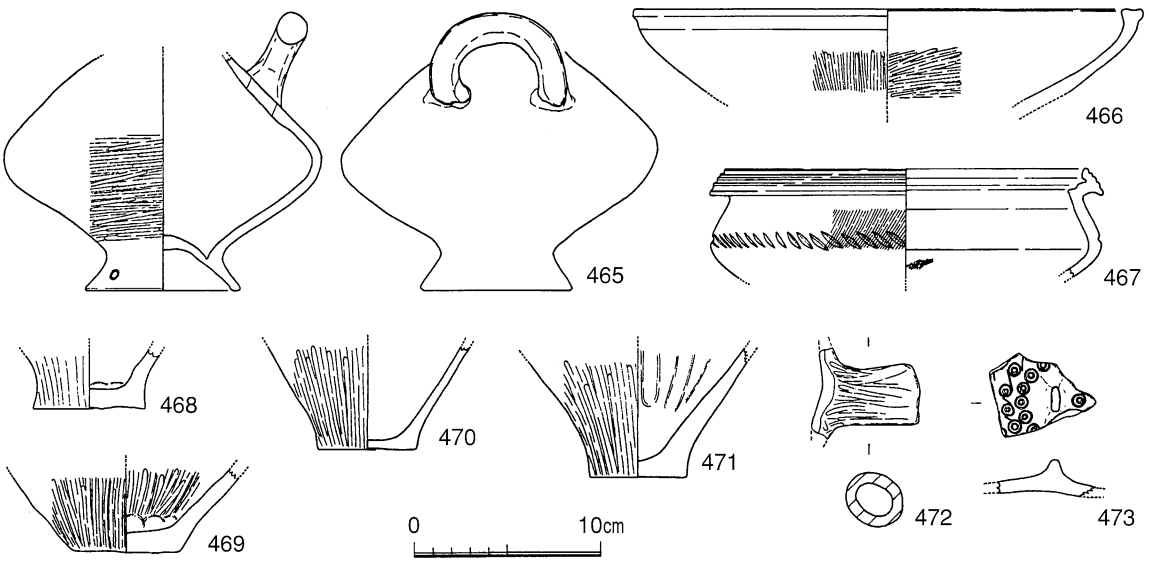
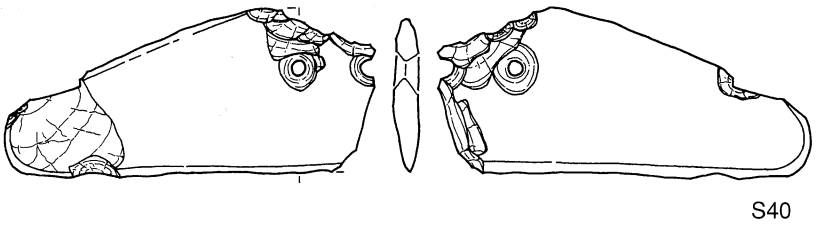
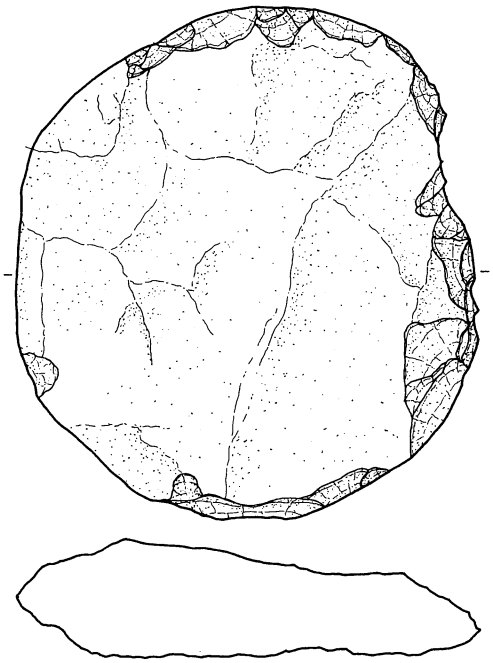


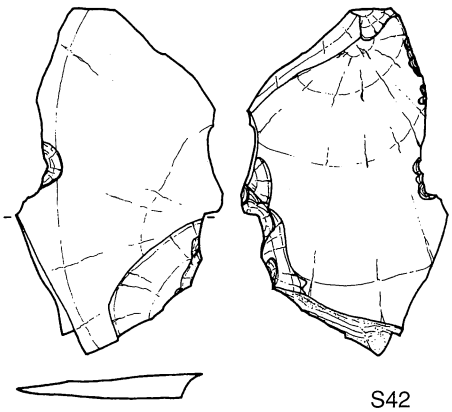
図229　溝16 出土遺物(2)



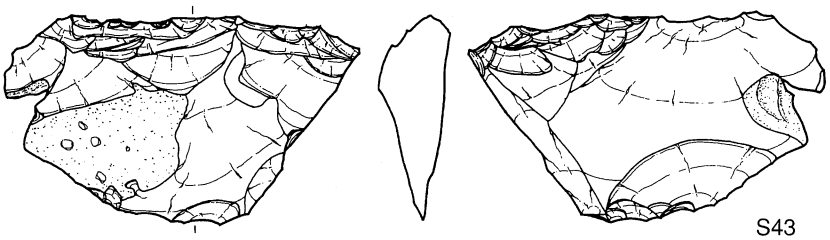
S40



S41



S42



S43

図230　溝16 出土遺物(3)

0　5cm

には角度の緩やかなV字形、もしくはやや急なU字形といえる。埋土は3層で、最下層からは遺物がほとんど出土しなかったが、上層の2層からは比較的多くの遺物が出土した。脚台(444～447・455～458)、高杯形土器(449～452・466)、壺形土器(453・454・459～462)、甕形土器(463・464)、水差し形土器(465)、鉢形土器(467)、底部(468～471)、注口形土器(472)、蓋形土器(473)、磨製石包丁(S40)、環状石斧未製品(S41)、サヌカイトの剥片(S42)、石核(S43)である。時期は中期中葉～末である。

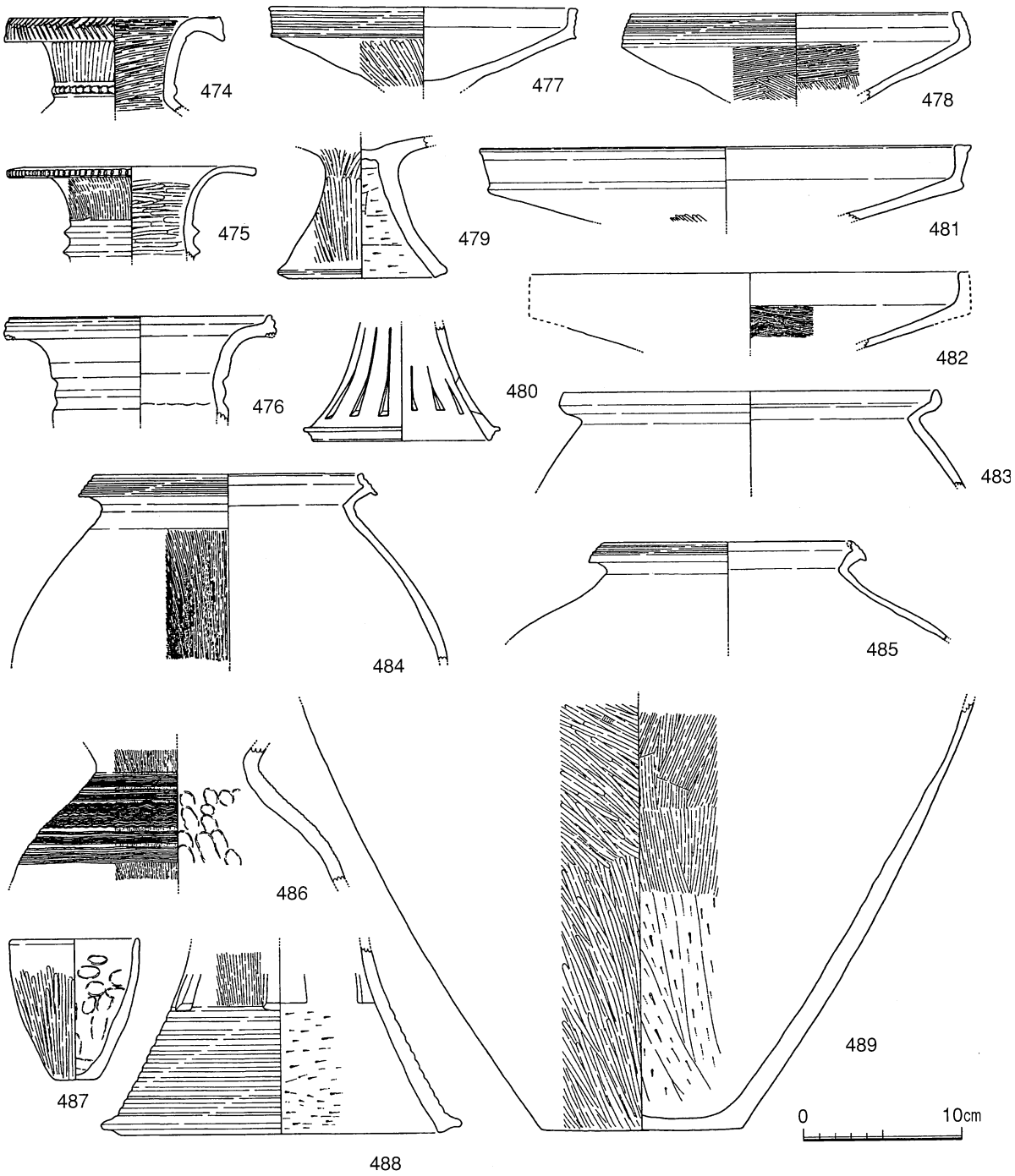


図231　溝17 出土遺物(1)

溝17（図231～233）

調査区南端で検出された溝である。調査区内を東西に直線的に横切る。当初は、幅3.8mほどの溝と想定して掘り下げていたが、断面や遺物の出土状況を検討した結果、若干時期が異なる溝が切り合っていることが判明した。最初に掘られた溝は南側で、幅2.0m前後、その西側を削平して幅1.8mの溝が掘削されている。いずれも遺構検出面は3.5m前後で、埋土は2層である。断面形は傾斜の緩やかなV字形、もしくはやや傾斜の急なU字形で、底面が若干深くなっており、流水を意識しているといえる。

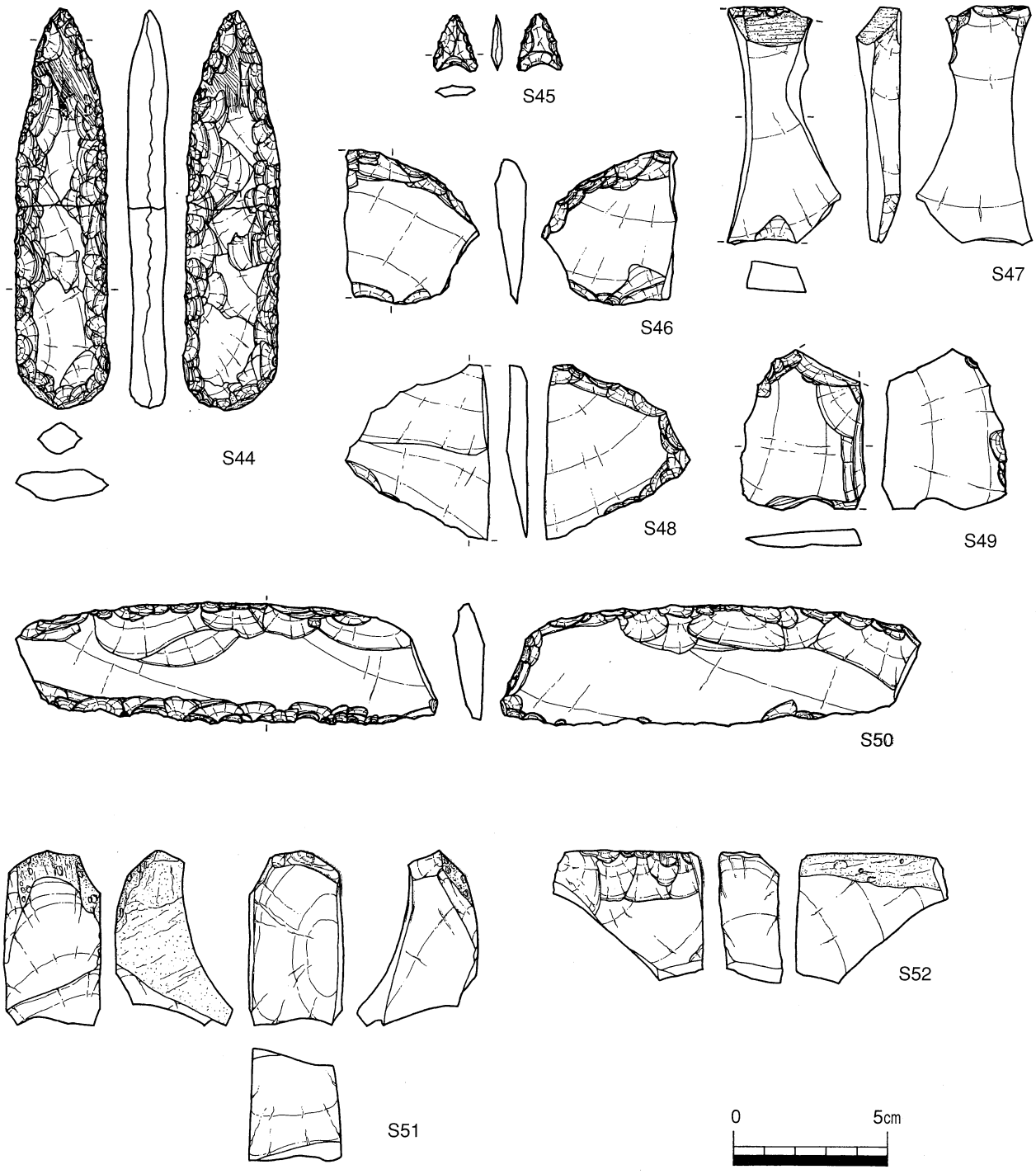


図232　溝17 出土遺物(2)

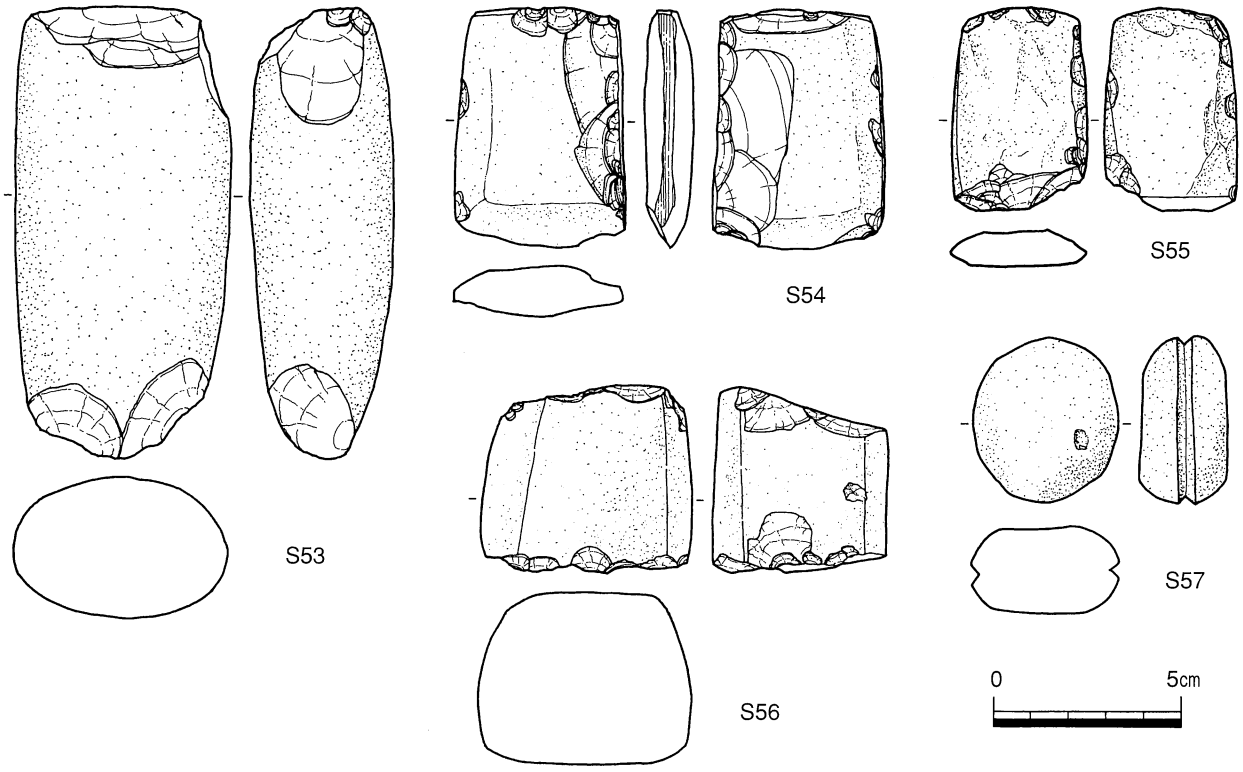


図233　溝17 出土遺物(3)

遺物はいずれも上層からまとまって出土しており、遺構掘り下げ段階では両溝の区別が明確にできなかったため、同じ溝内の遺物として取り上げた。下層からは両溝とも遺物がほとんど含まれていなかったこともあって、両溝の時期を分離する明確な出土状況を示す遺物は認められなかったが、上層出土の土器が中期中葉と、中期末～後期初頭の2時期に分かれることから、溝17の南側が中期中葉、北側が中期末から後期初頭の時期と考えられる。溝17の南側の溝は中期中葉～後葉にかけての過渡的様相を示すP1720によって削平されており、この点とも矛盾していないといえる。

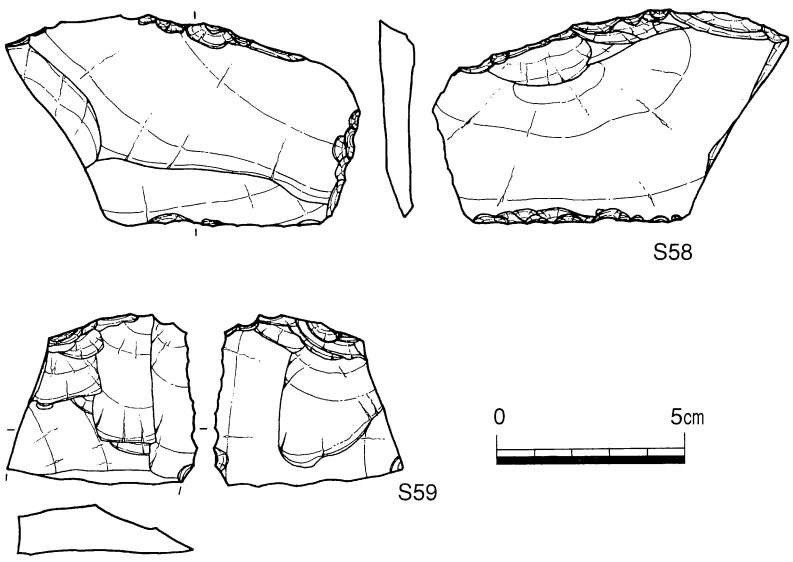


図234　溝18 出土遺物(1)

出土遺物は、壺形土器(474～476・486)、高杯形土器(477～482)、甕形土器(483～485)、鉢形土器(487)、器台形土器(488)、底部(489)、二上山産のサヌカイトを用いた打製石剣(S44)、石鏃(S45)、

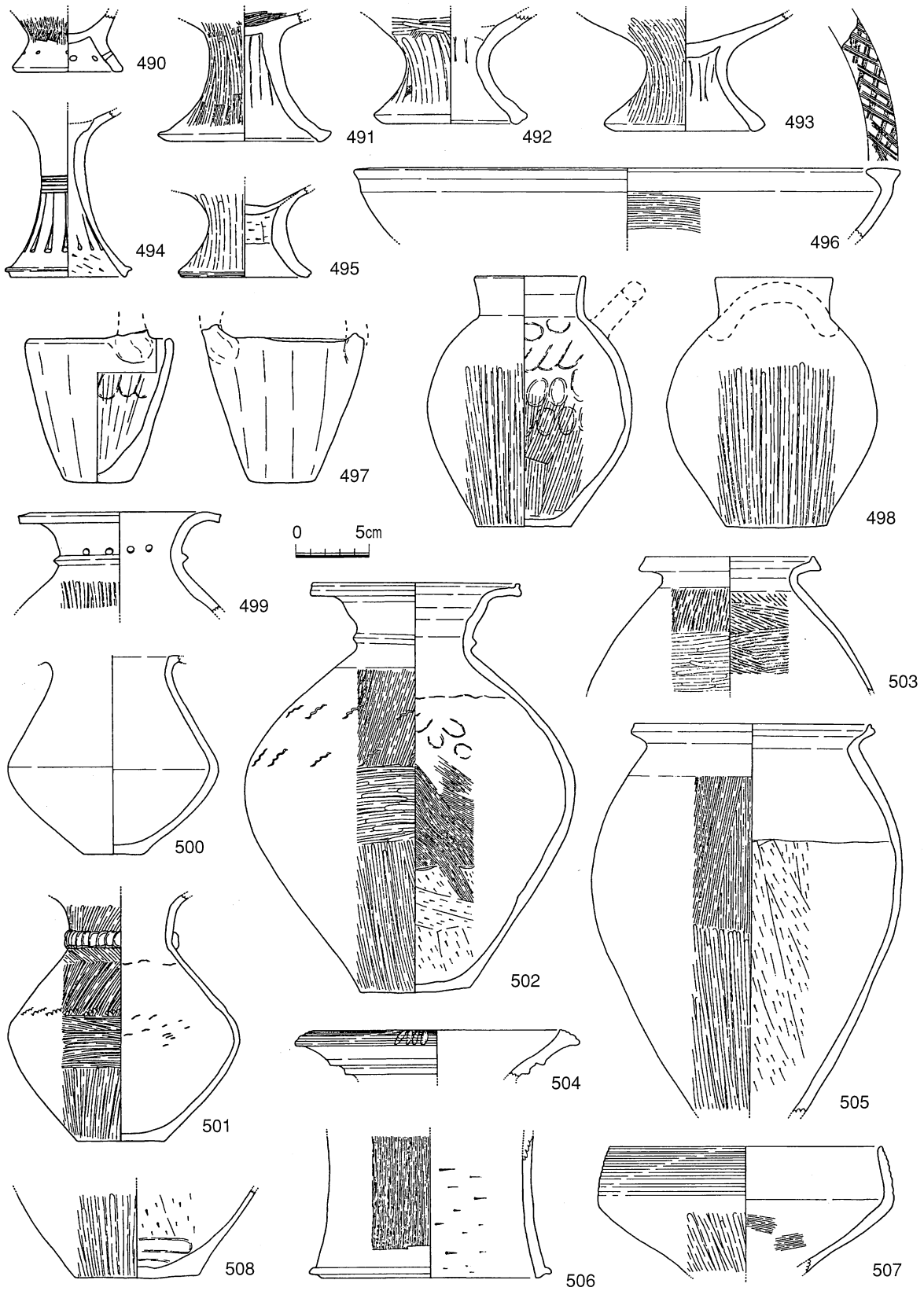


図235　溝18 出土遺物(2)

打製石包丁（S46・S48・S50）、蛤刃石斧（S53）、扁平片刃石斧（S54・S55）、叩き石（S56）、石錘（S57）、石核（S52）、サヌカイトの剥片（S47・S49・S51）・破片である。

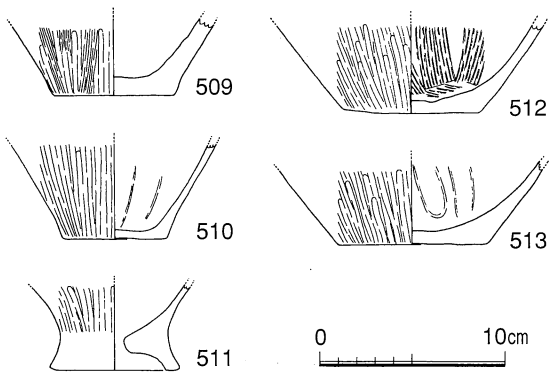


図236　溝18 出土遺物(2)

溝18（図234～236）

調査区中央やや南寄りで検出された溝である。調査区中央付近からやや円弧を描きながら東西へ流れているが、西半は溝16によって削平されている。おそらく、溝18は溝16のかつての流路で、掘り直しの際に若干北へ振ったために残った部分といえる。遺構検出面は3.5m付近で、最深部の深さは検出面から0.8mである。断面形も溝16とよく似ており、傾斜角度の緩やかなV字形、もしくはや

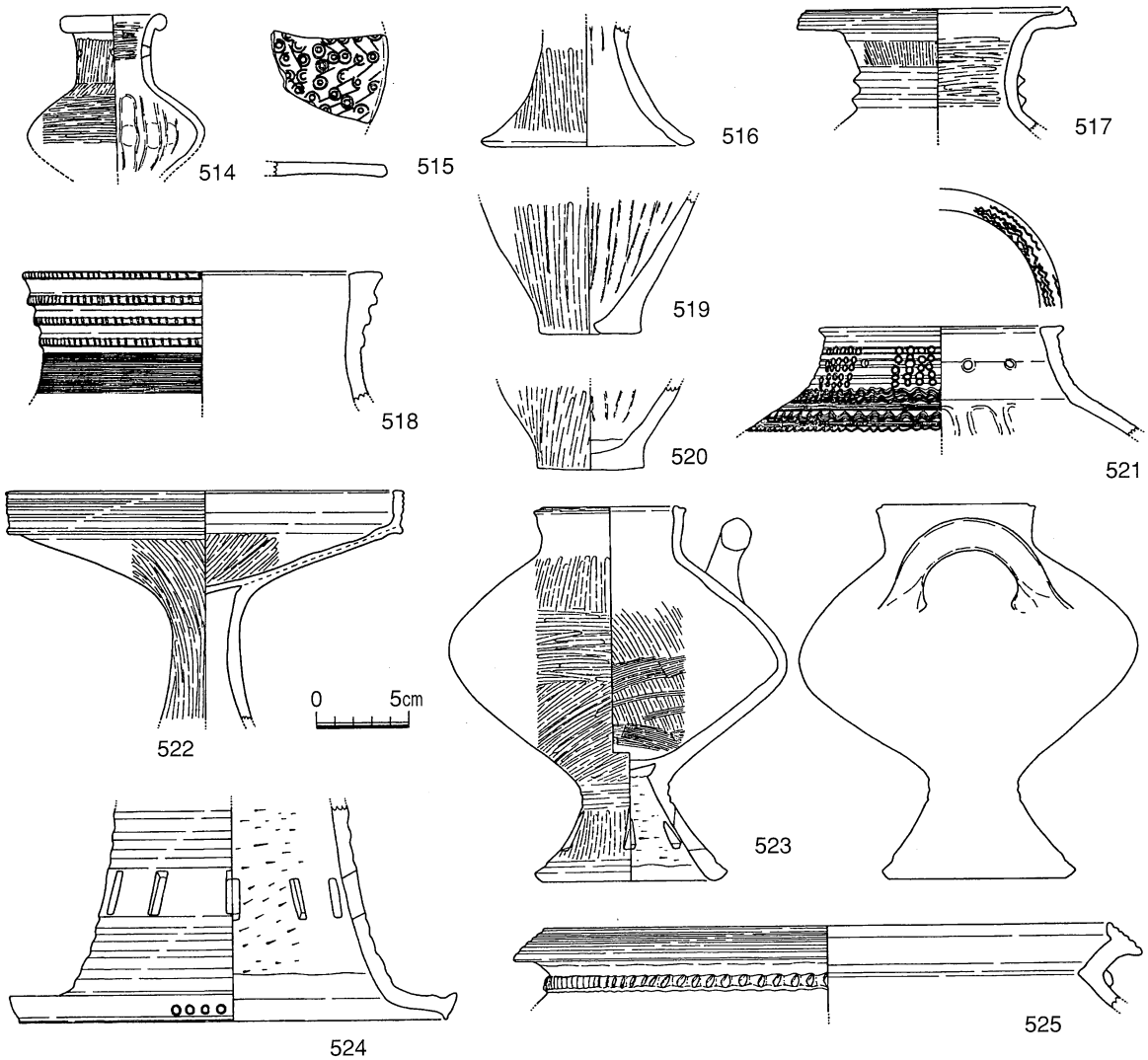


図237　溝19 出土遺物(1)

や急なU字形である。埋土は2層で、上層から遺物が出土した。

遺物は、脚台(490・495)、高杯形土器(491～496・506・507)、鉢形土器(497)、水差し形土器(498)、壺形土器(499～503)、甕形土器(505)、底部(508～513)、打製石包丁(S58)、石核(S59)である。中期中葉～末の時期である。

溝19（図237・238）

調査区南半で検出された溝である。溝17とほぼ平行して東西方向を流れており、直線的である。遺構検出面は3.5m付近で、幅2.4m、断面形は台形である。最深部の深さは検出面から0.9mである。埋土は2層で、上層には遺物が比較的多く含まれていたが、下層についてはほとんど含まれていなかった。

遺物は壺形土器(514・517・518・521)、蓋形土器(515)、高杯形土器(516・522)、底部(519・520)、

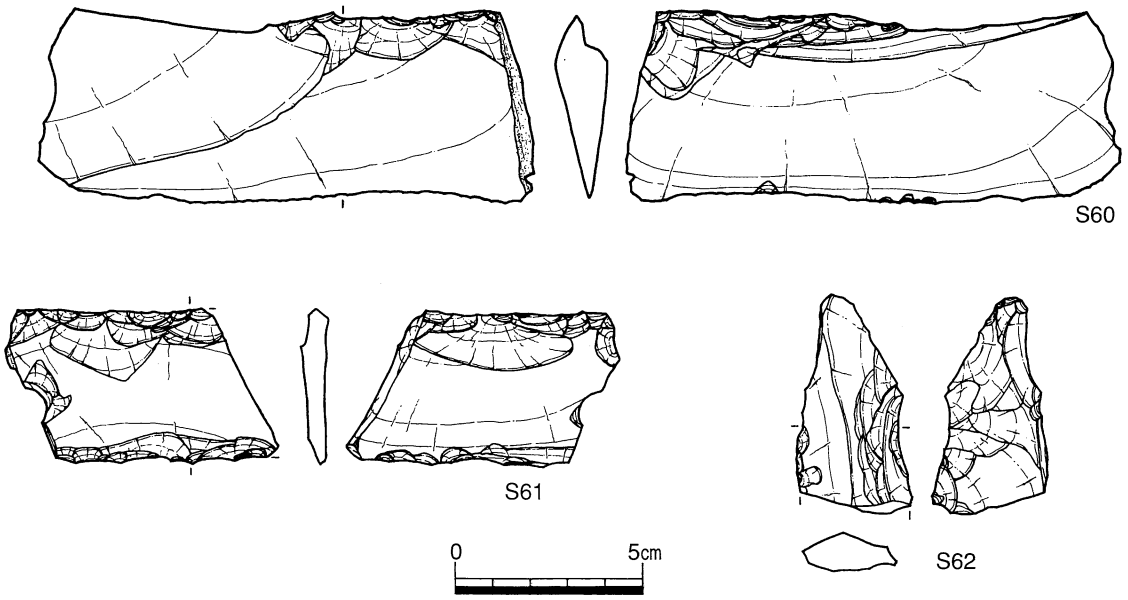


図238　溝19 出土遺物(2)

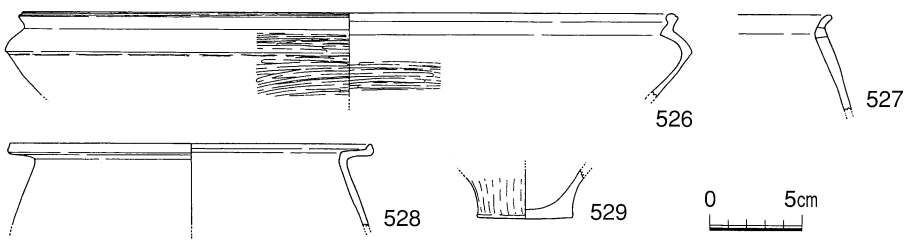


図239　溝20 出土遺物

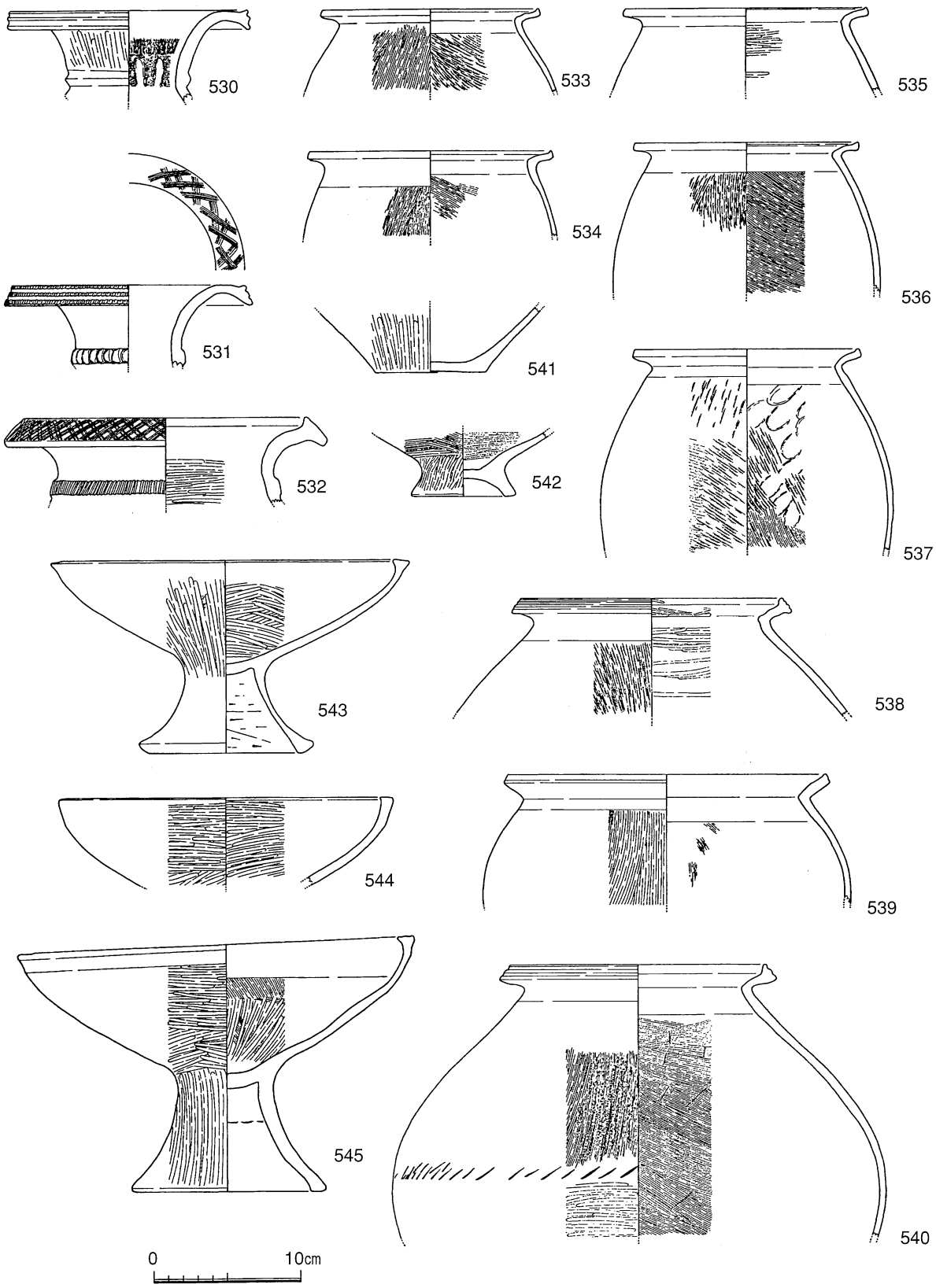


図240　溝21 出土遺物(1)

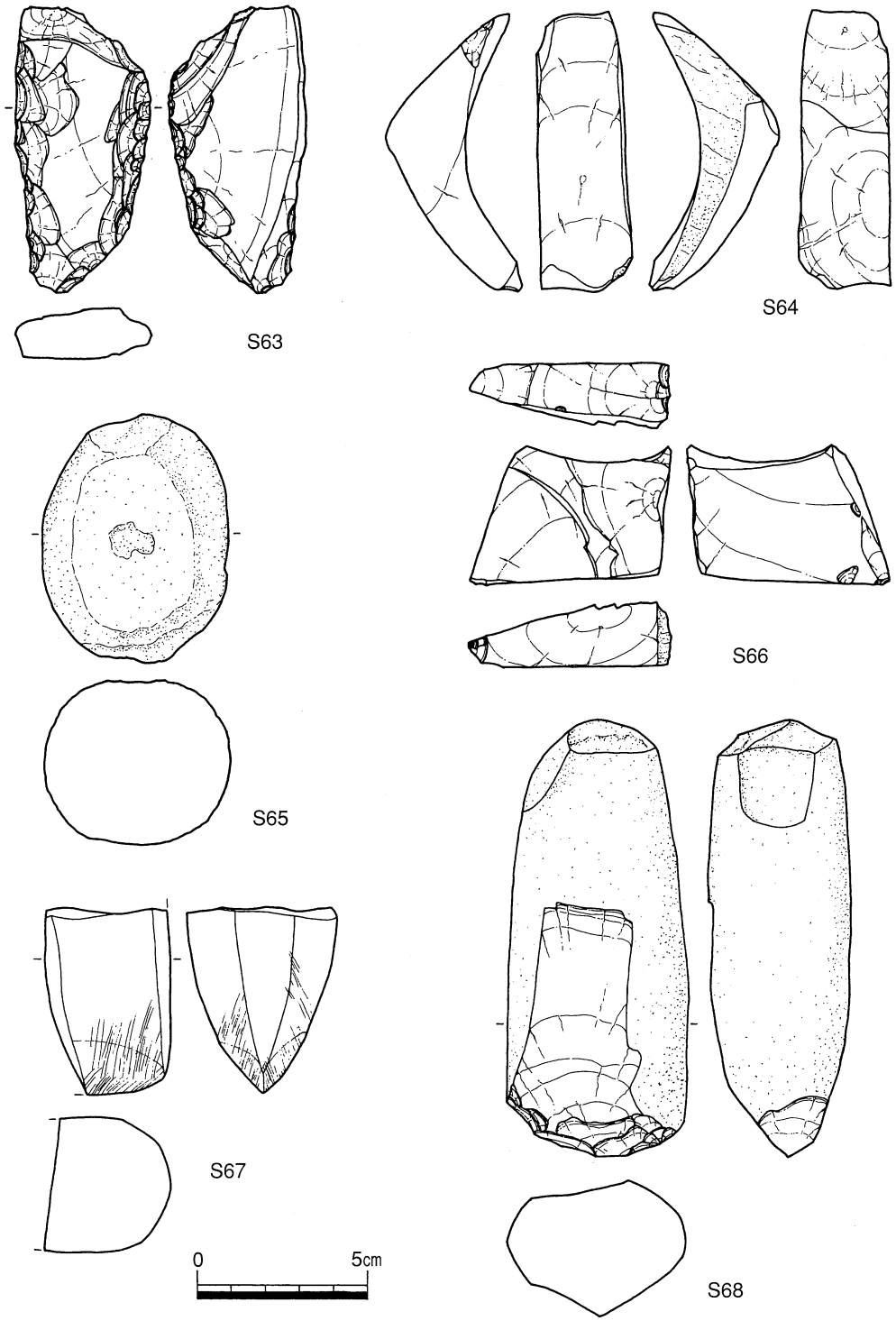


図241　溝21 出土遺物(2)

水差し形土器(523)、器台形土器(524)、甕形土器(525)、打製石包丁(S60・S61)、打製石剣の未製品(S62)、サヌカイトの剥片・砕片である。特に蓋形土器(515)は接合しなかったが、溝16出土の蓋形土器(473)と同一個体である可能性が高い。複数の溝が同時存在していたことを示すものでもある。

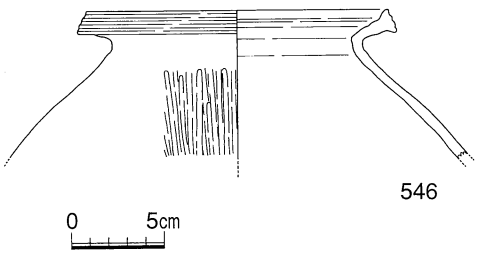
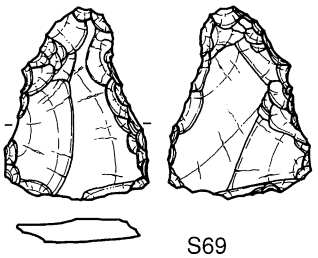
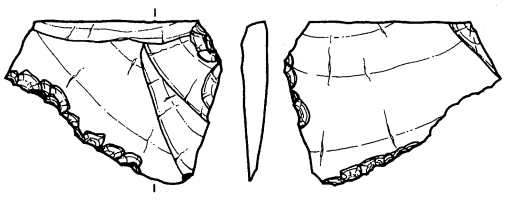
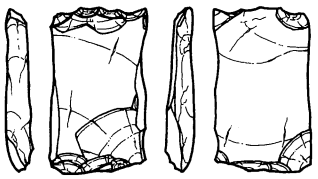
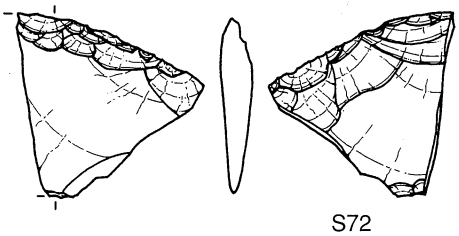


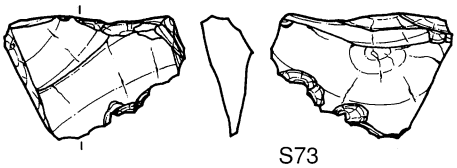
図242　溝22 出土遺物


S69

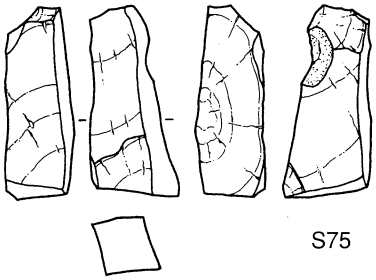

S70

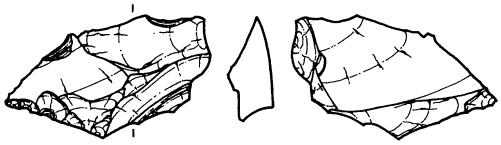

S71

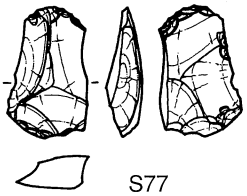

S72


S73

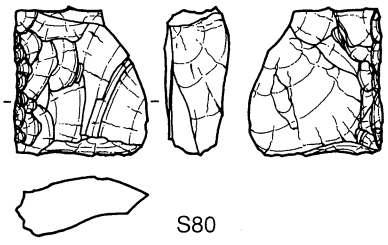
S74


S75


S76


S77

S78


S80

S79

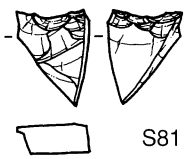

S81

図243　包含層及び柱穴出土石器(1)

溝20（図239）

調査区中央付近で検出された溝である。溝16・溝18に切られており、わずかな部分しか検出できなかった。おそらく溝16・溝18・溝20は一連の溝で、その流路のわずかな変更や掘り直しがそれぞれの溝に対応する可能性が高い。切り合い関係からすると、溝20としてとらえている部分が最も古いことになる。遺物は少なかったが、中期末に下るものが認められないこともそのことを指示しているといえる。

遺物は小片が多かったが、図化できたのは浅鉢形土器(526)、甕形土器(527・528)、底部(529)である。(526)は縄文晩期前葉の時期であり、器表面もそれ程摩滅していないことから、付近に同期の集落が存在する可能性を示している。

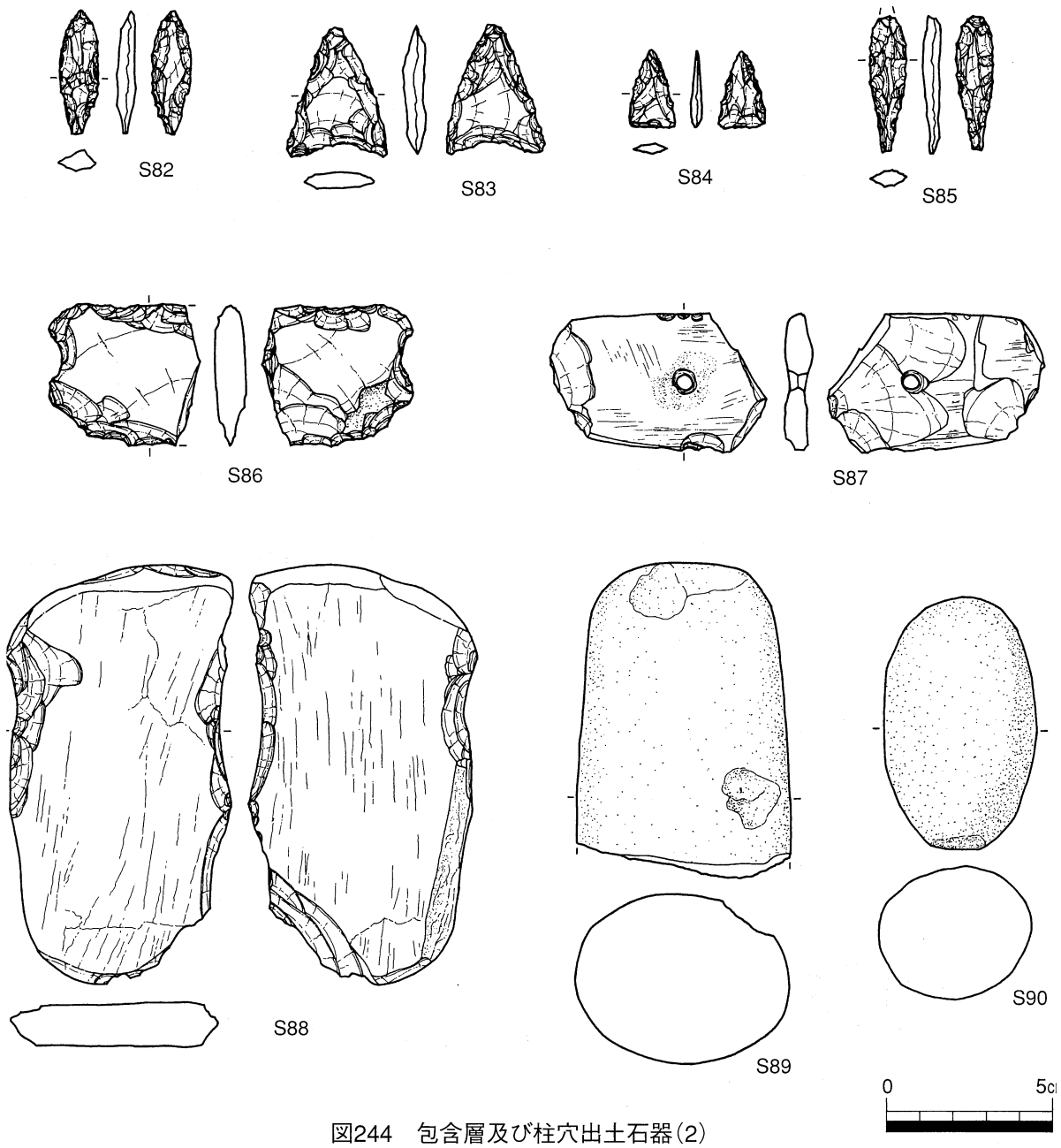


図244　包含層及び柱穴出土石器(2)

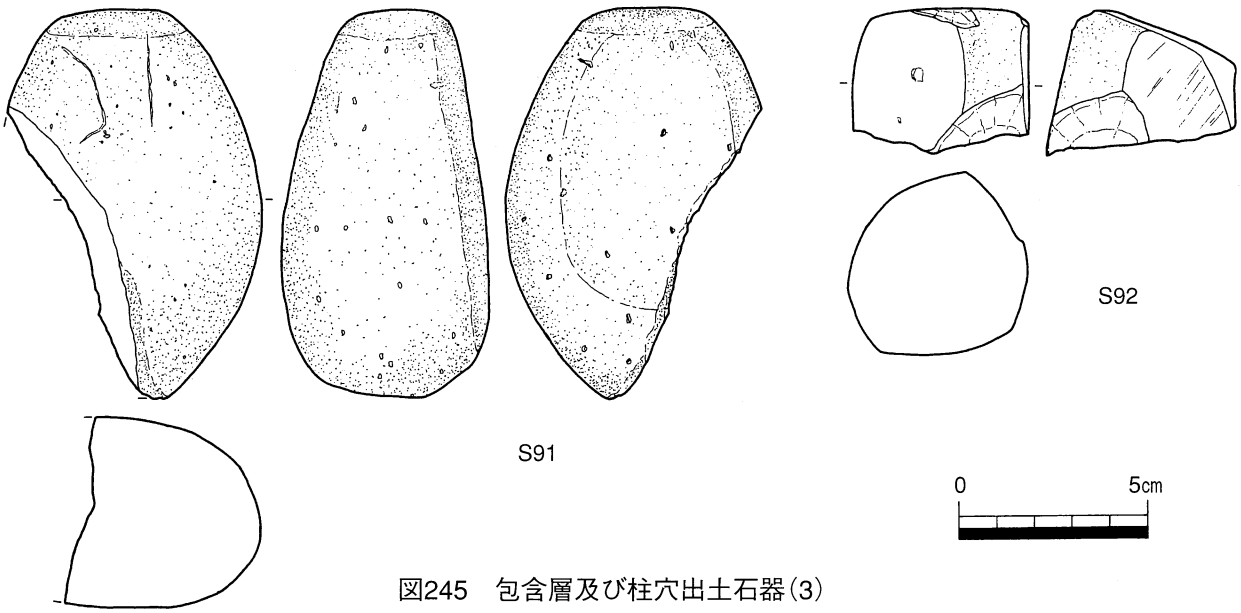


図245　包含層及び柱穴出土石器(3)

溝21（図240・241）

調査区南西部で検出された溝である。溝17にほとんど削平されているが、基本的には溝17の流路がわずかに変更した痕跡と理解できる。遺構検出面は3.5m付近で、底面までは検出面から0.5mと、溝17よりもかなり浅い。しかしながら本来の底面が残存部までの深さであったかどうかは不明である。

遺物は壺形土器(530～532)、甕形土器(533～540)、底部(541・542)、高杯形土器(543～545)、打製石剣の未製品(S63)、蛤刃石斧(S67・S68)、叩き石(S65)、石核(S66)、サヌカイトの剥片(S64)・砕片である。中期中葉の時期である。

溝22（図242）

調査区北西コーナー付近で検出された溝である。遺構検出面は3.5m付近で、最深部の深さは検出面から0.6mである。幅は2.5m前後で、底は平坦となっている。調査区内を東西に横切っているが、北へ若干直線的に振っていることから調査区中央付近で調査区外へと出てしまう。埋土は2層あるが、いずれも遺物の量は少なく、かつ、土器の小片ばかりであった。図化できたのは甕形土器(546)1点だけである。中期中葉である。

包含層及び柱穴出土石器（図243～245）

包含層や柱穴からも石器が出土している。それらはスクレイパー(S69・S70)、楔形石器(S71・S77)、打製石包丁(S72・86)、磨製石包丁(S87)、剥片(S73・S74・S76・S78・S79・S81)、石核(S75・S80)、石鏃(S82～S85)、石鍬(S88)、磨製石斧(S89)、叩石(S90)、石杵(S91・S92)である。特に石杵には赤色顔料の付着が認められる(附章参照)。

引用文献
草原孝典『妹尾住田遺跡』岡山市教育委員会　2003年
重根弘和「まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』167　2002年
豊島雪絵「古墳時代における石製紡錘車の性格－中国・近畿地方出土例を中心に－」『古代吉備』第23集　2001年
乗岡　実「中世の備前焼甕(壺)の編年案・紀年名資料に見る大甕(壺)の変遷」『第２回中近世備前焼研究会資料』2000年
間壁忠彦・間壁葭子「備前焼ノート(1)～(4)」『倉敷考古館研究集報』１・２・５・18　1966年・1966年・1968年・1984年

6　出土土器観察表

器　形	土器番号	法量(cm)			形態・調整手法の特徴	胎　土	色　調	遺　構
		口径	底径	器高				
甕	1	－	－	－	須恵器で、外面平行叩き後カキメ、内面車輪文叩き。	含長石・石英	淡灰色	近世水田層
器台	2	－	－	－	外面下半タテハケ、突帯上面は斜格子文。	含長石・石英	橙灰色	近世水田層
鉢	3	18.7	－	－	土師質土器で、口縁端部および外面ナデ、内面ヨコハケ。	含長石・石英	橙灰色	井戸１
壺	4	12.0	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
甕	5	25.3	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ後、内面下半ナデ。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
甕	6	－	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ後、内面下半ナデ。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
甕	7	－	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
甕	8	－	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
甕	9	－	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
底部	10	－	12.6	－	備前焼で、内外面ヨコナデ、外面指頭圧痕。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
底部	11	－	19.3	－	備前焼で、内外面ヨコナデ、外面指頭圧痕。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
擂鉢	12	16.8	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ、条線幅1.8cmで10本認められる。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
擂鉢	13	－	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ、外面指頭圧痕。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
擂鉢	14	21.4	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ、条線幅2.5cmで12本認められる。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
擂鉢	15	－	－	－	備前焼で、内外面ヨコナデ、外面指頭圧痕。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
擂鉢	16	－	13.6	－	備前焼で、内外面ヨコナデ、外面指頭圧痕、条線幅2.2cmで7本認められる。	含長石・石英	橙赤色	井戸１
椀	17	14.4	6.5	4.9	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ、底部外面に「墨書」が認められる。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	18	14.4	7.0	4.9	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ、底部外面に「墨書」が認められる。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	19	14.6	6.1	4.9	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ、底部外面に「墨書」が認められる。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	20	14.7	5.5	5.0	土師質土器で、外面下半ナデ、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	21	14.7	6.0	5.4	土師質土器で、外面下半ナデ、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	22	15.1	6.0	4.6	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	23	14.3	5.7	5.1	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	24	14.6	6.3	4.8	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	25	14.4	6.4	5.4	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	26	15.0	6.0	5.1	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	27	15.0	5.9	4.9	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
椀	28	15.0	6.3	5.2	土師質土器で、口縁部内外面および内面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	井戸2
杯	29	14.6	10.7	2.4	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
皿	30	8.3	6.2	1.5	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色	井戸2
皿	31	8.5	6.4	1.6	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2

皿	32	8.7	6.8	1.2	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
皿	33	8.7	7.2	1.7	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
皿	34	8.7	7.4	1.7	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
皿	35	8.8	6.1	1.5	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英	灰白色	井戸2
皿	36	8.8	7.4	1.6	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
皿	37	8.9	6.8	1.6	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
皿	38	9.0	6.7	1.5	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
皿	39	9.0	6.8	1.7	土師質土器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り。	含長石・石英・赤色粒	灰白色	井戸2
杯	40	12.9	9.3	9.3	土師器で、底部外面ヘラ切り後指押さえ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	建物1
杯	41	－	9.0	9.0	土師器で、底部外面ヘラ切り後指押さえ。	含長石・石英・赤色粒	橙赤色	建物1
鍋	42	46.0	－	－	土師器で、外面上半タテハケ後下半ヨコハケ、内外ヨコハケ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	建物1
鉢	43	20.0	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	建物5
杯蓋	44	15.2	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	建物6
杯蓋	45	17.0	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	建物6
杯身	46	13.2	9.4	3.5	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	建物6
杯身	47	15.3	9.2	5.8	土師器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	建物6
杯蓋	48	17.0	－	－	土師器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	建物6
皿	49	22.0	－	－	土師器で、内外面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ。	含長石・石英	淡橙灰色	建物6
杯	50	20.1	－	－	土師器で、内外面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ。	含長石・石英	淡橙灰色	建物6
杯	51	23.4	－	－	土師器で、内外面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ。	含長石・石英	淡橙灰色	建物6
皿(蓋)	52	－	－	－	土師器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	建物6
杯蓋	53	15.3	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P669
杯身	54	14.5	10.2	4.2	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P669
皿	55	20.2	－	－	土師器で、内面と口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P669
蓋	56	14.2	－	3.4	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P718
杯身	57	11.5	6.0	4.5	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石・石英	灰白色	P718
甕	58	30.2	－	－	土師器で、外面タテハケ後口縁部ヨコナデ、内外面ヨコハケ。	含長石・石英・金雲母	短茶色	P718
杯蓋	59	15.6	3.0	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P709
杯蓋	60	15.6	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P709
杯身	61	－	11.6	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P709
皿	62	15.2	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P709
皿	63	21.0	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ。	含長石・石英	淡橙灰色	P709
皿	64	21.6	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P709
甕	65	24.8	－	－	土師器で、外面ナナメハケ、内面ヨコハケ後ヨコナデ。	含長石・石英	短茶色	P709
甕	66	13.4	－	－	土師器で外面タテハケ、内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ、内面胴部工具ナデ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	P709
皿	67	21.0	－	－	土師器で、外面ヨコナデ後ケズリとミガキ、内面にはヨコナデ後暗文。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P709
皿	68	－	－	－	土師器で、内外面ヨコナデ、外面下半ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P709
杯	69	12.2	－	－	土師器で、内外面ヨコナデ、丹塗り。	含長石・石英	橙灰色	溝2
壺(横瓶)	70	20.5	－	－	須恵器で、胴部外面タテハケ、内面タタキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝2
杯身	71	9.0	9.0	3.0	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
杯身	72	12.2	9.8	3.9	須恵器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
杯身	73	－	8.6	－	須恵器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ 外部中央にヘラ記号あり。	含長石・石英	淡灰色	包含層
椀	74	－	－	－	緑釉陶器の椀である。	－	－	包含層
甕・壺	75	－	－	－	須恵器で、外面平行タタキ後カキメ、内面車輪文タタキ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
壺	76	－	－	－	須恵器で、外面に線刻が認められる。	含長石・石英	淡灰色	包含層
甕・壺	77	－	－	－	須恵器で、外面平行タタキ後カキメ、内面車輪文タタキ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
甕・壺	78	－	－	－	須恵器で、外面平行タタキ後カキメ、内面車輪文タタキ。	含長石・石英	淡灰色	包含層

甕・壺	79	−	−	−	須恵器で、外面平行タタキ後カキメ、内面車輪文タタキ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
猿面硯(？)	80	−	−	−	須恵器で、外面タタキ、内面ナデ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
杯身	81	11.9	9.3	3.5	須恵器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
杯身	82	−	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ後ヘラ記号。	含長石・石英	淡灰色	包含層
平瓶	83	−	−	−	須恵器で内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	包含層
椀	84	9.6	−	−	緑釉陶器で、京都産。	−	−	包含層
椀	85	−	−	−	緑釉陶器で、京都産。	−	−	包含層
皿	86	14.6	−	−	緑釉陶器で、京都産。	−	−	包含層
瓶	87	−	6.4	−	緑釉陶器で、猿投産。	−	−	包含層
底部	88	−	6.0	−	緑釉陶器で、京都産。	−	−	包含層
底部	89	−	6.4	−	緑釉陶器で、京都産。	−	−	包含層
底部	90	−	6.9	−	緑釉陶器で、京都産。	−	−	包含層
胴部	91	−	−	−	須恵器で、外面平行タタキ後カキメ、内面タタキ、外面に「小」の焼成前刻字あり。	含長石・石英	淡灰色	包含層
杯蓋	92	15.4	−	4.1	須恵器で、外面1／2ヘラケズリ後ヨコナデ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居1a
杯身	93	13.15	8.8	4.1	須恵器で、外面1／2ヘラケズリ後ヨコナデ、内面中央タタキ後ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居1a
杯身	94	14.3	−	3.4	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居1a
甕	95	18.2	−	−	土師器で、外面タテハケ後口縁部ヨコナデ、内面胴部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコハケ。	含長石・石英	橙灰色	竪穴住居1a
甑	96	24.4	−	−	土師器で、外面タテハケ、口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	橙灰色	竪穴住居1a
杯身	97	10.8	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居1b
壺	98	−	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居1b
杯蓋	99	12.1	−	4.15	須恵器で、外面1／2はヘラケズリ、下半ヨコナデ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	橙赤色	竪穴住居2a
杯蓋	100	15.7	−	3.4	須恵器で、外面1／2はヘラケズリ、下半ヨコナデ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居2b
杯身	101	11.8	6.0	11.8	須恵器で、外面1／3はヘラケズリ、下半ヨコナデ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居2c
杯身	102	13.1	7.2	3.4	須恵器で、外面1／4はヘラケズリ、下半ヨコナデ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居2a
鍋	103	30.1	−	−	土師器で、外面ナナメハケ、内面胴部ケズリ後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居2a
甕	104	17.0	−	−	土師器で、外面タテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡橙色	竪穴住居2a
甑	105	29.0	10.9	29.0	土師器で、外面ハケ後ナデ、内面板ナデ後ハケ。	含長石・石英・角閃石	短茶色	竪穴住居2a
杯蓋	106	14.0	−	4.4	須恵器で、外面1／2ヘラケズリ、下半ヨコナデ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居3
杯蓋	107	15.0	−	4.7	須恵器で、外面1／3ヘラケズリ、下半ヨコナデ、内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居3
杯蓋	108	17.4	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居3
杯身	109	11.0	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居3
杯身	110	13.8	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居3
甕	111	12.1	−	13.9	須恵器で、内外面ヨコナデ、頸部にタテ方向のミガキ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居3
甑	112	−	−	−	土師器で、ハケ後ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居3
鍋	113	40.4	−	−	土師器で、外面タテハケ後下半ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙赤色	竪穴住居3
杯蓋	114	13.0	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居7
杯身	115	11.0	−	−	須恵器で、外面下半1／2ヘラケズリ、ほかヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居7
鉢	116	16.0	−	−	土師器で、内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居7
甕	117	15.0	−	−	土師器で、背面胴部タテミガキ(？)内面胴部ケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居7
甕	118	18.4	−	−	土師器で、外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ、胴部ヘラナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居7
杯身	119	12.2	6.0	4.7	須恵器で、外面下半1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居8
甕	120	21.4	−	−	須恵器で、外面タテハケ、内面ヨコハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	竪穴住居8
杯蓋	121	14.9	−	−	須恵器で、外面上半1／3ヘラケズリ、下半及び内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居9
杯蓋	122	15.8	−	4.1	須恵器で、外面上半1／2ヘラケズリ、下半及び内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居9
杯身	123	12.2	−	−	須恵器で、外面下半ヘラケズリ、上半及び内面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居9
壺	124	14.3	−	−	土師器で、外面タテハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	橙灰色	竪穴住居9
杯蓋	125	16.4	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居11

杯蓋	126	16.2	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居11
杯身	127	−	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居16
甑	128	17.4	9.5	−	土師器で、外面タテハケ後上端ヨコハケ、内面ヘラケズリ後上端ヨコハケ、口縁端部ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	竪穴住居16
杯蓋	129	15.4	−	−	須恵器で、外面上端ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居18
杯身	130	13.0	−	−	須恵器で、外面下半1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	竪穴住居18
壺	131	21.0	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居18
甕(？)	132	36.6	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面カキメ。	含長石・石英	橙灰色	竪穴住居18
甕	133	18.8	−	−	土師器で、外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ、胴部ナデ、口縁部外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙赤色	竪穴住居19
高杯	134	−	−	−	土師器で、内外面の調整は不明。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居19
杯蓋	135	12.8	−	4.3	須恵器で、外面上半1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居20
杯身	136	10.6	−	4.8	須恵器で、外面下半1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居20
高杯	137	11.0	−	−	土師器で、内外面ヨコナデ、外面下半ナデ。	含長石・石英	橙灰色	竪穴住居20
椀	138	11.7	−	5.6	土師器で、外面上半ナデ、下半ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居20
壺	139	9.7	−	−	土師器で、胴部外面ヘラミガキ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙灰色	竪穴住居20
甕	140	12.0	−	−	土師器で、胴部外面ハケ、内面ナデ、口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居20
甕底部	141	−	−	−	土師器で、内面荒いヘラケズリ、外面不明。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居20
手ずくね土器	142	5.2	−	4.4	土師器で、内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居20
高杯	143	14.2	−	−	土師器で内外面ヨコナデ後外面タテハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居20
高杯	144	24.3	−	−	土師器で、外面ヨコナデ後ハケ後暗文、内面も同様。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居20
高杯脚部	145	−	11.0	−	土師器で、外面ナデ、内面不明。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居20
手ずくね土器	146	2.6	−	2.5	土師器で、内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居21
甑	147	−	−	−	須恵器で、内外面ナデ。	含長石・石英	淡灰色	竪穴住居22
杯	148	13.2	−	4.6	須恵器で、内外面ナデ。	含長石・石英	淡灰色	建物4PC
杯	149	8.7	−	3.0	須恵器で、内外面ナデ。	含長石・石英	淡灰色	柱穴列 6
甑	150	−	−	−	須恵器で、胴部下半ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	柱穴列 6
杯蓋	151	9.6	−	3.2	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
杯蓋	152	9.6	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
杯蓋	153	10.0	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
杯蓋	154	10.8	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
高杯蓋	155	12.4	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
杯身	156	10.4	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
高杯	157	−	−	8.0	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
甕	158	−	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面にヘラによる施文がある。	含長石・石英	淡灰色	P 110
鉢	159	9.6	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 110
製塩土器	160	−	−	−	外面タタキ、内面ナデ。	含長石・石英	橙灰色	P 110
甕	161	26.0	−	−	土師器で、内面ヨコハケ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙灰色	P 110
高杯	162	13.6	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1209
甑	163	−	−	−	須恵器で、下半ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1209
甕	164	12.4	−	−	土師器で、胴部外面タテハケ、口縁部内面ナナメハケ、ほかはナデ。	含長石・石英	橙灰色	P 1209
杯身	165	10.0	6.8	4.0	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1395
甕	166	22.8	−	−	須恵器で、胴部外面平行タタキ、内面車輪文タタキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1395
杯蓋	167	14.7	−	4.4	須恵器で、外面天井部1／2がヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1406
杯蓋	168	14.4	−	5.1	須恵器で、外面天井部1／2がヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1406
杯蓋	169	14.8	−	4.9	須恵器で、外面天井部1／2がヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1406
杯身	170	12.4	−	4.8	須恵器で、外面底体部1／2がヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1406
杯身	171	12.5	−	4.9	須恵器で、外面底体部1／2がヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1406
杯蓋	172	14.2	−	4.9	須恵器で、外面天井部1／2がヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1439

杯身	173	12.4	－	4.9	須恵器で、外面底体部1／2がヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1439
壺	174	12.0	－	－	弥生土器で、外面ヨコナデ、内面ナデ。	含長石・石英・金雲母	橙赤色	P 1439
甕	175	－	5.3	－	弥生土器で、外面タテミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P 1439
杯蓋	176	12.2	－	4.5	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面天井部にヘラ切り痕。	含長石・石英	淡灰色	P 1447
杯蓋	177	13.2	－	4.7	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面天井部にヘラ切り痕。	含長石・石英	淡灰色	P 1447
杯蓋	178	13.4	－	3.5	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1447
杯身	179	11.3	－	3.3	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1447
高杯	180	12.0	13.2	13.0	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	P 1666
壺	181	10.4	－	10.8	土師器で、外面胴部ナナメハケ、口縁部内面ヨコハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	P 1666
甕	182	21.2	－	－	土師器で、外面タテハケ後、口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヨコハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	P 1666
杯蓋	183	14.0	－	3.8	須恵器で、外面天井部1／3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝3
杯蓋	184	14.0	－	3.8	須恵器で、外面天井部1／3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝3
杯身	185	11.6	－	3.8	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝3
杯身	186	13.2	－	－	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝3
甑	187	－	－	－	土師器で、外面タテハケ後ナデ、内面ナデ。	含長石・石英・金雲母	橙赤色	溝3
杯蓋	188	14.0	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝9
杯身	189	11.4	－	4.4	須恵器で、外面底体部にヘラ切り痕、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝9
杯身	190	11.4	－	4.0	須恵器で、外面底体部にヘラ切り痕、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝9
杯身	191	11.4	－	4.4	須恵器で、外面底体部にヘラ切り痕、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝9
杯身	192	12.0	－	4.5	須恵器で、外面底体部にヘラ切り痕、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝9
杯身	193	12.8	－	－	須恵器で、外面底体部にヘラ切り痕、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝9
甕	194	－	－	－	須恵器で、外面底部ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝9
把手	195	－	－	－	須恵器で、ナデ、円孔あり。	含長石・石英	淡灰色	溝9
杯蓋	196	12.1	－	3.5	須恵器で、外面天井部1／3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝10
杯蓋	197	13.6	－	4.3	須恵器で、外面天井部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯蓋	198	14.4	－	4.2	須恵器で、外面天井部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯蓋	199	14.3	－	4.0	須恵器で、外面天井部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯蓋	200	14.8	－	4.2	須恵器で、外面天井部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯蓋	201	14.5	－	5.0	須恵器で、外面天井部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯蓋	202	14.8	－	5.3	須恵器で、外面天井部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯蓋	203	15.6	－	4.9	須恵器で、外面天井部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
高杯蓋	204	12.4	－	4.5	須恵器で、外面天井部1／3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯蓋	205	12.6	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	206	10.0	－	3.6	須恵器で、外面ヘラ切り後ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝10
杯身	207	9.6	－	－	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	208	10.8	－	3.7	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝10
杯身	209	12.0	－	4.2	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	210	12.0	－	4.2	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	211	12.0	－	4.4	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	212	12.6	－	4.6	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	213	12.0	－	4.2	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	214	12.3	－	4.6	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	215	12.8	－	3.6	須恵器で、底部ヘラ切り後ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	216	12.8	－	3.9	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	217	13.0	－	4.0	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	218	13.2	－	4.6	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
杯身	219	13.2	－	－	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10

杯身	220	13.4	−	4.9	須恵器で、外面底体部1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
壺	221	16.2	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝10
壺	222	21.6	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
平瓶	223	4.3	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝10
壺	224	−	−	−	須恵器で、胴部下半ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
高杯	225	−	8.7	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝10
甕	226	17.6	−	−	須恵器で、口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タタキ後カキメ、内面タタキ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
甕	227	26.4	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ、外面波状紋、胴部内面タタキ。	含長石・石英	淡灰色	溝10
甕	228	18.8	−	−	土師器で、外面タテハケ、内面ヨコハケ後、口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・金雲母	橙灰色	溝10
甕	229	20.4	−	−	土師器で、外面タテハケ、内面ヨコハケ、胴部内面工具ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙赤色	溝10
鉢	230	10.8	−	5.3	土師器で、内外面ヨコナデ、外面一部にヘラミガキ。	含長石・石英	橙灰色	溝10
製塩土器	231	19.8	−	−	内外面ナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	溝10
絵画土器	232	−	−	−	弥生土器で、流水文の可能性もある、外面ナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙赤色	溝10
甕	233	20.2	−	−	土師器で、内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙赤色	溝10
甑	234	−	10.0	−	土師器で、外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	溝10
製塩土器	235	−	−	−	外面タタキ、内面ナデ。	含長石・石英・金雲母	橙赤色	溝10
甕	236	26.4	−	−	土師器で、外面ナナメハケ、内面ヨコハケ、内面胴部ヘラナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝11
甕	237	26.2	−	−	土師器で、外面タテハケ、内面ヨコハケ、内面胴部ヘラナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝11
鍋	238	44.6	−	−	土師器で外面タテハケ後ヨコハケ、内面ヨコハケ、内面胴部ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝11
鍋	239	46.6	−	−	土師器で外面タテハケ後ヨコハケ、内面ヨコハケ、内面胴部ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝11
杯蓋	240	10.6	−	3.3	須恵器で、天井部外面1／3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
杯蓋	241	12.4	−	4.3	須恵器で、天井部外面1／3ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
杯蓋	242	12.0	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯蓋	243	12.8	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ、内面に工具痕あり。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯蓋	244	14.4	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯蓋	245	15.2	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯蓋	246	15.4	−	5.1	須恵器で、天井部外面1／2ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
杯身	247	9.6	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
杯身	248	9.8	−	4.0	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯身	249	11.2	−	4.2	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯身	250	11.6	−	3.8	須恵器で、外面ヘラ切り、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯身	251	11.1	−	4.0	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
杯蓋	252	11.8	6.1	3.9	須恵器で、外面ヘラ切り、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
提瓶	253	8.2	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
壺	254	−	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
壺(𤭯)	255	−	−	−	須恵器で、底部外面ヘラケズリ後ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
杯身	256	10.0	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
短頸壺	257	8.8	−	8.6	須恵器で、底部ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
短頸壺	258	8.8	−	9.4	須恵器で、底部ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
横瓶	259	9.0	−	−	須恵器で、胴部内外面タタキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
甕	260	22.6	−	−	須恵器で、胴部内外面タタキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
甕	261	22.2	−	−	須恵器で、胴部内外面タタキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
甕	262	22.0	−	−	須恵器で、口縁部内外面ヨコナデ、外面にヘラ記号あり。	含長石・石英	灰白色	溝12
横瓶	263	11.0	−	−	須恵器で、胴部内外面タタキ、外面カキメ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12
横瓶	264	−	−	−	須恵器で、内外面タタキ。	含長石・石英	灰白色	溝12
横瓶	265	−	−	−	須恵器で、内外面タタキ、外面カキメ。	含長石・石英	灰白色	溝12
平瓶	266	−	−	−	須恵器で、底部下半ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝12

甑	267	10.3	−	12.5	須恵器で、底部下半ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
高杯	268	12.0	−	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
高杯	269	−	8.5	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
高杯	270	−	8.9	−	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	溝12
壺	271	12.4	−	15.0	土師器で、外面タテハケ後下半ヨコハケ、内面口縁部ヨコハケ後内外面ヨコナデ。	含長石・石英・金雲母	橙灰色	溝12
甕	272	23.0	−	−	土師器で、胴部外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝12
甕	273	17.2	−	−	土師器で、内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	溝12
甑	274	35.4	−	−	土師器で、外面タテハケ後ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	溝12
甕	275	20.3	−	−	土師器で、外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ、胴部内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	短茶色	溝12
甕	276	22.8	−	−	土師器で、外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ、ほかはナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝12
甕	277	14.0	−	−	土師器で、外面タテハケ、口縁部内面ヨコハケ、胴部下半ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙赤色	溝12
鍋	278	36.2	−	−	土師器で、外面一部にヨコハケ、内面口縁部ヨコハケ後ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝12
鍋	279	33.2	−	−	土師器で、外面タテハケ後ヨコハケ、内面口縁部ヨコハケ、下半ナデ。	含長石・石英・金雲母	短茶色	溝12
鍋	280	41.6	−	−	土師器で、外面タテハケ後ナナメハケ、内面ヨコハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	溝12
製塩土器	281	13.0	−	15.0	外面ナデ、内面二枚貝条痕。	含長石・石英	橙灰色	溝12
平瓶	282	6.1	−	14.6	須恵器で、外面下半ヘラケズリ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝13
短頸壺	283	6.5	−	8.5	須恵器で、内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡灰色	溝15
製塩土器	284	12.0	−	−	外面タタキ、内面ナデ。	含長石・石英	橙赤褐色	包含層
製塩土器	285	14.0	−	−	外面タタキ、内面タタキ後ナデ。	含長石・石英	橙赤褐色	包含層
手ずくね土器	286	4.0	−	4.0	内外面ナデ。	含長石・石英	橙灰色	包含層
水差し形土器	287	11.9	−	−	外面胴部ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部外面ヨコナデ。口縁端部に3個1単位の竹管文が施文。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居4
鉢形土器	288	21.2	−	−	内外面の調整不明。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	竪穴住居4
甕形土器	289	14.4	−	−	胴部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居4
甕形土器	290	17.0	8.8	36.7	胴部外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、頸部以下ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	竪穴住居4
甕形土器	291	15.4	4.9	25.5	胴部外面タテハケ、内面ケズリ、頸部ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	竪穴住居4
底部	292	−	5.4	−	外面不明、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居4
底部	293	−	7.8	−	内外面の調整不明。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居4
壺形土器	294	18.1	−	−	外面タテハケ後、上半ヨコ、下半タテヘラミガキ、内面頸部以下ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居4
手ずくね土器	295	2.0	−	−	内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居5
手ずくね土器	296	2.6	5.6	−	内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	竪穴住居5
鉢形土器	297	9.8	4.6	6.3	外面ヘラケズリ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居5
鉢形土器	298	18.8	−	−	外面下半ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ、内面不明。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居5
高杯形土器	299	20.6	9.4	12.5	外面下半タテヘラミガキ後、端部ヨコヘラミガキ、内面ナナメヘラミガキ、胴部内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	竪穴住居5
鉢形土器	300	−	−	4.8	内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居5
甕形土器	301	10.0	−	−	内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居5
壺形土器	302	9.0	5.4	17.0	外面下半タテヘラミガキ、上半ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居5
甕形土器	303	11.8	5.0	19.2	外面上半タテハケ後下半タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居5
甕形土器	304	12.2	6.2	24.8	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙茶灰色	竪穴住居5
甕形土器	305	11.8	−	−	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	竪穴住居5
甕形土器	306	14.0	6.2	29.4	外面タテハケ後下半タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、頸部内面ハケ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居5
甕形土器	307	19.4	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	竪穴住居5
高杯形土器	308	23.8	−	−	口縁部付近ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	竪穴住居6
壺形土器	309	13.6	−	−	内外面ヨコナデ、頸部内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居6
高杯形土器	310	−	13.2	−	外面端部ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	竪穴住居6
底部	311	−	13.0	−	外面不明、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	竪穴住居6
器台形土器	312	28.6	25.8	−	外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	淡橙灰色	竪穴住居6
甕形土器	313	17.4	−	−	外面上半タテハケ、下半タテヘラミガキ、内面不明。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居10

高杯形土器	314	−	−	9.2	内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居10
高杯形土器	315	24.0	−	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	竪穴住居10
高杯形土器	316	11.0	−	−	外面下半ヘラミガキ、ほかはヨコナデ。	含長石・石英	橙白色	竪穴住居12・13・14
高杯形土器	317	−	9.2	−	外面ハケ後ナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居12・13・15
高杯形土器	318	−	8.4	−	外面不明、内面ヨコハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居12・13・16
高杯形土器	319	−	10.0	−	外面タテハケ後ナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	竪穴住居12・13・17
高杯形土器	320	22.0	−	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	竪穴住居12・13・18
高杯形土器	321	21.0	−	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	竪穴住居12・13・19
壺形土器	322	18.3	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙灰白色	竪穴住居12・13・20
壺形土器	323	−	−	−	外面タテハケ後ヨコナデ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	竪穴住居12・13・21
甕形土器	324	20.0	−	−	不明。	含長石・石英・赤色粒	茶灰色	竪穴住居12・13・22
甕形土器	325	19.2	−	−	外面タテハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・角閃石	橙茶灰色	竪穴住居12・13・23
鉢形土器	326	18.0	−	−	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ。	含長石・石英	橙灰色	竪穴住居12・13・24
甕形土器	327	13.0	−	−	不明。	含長石・石英	橙灰色	竪穴住居12・13・25
甕形土器	328	30.0	−	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰褐色	竪穴住居12・13・26
甕形土器	329	26.8	−	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰褐色	竪穴住居12・13・27
甕形土器	330	19.1	−	−	内面ナナメハケ後ナデ。	含長石・石英	淡橙色	竪穴住居12・13・28
甕形土器	331	19.0	−	−	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ナナメハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙色	竪穴住居12・13・29
甕形土器	332	−	−	−	内面ヨコヘラミガキ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙色	竪穴住居12・13・30
底部	333	−	6.2	−	外面タテヘラミガキ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙色	竪穴住居12・13・31
底部	334	−	−	−	内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙色	竪穴住居12・13・32
壺形土器	335	4.4	3.9	8.1	内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居15
底部	336	−	4.7	−	内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居15
底部	337	−	5.6	−	内面ハケ、ほかはナデ。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居15
底部	338	−	6.0	−	内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	竪穴住居15
鉢形土器	339	10.8	4.6	5.2	内面ハケ、外面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	竪穴住居15
鉢形土器	340	11.0	−	−	内外面ナデ、内面一部に工具ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居15
底部	341	−	4.3	−	外面タテヘラミガキ、内面不明。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居15
高杯形土器	342	26.1	−	−	下半内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居15
高杯形土器	343	22.6	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	竪穴住居15
高杯形土器	344	25.6	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	竪穴住居15
高杯形土器	345	20.3	−	−	下半内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	竪穴住居15
高杯形土器	346	20.0	−	−	口縁部内外面ヨコナデ、ほかは不明。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居15
高杯形土器	347	−	8.8	−	内面ヘラケズリ、外面ナデ及び施文。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居15
高杯形土器	348	−	8.4	−	内面ヘラケズリ、外面上半ヘラミガキ、施文・透かし穴あり。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居15
−	349	−	13.0	−	内面ヘラケズリ、外面ハケ、施文・透かし穴あり。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居15
甕形土器	350	10.0	−	−	内外面不明。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	竪穴住居15
底部	351	−	4.3	−	外面タテヘラミガキ、内面不明。	含長石・石英	橙茶灰色	竪穴住居15
甕形土器	352	14.2	−	−	外面ヨコナデ、内面ナデ。	含長石・石英	橙茶灰色	竪穴住居15
甕形土器	353	12.8	−	−	外面ヨコナデ、内面ナデ。	含長石・石英	橙茶灰色	竪穴住居15
甕形土器	354	14.2	−	−	外面ヨコナデ、内面ナデ、施文あり。	含長石・石英・黒色粒	淡橙灰色	竪穴住居15
甕形土器	355	15.6	−	−	内外面ヨコナデ、施文あり。	含長石・石英	淡橙灰色	竪穴住居15
甕形土器	356	13.4	−	−	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面タテハケ後下半ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	淡橙灰色	竪穴住居15
底部	357	6.4	−	−	外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	橙茶灰色	竪穴住居15
甕形土器	358	13.8	−	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居15
甕形土器	359	−	−	−	外面ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡灰茶色	竪穴住居15
高杯形土器	360	−	9.8	−	外面タテヘラミガキ、下半ヨコナデ、杯部内面タテハケ、脚部内面ヘラケズリ、施文・透かし穴あり。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居24

甕形土器	361	15.2	−	−	外面タテハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙茶灰色	竪穴住居24
甕形土器	362	16.6	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居24
高杯形土器	363	18.4	7.5	8.7	内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居24
底部	364	−	10.8	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英	淡橙灰色	竪穴住居24
高杯形土器	365	10.5	7.5	14.4	外面ヨコ後タテヘラミガキ、背部内面ハケ、脚部内面ヘラケズリ、施文あり。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	竪穴住居25
高杯形土器	366	17.6	−	−	端部ヨコナデ、ほかは不明。	含長石・石英	淡茶灰色	竪穴住居25
高杯形土器	367	13.55	9.3	17.0	外面タテヘラミガキ、端部ヨコナデ、杯部内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	建物1
高杯形土器	368	12.0	9.8	18.5	外面ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ、杯部内面ナナメハケ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	建物1
水差し形土器	369	7.4	10.75	6.95	外面ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ、内面ナナメハケ、口縁部内外面ナデ。	含長石・石英	灰色	P1036
甕形土器	370	15.0	−	−	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙茶灰色	P1058
甕形土器	371	−	−	−	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヘラミガキ、施文あり。	含長石・石英	橙茶灰色	P1058
壺形土器	372	20.4	−	−	外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、内面タテハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P1058
甕形土器	373	23.2	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1073
高杯形土器	374	−	−	7.6	内外面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1073
壺形土器	375	16.2	−	−	内面ナデ、ほかは不明。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	P1073
底部	376	−	7.4	−	外面タテヘラミガキ、ほかは不明。	含長石・石英	橙茶灰色	P1101
壺形土器	377	3.6	14.0	4.8	外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙茶灰色	P1107
壺形土器	378	23.2	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙褐色	P1108
壺形土器	379	24.8	−	−	内外面ヨコナデ、棒状浮文が貼付。	含長石・石英	橙褐色	P1108
壺形土器	380	22.4	−	−	内外面ヨコナデ、円形浮文が貼付。	含長石・石英	橙褐色	P1108
壺形土器	381	28.6	−	−	内外面ヨコナデ、円形浮文、波状紋、刻み目文あり。	含長石・石英	橙茶灰色	P1108
壺形土器	382	10.2	−	−	外面タテハケ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1108
壺形土器	383	11.4	−	−	外面タテハケ、ほかは不明。	含長石・石英・黒色粒	橙褐色	P1108
壺形土器	384	9.6	−	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1108
壺形土器	385	10.6	−	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	橙褐色	P1108
甕形土器	386	17.2	−	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	P1108
甕形土器	387	12.6	−	−	外面不明、内面タテハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1108
甕形土器	388	14.0	−	−	外面不明、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1108
甕形土器	389	16.2	−	−	内面ナデ、ほかは不明。	含長石・石英	橙褐色	P1108
甕形土器	390	19.0	−	−	口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡橙灰色	P1108
甕形土器	391	24.6	−	−	内面ナデ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P1108
甕形土器	392	25.2	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1108
甕形土器	393	23.4	−	−	口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	橙褐色	P1108
底部	394	−	10.0	−	外面タテヘラミガキ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1108
底部	395	−	7.4	−	外面タテヘラミガキ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1108
底部	396	−	11.2	−	外面タテヘラミガキ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1108
高杯形土器	397	−	7.0	−	調整は不明。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1108
高杯形土器	398	−	9.4	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1108
底部	399	−	6.8	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1108
底部	400	−	7.1	−	外面タテヘラミガキ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	P1108
底部	401	−	12.3	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラナデ。	含長石・石英	橙褐色	P1108
壺形土器	402	16.4	6.95	21.7	外面タテハケ後下半ヨコヘラミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	黄灰色	P1109
壺形土器	403	−	6.0	−	外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ、内面ハケ。	含長石・石英	黄灰色	P1109
甕形土器	404	13.7	4.8	22.8	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面上半ハケ、下半ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	P1109
甕形土器	405	−	5.25	−	外面タテハケ後下半ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデ。	含長石・石英	灰白色	P1109
高杯形土器	406	21.0	−	−	内外面下半ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1120
高杯形土器	407	22.2	−	−	外面下半ヘラミガキ、上半ヨコナデ、ほかは不明	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1120

甕形土器	408	14.6	−	−	外面胴部タテハケ、内面ハケ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	淡茶灰色	P1120
底部	409	−	5.0	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	含長石・石英	黄灰色	P1120
底部	410	−	6.0	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	含長石・石英	黄灰色	P1120
底部	411	−	5.8	−	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	P1120
甕形土器	412	12.6	−	−	外面タテハケ、内面胴部下半ナナメハケ後上半ヨコヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	P1126
壺形土器	413	−	−	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	P1126
高杯形土器	414	30.0	−	−	外面ヨコヘラミガキ、内面ヨコハケ後タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	P1126
甕形土器	415	−	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	灰白色	P1126
底部	416	−	9.0	−	外面タテヘラミガキ、内面ハケ。	含長石・石英・黒色粒	橙褐色	P1126
底部	417	−	9.2	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	P1126
壺形土器	418	7.7	3.9	11.2	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1253
甕形土器	419	17.6	−	−	内面ナナメハケ。	含長石・石英・赤色粒	橙灰色	P1269
壺形土器	420	14.8	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	P1658
高杯形土器	421	−	7.8	−	外面ナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1658
底部	422	−	7.2	−	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1692
蓋形土器	423	−	−	−	内外面ヘラミガキ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	P1692
甕形土器	424	19.6	−	−	外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、内面ヨコヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1692
甕形土器	425	11.8	−	−	外面タテハケ、内面ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1720
甕形土器	426	14.4	−	−	内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英	灰白色	P1720
甕形土器	427	15.8	−	−	外面タテハケ、ナデ、口縁部ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	灰色	P1720
甕形土器	428	15.8	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部ヨコナデ。	含長石・石英	橙褐色	P1720
甕形土器	429	−	−	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1720
壺形土器	430	21.4	−	−	外面ヨコヘラミガキ、内面タテハケ後ヘラミガキ、脚部ナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	P1720
高杯形土器	431	−	7.5	−	外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、下半タテヘラミガキ、内面ナナメハケ後下半ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	黄灰色	P1720
壺形土器	432	−	5.2	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	P1720
底部	433	−	5.7	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ、焼成後穿孔あり。	含長石・石英	橙褐色	P1720
底部	434	−	5.4	−	内外面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	P1720
底部	435	−	5.2	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙褐色	P1720
壺形土器	436	17.6	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	P1720
高杯形土器	437	26.8	−	−	内外面ヘラミガキ、口縁端部ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	P1720
鉢形土器	438	31.0	−	−	外面ハケ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	P1720
高杯形土器	439	48.2	−	−	外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	茶褐色	P1720
甕形土器	440	16.4	−	−	内面タテハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	P1734
甕形土器	441	14.2	−	−	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	P1734
高杯形土器	442	22.0	−	−	外面ナナメハケ後タテヘラミガキ、内面ハケ後ヨコヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	黄灰色	P1737
甕形土器	443	16.5	−	−	内面タテハケ後ヘラナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	P1737
脚台	444	−	−	−	内面ナデ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	溝16
脚台	445	−	7.8	−	内面ヘラミガキ、ほかは不明。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	溝16
脚台	446	−	6.0	−	内面ヘラミガキ、外面ヘラミガキ後ナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡橙灰色	溝16
脚台	447	−	9.0	−	内面ハケ、外面ヘラミガキ、脚部内部ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝16
脚台	448	−	9.9	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、脚部内部ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	黄灰色	溝16
高杯形土器	449	−	13.4	−	脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝16
高杯形土器	450	−	8.0	−	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡灰茶色	溝16
高杯形土器	451	−	8.2	−	外面腹ミガキ、内面ナデ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	淡灰茶色	溝16
−	452	10.6	9.7	18.2	外面タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ、内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・黒色粒	淡灰茶色	溝16
壺形土器	453	7.4	−	−	外面タテハケ後ヨコヘラミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	黄灰色	溝16
脚台	454	−	7.4	−	外面ヨコヘラミガキ、内面ハケ、脚部内面ヘラケズリ、端部に施文あり。	含長石・石英・赤色粒	黄灰色	溝16

脚台	455	−	7.0	−	外面ヨコヘラミガキ、内面ヨコハケ、円孔あり。	含長石·石英·黒色粒	淡灰茶色	溝16
脚台	456	−	8.6	−	外面ヨコヘラミガキ、内面タテハケ、円孔あり。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝16
脚台	457	−	10.0	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラミガキ、ほかはヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	黄灰色	溝16
脚台	458	−	18.8	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ後一部ヨコヘラミガキ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝16
壺形土器	459	10.0	−	−	調整は不明。	含長石·石英·黒色粒	橙茶灰色	溝16
壺形土器	460	15.2	−	−	外面ヨコナデ、内面ヨコハケ、下半ヘラミガキ。	含長石·石英·黒色粒	淡茶灰色	溝16
壺形土器	461	18.5	−	−	外面ハケ、ほかはヨコナデ。	含長石·石英·黒色粒	黄灰色	溝16
壺形土器	462	14.2	−	−	外面ハケ後突帯貼付、内面下半ハケ、上半ヨコナデ、端部施文あり。	含長石·石英·黒色粒	淡灰茶色	溝16
甕形土器	463	18.4	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝16
甕形土器	464	27.0	−	−	外面タテハケ後ミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡橙灰色	溝16
水差し形土器	465	−	8.2	−	外面ヨコヘラミガキ、内面ナデ。	含長石·石英·黒色粒	茶褐色	溝16
高杯形土器	466	27.4	−	−	内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	茶褐色	溝16
鉢形土器	467	19.4	−	−	外面タテハケ後下半ナデ、内面ハケ及びナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝16
底部	468	−	6.0	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝16
底部	469	−	5.8	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝16
底部	470	−	5.2	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝16
底部	471	−	5.2	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝16
注口形土器	472	−	−	−	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	橙褐色	溝16
蓋形土器	473	−	−	−	内外面ナデ、外面に施文あり。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝16
壺形土器	474	13.4	−	−	外面ヘラミガキ後突帯貼付、内面ヨコヘラミガキ、施文あり。	含長石·石英·黒色粒	茶褐色	溝17
壺形土器	475	15.8	−	−	外面タテハケ、内面ヨコヘラミガキ、口縁端部内外面ヨコナデ、施文あり。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝17
壺形土器	476	16.4	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石·石英	淡茶灰色	溝17
高杯形土器	477	19.2	−	−	外面下半タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英	淡灰茶色	溝17
高杯形土器	478	20.8	−	−	内外面下半ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝17
高杯形土器	479	−	9.2	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石·石英·赤色粒	茶褐色	溝17
高杯形土器	480	−	11.1	−	端部ヨコナデ。	含長石·石英	橙茶灰色	溝17
高杯形土器	481	30.8	−	−	内外面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡茶灰色	溝17
高杯形土器	482	27.6	−	−	内面ヘラミガキ、ほかは不明。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝17
甕形土器	483	23.5	−	−	口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·黒色粒	淡灰茶色	溝17
甕形土器	484	16.9	−	−	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝17
甕形土器	485	15.5	−	−	口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·黒色粒	橙茶灰色	溝17
壺形土器	486	−	−	−	外面タテハケ後施文、内面ナデ。	含長石·石英·黒色粒	黄灰色	溝17
鉢形土器	487	8.0	2.5	8.9	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	橙褐色	溝17
器台形土器	488	−	20.0	−	外面上半タテハケ、下半ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝17
底部	489	−	12.8	−	外面タテヘラミガキ、内面上半ハケ、下半ケズリ。	含長石·石英·赤色粒	茶褐色	溝17
脚台	490	−	7.1	−	外面ハケ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝18
高杯形土器	491	−	10.5	−	外面タテハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝18
高杯形土器	492	−	9.0	−	外面ハケ後ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石·石英·黒色粒	茶褐色	溝18
高杯形土器	493	−	9.6	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石·石英·赤色粒	灰色	溝18
高杯形土器	494	−	7.8	−	内面ヘラケズリ。	含長石·石英·赤色粒	淡橙灰色	溝18
高杯形土器	495	−	8.5	−	外面タテヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝18
高杯形土器	496	37.0	−	−	外面ナデ、内面ハケ、端部施文あり。	含長石·石英·赤色粒	橙茶灰色	溝18
鉢形土器	497	9.6	4.6	9.9	内外面ナデ、内面下半工具ナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝18
水差し形土器	498	7.4	6.4	17.0	外面タテヘラミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·黒色粒	淡茶灰色	溝18
壺形土器	499	13.8	−	−	外面タテヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	灰色	溝18
壺形土器	500	−	4.0	−	内面ヨコナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡灰茶色	溝18
壺形土器	501	−	6.0	−	外面タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ後突帯貼付及び施文、内面ヘラナデ。	含長石·石英·赤色粒	淡橙灰色	溝18

壺形土器	502	14.0	7.4	28.1	外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ハケ後ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	溝18
壺形土器	503	11.4	−	−	外面ハケ後ヨコヘラミガキ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝18
壺形土器	504	16.7	−	−	外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	茶褐色	溝18
甕形土器	505	16.0	−	−	外面ハケ後下半ヘラミガキ、内面下半ヘラケズリ、口縁部付近内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	溝18
高杯形土器	506	14.8	−	−	外面タテハケ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝18
高杯形土器	507	18.5	−	−	外面下半ヘラミガキ、内面下半ハケ、上半内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝18
底部	508	−	8.5	−	外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	溝18
底部	509	−	6.4	−	外面ハケ後タテヘラミガキ。	含長石・石英	淡橙灰色	溝18
底部	510	−	5.6	−	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	溝18
底部	511	−	6.9	−	外面ヘラミガキ、内面ナデ、焼成後穿孔あり。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝18
底部	512	−	7.2	−	外面タテヘラミガキ、内面ハケ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	溝18
底部	513	−	8.0	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	溝18
壺形土器	514	5.4	−	−	外面タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ、内面上半ヨコヘラミガキ、下半ナデ、頸部に焼成前穿孔あり。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝19
蓋形土器	515	20.0	−	−	内外面ナデ、外部に施文あり。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝19
高杯形土器	516	−	10.2	−	外面ヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	溝19
壺形土器	517	14.1	−	−	外面タテハケ後突帯貼付、内面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡茶灰色	溝19
壺形土器	518	19.3	−	−	外面ナデ後突帯貼付及び施文、内面不明。	含長石・石英	灰色	溝19
底部	519	−	5.4	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	溝19
底部	520	−	5.8	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	茶褐色	溝19
短頸壺形土器	521	13.1	−	−	外面ヨコナデ後施文(竹管文・波状文・直線文)内面ナデ、焼成前穿孔あり。	含長石・石英・黒色粒	淡橙灰色	溝19
高杯形土器	522	21.6	−	−	外面ヘラミガキ後ヨコナデ、内面ヘラミガキ後ヨコナデ、脚部内面不明。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	溝19
水差し形土器	523	7.0	9.2	20.4	外面タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ、内面ハケ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	茶褐色	溝19
器台形土器	524	−	23.2	−	外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	溝19
甕形土器	525	30.6	−	−	内外面ヨコナデ後突帯貼付。	含長石・石英・赤色粒	淡橙灰色	溝19
浅鉢形土器	526	35.0	−	−	内外面ヨコヘラミガキ。	含長石・石英・黒色粒	灰褐色	溝19
甕形土器	527	−	−	−	調整は不明。	含長石・石英	灰色	溝19
甕形土器	528	19.4	−	−	口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	溝19
底部	529	5.0	−	−	外面ヘラミガキ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	溝19
壺形土器	530	16.2	−	−	外面ヘラミガキ後突帯貼付、内面タテハケ後ヨコハケ後ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	淡茶灰色	溝21
壺形土器	531	15.8	−	−	内外面ナデ後突帯貼付。	含長石・石英・赤色粒	淡灰茶色	溝21
壺形土器	532	19.2	−	−	外面ヨコナデ後突帯貼付、内面ヨコヘラミガキ。	含長石・石英・赤色粒	灰色	溝21
甕形土器	533	14.6	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	溝21
甕形土器	534	16.4	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	溝21
甕形土器	535	16.4	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	溝21
甕形土器	536	15.2	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	橙茶灰色	溝21
甕形土器	537	15.2	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・黒色粒	黄灰色	溝21
甕形土器	538	17.8	−	−	外面タテハケ、内面ヨコヘラミガキ。	含長石・石英・赤色粒	灰色	溝21
甕形土器	539	21.6	−	−	外面タテハケ、内面ハケ、口縁部内外面付近ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝21
甕形土器	540	17.4	−	−	外面タテハケ下半ヘラミガキ後施文、内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	灰色	溝21
底部	541	−	7.5	−	外面タテヘラミガキ、内面ナデ。	含長石・石英・赤色粒	茶褐色	溝21
底部	542	−	6.0	−	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、底部外面ナデ。	含長石・石英	淡灰茶色	溝21
高杯形土器	543	24.4	10.5	13.1	外面ハケ後タテヘラミガキ、内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラケズリ。	含長石・石英・赤色粒	茶褐色	溝21
高杯形土器	544	22.8	−	−	内外面ヘラミガキ。	含長石・石英・赤色粒	茶褐色	溝21
高杯形土器	545	26.8	13.0	−	外面ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ、内面ハケ後タテヘラミガキ、脚部内面ナデ。	含長石・石英・黒色粒	茶褐色	溝21
甕形土器	546	16.2	−	17.4	外面タテヘラミガキ、内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石・石英・赤色粒	橙茶灰色	溝22

7　出土石器観察表

図番号	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	遺　構	備　考
S1	石錘	花崗岩	10.0	8.6	7.0	910.0	竪穴住居5	
S2	柱状片刃石斧	不　明	4.9	1.3	1.2	14.8	竪穴住居5	破損品
S3	扁平片刃石斧	不　明	5.8	3.9	1.0	38.1	竪穴住居5	破損品
S4	楔形石器	サヌカイト	2.3	3.2	0.5	4.4	竪穴住居5	
S5	剥片	サヌカイト	8.8	4.9	1.3	56.7	竪穴住居10	
S6	剥片	サヌカイト	4.2	2.6	0.7	9.0	竪穴住居10	
S7	石鏃	サヌカイト	6.8	6.9	1.6	85.3	竪穴住居14	破損品
S8	砥石	不　明	4.8	2.4	1.9	39.7	竪穴住居14	
S9	柱状片刃石斧	不　明	10.2	1.9	1.9	43.8	竪穴住居14	未製品
S10	石鏃	サヌカイト	2.0	1.4	0.3	0.8	竪穴住居12～14	
S11	石鏃	サヌカイト	3.0	2.5	0.5	3.0	竪穴住居12～14	
S12	石鏃	サヌカイト	2.8	1.8	0.4	1.3	竪穴住居12～14	
S13	石鏃	サヌカイト	2.2	2.2	0.5	1.7	竪穴住居12～14	
S14	石錐	サヌカイト	2.2	1.6	0.4	1.2	竪穴住居12～14	
S15	スクレイパー	サヌカイト	4.0	4.9	0.7	11.7	竪穴住居12～14	
S16	扁平片刃石斧	結晶片岩	5.9	3.8	0.9	40.9	竪穴住居12～14	破損品
S17	石鏃	サヌカイト	2.9	1.1	0.4	1.3	竪穴住居15	
S18	石鏃	サヌカイト	3.8	1.1	0.5	1.9	竪穴住居15	
S19	楔形石器	サヌカイト	4.6	4.0	0.8	16.2	竪穴住居15	
S20	剥片	サヌカイト	5.4	1.2	0.6	4.1	竪穴住居15	
S21	剥片	サヌカイト	4.5	4.7	0.5	10.5	竪穴住居15	
S22	打製石包丁	サヌカイト	5.3	5.5	0.9	39.8	竪穴住居25	破損品
S23	打製石包丁	サヌカイト	4.6	8.4	0.9	41.5	P1036	
S24	砥石	不　明	10.0	3.0	1.3	99.0	P1107	
S25	叩石	花崗岩	7.7	6.7	5.0	344.4	P1658	
S26	剥片	サヌカイト	3.0	4.3	0.9	7.8	P1669	
S27	剥片	サヌカイト	2.2	3.3	0.5	2.6	P1669	
S28	剥片	サヌカイト	2.5	3.0	0.4	2.8	P1669	
S29	剥片	サヌカイト	2.7	4.1	1.0	10.6	P1669	
S30	石鏃	サヌカイト	2.7	1.7	0.5	1.5	P1720	
S31	剥片	サヌカイト	2.2	3.7	0.4	2.6	P1720	
S32	剥片	サヌカイト	6.5	2.8	1.0	12.8	P1720	
S33	スクレイパー	サヌカイト	3.5	3.7	0.8	10.6	P1720	
S34	剥片	不　明	3.3	2.1	0.4	2.5	P1720	
S35	剥片	サヌカイト	5.3	6.8	1.6	80.3	P1720	
S36	叩石破片？	不明	3.4	3.7	0.9	7.0	P1720	
S37	剥片	ヒン岩	2.6	4.3	0.5	5.7	P1720	
S38	扁平片刃石斧	不　明	5.7	2.8	1.7	53.8	P1720	
S39	環状石斧	ヒン岩	5.8	5.0	1.9	76.6	P1720	未製品。被熱の可能性あり。
S40	磨製石包丁	砂　岩	4.5	9.8	0.7	34.0	溝16	
S41	環状石斧	ヒン岩	13.5	12.2	3.2	641.2	溝16	未製品
S42	剥片	サヌカイト	9.1	5.4	0.8	32.4	溝16	
S43	石核	サヌカイト	5.5	9.4	2.0	73.2	溝16	
S44	打製石剣	サヌカイト	12.8	3.0	1.3	60.8	溝17	接合資料。下半部は溝19出土。
S45	石鏃	サヌカイト	1.9	1.4	0.3	0.5	溝17	

S46	打製石包丁	サヌカイト	4.9	4.3	1.0	20.1	溝17	破損品
S47	剥片	サヌカイト	7.6	1.4	1.0	31.4	溝17	
S48	打製石包丁	サヌカイト	5.6	4.7	0.7	18.7	溝17	未製品
S49	剥片	サヌカイト	5.1	4.0	0.6	20.2	溝17	
S50	打製石包丁	サヌカイト	3.9	13.5	1.0	65.4	溝17	
S51	剥片	サヌカイト	5.6	3.0	3.8	71.0	溝17	S64と接合
S52	石核	サヌカイト	4.2	4.9	2.1	52.7	溝17	
S53	大型蛤刃石斧	ヒン岩	12.0	5.7	3.7	424.6	溝17	
S54	扁平片刃石斧	不　明	6.3	4.5	1.3	61.6	溝17	
S55	扁平片刃石斧	不　明	5.4	3.6	1.0	27.4	溝17	破損品
S56	叩石	不　明	4.9	5.7	4.6	225.7	溝17	磨製石斧の転用
S57	石錘	凝灰岩	4.4	3.9	2.3	39.0	溝17	
S58	打製石包丁	サヌカイト	5.6	9.4	0.9	53.9	溝18	
S59	石核	サヌカイト	4.5	5.0	0.8	33.0	溝18	
S60	打製石包丁	サヌカイト	13.1	5.1	1.9	69.1	溝19	未製品
S61	打製石包丁	サヌカイト	7.2	4.1	0.7	23.9	溝19	破損品
S62	打製石剣	サヌカイト	5.8	3.1	1.0	19.3	溝19	未製品
S63	打製石剣	サヌカイト	8.4	4.0	1.4	66.9	溝21	未製品
S64	剥片	サヌカイト	8.2	3.9	2.7	58.8	溝21	S51と接合
S65	叩石	花崗岩	7.3	5.5	4.9	281.8	溝21	
S66	石核	サヌカイト	4.1	5.9	1.9	60.1	溝21	
S67	大型蛤刃石斧	ヒン岩	5.5	3.7	4.4	128.8	溝21	破損品
S68	大型蛤刃石斧	ヒン岩	12.9	5.4	4.6	480.1	溝21	破損品
S69	スクレイパー	サヌカイト	5.0	3.8	0.6	12.7	竪穴住居8	
S70	スクレイパー	サヌカイト	4.3	5.7	0.7	17.5	P2	
S71	楔形石器	サヌカイト	4.3	2.5	0.7	11.1	P2	
S72	打製石包丁	サヌカイト	4.8	4.9	0.8	18.0	P1065	
S73	剥片	サヌカイト	3.2	4.7	1.8	16.0	P1111	
S74	剥片	サヌカイト	2.6	3.2	0.8	7.3	P1189	
S75	石核	サヌカイト	5.1	2.3	1.5	24.9	P1194	
S76	剥片	サヌカイト	3.3	5.4	1.2	16.7	P1271	
S77	楔形石器	サヌカイト	3.4	2.1	0.8	6.6	P1271	
S78	剥片	サヌカイト	2.1	2.0	0.4	1.9	P1271	
S79	剥片	サヌカイト	2.3	5.0	0.6	6.2	P1271	
S80	石核	サヌカイト	4.0	3.5	1.7	28.5	P1387	
S81	剥片	サヌカイト	2.5	2.0	0.8	4.4	P1542	
S82	石鏃	サヌカイト	3.7	1.2	0.6	2.4	包含層1	
S83	石鏃	サヌカイト	3.9	3.0	0.7	6.0	南包含層3	
S84	石鏃	サヌカイト	2.3	1.4	0.3	0.8	包含層1	
S85	石鏃	サヌカイト	4.1	1.1	0.5	2.3	包含層1	
S86	打製石包丁	サヌカイト	3.2	4.5	0.9	23.2	南包含層3	破損品
S87	磨製石包丁	不　明	4.2	6.5	0.8	30.9	南包含層3	破損品
S88	石鍬	頁岩	12.6	6.8	1.3	197.4	中・近世水田	
S89	大型蛤刃石斧	ヒン岩	9.4	6.4	5.2	546.6	排土中	破損品
S90	叩石	不　明	7.5	4.6	4.0	203.4	排土中	
S91	石杵	安山岩	10.3	6.8	5.4	412.6	西壁・包含層	
S92	石杵	不　明	3.8	4.8	4.8	121.3	南包含層3	

第Ⅳ章　結　語

赤田東遺跡は今回の調査の結果、中世(12世紀末～15世紀)、古代(８世紀～９世紀)、古墳時代中・後期(５世紀末～７世紀)、弥生時代中・後期の遺構面が存在することが明らかとなった。いずれも集落の一角と考えられるが、その景観はそれぞれの時代の集落像を極めて先鋭に示している。

第Ⅲ章では検出した遺構と遺物を説明したが、ここではより詳細に整理してみたい。

1　中世（12世紀末～15世紀）

現在水田の耕土を除去した時点では、調査区中央付近に包含層が露出しており、いわゆる島状高まり状態であった。そしてその北端と南端に近世水田層が認められた。つまり、調査区の両端が水田化されたのは近世以降、かなり新しい時期といえる。当遺跡よりも北に1.2kmの地点にあるハガ遺跡では、少なくとも18世紀前半には微高地を大きく切り崩した水田開発がおこなわれている。周辺の微地形と水利系統の整合性からも、該期前後に大規模な水田開発・再開発がおこなわれたことは間違いない。それは、元禄五年(1692)に、岡山藩が津田永忠の指揮でおこなった南北４km、東西５kmの大規模な沖新田干拓事業に伴って整備された祇園用水路の再開発と整合すると考えられる。新たな干拓地の出現は耕地の拡大をもたらす一方で、その反作用として、背後の耕地の排水を疎外するようになる。そのため旧来の耕地の湿田化、あるいは湿地化を生じやすくしてしまう。その対策として、新たな干拓地の開発には常に背後の耕地の再開発・再整備が必要であった。沖新田の干拓面積はそれまでの干拓事業のなかでは突出しており、それに伴う背後の再開発もかなりの規模であったということなのであろう。

そういった大規模な開発を経過しても、当地は水田化されなかった部分が目立つということは、旧来の地形がかなり高かったということであり、安定した集落が形成されやすい地理的条件を有していたということなのであろう。

さて、中世の遺構は調査区の中央付近の南北幅約30ｍの間に帯状に分布している。この部分は近世でも水田化されていなかった部分である。また、水田耕土自体は残存していなかったが、遺構の分布しない調査区南端と北端のやや低い部分は、中世段階でも水田化されていた可能性が高いといえる。

遺構の時期幅については、第Ⅲ章でも触れたが、調査当初中世に属する遺物は皆無で、中世の遺構は存在しないのではと考えたほどであった。おそらく中世の包含層は近世以降の水田開発によって削平されたためと考えられる。当調査区の200ｍほど北にある雄町遺跡での立会成果を参考にすると、微高地上は後の削平を受けてほとんど包含層は認められず、むしろ、微高地の存在しない低地部や河道の最上層などに包含層の二次堆積土が認められる。この辺りでは、微高地上の削平がかなり普遍的におこなわれていたことを示している。

それぞれの柱穴の時期を示す中世の遺構でまとまった遺物を出土したのは、井戸１と井戸２だけである。井戸１は15世紀、井戸２は12世紀末である。井戸以外の遺構は柱穴が主体である。柱穴はかなり錯綜していることから、それぞれの時期を示す積極的な根拠は少ないが、埋土から出土した断片的な土器の小片からみても一応12世紀末～15世紀の間に形成されたと考えられる。16世紀以降

は集落が移動、もしくは廃絶し、高い部分も畠地などの耕作地になったと推測される。そして限りなく現代に近い時期に水田化されたといえる。

次に遺構の変遷を検討してみたい(図246)。ただし検出された全ての柱穴が建物、あるいは柱穴列として把握できたのではないため、かなり大まかな様相といえる。まず、建物と柱穴列の方向性についてみてみる。それらは3群に分けられる。ほぼ正方位に近いもの(A群)、N-60°-Wの方向にあわせるもの(B群)、N-10°-Wの方向にあわせるもの(C群)である。C群は屋敷地のほぼ全域を調査していると考えられる。長辺25m、短辺16mの長方形の平面形を呈する敷地に、2間×4間の側柱建物が1棟認められる。屋敷地の区画は、柱穴列が完全に囲繞しているわけではなく、むしろ部分的に柱穴列が存在する。『一遍上人絵伝』などをみると、当時の住宅の囲繞施設には塀などのほかに植栽などもあることから(小泉ほか1996)、柱穴列の間には痕跡の残りにくい生け垣や植木があった可能性が考えられる。建物の正面には井戸1と井戸2がある。両井戸とも建物との関連が想像できるが、井戸2の掘り方が隅丸方形で、ほぼ正方位にその方向をあわせてあるので、井戸2はA群に属すると考えられる。したがってC群は建物1棟、井戸1基で構成され、屋敷地の大きさは400㎡ということになる。井戸1の時期からC群は15世紀といえる。

次にA群についてみてみたい。A群もC群と同様に一部柱穴列である囲繞施設が想定され、規模もC群とよく似ており、長辺20m以上、短辺16mが想定される。短辺の長さについては、この屋敷地を挟むように墓があり、その間に建物と柱穴列があることから16mと推測した。屋敷地を挟んでいる墓は、中世前半における土地所有を主張する根拠になっていたとされる屋敷墓(橘田1991)と考えられる。建物は2棟あり、その床面積の相違から建物1が主屋で、建物3が副屋といえる。当地においては建物2棟と井戸1基が中世の屋敷地の1つの基本的な構成単位であるとの指摘(岡本1989・山本1990)もあり、A群もその例にはいると考えられる。A群の時期は井戸2の時期から12世紀末といえる。

B群は、南側と東側の囲繞施設の一部と考えられる柱穴列と建物1棟で構成される。建物の西側は調査区外へ出るため確定できないが、梁間がほぼC群の建物と一致することや、囲繞施設の様相も似ていることから、方向を違えて若干重複しているものの、C群と同様の構成を持つ屋敷地であった可能性が高いように思われる。つまり、B群とC群は同じ様な内容の屋敷地の建て替えと考えられるのである。B群に伴う遺物は、柱穴埋土から出土した図化できないような土器の小片しかないため明確ではないが、調査区内ではC群の井戸1以降の遺構や遺物が認められないことから、当地の屋敷地の最後をC群の屋敷地と考えると、B群はC群の前の可能性が高い。しかも、C群とは建て替えの関係になるとすると、B群はA群の時期までは遡り得ないということになる。したがって、中世における遺構群の変遷はA群→B群→C群といえる。

各群の時期はA群が12世紀末、C群が15世紀、B群がA群とC群の間で、C群に近い年代である。それぞれ一部柱穴列の囲繞施設を伴った屋敷地があり、その規模も断片的ではあるものの、大体400㎡前後と一定しているようである。内部は建物1棟、もしくは2棟と井戸で構成されており、これも共通する。

それではこの屋敷地はどのような階層に属するのであろうか。建物の床面積が全て明らかなのはC群だけであるが、ほかもそれ程大差がないようにみえる。これらの屋敷地の階層的な位置付けを屋敷地内の建物の床面積からみてみたい。伊藤鄭爾氏は文献資料から室町時代の住居の床面積と階

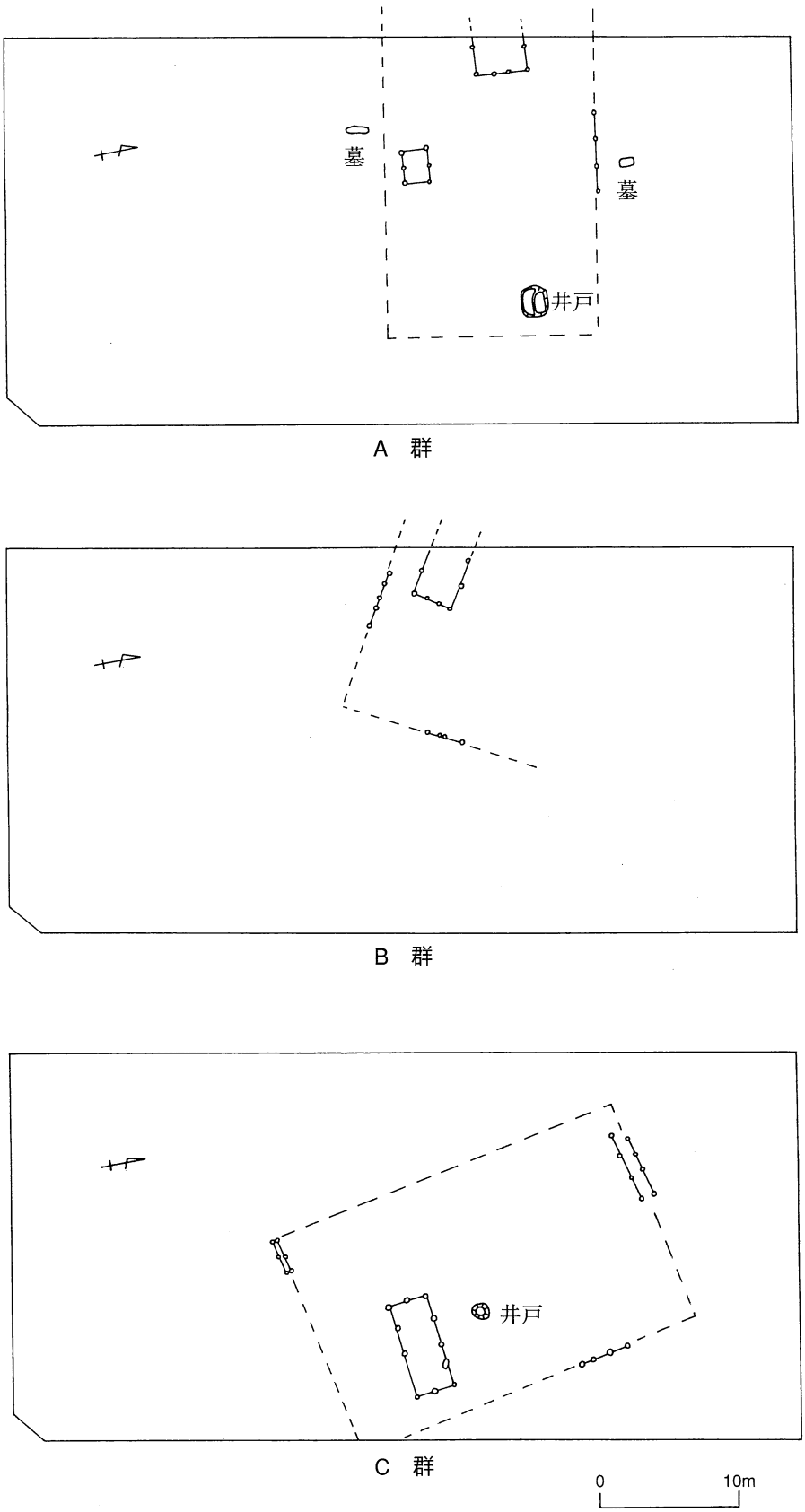


図246　赤田東遺跡　中世遺構変遷図

層の関係を追求している(伊藤1958)。それによると、地侍層が80～112㎡、名主層が30～80㎡、被官百姓層が13～60㎡となっている。このデータからすると、赤田東遺跡の屋敷地は一般百姓層ということになる。同様の階層の集落が、12世紀末～15世紀まで形成されていたといえる。ただしA群とB・C群の間には、年代的な断絶期が存在している可能性が高く、A群が中世前期、B・C群が中世後期の屋敷地というとらえ方が妥当であるかもしれない。そうすると中世前期の屋敷地は古代の集落と同様に正方位に規定されている可能性があるといえる。備前国府関連の官衙であるハガ遺跡は、12世紀後半まで機能しており(草原2004)、備前国府の周辺地では一般的な集落でも12世紀段階までは、まだ正方位の意識は残存していたということになる。ところが中世後期になると、完全に正方位に規定される住居占地の意識は喪失したといえる。このような中世前期から中世後期にかけての集落意識の変化は、集落史を考える上で、極めて興味深い事例といえる。

引用文献
伊藤鄭爾『中世住居史』東京大学出版会　1958年
岡本寛久「百間川米田遺跡」3　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74　1989年
草原孝典『ハガ遺跡』岡山市教育委員会　2004年
小泉和子・玉井哲雄・黒田日出男『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会　1996年
橘田正徳「屋敷墓試論」『中世土器の基礎研究』Ⅲ　1991年
山本悦世「鹿田遺跡」Ⅱ『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第4冊　1990年

2　古代(8世紀～9世紀)

(1) 遺構の変遷

1．出土遺物からみた時期幅(図247)

古代の遺構は基本的に柱穴が主体であるため、それ程遺物の量は多くなかった。しかしながら、わずかに検出された土壙出土遺物や、柱穴埋土から出土した遺物から、3期に分けてとらえることができる。

まず、赤田東古代Ⅰ期はP669、P709出土遺物が相当する。両遺構とも須恵器杯Bと畿内産土師器が認められる。杯Bは高台の高さも高く、外側に「ハ」字状に開いており、比較的古い

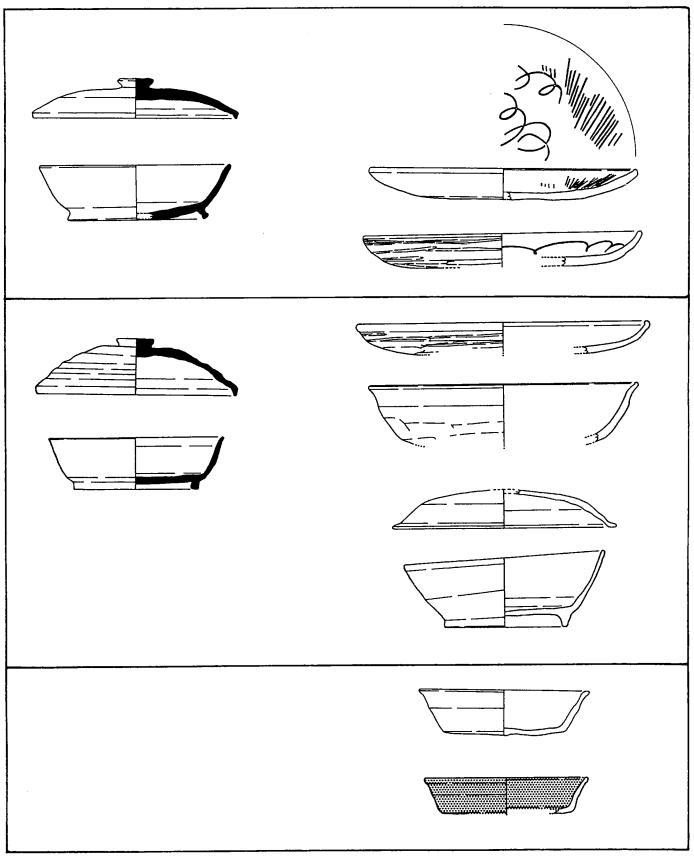
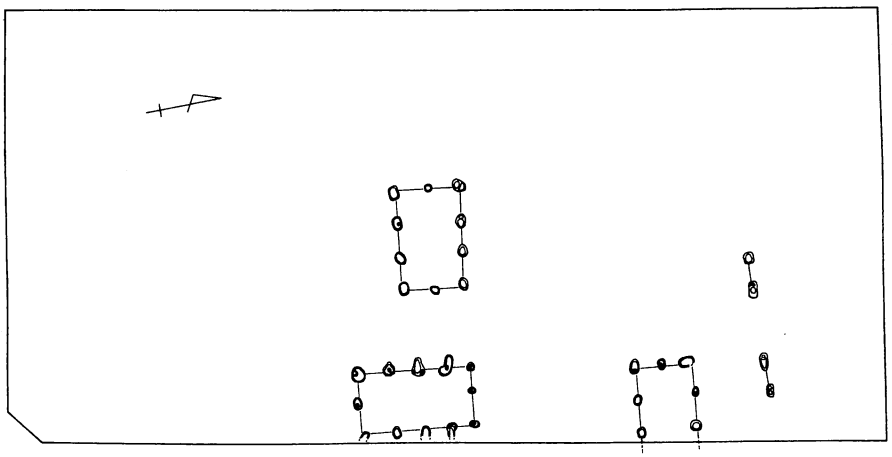
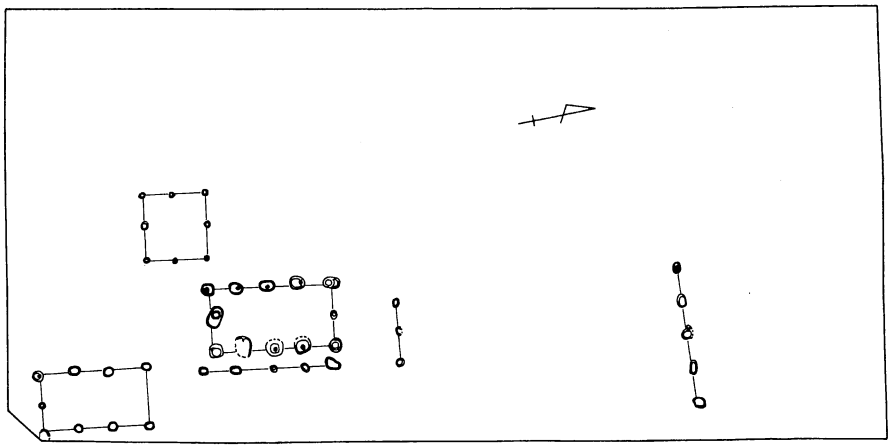


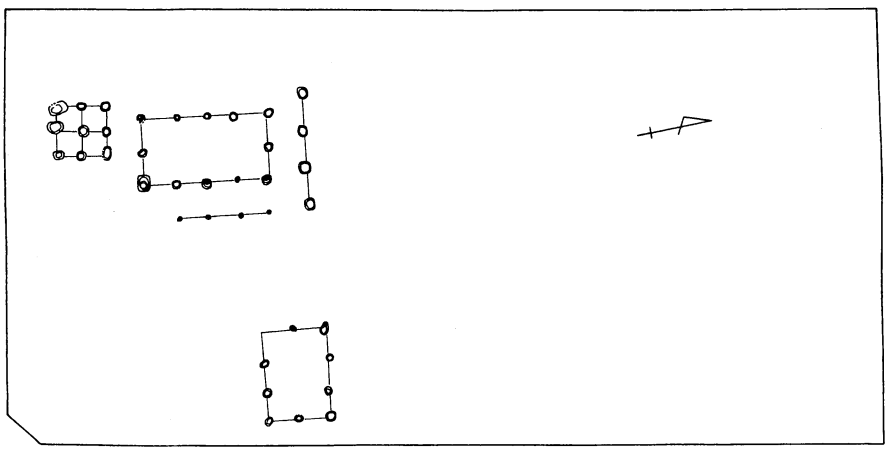
図247　赤田東遺跡古代遺構面出土土器分類



赤田東古代Ⅰ期（8世紀中葉）



赤田東古代Ⅱ期（8世紀後葉）



赤田東古代Ⅲ期（9世紀前葉）

0　10m

図248　赤田東遺跡古代遺構変遷図

様相といえる。伴出している畿内産土師器は皿で、平城宮Ⅲの時期である。これらから、Ⅰ期は8世紀中葉の年代が与えられる。

赤田東古代Ⅱ期は、建物6出土の土器群が相当する。須恵器杯Bの高台は、断面が方形で、外側に開いていない。Ⅱ期よりも明らかに後出する。土師器杯Bも口縁端部に沈線を形成することなく、尖り気味におさめてある。伴っている畿内産土師器はいずれも小片であり、器種は皿と杯がある。ただし、暗文はみられない。以上のことから、Ⅱ期は8世紀後葉の時期と考えられる。

赤田東古代Ⅲ期は、建物1の柱穴埋土出土土器、溝2出土土器が相当する。食膳具に関しては、須恵器の出土量が激減する。基本的には土師器の杯である。回転台を用いて成形をしており、丹塗りのものが多い。統計的な処理が可能なほど土器が出土しているわけではないが、9世紀後半の時期にまで下る杯ほどに口径が縮小したものは看取されない。伴出してはいないが、包含層から出土した緑釉陶器をみてみると、大半が京都産で、一点猿投産がある。いずれも9世紀前半である。土師器の年代観とも一致している。このことから、Ⅲ期は9世紀前半の時期といえる。該期以降の遺物や遺構は認められないことから、9世紀後半以降に集落の移動や縮小、もしくは廃絶があったといえる。

2．遺構の分類と変遷

出土した遺物から3期に遺構が分離できることがわかった。建物群は正方位に軸方向をあわすものの、結果として錯綜しており、同じ地点で何度も建物がつくられたことを示している。それらを分離させるために、まず、わずかな土器片も含めた柱穴から出土した土器からみてみたい。指標とするのは丹塗り土師器で、回転台を用いて成形したものの有無である。回転台を用いて成形した土師器を出土したのは、建物1、建物2、建物5、溝2である。特に建物2の東側の柱列は、建物5の棟持ち柱の軸と一致することから、一連の建物であることは明らかで、建物5の北側と東側に平行する柱穴列1、2も建物5に伴う目隠し塀と考えるのが自然である。これらは最も新しい時期に属する。

次に、建物2と建物5の関係のように、柱列の軸を共有する建物の関係をみてみる。Ⅱ期の基準となっている土器群を出土した建物6の南側柱間の柱列は、建物3の北側の柱列と軸方向が一致し、建物3の南側梁間の柱列は、建物4の北側の梁間の柱列と軸方向が一致する。したがってこの3棟は同プランで存在しているといえる。建物6の北側と東側には柱穴列があり、建物5と同様に目隠し塀が付属しているといえる。建物9の北側の柱列も建物7の北側梁間の柱列と軸方向が一致しており、一連のものといえる。

さらに調査区北半には建物8、柱穴列5、柱穴列6、柱穴列7が存在する。いずれからも回転台を用いた土師器は出土していない。この点をⅢ期に属していないことを示していると考えると、建物8と柱穴列5が重複していることから、Ⅰ期とⅡ期の重複と解釈できる。建物8は柱穴列5に切られていることから、建物8がⅠ期で、柱穴列5がⅡ期となる。柱穴列6・7がⅡ期であるとすると、ここだけ二重の柱穴列となるので、この柱穴列はⅠ期に属すると考えたい。

以上のように各期の遺構の組み合わせを理解して、各期ごとに様相を説明する。

赤田東古代Ⅰ期（8世紀中葉）

建物3棟と柱穴列で構成される。建物のうち、建物9と建物7が逆L字形に配列されている側柱

建物である。建物７の床面積は28.1㎡、建物９の床面積は24.8㎡で、わずかに建物７の方が規模が大きい。建物９と建物７から若干離れたところにある建物８は、中央に束柱が認められなかったことや、東側の梁間に棟持ち柱が検出されなかったことから、調査区外へ延びる側柱建物と考えられる。しかし後で触れることになるが、Ⅲ期には建物群の中に２間×２間の柱構成を持つ総柱建物が１棟あり、Ⅱ期も束柱は検出されなかったが、２間×２間の柱構成の建物が認められることから、調査区外へ伸びる側柱建物と考えている建物８も２間×２間の柱構成である可能性が高い。すなわち居住のための屋と考えられる掘立柱建物２棟と倉１棟で構成される建物群であると考えられるのである。この構成はⅠ～Ⅲ期を通しての基本的なパターンである。

建物群の北端にある東西方向の柱穴列であるが、位置的にみて１つの建物に付属する目隠し塀というわけではない。これら建物群全体の北側を画する性格のものであることを推測しておきたい。

赤田東古代Ⅱ期（８世紀後葉）

建物３棟と柱穴列で構成される。屋と考えられる側柱建物の建物４と建物６は、棟方向を平行にして並んでいる。建物４の床面積が24.6㎡、建物６の床面積が30.8㎡で、建物６には目隠し塀も付属することから、建物４と比べ優位であることは明らかで、主屋と考えられる。Ⅰ期でもわずかな差ではあるが主屋が識別でき、Ⅱ期になって主屋と副屋の差が顕著になっているといえる。それは倉と考えられる２間×２間の柱構成を持つ掘立柱建物との関係からもうかがわれる。つまりⅠ期では主屋や副屋から等しい距離があった倉であるが、Ⅱ期では明らかに主屋に付属した位置にある。ただし、倉は両方の屋の柱列の軸線と一致しており、Ⅲ期になると主屋のみしか軸線を共有していないのとは異なっている。

赤田東古代Ⅲ期（９世紀前葉）

建物３棟と柱穴列で構成される。屋２棟はＬ字形に並んでいるが、Ⅰ・Ⅱ期からすると、最も距離を置いていることになる。建物５の床面積は44.8㎡、建物１の床面積は23.2㎡で、建物５が主屋であることは明らかで、格差はⅡ期よりも顕著になっている。Ⅱ期の副屋とⅢ期の副屋との間には、床面積を見る限りほとんど差がないことから、主屋が急激に大きくなったといえる。また、倉との関係も異なってくる。Ⅱ期では主屋に付属することが明らかになってきたが、まだ副屋の柱列は、倉の柱列と軸線を共有するなどの関係が認められた。しかしⅣ期になると、倉の柱列が軸線を共有するのは主屋の柱列だけとなっている。倉との関係についても主屋と副屋の間には極めて顕著な差が生じてきたことになる。

(2) 遺跡の性格

赤田東遺跡の古代遺構面は建物の方位が正方位であることや、出土遺物の中に帯金具が含まれていることから、官衙遺跡の可能性がまず考えられる。８世紀中葉～９世紀前葉の時期幅で、３時期の遺構の変遷があり、それぞれ倉と考えられる建物を１棟含んだ３棟の建物群で構成されている。調査区外の様子が不明ではあるものの、同じ構成の建物群が３時期にわたって認められることから、１つの遺構の組み合わせを示していると考えてよい。これは官衙とは明らかに異なっている。

８・９世紀、いわゆる律令国家期における当地の集落遺跡は、他の時期の集落遺跡とは際だった

相違のあることが指摘される(草原2004)。それは基本的に掘立柱建物であること、建物の配置が軸方向を合わせて整然と並んでいること、倉が伴うことである。とくに建物の配置については、官衙遺跡と混同される要因であり、近接して１つの単位を形成している建物群はもちろんであるが、そういった単位がいくつか集まった場合でさえ、全ての建物の方位を合わせている場合がある。しかし、それらは数棟の屋に倉が付属するといった基本単位で構成されている。さらに屋と倉の床面積については、かなり有機的な関係がある。１つの建物群の中の屋の総床面積が増加した場合、それに付属する倉の床面積も増加している。具体的にいうと、２棟の屋に付属する倉の床面積よりも、３棟の屋に付属する倉の床面積の方が広く、また、その差は極めて規則的なのである。屋は住居であるから、倉の大きさは１つの単位の住人の数に合わせて規則的につくっているということになる。さらに住居形態が竪穴住居であれ、掘立柱建物であれ、集落には集落を構成する最小単位といったものを抽出することができる。そういった個々の単位に倉が付属するのは該期だけである(７世紀については後節で触れる)。以上のことから、倉はそれぞれの単位の住人に課せられた課税の保管庫で、該期の集落が規則的であるのは課税を軸に編成された性格が強かったからと考えられた。

赤田東遺跡の古代の遺構面についても、まさにこれに相当する。複数の屋が存在するのは１つの単位が複合家族で構成されていたことであり、時期が下るにしたがって一方の家族が成長していく過程を克明に示している。そして興味深いのは、９世紀前葉に倉の帰属が明らかに主屋になった時点で、それまでよりも倉の床面積が縮小していることである。副屋に対する課税のあり方にも変化があったことを示唆しているようにも思える。いずれにせよ、赤田東遺跡の古代遺構面は該期の集落の範疇に含まれるといえる。

(3) 郷衙との関係について

赤田東遺跡からは帯金具も出土している。これは官衙、もしくは官衙との関わりを示す遺物といえる。官衙に所属する官人も集落に居住する場合が想定される。したがって帯金具の出土もそのように理解されることも許されるであろう。ただし、末端官衙とされる郷衙との関連は検討されねばならない。

国－郡－郷(里)と続く地方行政機構を反映する施設として、郡クラスの官衙までは文献的、遺構的にも整合して理解されている。しかしその下位に属する郷については、郷の中心となる郷長が位を持つ正規の官人を任命するのではなく、地方の有力者から選ばれる性格のものであることから(阿部1989)、文献的には末端官衙として存在しているとは考えられていない。しかしながら発掘された遺構の中には、郡衙クラスまでには位置付けられないような官衙遺跡の存在があり、しかもいくつかの類型に分けて理解できることが指摘されている。これらを『令集解』「春時祭田條」に記載された郷家とし、最末端の官衙であるという考えがある(井上1991)。また、里(郷)家が主体となって書かれた木簡も出土しており、律令国家の支配体系の根幹となる文書主義が郷クラスでも体現されていたと理解されていること(佐藤1997・山中1997)からも、その考えを支持させる。郡衙クラスまでの官人が官衙を中心にして活動するのとは異なり、里(郷)長は、里(郷)内に常住して貢納物の収奪にあたった(吉田1980)ため、結果として、住居と官衙の取扱いが曖昧になっているようにみえるのではなかろうか。ここでは郷衙の存在を肯定的に考え、県下における発掘例からその可能性のあるものを抽出し、建物構成に郷衙としての一定の型があることを示したいと思う。

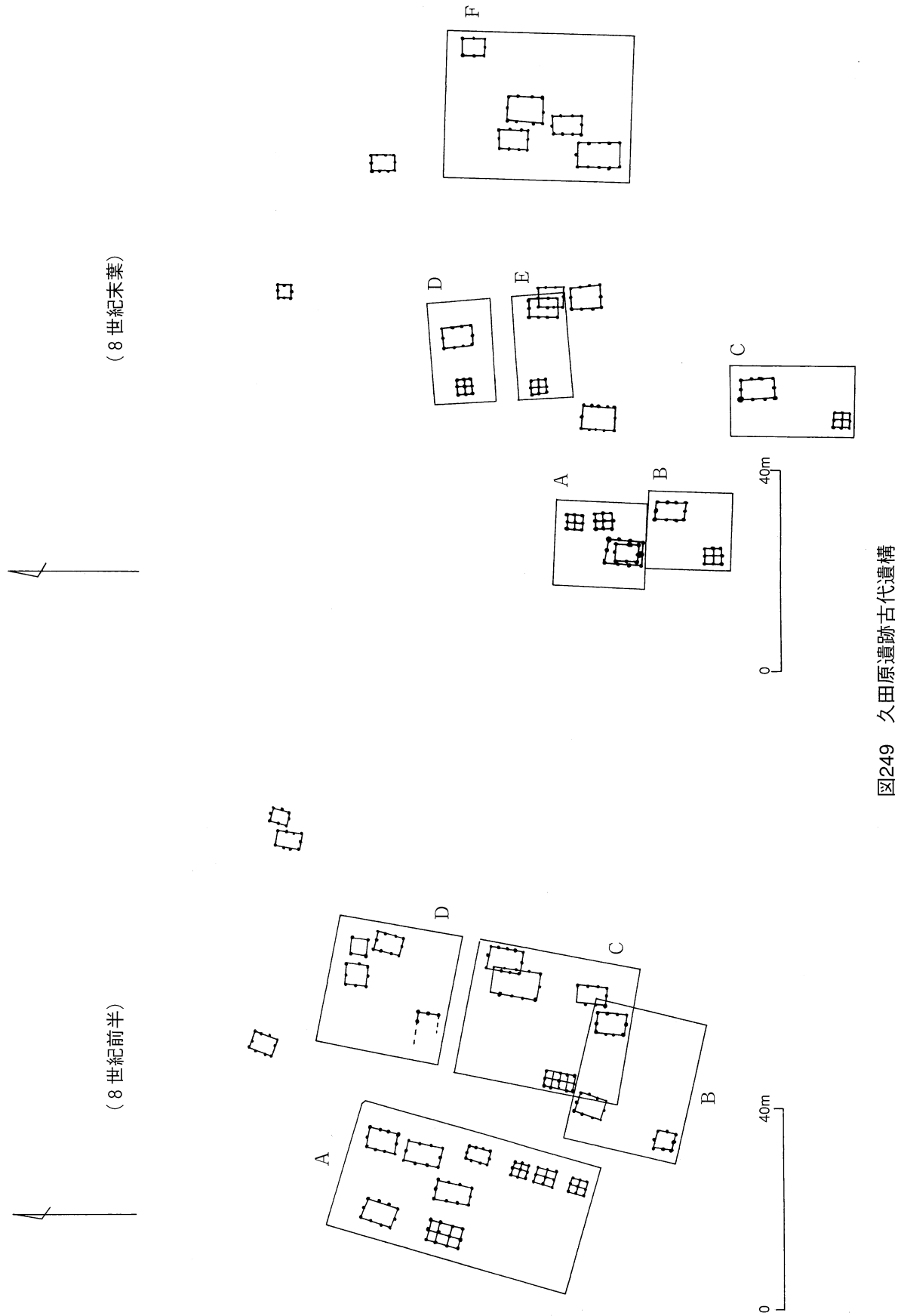


図249　久田原遺跡古代遺構

１．多くの倉を持つ集落単位

数棟の側柱建物に１棟の総柱建物が付属する単位を、集落の最小単位を示す１つの型と考えた。ところが多くの倉を付属しながらも、官衙に特徴的な「コ」字形配列の建物や、明確な囲繞施設と大規模な占地をしていない建物群が認められる。まずこのような例を概観したい。

久田原遺跡（弘田ほか2004）（図249）

久田原遺跡は、岡山県北部にある奥津町に所在し、旧国単位では美作国に属する。かなり広大な面積を調査しており、古代の集落の大半を明らかにしていると考えてよい。検出された遺構は建物の方位と遺構の切り合い関係によって、詳細な検討がなされている。ここでみてみるのは、８世紀前半と８世紀末葉の遺構である。８世紀前半は、建物のまとまりからＡ～Ｄの４つの単位が認められる。まずＡは、４棟の屋と４棟の倉からなる。Ｂは全て側柱建物であるが、そのうち１間×１間の方形の平面形である建物を倉とすると、２ないし３棟の屋に対し１棟の倉が付属しているということになる。Ｃは重複があることからそれを建て替えと考えると、２棟の屋に１棟の倉が付属するということになる。Ｄは３棟の側柱建物からなるが、そのうち１棟が２間×２間の方形の平面形になることから、これを倉とすると２棟の屋に１棟の倉が付属するということになる。一見して若干格差のある単位が集合して集落を形成しているといえる。

８世紀末葉になると、６単位が認められる。Ａ～Ｅはいずれも１棟の屋に１棟の倉が付属しており、等質的な単位が分布するようになっている。一方Ｆは５棟の屋からなり、倉は付近に認められ

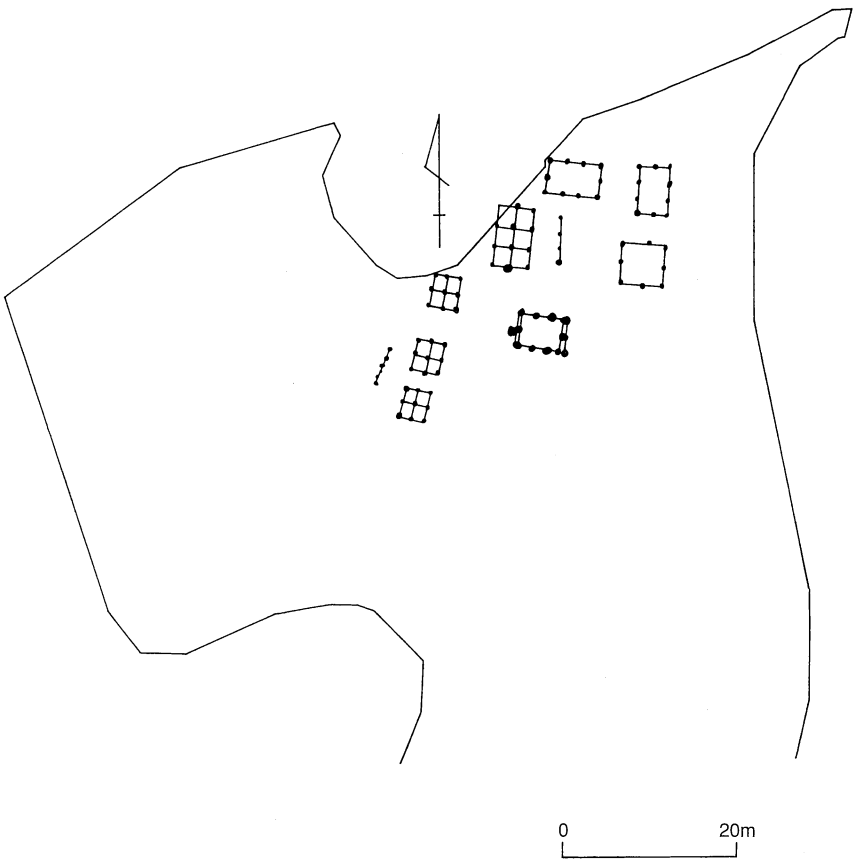


図250　小中遺跡古代遺構

ない。屋の構成は8世紀前半のAと全く共通しており、8世紀末葉のFは該期のAから倉を除外したものの可能性が高い。Fはほかの単位と比べると、屋の数が圧倒的に優位であり、8世紀前半のAの没落した姿とはいえない。これについては後で検討したい。

小中遺跡（浅倉ほか1997）（図250）

小中遺跡は岡山県北部にある勝央町に所在し、旧国単位では美作国に属する。8世紀後半の時期で、掘立柱建物が8棟検出され、1つの単位と考えてよい。部分的に調査区外へでるため、さらに1棟前後は存在している可能性がある。4棟の屋と4棟の倉からなる。倉は2間×2間の総柱建物3棟と2間×3間の総柱建物1棟からなり、これは久田原遺跡の8世紀前半のA単位の倉の構成と同じである。2間×2間の総柱建物が並んでおり、それらと位置を変えて2間×3間の総柱建物を配置する点も全く共通するといえる。調査区外の位置に屋を1棟想定すると、屋の数まで共通することになる。小中遺跡の場合は、久田原遺跡の最も優位な単位が独立して存在しているといえる。

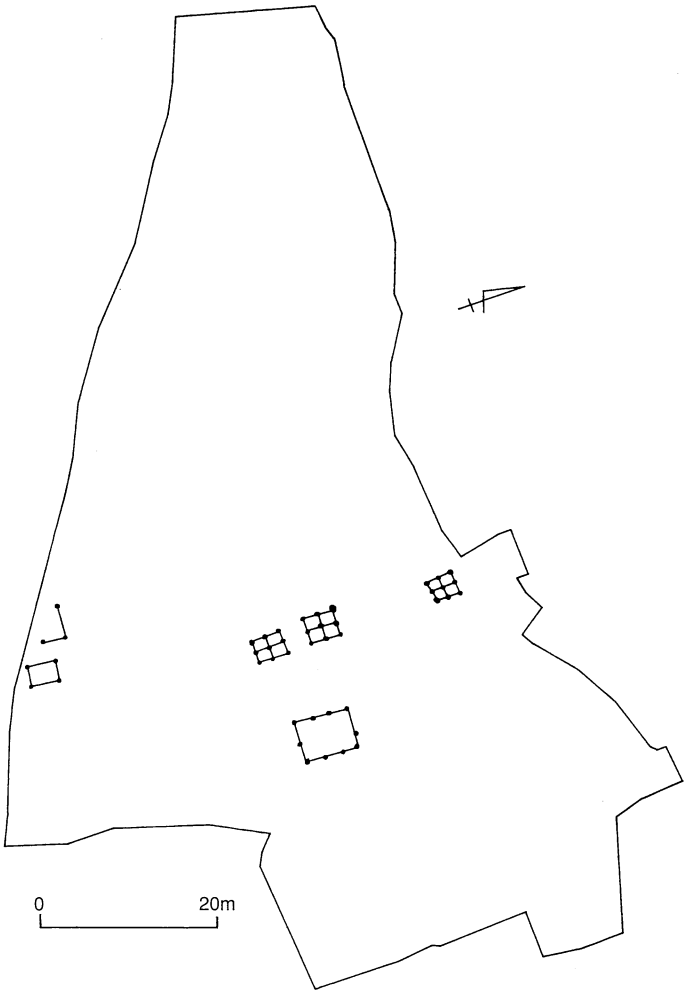


図251　城山東遺跡古代遺構

城山東遺跡（大沢ほか1995）（図251）

城山東遺跡は岡山県北端部にある真庭郡川上村に所在し、旧国単位では美作国に属する。8世紀中葉～後半の時期で、掘立柱建物が4棟並んでおり、1つの単位と考えてよい。調査区の範囲が限定されており、調査区外にも建物が存在している可能性は高い。建物構成は2間×2間の柱構成の総柱建物が3棟、ほぼ軸方向を合わせて並んでおり、それに平行して側柱建物が1棟ある。2間×2間の総柱建物が3棟並んでいるのは、小中遺跡や久田原遺跡の8世紀前半のA単位と共通する。

2．3棟の並列する倉を持つ単位の性格

以上の3例、特に久田原遺跡と小中遺跡をみると、4～5棟の屋に2間×3間の柱構成を持つ広い床面積の倉と2間×2間の柱構成を持つ倉が3棟並んでいる単位は、建物の数だけでなく、配置

までも共通している。城山東遺跡についても、同様の建物群の一部である可能性が高い。このほか作東町に所在し、旧国単位では美作国に位置する高本遺跡でも２間×２間の柱構成を持つ倉が３棟並んで検出されており、同様の可能性が推測される。

また久田原遺跡や高本遺跡をみると、この単位は集落の一部であったりもする。２間×３間の倉と２間×２間の倉については配置を変えていることからも、その性格に差があることは明らかである。山陽町馬屋遺跡(伊藤ほか1995)では、屋が３棟あり、１～２棟の屋によって構成されることの多い集落の単位に比べると、やや屋が多い。そのため、２間×３間の柱構成を持つ倉が付属していると考えられる。そうすると、久田原遺跡や小中遺跡の２間×３間の倉も、４～５棟の屋に対応するものといえる。つまり、屋には居住する人々の貢納に直接関係する倉と考えられる。したがってそれと別の３棟並んだ倉は異なった意味を考えなくてはならない。おそらく、倉の付属する単位外からの貢納に関する倉と考えるのが妥当であろう。集落の一角に位置する場合があり、しかも建物配置や構成に一定の型を持っている点などから、久田原遺跡や小中遺跡のような集落単位はまさに郷家である可能性が高いと考えられる。いずれも美作国ばかりの例であるため、備前国や備中国にも共通するとは言い切れないが、少なくとも、郷家としての一定の型が存在することは確かといえよう。そういった意味で、やはり郷家は本質的には末端官衙であった可能性が高いと考えられる。

３．赤田東遺跡と郷衙

県下における古代の遺跡のうちで、郷衙遺跡と思われるものを抽出してみた。その結果、１～３棟の屋に１棟の倉が付属するのが当地の集落の基本的な単位であるが、郷衙の場合は４～５棟の屋に１棟の２間×３間の床面積が広い倉と、２間×２間の倉３棟がセットになることが推測された。これは一般的な集落単位よりも集落の構成員が多いことと、単位外からの貢納品を保管する倉が３棟あるといった特徴が指摘できる。ただし久田原遺跡の８世紀末葉については、こういった単位から倉だけが欠落している。これについては、『類聚三代格』の延暦一四年(795)七月一五日、九月一七日の太政官符で、郡倉を分散して設置するように命じていることが参考になる。これは郡レベルでのことであるが、地方官衙の公的な倉一般にもいえるとすると、久田原遺跡の場合も、倉だけを別の地点へ移動させた可能性が想定される。笠岡市に所在し、旧国単位では備中国に属する鍛冶屋遺跡(岡田1988)でも、古代の建物群が検出されている。建物は複数の時期に渡っているため、明確な分離は容易ではないが、古代に属すると思われる建物は１棟の倉と数棟の屋がいくつか集まって集落を形成しているようにみえる。その一方で、屋に付属しない倉だけが独立して存在しているものもみられる。これも倉を別の地点に立地させている例に入るものといえる。

いずれにせよ、当地の郷衙の１つのパターンとしては、３棟の倉が、屋と床面積の広い倉がセットとなった単位に付属する構成を持っているといえる。赤田東遺跡は基本的に屋２棟に２間×２間の柱間の倉１棟が付属する構成であり、集落の基本的な構成パターンといえる。しかしながら、徐々に主屋が拡大している点や、帯金具、当地では出土の珍しい猿投産の緑釉陶器の小瓶などが出土していることから、いわゆる一般集落の単位というだけでなく、官人的、あるいは官人の居住していた単位という性格が推測される。それは畿内産土師器が比較的多く出土していることからもうなずける。ただし、郡衙レベルであるのか国衙レベルであるのかは不明である。10世紀以降に遺構や遺物がみられなくなる点を過大に評価すると、それは郡司層の没落期と重なることになり、郡衙

クラスに属する可能性が推測される。調査区北側の畑(第１章参照)からは古代の遺物がまとまって出土しており、赤田東遺跡の形成された微高地は微地形をみる限りかなり広い。この微高地のどこかに郡衙遺構が埋没しているのではないかという推測も可能と思われる。

引用文献
浅倉秀昭ほか「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 1997年
阿部義平『官衙』ニューサイエンス社　1989年
伊藤　晃ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　1995年
岡田　博ほか「鍛冶屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70　1988年
草原孝典「８世紀における集落の一類型」『古代文化』56－3　2003年
佐藤　信『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館　1997年
下澤公明ほか「城山東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995年
弘田和司ほか「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184　2004年
山中　章『日本古代都城の研究』柏書房　1997年
吉田　晶『日本古代村落史序説』塙書房　1980年

３　古墳時代後期

(1) 遺構変遷の基準

１．基準資料の概観（図252・253）

古墳時代後期における遺構は多数あり、さらにそれらはかなり錯綜している。大規模な集落が安定的に存在していたことを示している。しかも、古墳時代における当地の一般的な住居形態であった竪穴住居が、該期のなかで掘立柱建物を主体とする住居形態へ変化している。また、竪穴住居がその方向性をあまり意識しないような分布であるのとは対称的に、掘立柱建物は建物の軸方向をあわせるなど景観的にも整然としている。少なくとも集落史の観点からは、この時期は大きな画期点であると考えてよい。まず、ここではその時期をより明確にするために、遺構の時期変遷の基準となる須恵器の変遷を概観しておきたい。ただしそれは須恵器編年を目的としたわけではなく、陶邑窯跡における田辺編年(田辺1981)と飛鳥地域の宮殿跡・寺院跡における飛鳥編年（西1978）を基軸に、それと併行する比較的内容の明らかな資料、及び、一括性が高い資料をおいて、各期の器種構成や内容をできるだけ整理することを目的とした。また、資料上の制約や須恵器の器形的特徴がかなり広域で共通するといった性格から、小地域性が存在していることもあえて無視した形になっている。

さて、赤田東遺跡の古墳時代の遺構のなかで最も古いのは竪穴住居20である。これは田辺編年ＴＫ23・ＴＫ47の時期で、実年代では５世紀末～６世紀初頭である。それから少し間をおいて、田辺編年ＴＫ10・ＴＫ43以降多くの遺構が認められるようになる。下限については、溝12などから出土した須恵器杯身から７世紀代と考えられる。したがって、須恵器の変遷はＴＫ10以降、７世紀後半までについてを概観することになる。

須恵器の編年における基準資料は窯跡の調査によるものが最も良好であるが、そのような例は少なく、また器種も限られている場合が多いため、古墳の副装品などの消費地からの出土資料を併用していきたい。まず、田辺編年のＴＫ10併行資料としては、岡山市西山３号墳(福田ほか1996)、倉敷

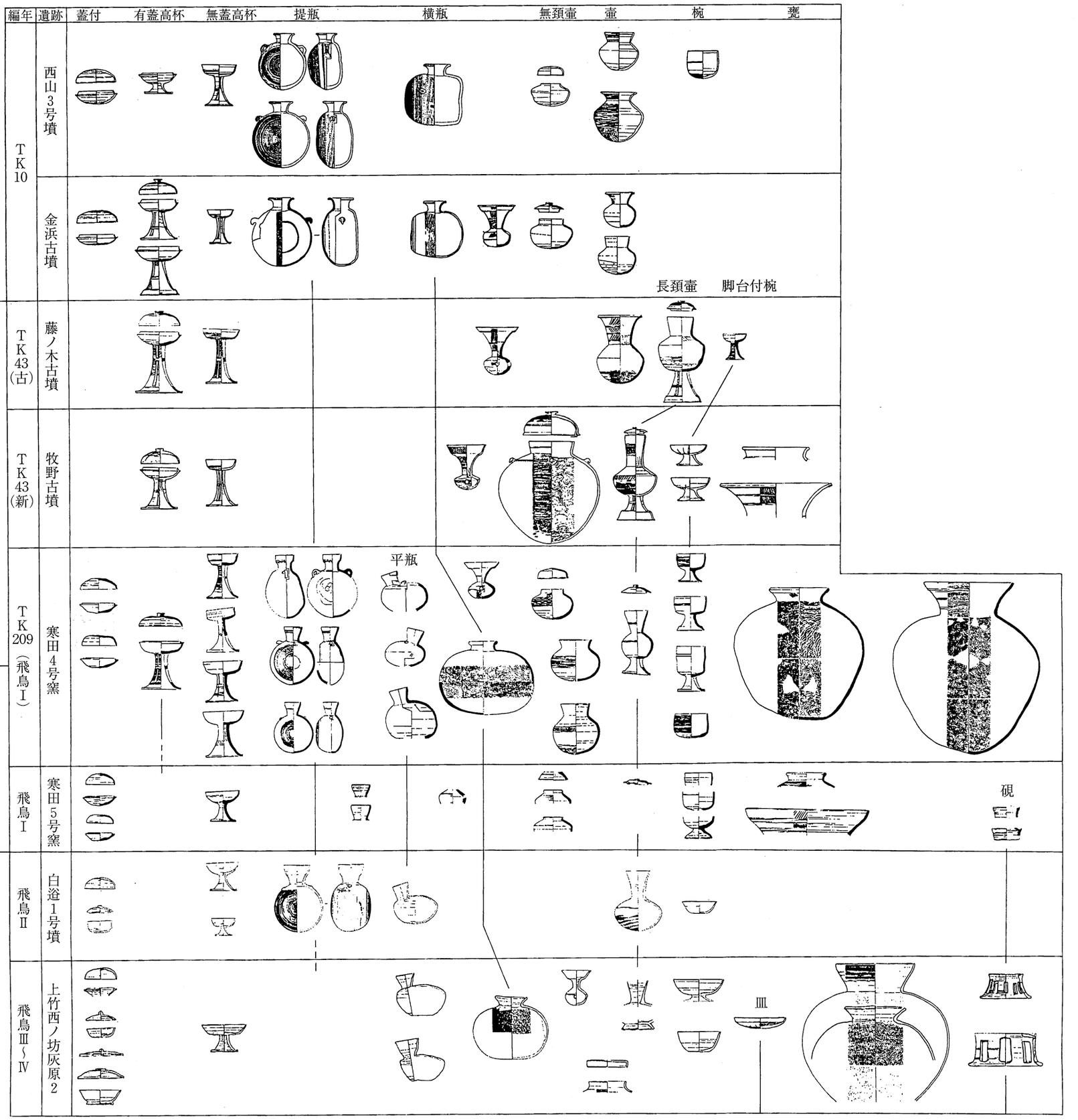


図252　赤田東遺跡関連須恵器の変遷

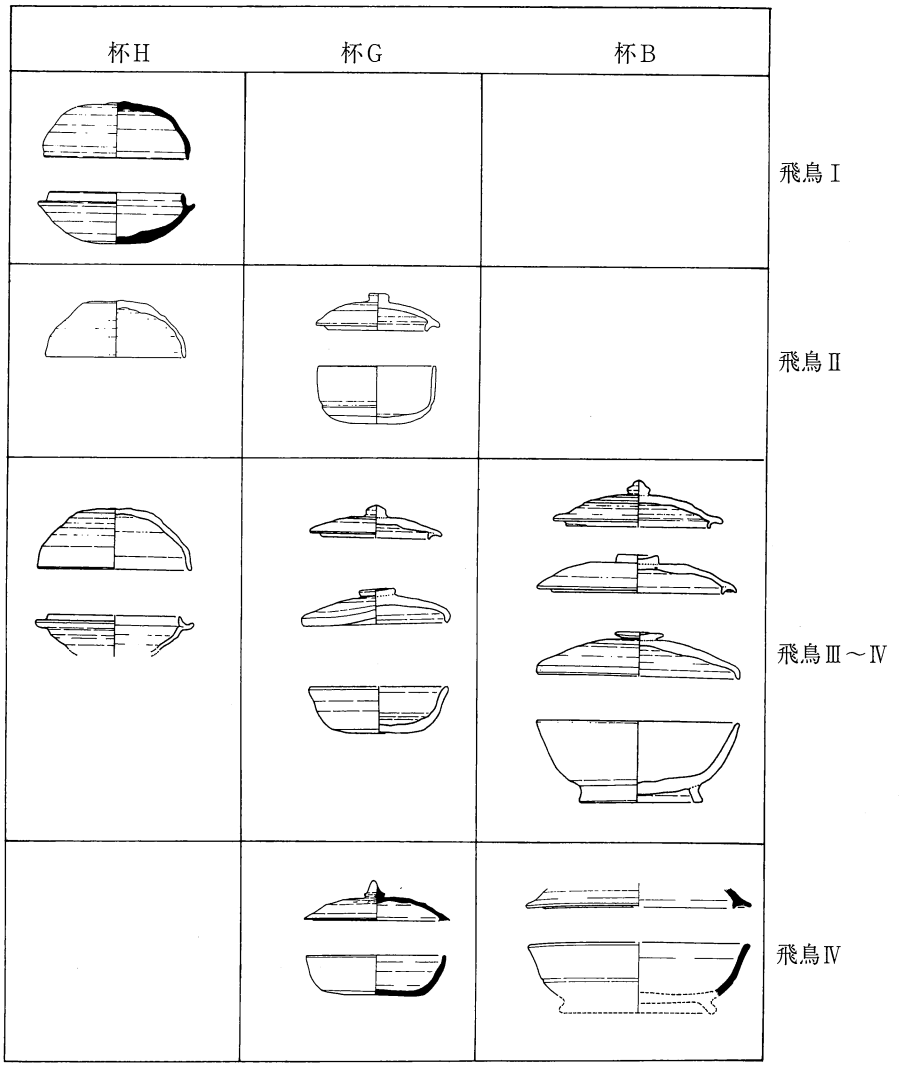


図253　杯の変遷

市金浜古墳(間壁ほか1979)出土の資料である。いずれも古相の横穴式石室をもつ古墳である。西山3号墳からは、蓋杯の蓋が39点、身が4点、金浜古墳からは蓋杯の蓋が26点、身が25点出土している。両墳出土の蓋は口径13.5～15cm前後、器高3.5～5.0cm前後、身は口径12.0～14.0cm前後、器高3.5～5.0cm前後にまとまる。蓋の口縁端部に稜線を持つ特徴なども共通しており、両墳の資料の時期が共通し、かつ追葬などによる異なる時期の遺物が混入した可能性が少ないことがうかがえる。堤瓶をみると、西山3号墳の把手は輪状であるものが認められるが、金浜古墳は鍵状だけであり、西山3号墳の方が古相にみえる。しかし、高杯については金浜古墳の方が古相を示している。それらは同期の中のバリエーションといえる。

田辺編年のＴＫ43併行資料については、かなり多くあるが、他時期の遺物は混じらず、器種構成が明瞭な資料は皆無に等しい。そのため、ここでは該期の良好な資料として、奈良県藤ノ木古墳(木下ほか1989)と、同県牧野古墳(河上ほか1987)の資料をあげる。いずれも巨石を用いた大型墳で、出土資料を見る限り、単次葬といえるものである。牧野古墳については有蓋高杯の器形の縮小傾向や、脚台付き椀との比較などから、藤ノ木古墳よりも後出的であることは明らかである。しかしながら、蓋杯が伴わないため、やや明瞭さを欠くものの、有蓋高杯の口縁部の立ち上がりがしっかりしてい

る点や、長脚高杯の透かしに退化傾向がみられない点、平瓶が伴わない点などから、ＴＫ43の範疇に入るものと考えられる。

田辺編年ＴＫ209併行の資料としては、倉敷市寒田４号窯（藤原ほか2003）、およびその灰原出土資料がある。これは出土資料数も多く、器種も豊富であり、その内容も調査者である藤原好二氏によって詳細な分析がなされている。その結果、これらの資料は寒田Ⅰ期とⅡ期の２期に区分されている。ここではいくつかの小期を内包しているものの、次の時期に考えている寒田５号窯出土資料との関係から、これらを一つの時期として扱っておきたい。まず、蓋杯の蓋は口径11cm以上で15cm以下の範囲で、12.5～13.5cm前後に比較的集中する傾向があり、身は口径11cm前後以上で15cm以下の範囲で、13.5cm前後に比較的集中する傾向がある。身と蓋が逆転して蓋につまみを持つ杯Ｇとする1点があると指摘されているが、つまみの形状が一般的な杯Ｇとは異なっていることや、身についても短頸壺の蓋である可能性も考えられることから、一応杯Ｇは伴っていないと考えておきたい。長脚高杯は、その透かしの形状から上・下２段とも透かしがあるもの、上段が切り込みだけで下段が透かしのもの、上・下とも切り込みのもの、切り込みも省略しているものの４種に分けられる。堤瓶もその把手の形状から円環状のもの、鍵手状のもの、鍵手を省略したボタン状のものの３種に分けられる。脚台付き椀も深いものとやや浅いものがあり、脚端部についても「ハ」の字形に開くものから、段を持って開くものの２種がある。これら各器種にみられる差は時期差に起因する可能性も高いものの、前後の時期の資料からの差からすると、この資料全体の時期幅はそれ程長くは見積もれない。一応各器種にみられるバラエティーは、この期の特徴である可能性を想定しておきたい。

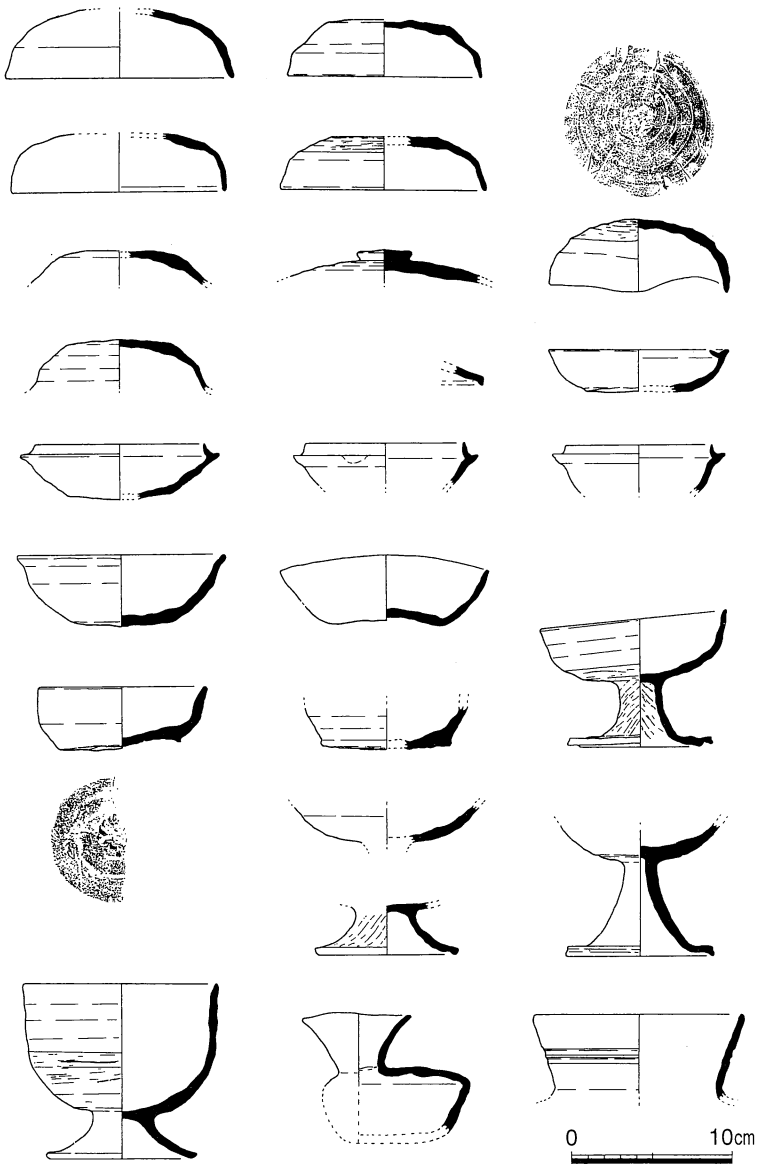


図254　福吉丸山遺跡段状遺構５出土土器

次は田辺編年ＴＫ217ということになるが、これ以降は絶対年代の比定が明確で、より時期幅が限定される飛鳥編年を基軸としたい。ただし飛鳥Ⅰは比較

的長い時期幅が想定され、その前半はＴＫ209と重複する。さて飛鳥Ⅰに併行の資料としては、倉敷市寒田５号窯及び、その灰原出土資料がある(柳瀬1979)。蓋杯(杯Ｈ)の法量は、蓋が口径9.5～11.5cm前後、身が口径9.5～11cm前後にまとまり、寒田４号窯と比べると、明らかに縮小している。高杯も透かしはなく、器高も縮小している。脚台付き椀の脚は支部も「ハ」の字形に開くものだけとなる。円面硯が認められるようになる。岡山市鹿田遺跡竪穴住居26、土壙410、土壙422(山本ほか1988)はこの期に併行する資料である。

飛鳥Ⅱに併行の資料は勝央町白迮１号墳出土資料がある（浅倉ほか1988)。蓋杯には杯Ｈと杯Ｇがあり、杯Ｇの法量は口径が7.0cm、器高3.0cm以下である。

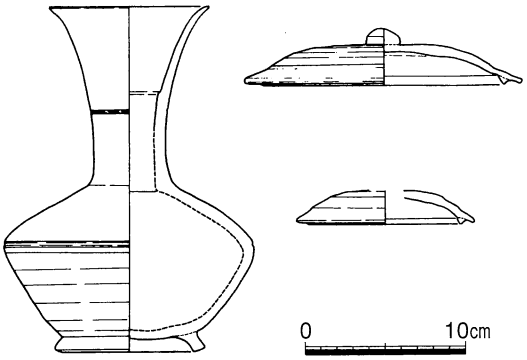


図255　矢部36号墳出土土器

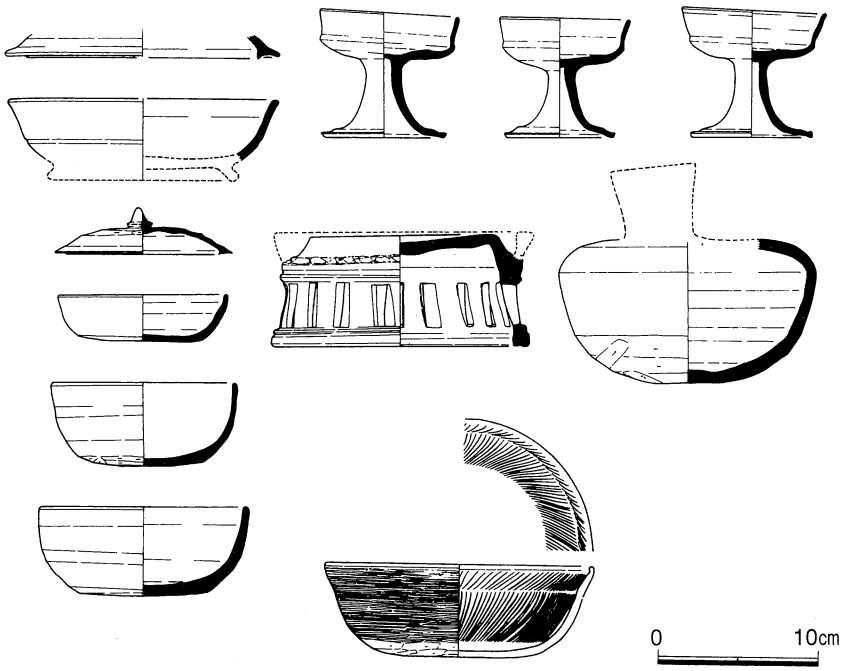


図256　千引７号墳出土土器

飛鳥ⅢからⅣに併行の資料は、金光町上竹西の坊窯灰原２出土資料がある(武田ほか1988)。これは出土資料の点数も多く、器種も豊富であり、その内容も調査者である武田恭彰氏によって分類がなされている。おもに杯の形態から４小期に分けて理解されている。特に杯Ｇの変化は飛鳥編年はもとより、終末期古墳出土資料からも明確な型式変化と時期変化が整合的に把握されている。そのため上竹西の坊窯灰原２出土資料を１つの時期として扱うことはかなり抵抗を感じるが、杯以外の器種についてはそれ程矛盾を認められないことから、一応１つの時期として扱う。これと併行する様相を示す資料としては、倉敷市二子14号墳(亀山ほか1993)、同矢部36号墳(浅倉ほか1993)(図255)である。

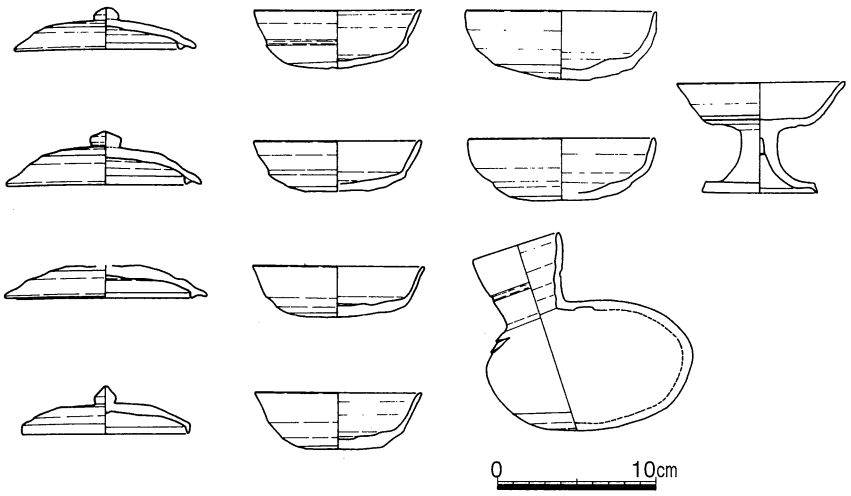


図257　矢部37号墳出土土器

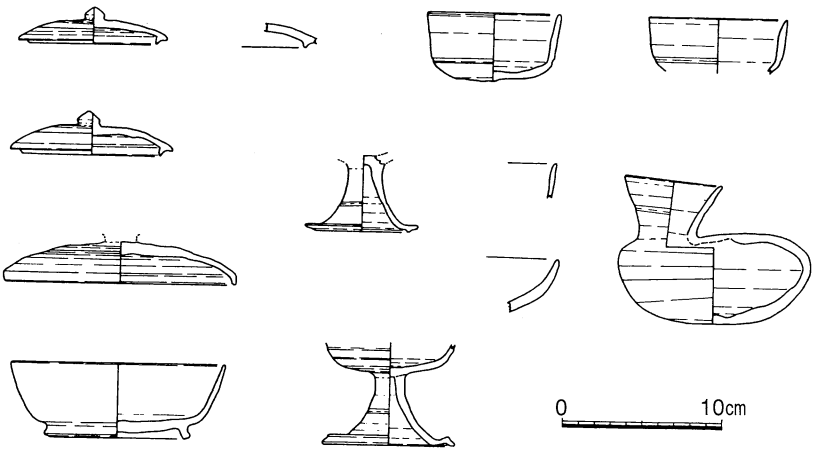


図258　富原西奥古墳出土土器

このほか、遺構の性格上他の時期の遺物が混入している可能性があるものの、勝央町福吉丸山遺跡段状遺構５(圃1999)(図254)には、杯Ｈとともに断片的ではあるが扁平なつまみを持ち、かえしのない杯Ｂが認められる。この期の杯の組み合わせを傍証している可能性を示すと考えたい。

上竹西の坊窯に後続する資料としては、総社市千引７号墳の土器(武田ほか1999)(図256)がある。飛鳥Ⅳの畿内産土師器が伴っており、編年上の定点になる資料といえる。これと併行する資料としては倉敷市矢部37号墳出土土器(浅倉1993)(図257)がある。いずれも杯Ｈが認められないことから、この期にいたって完全に杯Ｈが姿を消すと考えておきたい。

以上のように須恵器の変遷を考えると、備前国における一大窯業生産地である邑久古窯跡群の採集、及び発掘資料から組み立てられた編年と少なからず齟齬がある。特に大きいのは杯Ｈがかなり後まで伴うという点と、杯Ｂの蓋に扁平なつまみを持ち、かえしのないものが宝珠形のつまみでかえしのある器種と同時に出現しているという点である。しかし、岡山市富原西奥古墳(図258)は、出土した釘や石室の規模などから、一体だけを葬った単層墓であるが(松本ほか1993)、副装品の須恵器

には宝珠形のつまみでかえしのある蓋に、かえしのない杯Ｂの蓋が伴っている。いずれにせよ、これらについては該期の資料が増えた段階で再検討していきたい。

２．実年代の比定

各時期の実年代の比定については、基軸とする田辺編年、飛鳥編年に従う。ＴＫ43は飛鳥寺下層の時期、すなわち飛鳥寺の創建年代である588年直前の時期前後で６世紀後半とされる。ＴＫ10は、それより２型式遡るＴＫ47が471年の年代を示すと考えられている埼玉県稲荷山古墳出土の銘文を有する鉄剣と共伴することから、ＴＫ43との間である６世紀中葉とされる。ただし、ＴＫ43についてはその基準となる資料そのものが、７世紀前葉まで下るとする意見（畑中1999）や、ＴＫ43の新段階と考えた牧野古墳が６世紀末～７世紀初頭に没したと推測される押坂彦人大兄皇子の墓に擬する意見(河上1987)が多いことから、ＴＫ43の時期についてはやや新しく位置づける可能性もでてきている。しかし、飛鳥Ⅰは593年に推古大王が即位したとされる豊浦宮の土器群、603～628年までの間に使用された小墾田宮の土器群が基準となっており(西1978)、兵庫県箕谷２号墳から出土した608年に相当する銘文を有する鉄剣と共伴する土器群(谷本ほか1987)からもそれらを追認することができることから、６世紀末～７世紀前葉の時期観は動かない。そうすると、その前半部分であるＴＫ209期も６世紀末～７世紀初頭の年代となり、さらにその前のＴＫ43は６世紀後半の時期でよいということになると考えられる。

したがって本報告書においては、従来からの年代観を用いていきたいと思う。つまり、ＴＫ10は６世紀中葉、ＴＫ43は６世紀後半、ＴＫ209期は６世紀末～７世紀初頭、飛鳥Ⅰは７世紀前葉、飛鳥Ⅱは７世紀中葉、飛鳥Ⅲ～Ⅳは７世紀後葉とする。

(2) 赤田東遺跡の古墳時代後期の遺構の変遷（図259）

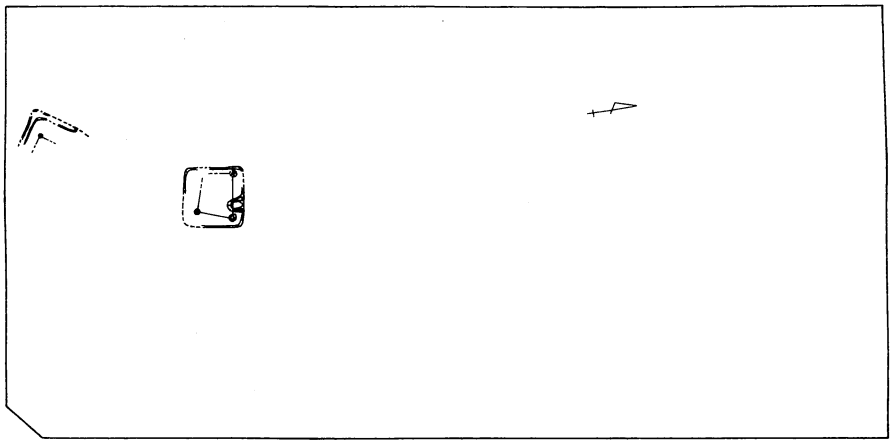
それでは出土した遺物をもとに、該期の遺構の変遷をみていきたい。

赤田東古墳Ⅰ期

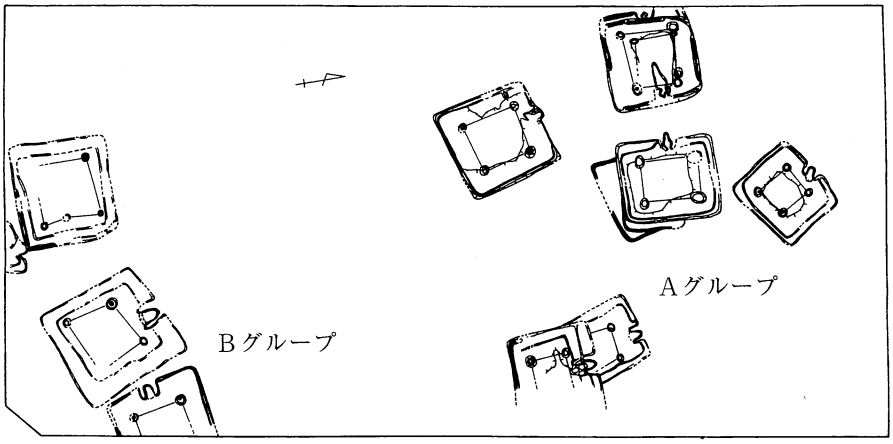
まず、５世紀末～６世紀初頭にかけて、調査区の南端で竪穴住居が２棟認められる。この期に属する遺物が少ないことからも、小規模な集落が存在していたといえる。後続する時期の遺構や遺物が認められないことから、単発的な集落といえる。後述するが、この期における同様の集落は比較的例があることから、小規模な集落の単発的な出現は、該期における当地の社会的な動きであった可能性が高い。

赤田東古墳Ⅱ期

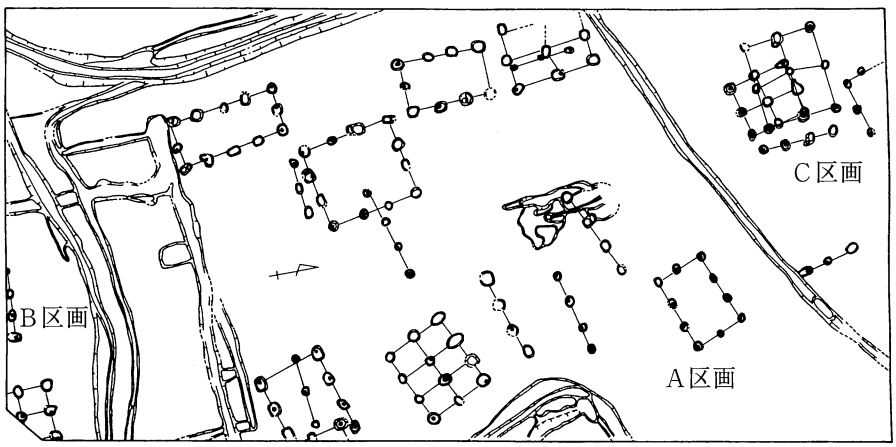
６世紀中葉～７世紀初頭になると、遺構・遺物の量が増加する。調査区内に限ってみると、竪穴住居が北(Ａグループ)と南(Ｂグループ)に分かれる傾向が明瞭である。しかもそれぞれのグループ内は切り合っていたり、同時存在はまず想定されないほど近接している竪穴住居が目立つことから、何度も同じ位置で住居の建て替えがおこなわれていたといえる。確実に同時存在していた竪穴住居の数を同定することは困難であるが、１つのグループがかなり安定的に営まれていたと考えてよい。包含層からは鉄滓が出土しており、竪穴住居の埋土からも出土していることから、集落内で、鉄・鉄器生産がおこなわれていたといえ、馬の骨なども出土していることから、馬も保有していたといえる。



赤田東古墳Ⅰ期（5世紀末～6世紀初頭）



赤田東古墳Ⅱ期（6世紀中葉～7世紀初頭）



赤田東古墳Ⅲ期（7世紀初頭～7世紀中葉）

0　10m

図259　赤田東遺跡古墳時代後期遺構変遷図

赤田東古墳Ⅲ期

7世紀初頭前後～7世紀中葉の時期である。集落景観が一変する。まず、竪穴住居から掘立柱建物へと変化する。さらに建物群を区画する溝が認められ、調査区内ではA～Cの3区画が確認できる。ただし、この区画の位置はⅡ期の竪穴住居のまとまるグループの位置を踏襲しているようにみえる。ただ、竪穴住居の配置にほとんど規格性などはうかがわれなかったが、掘立柱建物は奈良時代の官衙ほどではないものの、大体棟方向をあわせており、集落全体を貫く計画性が存在していたこともうかがえる。ちなみに区画内の大半を調査したと考えられるA区画内の建物をみると、区画の西側は棟方向を南北方向にあわせた建物4棟で構成され、東側はそれに直交する東西方向にあわせた建物3棟で構成される。東西両建物群には総柱建物が伴っている。また、建物群の中間には馬を意識的に一頭埋納した土壙も検出されている。おそらくこのような景観の区画がいくつか集まったのがこの期の集落であったのであろう。

遺物は区画溝から多く出土しており、なかでも鉄滓やフイゴ羽口などの鉄・鉄器生産関連の遺物、製塩土器、馬の骨などは当時の手工業生産の頂点に位置づけられるものである。

(3) 吉備地域における5世紀～7世紀の集落遺跡の変遷と画期

旧国単位の備前国・備中国・美作国・備後国とは、大和に匹敵する規模の古墳を築き得た地域として吉備と呼称されていた。ここでは吉備地域の大半を占める岡山県域の発掘調査例から、5世紀～7世紀にかけての集落の変遷を復元的に追跡してみたい。そして、その変遷の画期が吉備地域の歴史的特質とどのような関係にあるのかを若干検討してみる。

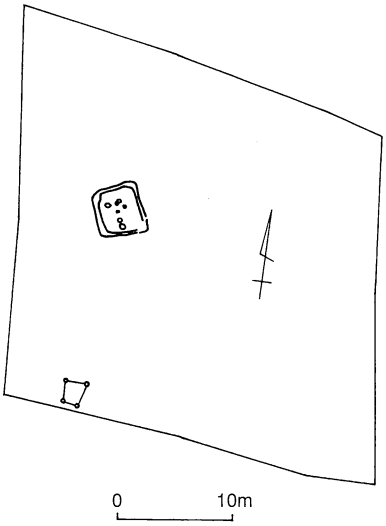
1．5世紀～6世紀初頭の集落

道口遺跡（図260－1）（正岡ほか1988）

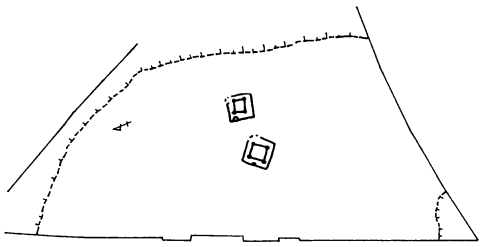
倉敷市玉島の丘陵部に位置し、旧国単位では備中国西半に属する。一辺4mの竪穴住居1軒、掘立柱建物1棟、土壙が検出された。ただし、掘立柱建物は竪穴住居の上面が削平されたものと考えられる。そうすると約10mの間隔をあけて、竪穴住居が2軒並んでいたといえる。遺構の重複もないことから、短期間営まれた単発的な集落といえる。時期は5世紀前半である。

三手向原遺跡（図260－2）（草原2001）

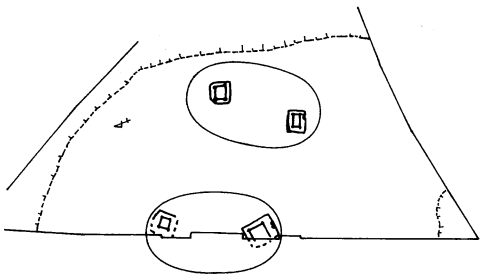
岡山市三手の足守川中流域の平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。5世紀前半～5世紀中葉まで継続的に営まれた集落である。一辺4～5mの竪穴住居が8軒検出されているが、同時存在は2～4軒ほどで、小規模な集落であったといえる。周囲は足守川や前川などの中・小河川が合流する不安定な地形環境である。周辺には同様の小集落が点々と認められることから、5世紀になって三手向原遺跡のような小集落を中心に、本格的な開発が行われたのであろう。5世紀前半、5世紀後半～6世紀初頭、6世紀中葉の3時期の変遷がとらえられ、いずれも竪穴住居2軒が1つの単位となっている。5世紀後半～6世紀初頭の遺構面については、竪穴住居が4軒ある。広場を挟んで2軒が1単位となる竪穴住居の単位が2単位あり、全体としては径約15mの広場の周囲に円弧状に竪穴住居が並んでいる。



1　道口遺跡

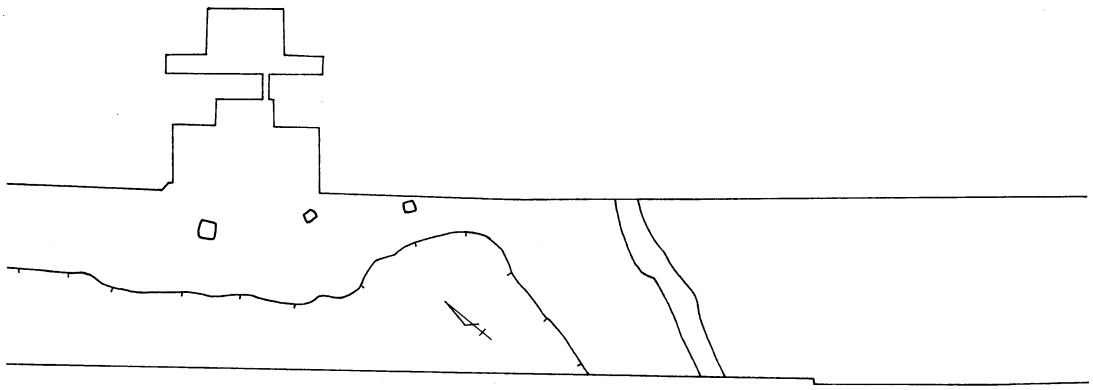


5 世紀前半

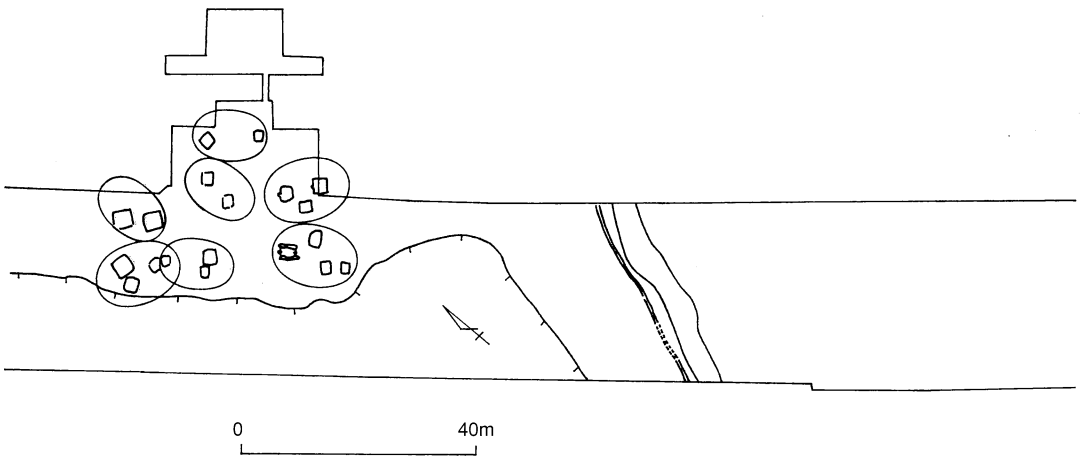


5 世紀後半～ 6 世紀初頭

2　三手向原遺跡



5 世紀前半



5 世紀後半～ 6 世紀初頭

3　百間川原尾島遺跡

図260　5 ～ 6 世紀初頭の集落(1)

百間川原尾島遺跡（図260－３）（柳瀬ほか1996）

岡山市原尾島の旭川下流域の東岸平野に位置し、旧国単位では備前国に属する。縄紋時代から遺跡の形成は行われ、弥生時代後期には当地の拠点集落の１つであったと考えられる。５世紀前半～６世紀前半にも集落が認められ、竪穴住居、掘立柱建物、井戸などが検出された。５世紀前半の集落は、一辺６ｍほどの中型住居１軒と一辺４ｍ前後の小型の住居が２軒の計３軒で構成される。竪穴住居間は30mほどあり、散在的に分布している。５世紀後半～６世紀初頭になると18軒もの竪穴住居が認められる。ただしそれらは２～３軒の竪穴住居がまとまる単位が、５世紀後半と６世紀初頭の２時期にわたって存在した結果とされる。そうすると、5世紀前半の竪穴住居群はそういった単位の１つであったというよりも、間隔が30ｍもあいていることから、１軒が１つの単位であった可能性が高い。掘立柱建物は、３間×２間の柱間の側柱建物が１棟のみ認められる。全ての単位に付属するといったものではない。また、床面積も20㎡ほどで、中型の竪穴住居の床面積よりも小さい。

正善庵遺跡（図261－４）（小郷1992）

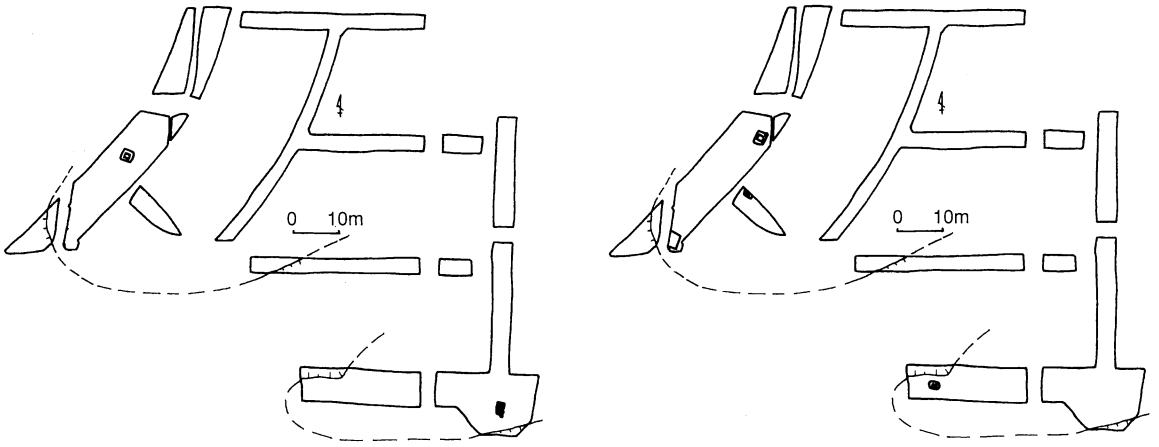
津山市東一宮の横野川中流域の小平野部に位置し、旧国単位では美作国に属する。南北に並ぶ２つの微高地が調査されている。５世紀後半と６世紀中葉の２時期があり、北側の微高地の様相が比較的明確である。５世紀後半は一辺４ｍ前後の竪穴住居が１軒で、周囲にはほかの竪穴住居は認められない。６世紀中葉は一辺４～６ｍの竪穴住居が３軒で、それぞれの竪穴住居の間には20～30mほどの間隔がある。調査区の範囲が限定的であるため、竪穴住居の周囲の様相は明確でないが、道口遺跡や三手向原遺跡のように２軒の竪穴住居が１つの単位を形成しているのではないようである。竪穴住居１軒が集落内の単位といえる。

加茂政所遺跡（図261－５）（柴田ほか1999）

岡山市加茂の足守川中流域の平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。弥生時代から近世までの集落遺跡で、とくに弥生時代中期から古墳時代前期の遺構密度が高い。５世紀前半の竪穴住居が６軒検出されているが、面的に調査できたのは３軒で、それぞれ20mほどの間隔をあけて点々と営まれている。竪穴住居１軒が集落を構成する単位であったといえる。

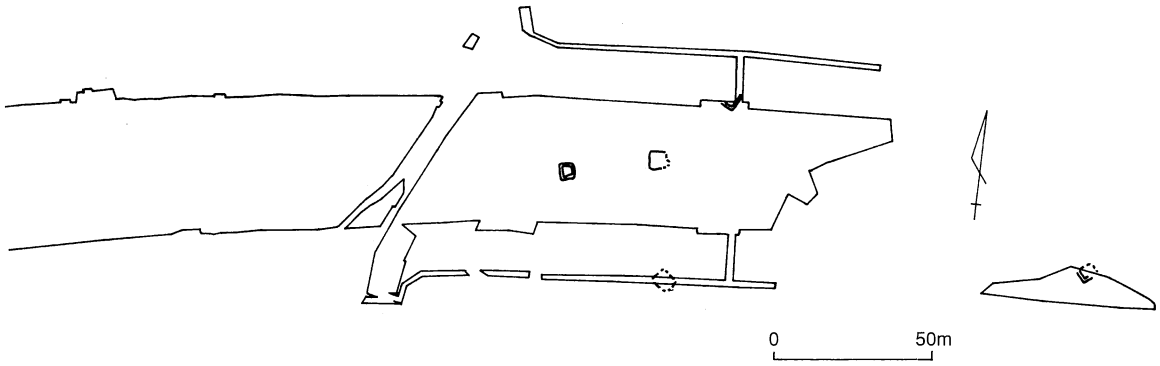
谷尻遺跡（図261－６）（高畑ほか1976）

北房町上水田の備中川南岸部の狭小な平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。縄紋時代からの遺物が認められるが、明確な集落が形成されるのは弥生時代中期以降である。とくに古墳時代前期の大型竪穴住居からは巴形銅器が出土しており、周囲には周溝をめぐらしていることから、該期における在地首長層の住居と推測されている。５世紀後半～６世紀初頭の竪穴住居は５軒検出されている。４軒が大体まとまる傾向があり、１つの集落といえる。しかし、そのうち３軒は20～25mほどの間隔がある。一辺が７ｍ前後の最も規模の大きな竪穴住居と、一辺が４ｍ前後の小型の竪穴住居が近接しており、１つの単位である可能性が高い。そうすると、竪穴住居１軒が１つの単位であるものと、複数の竪穴住居が１つの単位であるものが並存していることになり、いわばやや格差の認められる単位がまとまって集落を形成しているということになる。

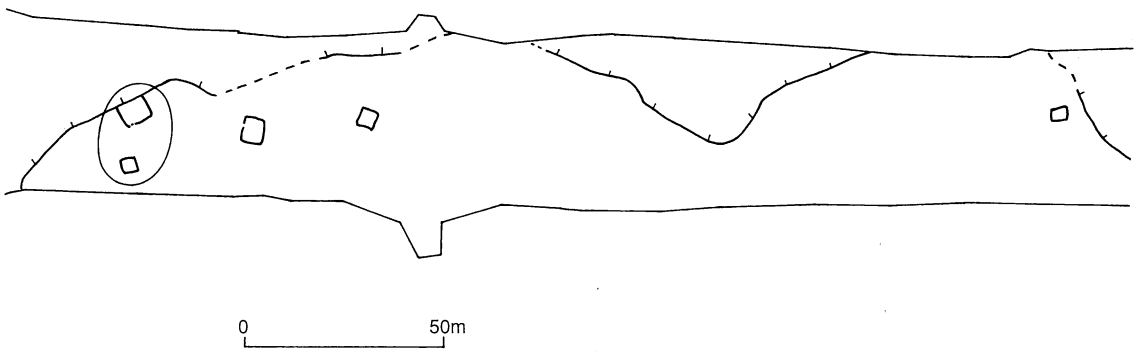


5 世紀後半　　6 世紀中葉

4　正善庵遺跡

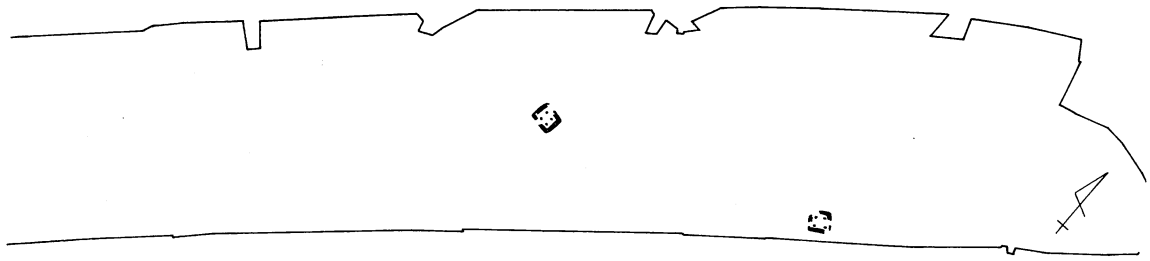


5　加茂政所遺跡

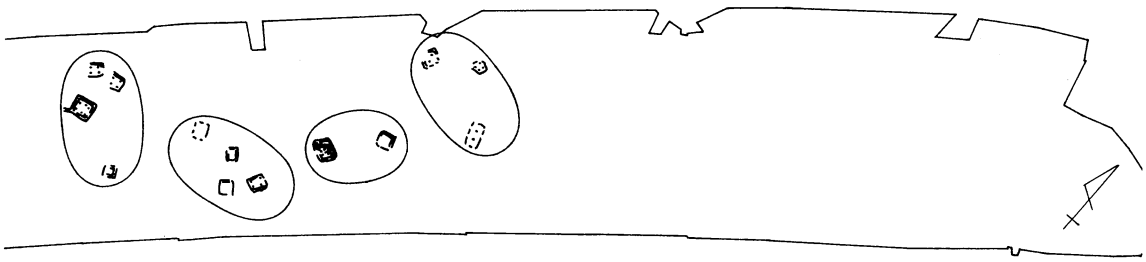


6　谷尻遺跡

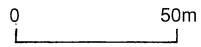
図261　5～6 世紀初頭の集落(2)



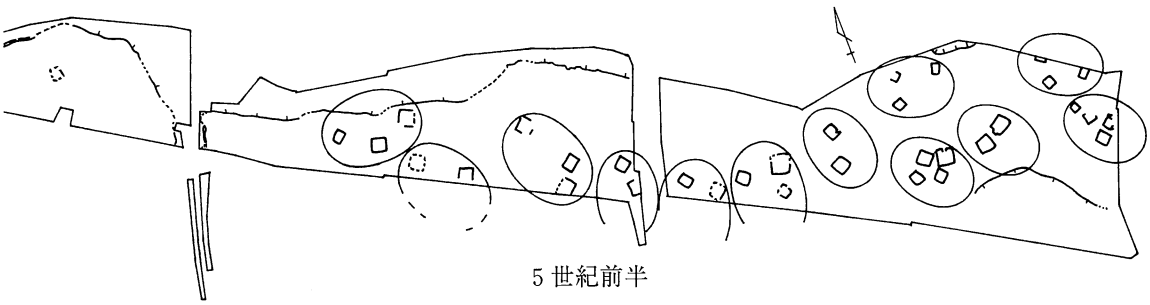
5 世紀前半



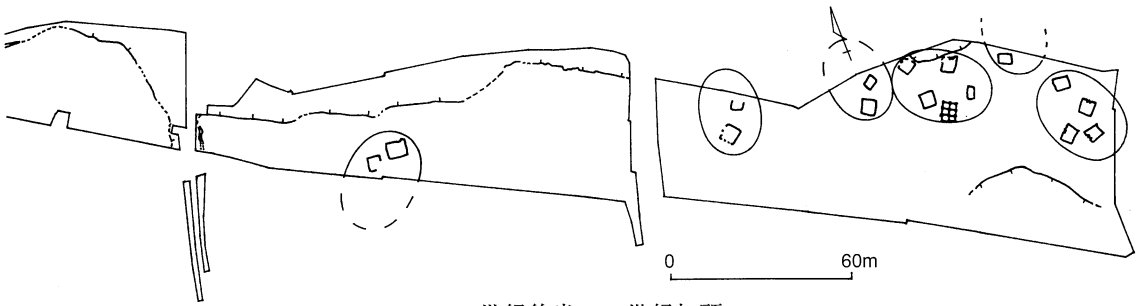
5 世紀後半～ 6 世紀初頭



7　斎富遺跡



5 世紀前半



5 世紀後半～ 6 世紀初頭

8　高塚遺跡

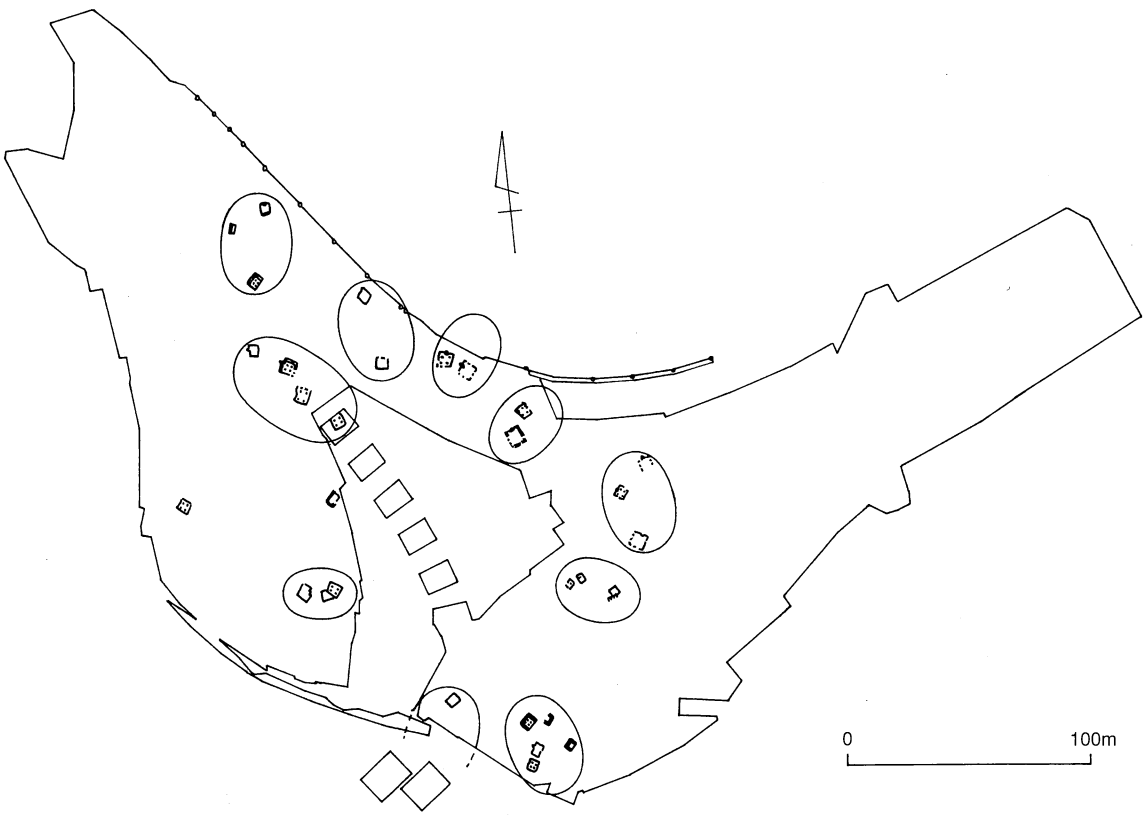
図262　5 ～ 6 世紀初頭の集落(3)

斎富遺跡（図262－７）（下澤ほか1996）

山陽町斎富の砂川流域の平野部に位置し、旧国単位では備前国に属する。縄紋時代から中世までの集落遺跡で、とくに古墳時代中期から後期にかけては朝鮮半島系の遺物が多く出土している。５世紀前半は２軒の竪穴住居と井戸や土壙が検出されているが、２軒の竪穴住居の間には60ｍほどの間隔がある。これは、竪穴住居１軒が集落の単位であったことを示している。５世紀後半～６世紀初頭は竪穴住居が11軒と、周溝遺構や土壙が検出されている。竪穴住居は２～４軒がまとまって１つの単位を構成しており、そういった単位が４単位検出された。そして、この４単位の竪穴住居群は、径50ｍほどの円形の広場を中心に、径150ｍほどの円弧状に並んでいるようである。

高塚遺跡（図262－８）（弘田ほか2000）

岡山市高塚、三手の足守川中流域の平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。弥生時代から中世の集落遺跡で、とくに弥生時代後期初頭や中葉には竪穴住居の数も多く、銅鐸や貨泉も出土していることから、該期の拠点集落の１つと考えられる。５世紀の竪穴住居も多く、韓式系土器も含まれていることから、高塚遺跡の南約1.5㎞の位置にある、５世紀前半の築造と考えられる墳長350ｍの造山古墳との直接的な関係も想定されている。５世紀～６世紀初頭の竪穴住居は65軒が検出され、掘立柱建物も１棟検出されている。竪穴住居は５世紀前半と５世紀後半～６世紀初頭の２時期に分けられるが、掘立柱建物については出土遺物が極めて少ないことから、どちらの時期に属するか不明である。



9　津寺遺跡

図263　５～６世紀初頭の集落(4)

5世紀前半の竪穴住居は2～4軒が1つの単位を構成し、そういった単位が8単位認められる。巨視的にみると、高塚遺跡は東西にのびる幅80mほどの微高地上に形成されており、竪穴住居群も地形に合わせて東西に並んでいる。5世紀後半～6世紀初頭になっても竪穴住居が数軒ごとにまとまる単位が認められるが、4軒以上で構成される大きな単位と、2軒ほどの小さな単位に分けられ、しかも竪穴住居の分布も調査区東半が顕著となり、大きな単位も調査区東半にまとまる。また、5世紀後半～6世紀初頭になると、複数の竪穴住居から鍛冶滓が出土するようになり、集落内で鍛冶が盛んに行われるようになったと考えられる。鍛冶滓が出土した竪穴住居は、調査区東半に集中している。この期に掘立柱建物が属するとするならば、掘立柱建物も調査区東半に属することになり、5世紀前半と比べ集落内に格差が生じてきていることがうかがわれる。

津寺遺跡（図263－9）（中野ほか1998）

岡山市津寺の足守川中流域の平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。弥生時代から中世の集落遺跡で、奈良時代には正方位に合わせた南北118.3m、東西89.1mの方形区画を持つ官衙が形成されている。5世紀末～6世紀初頭には、微高地全体に竪穴住居が分布する。2～5軒が1つにまとまる単位が11単位ある。それらは径約70mの広場を中心に、径約250mの範囲に弧状に並んでいるようにみえる。竪穴住居群は一部に重複があるものの、全体的には少ない。またフイゴ羽口が出土した土壙があるものの、鍛冶関係の遺物がとくに多いといった傾向はない。

岡山県下における5世紀前半～6世紀初頭の集落は、正善庵遺跡のように竪穴住居1軒だけのものから、高塚遺跡や津寺遺跡のように数十軒以上集まった大規模なものまである。また竪穴住居が複数検出された集落をみると、加茂政所遺跡のように竪穴住居が20mほどの間隔をあけて点々とある、いわば竪穴住居1軒が集落を構成する単位であるものと、津寺遺跡や高塚遺跡のように竪穴住居2～4軒ほどが1つの単位をなし、それらが集積して集落を形成するものがある。また谷尻遺跡のように両者がまとまって1つの集落を形成しているものもある。複数の竪穴住居がまとまる単位については、三手遺跡や谷尻遺跡のような小規模な集落の場合は2軒であるが、大規模な集落では3軒以上で構成されるものが認められる。1つの単位内において同時存在の竪穴住居を確実に同定することは困難であるが、少なくとも多くの竪穴住居で構成される単位の方が優位であったことは推測してよいと思われる。さらに5世紀後半～6世紀初頭になると、高塚遺跡ではそれまではランダムであった竪穴住居の分布に偏りが認められるようになる。竪穴住居4軒で構成される大きな単位が調査区の東半に集中し、さらにこれらの単位のなかには掘立柱建物が付属する可能性があるものもあり、集落内の単位間に格差が生じてきていることがうかがわれる。また調査区東半の竪穴住居からは鉄滓が多く出土しており、その鉄滓は鍛冶滓で、集落内で鍛冶が行われたことを示している（弘田ほか2000）。このことから集落内に生じた格差の要因の1つに鍛冶という手工業生産が関係していたといえる。

このほか竪穴住居の配列であるが、津寺遺跡や斎富遺跡のように円弧状に並ぶものと、高塚遺跡のように帯状に並ぶものがある。集落規模の小さい三手向原遺跡も円弧状であることや高塚遺跡の場合は立地している微高地の形状に規定していると考えられることから、該期の集落に定められた2つの型があったというのではなく、地形に即したためと考えられる。

以上のことをまとめると、５世紀前半～６世紀初頭の集落は、集落内における竪穴住居の集積状況を指標とすると、竪穴住居１軒で集落内の単位が構成されるもの（Ａ型）と、竪穴住居数軒で集落内の単位が構成されるもの（Ｂ型）とがある。さらにＢ型は１つの単位が２軒のもの（Ｂ－１型）と、３軒以上のもの（Ｂ－２型）とに分けられる。大規模な集落は基本的にＢ型で、Ｂ－１型とＢ－２型が混在している場合が多い。高塚遺跡の場合、Ｂ－２型の単位を中心に鉄滓が出土しており、その差は単に住居の数だけでなく、各単位の生産活動の内容をも反映させている可能性も含まれている。

２．６世紀中葉の集落

三手向原遺跡（図264－１）（草原2001）

６世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。検出された竪穴住居は２軒で、約10ｍの間隔をあけて並んでいる。２棟が１単位となる小規模な集落が６世紀中葉も営まれていたといえる。

百間川原尾島遺跡（図264－２）（柳瀬1996）

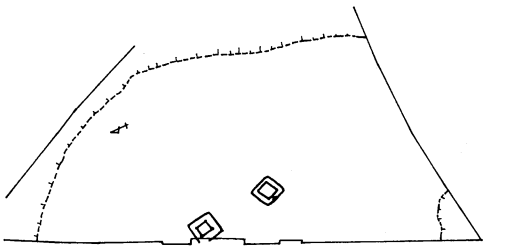
６世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。しかし、５世紀後半～６世紀初頭には複数の竪穴住居のまとまる単位が７単位も認められる中規模集落であったが、６世紀中葉には２軒だけとなる。東側に隣接する微高地にも竪穴住居が認められるが、それも１軒だけで、全体的に小規模で散在的な様相を呈する。

斎富遺跡（図264－３）（下澤ほか1996）

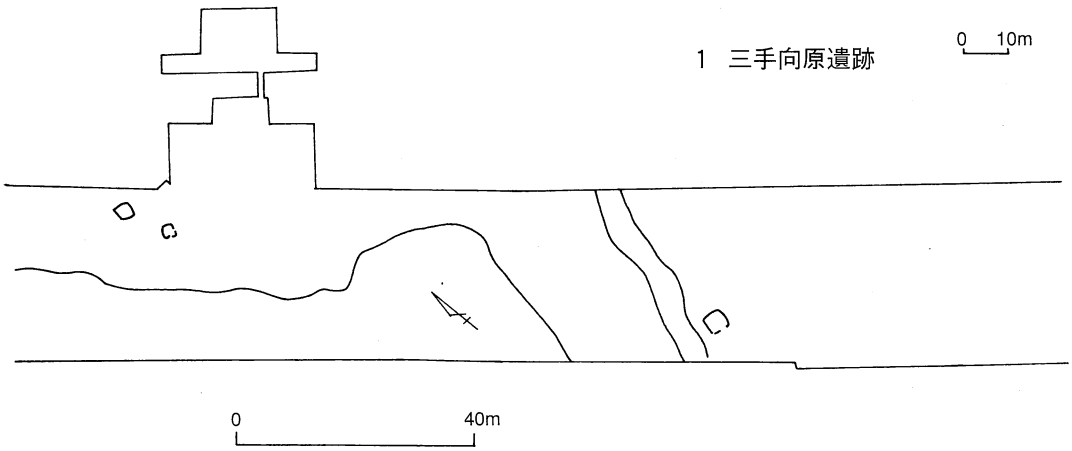
６世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。２軒前後がまとまる単位が３単位認められる。全体として中規模程度の集落であるが、単位内の竪穴住居には重複するものがある。竪穴住居のほかに掘立柱建物も認められる。竪穴住居と同様に２棟並んで１つの単位を構成しているものもある。また竪穴住居の単位に付属すると思われるものもある。しかし、６世紀後葉にも竪穴住居が認められ、また当地におけるほかの遺跡でも６世紀後葉までは竪穴住居主体で集落が構成されていることから、斎富遺跡の様相は、竪穴住居から掘立柱建物へ変換する過渡的様相とはいえない。この時期には陶質土器・陶質系土器や算盤玉形土製紡錘車などの朝鮮半島系の遺物が多く認められることから、集落内に渡来人が存在していたと考えられ、掘立柱建物もそれと関係する可能性が推測される。

窪木薬師遺跡（図264－４）（島崎ほか1993）

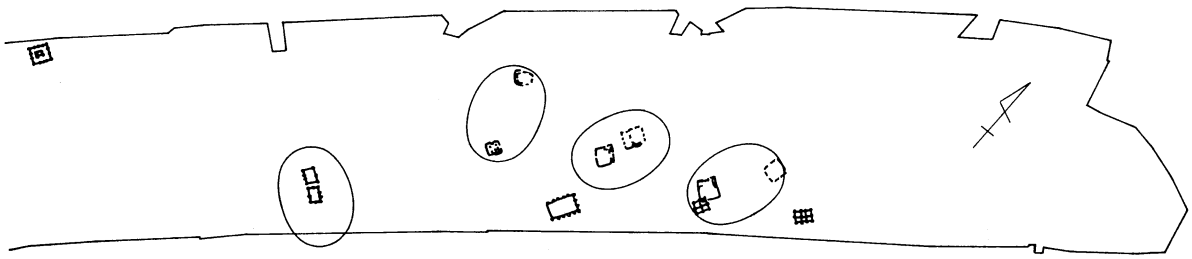
総社市窪木薬師の中・小河川である前川北岸の平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。弥生時代後期前半から中世までの集落遺跡であるが、５世紀前半～６世紀後葉には、鉄鋌や鍛冶滓などの鍛冶関係遺物や遺構が認められることから、鉄器製作集団の集落と考えられている。６世紀中葉の竪穴住居は13軒で、竪穴住居の上面が削平された結果と考えられる１間×１間の掘立柱建物も含めると17軒となる。４～６軒の竪穴住居がまとまって１つの単位となり、そういった単位が５単位ある。ただし、同じ単位内の竪穴住居は重複しており、同時に存在していたのは２軒ほどと考えられる。ほとんどの竪穴住居から鉄滓が出土しており、鉄器製作に必要な木炭を焼成したと考えられる窯も伴っている。



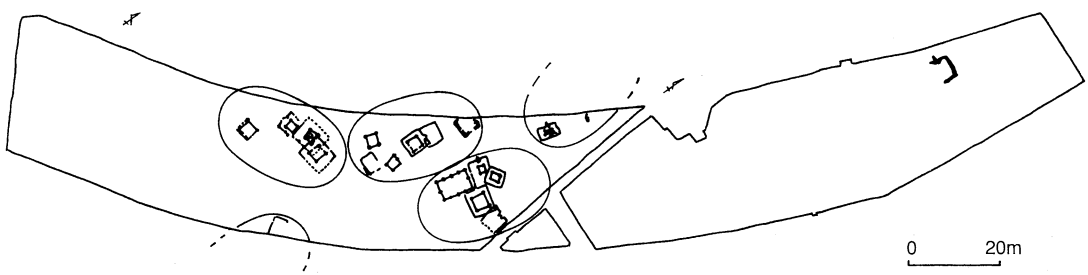
1　三手向原遺跡



2　百間川原尾島遺跡



3　斎富遺跡



4　窪木薬師遺跡

図264　6世紀中葉の集落

6世紀中葉における集落は、竪穴住居1軒が集落の基本的な単位である正善庵遺跡や百間川原尾島遺跡と、2軒が1つの単位となる三手向原遺跡や斎富遺跡、3軒以上が1つの単位をなす窪木薬師遺跡がある。竪穴住居の集積状況から、正善庵遺跡、百間川原尾島遺跡はA型、三手向原遺跡、斎富遺跡はB－1型といえる。窪木薬師遺跡は、複数の竪穴住居がいくつか集まった単位の集積によって集落が構成されているが、5世紀前半～6世紀初頭の集落とは異なり、単位内の竪穴住居が重複している。これは、個々の単位がほとんど同じ位置で建て替えを行ったことを示しており、1つの単位の安定性が増したことを示唆している。このような様相は6世紀後葉の集落になるとより顕著で、窪木薬師遺跡はその先駆的形態といえる。このような単位をC型とする。3軒以上の多くの竪穴住居が構成されるB－2型の発展した形態と考えられる。窪木薬師遺跡からは焼土壙や鉄滓などの鉄・鉄器生産に関する遺構や遺物が出土していることから、鉄・鉄器生産とC型の関係が推測させられる。いずれにせよ、6世紀中葉はC型の出現という画期が指摘される。

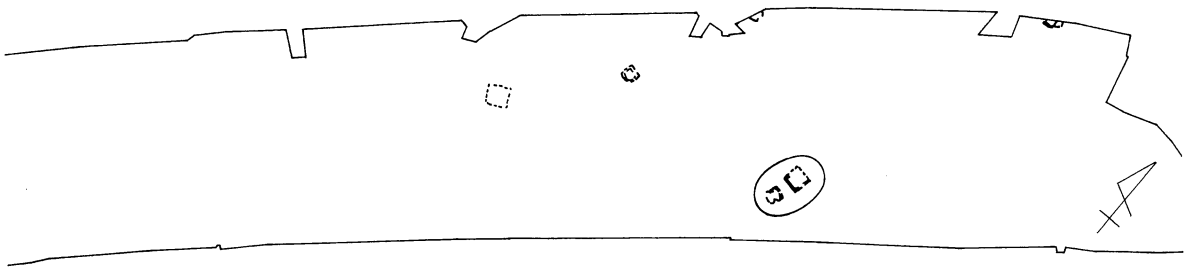
3．6世紀後葉～7世紀初頭の集落

斎富遺跡（図265－1）（下澤ほか1996）

6世紀中葉に続いて竪穴住居が認められる。2～3軒が1つにまとまる単位が3単位認められる。竪穴住居の分布は6世紀中葉とほとんど変わらない。一方、6世紀後葉～7世紀の掘立柱建物は側柱建物と総柱建物で29棟ある。数棟の建物がまとまる単位が4～5単位認められる。それらの分布をみると、掘立柱建物のまとまる単位は竪穴住居がまとまる単位の位置と重なる。掘立柱建物と竪穴住居が並存していたのか、それとも時期差があるのかを判断することは難しい。しかし掘立柱建物は個々の小単位を越えて方向を合わせる、いわば集落全体を規定するような方向性によって分布しているが、竪穴住居には同じ単位内でも共通した方向性は認められず、整然と並ぶ掘立柱建物の様相とは対称的である。また、調査区中央付近の掘立柱建物群と竪穴住居とが極めて近接しており、両者の同時存在は不可能である。6世紀後葉の竪穴住居のまとまる単位の位置を継承しながら、6世紀末～7世紀前半の集落は掘立柱建物に変化し、しかも建物相互には方向を合わせる規定ができたと考える方が妥当と思われる。斎富遺跡では、6世紀中葉には竪穴住居と掘立柱建物がある程度並存する景観を想定した。しかしながら、6世紀後葉ではその景観は解消された可能性が高い。6世紀中葉には朝鮮半島系の遺物が多く認められることから、該期の掘立柱建物と渡来人との関係を推定したが、6世紀後葉になると朝鮮半島系の遺物が全く認められなくなる。このことは渡来人との関係がなくなったか、もしくは薄まったことを示している。そのため、集落も竪穴住居主体の一般的な集落景観になったと考えられる。

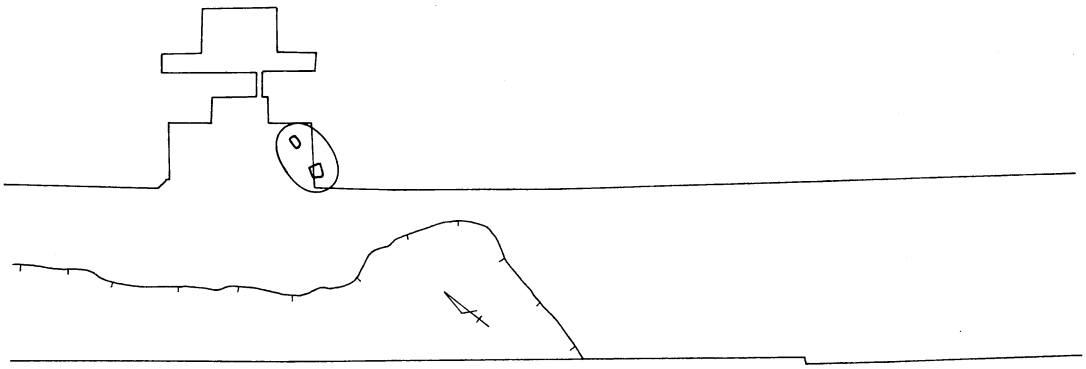
百間川原尾島遺跡（図265－2）（柳瀬ほか1996）

6世紀中葉に続いて竪穴住居が認められるが、6世紀後葉は2軒のみで6世紀中葉と同様の様相を呈する。しかし6世紀末～7世紀初頭については、竪穴住居が6軒となり、数軒の竪穴住居がまとまる単位も認められる。しかし全体としては遺構が少なく、それほど大きな集落とはいえない。一方7世紀になると掘立柱建物も数多く認められ、建物の軸線方向を指標にすると、同じ軸線方向を共有する建物群が3～4単位あり、それぞれ1単位が3～4棟の建物で構成されている。軸線方向が若干異なる建物には極めて近接しているものもあることから、両者の同時存在は難しく、単位

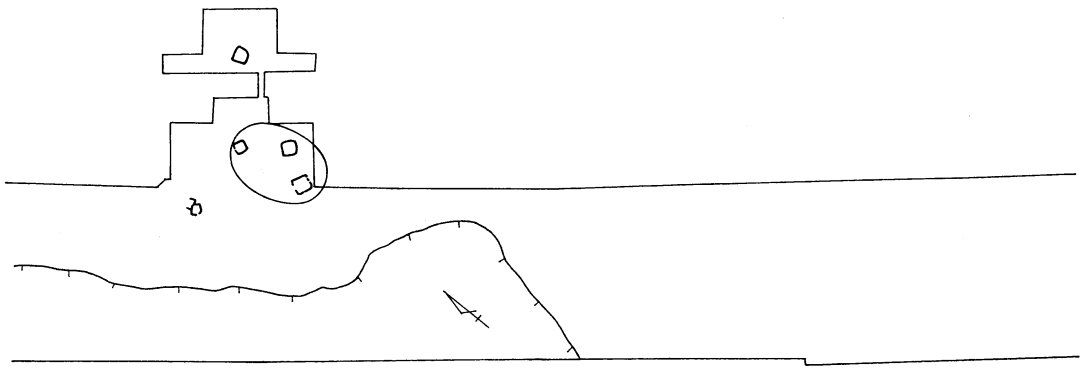


1　斎富遺跡

0　50m



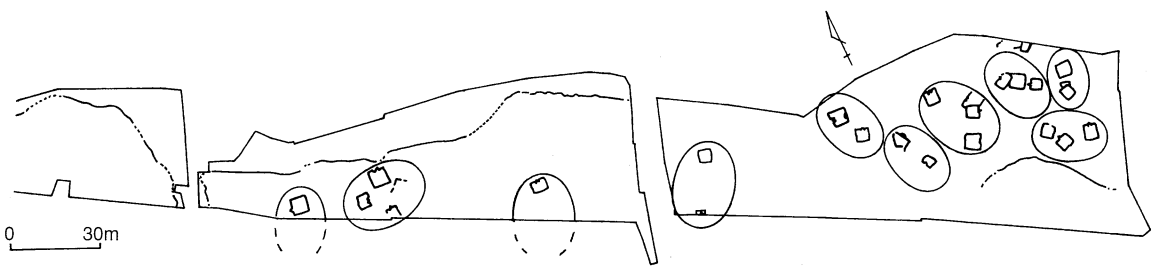
6 世紀後半



7 世紀初頭

0　40m

2　百間川原尾島遺跡



0　30m

3　高塚遺跡

図265　6 世紀後葉～7 世紀初頭の集落(1)

の違いは時期差を示している可能性が高い。竪穴住居と掘立柱建物との関係については、近接していて同時存在が不可能な竪穴住居と掘立柱建物が認められる。それは該期の竪穴住居6軒のうち2軒までがそうである。また、建物の軸線方向を合わせ、整然と並ぶ掘立柱建物群と、緩やかにまとまって1つの単位を構成する竪穴住居とは、景観的にも対称的である。以上の点から、竪穴住居と掘立柱建物の並存関係で集落が構成されていたと考えることは難しいように思われる。ただし8世紀における事例であるが、津山市一貫西遺跡(行田1990)の場合、掘立柱建物主体の集落に竪穴住居状の遺構が付属している。したがって該期の百間川原尾島遺跡も同様に、掘立柱建物主体の集落に単発的に竪穴住居が付属するという関係が考えられる。

高塚遺跡（図265－3）（弘田ほか2000）

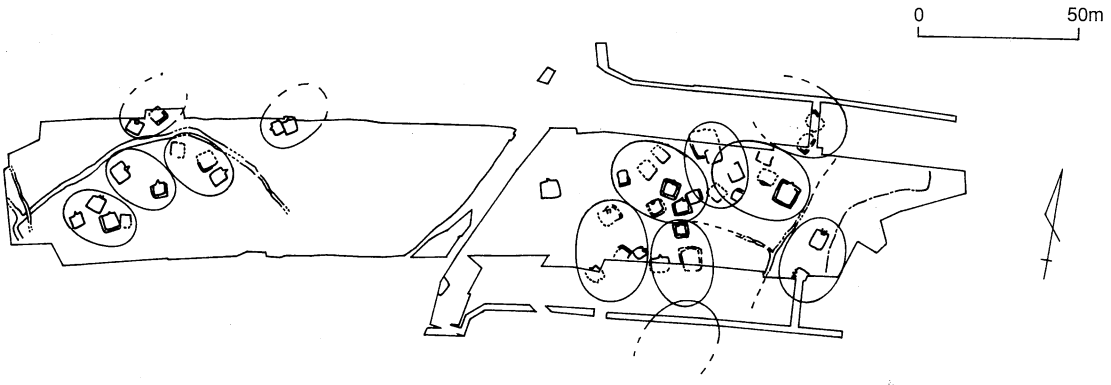
5世紀～6世紀初頭に続いて竪穴住居が認められるが、数は半分以下に減っている。竪穴住居は3～4軒以上で構成される単位と竪穴住居1軒のみの単位があり、前者も単位内で重複が認められるものと認められないものがある。重複の認められる単位は、調査区東側に集中しており、5世紀～6世紀初頭においても同様の位置に竪穴住居が集中していた。ただし、鉄滓が出土する竪穴住居は調査区西側にも認められ、集落全体で、鉄・鉄器生産を行っている様相といえる。

加茂政所遺跡（図266－4）（柴田ほか1999）

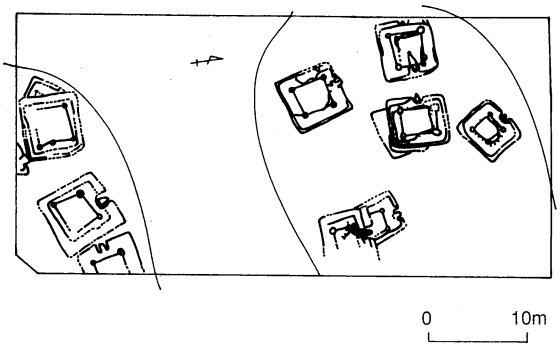
6世紀初頭に続いて竪穴住居が認められる。以前には住居が確認されなかった低位部へも認められるようになり、全体の住居数も増加していることから、集落が著しく拡大したといえる。3～8軒ほどの竪穴住居がまとまって1つの単位を形成しているものと、1軒のみで1つの単位を形成しているものとがある。また整然としたものではないが、竪穴住居群を区画するためと推測される溝もある。区画の範囲については、溝が完存していないため明確でない。ただし遺構密度の薄い調査区西側でも、竪穴住居群を囲む溝が検出されている。そこでは、竪穴住居がまとまる単位を3単位ほど囲っている。また、単位内の竪穴住居は重複していたり、接していたりするものが少なくない。同じ位置に竪穴住居が連綿と建て替えられた結果と考えられ、より1つの単位が安定してきていることを示しているといえる。鉄滓を出土した竪穴住居もあり、焼成土壙や鍛冶炉も伴っていることから、鉄・鉄器生産も行っていた集落といえる。

津寺遺跡（図266－6）（中野ほか1998、亀山ほか1997）

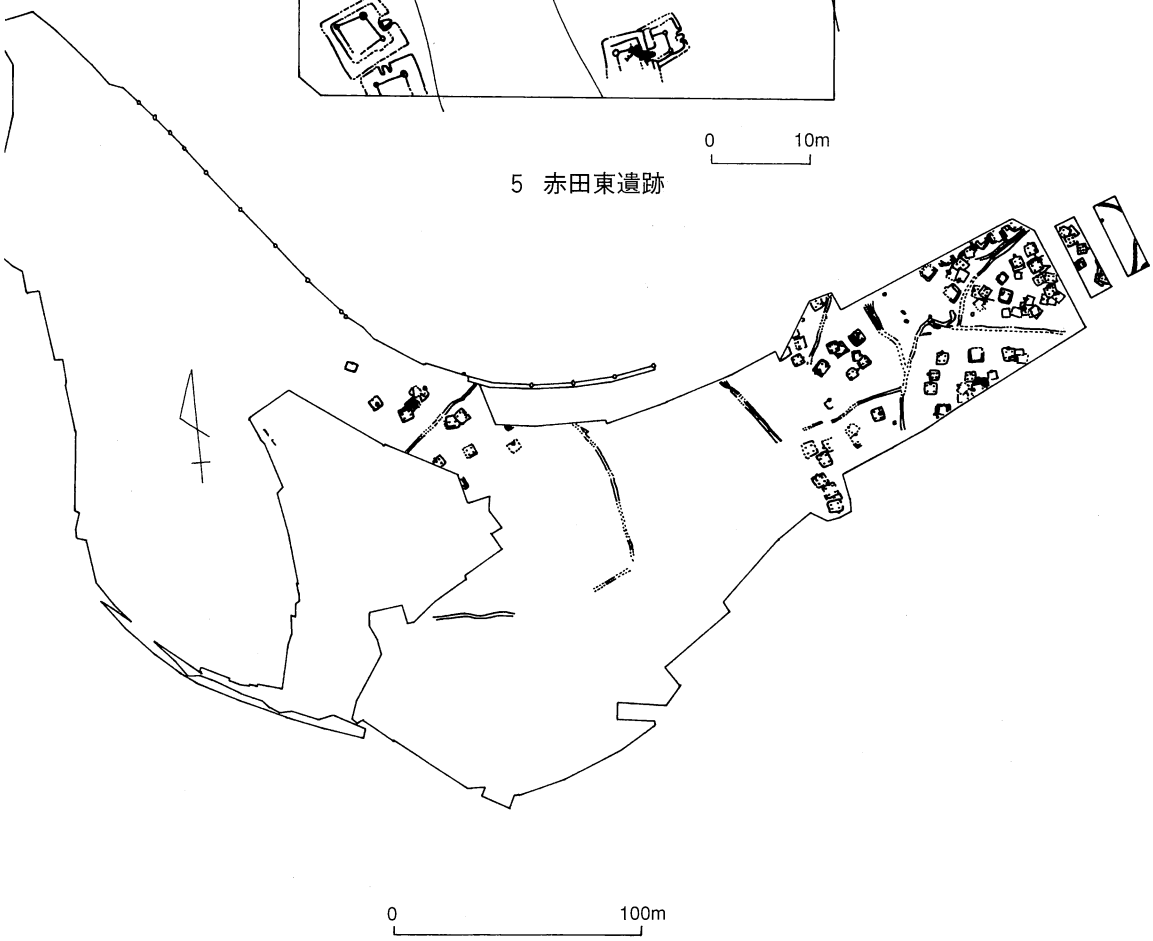
5世紀～6世紀初頭にかけて大規模な集落が形成されていたが、6世紀中葉に遺構の空白期がある。しかし、6世紀後葉～7世紀初頭にかけて数多くの竪穴住居が認められるようになる。ただ5世紀～6世紀初頭までとは異なり、集落の中心は微高地高位部よりも低位部に移る。しかも竪穴住居が重複し、密集した状況で検出される。さらに竪穴住居群を小溝によって区画している。溝で画される範囲は大体100m四方ほどの範囲であるが、この溝は8世紀以降の官衙遺跡のように整然とした方向性は有していない。竪穴住居のほかに掘立柱建物もあるが、溝で画された竪穴住居群個々に伴っている様相でもない。鉄滓や焼成土壙も多数存在していることから、集落内で鉄・鉄器生産が行われていたと考えられる。



4　加茂政所遺跡



5　赤田東遺跡



6　津寺遺跡

図266　6 世紀後葉～ 7 世紀初頭の集落(2)

6世紀後葉～7世紀初頭の集落の特徴は、1つの単位内の竪穴住居が重複するC型がかなり認められるようになることで、いずれも鉄滓などの鉄・鉄器生産関連の遺物や遺構が出土している。さらに津寺遺跡や加茂政所遺跡では、竪穴住居群をいくつかまとめて囲む溝が認められる。これをD型とする。1つの単位の占有空間を明確に区画していることや、複数の単位がまとまっていることから、C型がさらに発展した形態と考えられる。

4．5世紀前半～7世紀初頭の集落形態

5世紀前半～7世紀初頭における吉備地域の集落遺跡を概観した。掘立柱建物も認められるが、竪穴住居が主体である。また竪穴住居が数軒の小規模な集落から、数十軒もある大規模なものまで様々な規模のものがある。それらは竪穴住居1軒、もしくは数軒がまとまる単位によって構成されているが、その単位はいくつかの型に分類できる(図267)。まず最もシンプルな単位は竪穴住居1軒である。これをA型とする。竪穴住居が2～4軒がまとまって1つの単位を形成しているものをB型とする。B型は竪穴住居2軒のものをB－1型、3軒以上のものをB－2型とする。大規模な集落にはB－2型が認められる。竪穴住居がまとまっていることについてはB型と共通するが、単位内で重複しているものをC型とする。同じ位置で重複することは、その単位がより安定してきていることを示している。C型をいくつかまとめて溝で囲ったものをD型とする。

この指標にしたがって各期の集落を分類してみると、5世紀前半～6世紀初頭の集落は、A型が集落の基礎単位となるものが多い。実例としては正善庵遺跡、5世紀前半の百間川原尾島遺跡、5世紀前半の斎富遺跡などで、これをⅠ類の集落とする。A型が主体で若干B型が認められるのは谷尻遺跡で、これをⅡ類の集落とする。B型によって構成されるものは、高塚遺跡、5世紀後半～6世紀初頭の斎富遺跡、5世紀後半～6世紀初頭の百間川原尾島遺跡、津寺遺跡、三手向原遺跡で、これをⅢ類の集落とする。Ⅲ類の集落は数十軒の竪穴住居があり、直径250mの範囲に広がる津寺遺跡のような大規模集落から、4軒ほどの竪穴住居で直径60mほどの範囲の三手向原遺跡のような小規模なものまである。また高塚遺跡は5世紀前半と5世紀後半～6世紀初頭の2時期にわたって集落が営まれているが、5世紀前半は調査区全体に竪穴住居が認められるものの、5世紀後半～6世紀初頭には調査区の東側に偏る傾向が認められる。しかも、集中する地点の単位をみてみると、竪穴住居4軒で構成されるB－2型が多い。さらにその地点からは鉄・鉄器生産関連の遺物が多数出土している。B－1型と比べ、B－2型の方が有力な単位であると考えられることから、5世紀後半～6世紀初頭には集落内において単位間の格差が顕著になってきているといえる。そのような状況

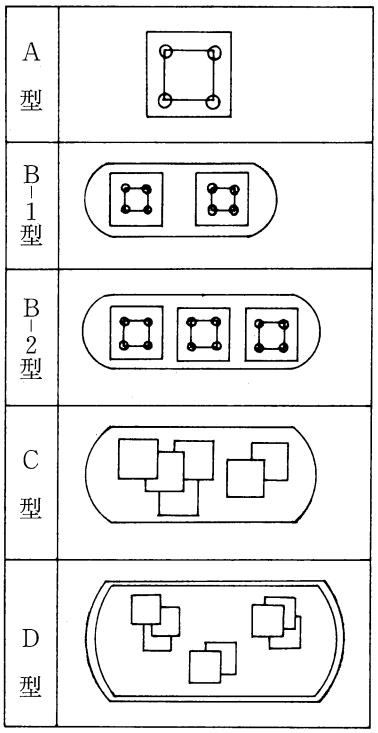


図267　5世紀前半～7世紀初頭の集落形態

の生じた要因として、鉄・鉄器生産との関係がうかがわれる。

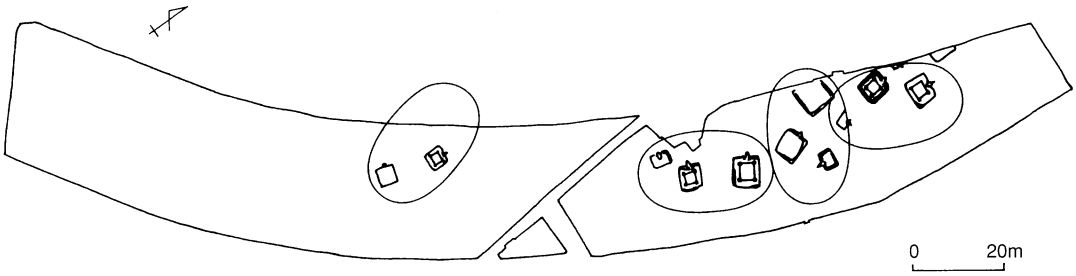
6世紀中葉の集落例はそれほど多いとはいえないが、Ⅰ類の正善庵遺跡や百間川原尾島遺跡、Ⅱ類の三手向原遺跡や斎富遺跡のほかに、C型が認められる窪木薬師遺跡がある。これをⅣ類の集落とする。Ⅳ類の集落からは鉄・鉄器生産関連の遺物や遺構がかなり出土しており、さらに掘立柱建物が付属する単位も認められるようになる。同一地点での竪穴住居の重複は、その単位がかなり安定してきたことを示している。Ⅳ類の集落の出現は、古墳時代の集落変遷上の1つの画期といえる。そして窪木薬師遺跡の様相は、それが鉄・鉄器生産と極めて密接な関係があったことを示している。ただしその萌芽は高塚遺跡の例から、5世紀後半には認められる。

6世紀後葉～7世紀初頭の集落は、Ⅱ類の斎富遺跡、Ⅲ類の百間川原尾島遺跡、Ⅳ類の高塚遺跡、赤田東遺跡のほかに、D型の認められる加茂政所遺跡や津寺遺跡がある。加茂政所遺跡や津寺遺跡をⅤ類の集落とする。溝で区画された内部の構成については、加茂政所遺跡の場合、やや遺構が少ない部分があり、そこには1つの区画内に竪穴住居がまとまる単位が3単位認められる。津寺遺跡の溝で区画される範囲については、大体100m四方程度と考えられる。この範囲は竪穴住居2～4軒で構成される単位の占有範囲からすると、かなり広い。この点からも区画されたのは1つの単位ではなく、いくつかの単位をまとめて溝で区画していたことがうかがわれる。いずれにせよ、同一単位内で竪穴住居が重複するⅣ・Ⅴ類の集落は、集落を構成する単位が安定していることから、集落自体の規模も大きい。

つまり5世紀～7世紀初頭における竪穴住居主体の集落は、集落を構成する単位の形態によってⅠ～Ⅴ類に分けられるが、それは単位の拡大と固定化の段階を示しており、より固定化を指向する単位が時期が下るごとに出現してきているといえる。ただし6世紀後葉～7世紀初頭の集落例をみてもわかるように、様々な形態の集落があることから、集落個々をみると多様である。また当地の集落の安定と拡大には、集落内における鉄・鉄器生産が不可分に結びついていることも指摘される。

5．一般集落と専業集落

当地域の6世紀以降の集落では、鉄・鉄器生産に関わるようになった集落が安定的に大規模な集落を形成していることを指摘した。それは具体的には同地点での竪穴住居の繁茂な建て替えによって示されているとした。6世紀後葉になると、竪穴住居数軒の小規模な集落からも鉄滓などの鉄・鉄器生産に関わる遺物が出土するようになる。花田浩氏はこれらの集落を鉄・鉄器生産に関わる度合いからA～C類に分けた(花田1996)。そのうち鍛冶炉を持つ工房や屋外炉を中心とした建物配置が認められ、多量の鉄滓にフイゴ羽口、砥石、鍛造剥片が検出される集落を専門工人の専業集落としている。6世紀後葉～末の窪木薬師遺跡がその例とされる。窪木薬師遺跡は6世紀中葉に鉄・鉄器生産の拡大とともに、竪穴住居が同地点で重複する安定的な集落を形成している。6世紀後葉～末になると、多量に鉄滓などの遺物が出土することから、鉄・鉄器生産が飛躍的に拡大したと考えられる。一方、6世紀後葉～末の集落は、竪穴住居と掘立柱建物で構成されている(図268)。掘立柱建物と竪穴住居の関係については明確でない点も多いが、掘立柱建物が竪穴住居よりも高燥な地点を意識して立地しており、また竪穴住居とは重複しないことから同時存在で、しかも竪穴住居とは異なった立場、あるいは異なった階層の住居であったと考えられる。総柱建物の倉庫を有していることからも、竪穴住居よりも上位の住居といえる。ただ、掘立柱建物の方位が2方向あることから、



窪木薬師遺跡

図268　鉄・鉄器生産関連集落

若干異なる時期の建物群であることも推測される。竪穴住居の分布についてみると、6世紀中葉とは様相が異なっている。一辺が6mほどの中形住居が2軒と4m×1.5mほどの小型の住居1軒がセットとなって1つの単位を形成している。そして同じ単位内の竪穴住居はカマドの方向を合わせたり、あるいは直交にするなど相互に意識して配置されていることがうかがわれる。ただ平面的にみると、近接しすぎている単位があり、検出された竪穴住居は全て同時存在とはいえない。3軒ほどの竪穴住居がセットとなる単位を位置をずらしながら建て替えた結果と考えられる。ただし、同じ単位内では住居の重複は認められない。6世紀中葉の場合は、同じ単位内の竪穴住居には重複が認められる。そうすると竪穴住居のあり方だけをみると、6世紀後葉～末は、6世紀中葉よりも集落内の単位の安定度が後退しているといえる。

窪木薬師遺跡よりも小規模ではあるが、6世紀後葉～7世紀初頭の鉄・鉄器生産と関係が深いとされる集落が県北の山間部を中心に調査されている。鉄鉱石や砂鉄を製錬するだけと考えられる遺跡では、製錬炉や炭窯は検出されるものの、それを操業していた集落は認められない。これは県南部でも同様で、次の工程である精錬鍛冶や鍛錬鍛冶を行っている場合には集落が認められる。製錬遺跡の調査例は30例を越えており、この様相はある程度普遍的と理解される。津山市大畑遺跡は鉄・鉄器生産を行っていた集落の全容がわかった調査例で、竪穴住居2軒、カマドを伴わない作業場的な竪穴住居状遺構が3軒、薪などをおく物置と推測される段状遺構が2棟で構成される(行田ほか1993)。付近には製錬炉とセットになる八ツ目うなぎと通称される炭窯もあることから、製錬→精錬鍛冶あるいは鉄器製作までを一貫しておこなっていた集落と考えられる。同様の集落例としては津山市深田河内遺跡(保田ほか1988)、大開遺跡(平岡1994) などがある。

このような単位が多数集まった集落としては、津山市狐塚遺跡(河本1974)がある。ただし狐塚遺跡ではカマドを付属する竪穴住居は認められず、作業場的な竪穴住居状遺構と段状遺構がセットとなる単位によって構成されている。しかも遺物の構成から、精錬鍛冶から鍛錬鍛冶の各工程を地点ごとに分担していたと考えられている。住居である竪穴住居が認められない点や生産工程が整然としていることから、狐塚遺跡は集落というよりも、工房と考えた方がよい。ただ、今のところ工房については狐塚遺跡以外には同様の例が見当たらないため、より数例の増加を待って検討していく必要がある。窪木薬師遺跡の6世紀末の集落は、基本的にはカマドを持つ竪穴住居2～3軒の単位の集積で構成されていることから、大畑遺跡のような集落がいくつかまとまって集落を形成していたと考えられる。大畑遺跡のような山間部で製錬や鍛冶をおこなっている集落は、住居の重複もあまり認められないことから、比較的短期間のうちに集落地をかえていると考えられる。それは鉄・

鉄器生産によって周辺の燃料を取り尽くしたということが基本的な理由であろうが、一方でそのような不安定な集落の鉄・鉄器生産を支える保障が存在していたことも示唆している。窪木薬師遺跡の6世紀後葉～末の鉄・鉄器生産の飛躍的な拡大も同様に考えられる。それは集落内の単位の様相が6世紀中葉に比べると継続的でないことから、その保障は集落内の各単位の自立性を喪失する方向のもので、いわゆる従属的な関係の成立によって生産が拡大したと推測される。したがって、県北山間部の鉄・鉄器生産関連の集落が単発的であることも、燃料の枯渇といった現象面からの理由だけでなく、従属的な関係のもとで鉄・鉄器生産を行っていたことを示していると考えられる。

つまり、6世紀後葉～末になると従属的に鉄・鉄器生産を行う集落があらわれる。その集落はそれまでの集落と比べると、飛躍的に鉄・鉄器生産を行う反面、集落そのものの自立性や安定性は低くなる。生産効率のみを優先させた鉄・鉄器生産としては、一般集落の基本となる竪穴住居を欠落させた遺構のみで構成される、いわゆる工房といえるものであると考えられる。今のところ狐塚遺跡の1例だけであるが、当地においては、6世紀末～7世紀初頭には存在した可能性が高い。これは国衙工房などの系譜につながるものと考えられる。いずれにせよ6世紀後葉～7世紀初頭の集落には、大規模な集落であっても、その内部における竪穴住居の様相から一般的な集落と従属的な集落を分類することが可能であるし、見掛け上の遺構の多さで両者を混同してはならない。次に7世紀の集落についてみてみたい。

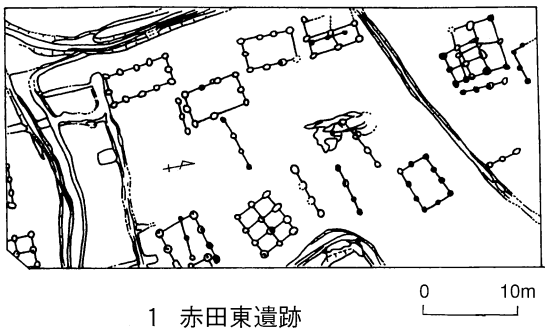
6．7世紀前葉の集落

百間川原尾島遺跡（図269－2）（平井ほか1994）

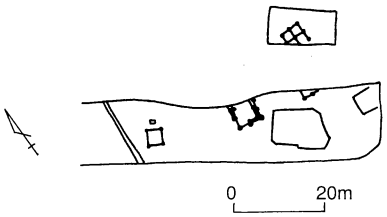
7世紀前葉の竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。しかし、6軒の竪穴住居のうち、2軒は掘立柱建物と近接しすぎることや、ほかの3軒はまとまって6世紀後葉の集落のように1つの単位を形成していることなどから、建物方向を合わせて整然と並ぶ掘立柱建物と竪穴住居が並存して集落を形成していた可能性は少ない。7世紀前葉のある段階で、掘立柱建物主体の集落に変化したといえる。建物は方位によって3群ほどに分けられる。また同一方位の建物群を囲んでいる区画溝もある。最も広く調査された区画についてみると、側柱建物4～5棟、総柱建物1～2棟で構成されている。区画溝からは鉄滓も出土している。

斎富遺跡（図269－4）（下澤ほか1996）

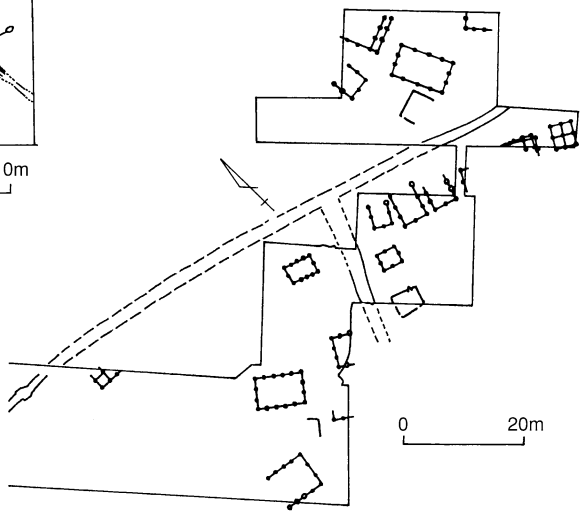
6世紀末～7世紀にかけては、掘立柱建物と竪穴住居が並存する集落に変化したとされる。6世紀後葉には竪穴住居が少なくなるが、それについては集落が縮小したのではなく、補完的に掘立柱建物が用いられたためとされる。掘立柱建物は建物の方向と柱穴の出土遺物から、6世紀後葉～7世紀初頭と7世紀前葉の2時期に分けられる。両時期ともいくつかの建物がまとまる単位が認められるが、単位を越えて建物の方向が共通していることから、全体として規則的な集落形態を呈している。6世紀後葉～7世紀前葉の建物と、6世紀後葉の竪穴住居の配置を重ねてみると、重複したり、掘立柱建物の単位と大きくずれて竪穴住居が存在していたりする。また竪穴住居の配置には掘立柱建物のような規則性はうかがわれないことからも、基本的には竪穴住居と掘立柱建物は分離されると考えられる。掘立柱建物のまとまる単位は、50m×60mほどの方形の範囲が想定される。弥生時代から中世にかけての遺構が多数重複しているため、掘立柱建物の数や種類の同定については



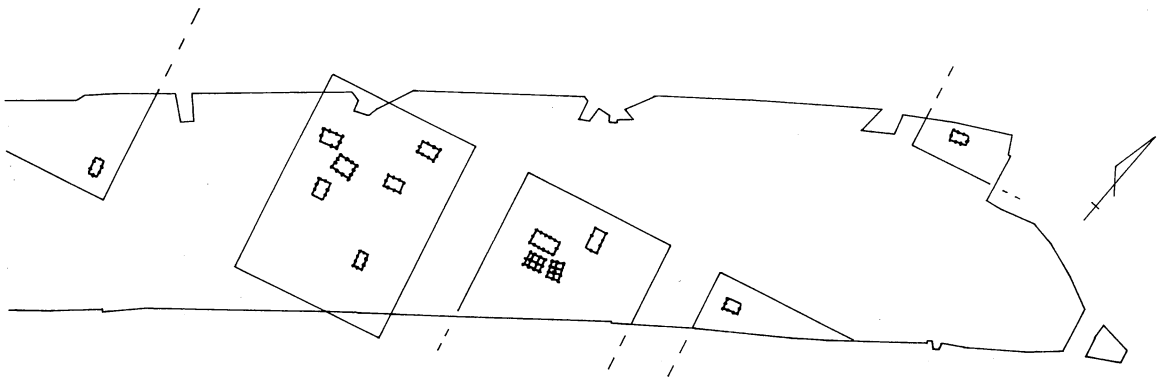
1　赤田東遺跡



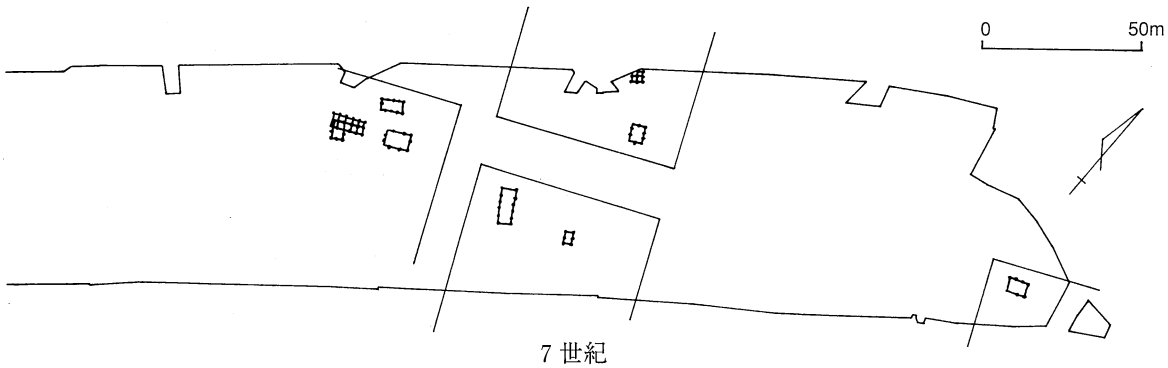
3　矢部南向遺跡



2　百間川原尾島遺跡



6 世紀後半～7 世紀前葉



7 世紀

4　斎富遺跡

図269　7 世紀前葉の集落

ある程度の幅を持たせて考えなければならないが、１単位は大体６棟前後以下の掘立柱建物で構成される。そして総柱建物を持つ単位もかなりあり、各単位にそれぞれ総柱建物が付属していた可能性が推測される。集落内や付近から鉄滓が出土しており、鉄・鉄器生産が行われていたと考えられる。

矢部南向遺跡（図269－３）（江見(ほか)1995）

倉敷市矢部の足守川中流域の平野部に位置し、旧国単位では備中国に属する。弥生時代後期後半の遺構や遺物の密度は高く、周辺地域の中心的な集落であったと考えられている。６世紀末～７世紀前葉の掘立柱建物が検出されている。掘立柱建物は２時期に分けられるが、いずれも２棟以上の側柱建物と１棟以上の総柱建物及び建物方向と方位を合わせた溝が検出されている。おそらく数棟の建物が溝によって区画されているといった景観であったと推測される。また柱穴は認められないが、床面に炉状遺構が認められる工房的な竪穴住居状遺構も伴っており、集落内で鉄・鉄器生産が行われていたと考えられる。

７世紀前葉の集落は、竪穴住居主体から掘立柱建物主体へ変化しているものが顕著となる。しかも建物相互には方位を合わせて並ぶ規則性が看取され、斎富遺跡のように集落全体の建物にも一貫した方向性が認められる例もある。また、建物数棟がまとまって方形の溝で区画されたものもある。さらに建物数棟がまとまる単位のなかには、総柱建物が含まれることが多い。

７．７世紀における集落の画期

５世紀～７世紀前葉にかけての集落の様相を整理してきた。集落の変遷の画期をより鮮明にするために、８世紀の集落の様相について触れておきたい。当地における８世紀の集落は調査例も蓄積されてきており、ある程度は集落形態を復原することができる。基本的に掘立柱建物で構成されており、付属的に竪穴住居状の建物が認められる場合があるが、その例は極めて少ない。集落の最小単位は側柱建物２棟と総柱建物１棟で構成され、それらの配置は相互に平行であったり、直交してＬ字形になったりしており規則的といえる。側柱建物２棟の総床面積は大体60㎡前後で、総柱建物の床面積は15㎡前後である。集落の最小単位のなかには側柱建物が３棟の場合もあるが、その場合、総柱建物の床面積も増える傾向が認められることから、両者の床面積には規則的な関係があったことがうかがわれる。また、側柱建物１棟に総柱建物１棟で構成される単位もあるが、その場合でも側柱建物の床面積は60㎡前後となり、側柱建物２棟の総床面積と近い。こういった側柱建物と総柱建物がセットになる単位は、複数の単位が集積した集落でも認めることができることから、単独で存在する集落の特異な形態でなく、該期の集落の最小単位の一般的な形態であるといえる。しかし、そのような集落の最小単位に倉庫と考えられる総柱建物が付属することや、建物の配置や両者の床面積に規則性が認められるのは８世紀の集落だけである。そのため、このような集落形態は律令的集落と呼称できる。そうすると、集落の最小単位に付属する倉庫については余剰物の保管といった意味ではなく、各単位に課せられた貢納物の保管という意味が強いと考えられた。つまり８世紀の集落は課税の対象として編成されたものと考えられる（草原2004）。

このような８世紀における集落のあり方は、７世紀の集落においても認めることができる。まず

倉庫についてみると、5世紀～7世紀初頭の竪穴住居が主体の集落においては基本的に認められない。岡山市の百間川兼基遺跡では、5世紀前半の総柱建物がまとまって検出されている(正岡ほか1982)。竪穴住居も検出されているが、総柱建物と重複していたり近接しすぎている。また総柱建物の数と比べると竪穴住居の数は少なすぎる。総柱建物群のみが存在していたと考えられる。6世紀中葉～後半の集落である真備町の阿知境遺跡では部分的な調査ではあるが、舌状の低丘陵の高所に竪穴住居があり総柱建物は斜面部にまとまっている(根木ほか1998)。これも竪穴住居と総柱建物が別々の空間を占地していることを示している。5世紀～7世紀初頭の集落例をみても、基本的には竪穴住居が主体、もしくは竪穴住居のみで集落が形成されている。このことから倉庫と考えられる総柱建物は別の地点にまとまって存在していたことが推測させられる。

7世紀前葉の掘立柱建物主体の集落をみると、数棟の側柱建物に総柱建物が1～2棟付属する。溝で区画された単位の大半を調査した赤田東遺跡の場合、3棟前後の側柱建物に1棟の総柱建物が認められる建物群が2つある。百間川原尾島遺跡の場合は、4～5棟の側柱建物に1棟の総柱建物が認められる。矢部南向遺跡でも数棟の側柱建物に総柱建物が1棟ある。斎富遺跡は遺構の重複がかなりあり、該期の建物全てを把握することは困難であるが、傾向としては総柱建物が1地点に集中するのではなく散在的であることから、数棟の側柱建物がまとまる単位に総柱建物が付属していた可能性が推測される。

つまり、竪穴住居主体の集落では総柱建物はどこか別の地点にまとまっているが、7世紀前葉の掘立柱建物主体の集落になると、集落内の各単位ごとに総柱建物が付属していくといえる。8世紀の集落と比べると1つの単位を構成する建物の数が多いものの、基本的な形態は共通している。単位内の建物配置も相互に規則的であり、これも8世紀の集落と共通する。8世紀における集落の基本形態は、7世紀前葉に形成されていたといえる。

8．画期の背景

集落の変遷をみる限り、課税を目的として編成されている8世紀の集落の原形が、7世紀前葉に形成されていることがわかった。8世紀の集落は、7～8棟の建物で構成されている7世紀の集落の最小単位を3～4棟で構成される単位に細分したもので、7世紀前葉からの連続的な変化の延長線にあるといえる。また竪穴住居から掘立柱建物への変化については、斎富遺跡や百間川原尾島遺跡では両者が並存しているようにも考えられているが、遺構の分布を検討した結果、並存の可能性は少ない。竪穴住居から掘立柱建物への変化は、その外観の変化だけでなく、用いられた柱などの部材が広葉樹材から針葉樹材に変化している。掘立柱建物の柱材まで残存している例は少ないが、赤田東遺跡では残存していた2点とも針葉樹材であった(藤井2003)。広葉樹材は沖積平野に形成された集落の周辺でも獲得できるが、柱などの建築部材に用いるようなまとまった量の針葉樹材はある程度遠隔地からの供給が必要であり、地域を越えた供給システムが整備されていたことがうかがわれる。7世紀後半以降は古代寺院や官衙が各地につくられ、多くの針葉樹材が必要となってくるが(木沢2002)、その先駆的な供給システムは7世紀前葉の集落において形成されていた可能性が高い。

古墳の築成についても、当地においては7世紀前葉に変化が認められる。それは前方後円墳の消滅とリンクするが、巨石を用いた巨大な横穴式石室を有する古墳が認められなくなる。一方、石室全

長が３～５ｍ前後の小型古墳については盛んに築かれており、県南部の後期古墳群を広範囲に調査した総社市の奥坂遺跡群（武田1999）や西団地内遺跡群（村上ほか1991）の様相では、むしろ７世紀前半に築造のピークを迎える。県下における横穴式石室の発掘調査されたデータを集成しても、７世紀以降にも数多く築造されている。また６世紀後葉に造墓を開始した古墳群は、７世紀も造墓活動を続けている場合が多い。この様相が県下に数多く存在する後期古墳の一般的な様相と考えてよいとするならば、７世紀以降は巨大な古墳の造墓主体者は断絶したり、規模を大幅に縮小させるが、小型古墳の造墓主体者の変化はあまりなかったということがいえる。

古墳の造墓主体者と集落遺跡を直接対応させることは難しいが、６世紀後葉～７世紀にかけての小型古墳と、該期の集落の比較から検討してみたい。６世紀後葉の集落のうち、最も安定しているのは同じ地点で重複する竪穴住居が認められ、なおかつ２～３単位の竪穴住居群をまとめて溝で囲った単位によって構成されるＶ類の集落である。７世紀前葉における掘立柱建物主体の集落は、溝で区画された掘立柱建物群の集積で構成されており、区画内の建物群はさらに２～３単位に分けられる。Ｖ類の集落と７世紀における掘立柱建物主体の集落は、住居形式や住居の配置のあり方は異なっているが、基本的な構成は共通する。赤田東遺跡では、６世紀後葉の竪穴住居のまとまる単位が、7世紀前葉には整然とした掘立柱建物群へ変化しており、単位の位置もほぼ踏襲されている。竪穴住居主体の集落が、掘立柱建物主体の集落へそのまま移行した例といえる。６世紀後葉～７世紀にかけての小型古墳の造墓活動も継続的に行われていることから、竪穴住居のまとまる単位を溝で囲った単位と、掘立柱建物群を溝で区画した単位は、小型古墳の造墓主体者に対応する可能性が高いように思われる。Ｖ類の集落が認められるようになる６世紀後葉から後期古墳が爆発的に築かれ、しかも墳丘を接して連続して築かれている後期古墳群の景観は、Ｖ類の集落の景観とも対応するようにみえる。竪穴住居１軒は、それが集落の基本的な単位である場合もあることから、血縁関係の最小単位である家族に対応すると考えられる。すると、竪穴住居群はいくつかの家族を合成した複合家族ということになる。Ｖ類の集落の基本単位とは、さらにそれを２～３単位まとめて溝で囲ったものである。これは、小型古墳を築造するための基本的な労働力に相当すると考えても矛盾しないと思われる。

６世紀後葉は、鉄鏃についても吉備独自の地域性が認められる（尾上1993）。このことを鉄・鉄器生産が在地の首長層に掌握されていたことの反映と解釈すると、重複のない竪穴住居の集積である６世紀後葉の窪木薬師遺跡は、鉄・鉄器生産をかなり集中して行っているものの、該期に巨石墳を築造し得るような有力な首長層に従属していた可能性が高いということになる。６世紀後葉の首長居館は当地域では未検出であり、実態としては不明であるが、該期には自立的で安定した集落と従属的で手工業生産を専業的に行う集落といった二者が並存していたということになる。実際には様々な集落形態があることから、両者の中間的な性格を持つ集落などもあったと考えられる。また鉄・鉄器生産についても、多量に生産を行っているものから、小規模な生産を行っているものまである。しかも岡山市吉野口遺跡のように、製錬系鉄塊系遺物の小割りと精錬鍛冶までの限定された工程のみを行っている集落もある（大道2001）ことから、鉄・鉄器生産への関わり方も多様であったことがうかがわれる。いずれにせよ６世紀後葉の集落は、自立的であれ、従属的であれ、５世紀前半からの集落形態の延長線上で理解されることから、基本的には在地の秩序によって存在していたといえる。

ところが7世紀前葉の集落は、最も安定的に発展した6世紀後葉の自立的集落と同様に、いくつかの住居がまとまった単位で構成されているものの、その形態は規則的であり、集落全体にもその規則性が貫徹されている。掘立柱建物をつくるための針葉樹材の確保には、遠隔地からの供給システムが必要であると考えられることからも、汎地域的な規定が存在したと考えられ、掘立柱建物主体の集落への変化は、集落外はもとより地域外の作用によって行われたといえる。7世紀における群集墳が極めて整然と造墓活動が行われていることから、戸籍的な意味を持ち、それが推古朝による規制を示しているという考えがある(水野1969)。これは、7世紀における当地域の集落の変化とも合致している。

古墳の規制は、既存の造墓集団に対してだけ行われたのではない。倉敷市菅生小学校裏山遺跡では製鉄に関係する炭窯とともに、7世紀前葉の古墳が2基築かれている(中野ほか1993)。また、総社市林崎遺跡では丘陵裾部に6世紀後葉以降の集落があり、背後の丘陵部には炭窯や製鉄炉と小型古墳が1基存在する(武田1999)。竪穴住居の床面には鍛冶炉を伴うものがあり、製錬と鍛冶を一体として行う作業が存在していたといえる。ただし、集落が形成されているのは丘陵裾部の狭小な河岸段丘上であり、それほど大きな集落は形成できない。そのため、古墳は7世紀代の小型古墳が1基だけということなのであろう。奥坂遺跡群や西団地遺跡群の場合、造墓活動が7世紀前半にピークを迎えることも、7世紀に造墓する集団が増加したことを示している。つまり、それは既存の自立的集落を規制のなかに取り込むと同時に、それまで古墳を築き得なかった、言い換えれば自立的でなかった集落も自立的な集落と同様のレベルに編成して取り込んだことを示している。菅生小学校裏山遺跡や林崎遺跡は、そのような集落に相当すると考えられる。県北部の久米町稼山遺跡群でも、多数の後期古墳と製鉄遺構が発掘調査されている。しかし、それらを統轄する有力豪族の墓域が認められないことが指摘されている(村上1980)。稼山遺跡群も7世紀以降の造墓が多い。このことは、県北部でも県南部と近い様相であったことを示している。自立的でない集落、言い換えれば従属的集落を畿内政権の規制に取り込むことは、その上位に存在した在地の首長層の基盤を崩すことである。そのため7世紀になると、6世紀後葉のような巨大な古墳を築けなくなった現象へつながると考えられる。

古墳時代における畿内政権と地方との関係は、鏡や甲冑の配布にみられるように、地方においてある程度の古墳を築くことのできる首長層との間で成立していた。中期中葉には一時的により下位層までその関係が及んでいたが(豊島2000)、後期における装飾付太刀の分布をみても(新納1983)、6世紀後葉まではある程度の階層までであった。ところが、7世紀における集落の変化や小型古墳の増加は、末端までに直接的な関係が成立してきたことを示している。

吉備地域においてそのような関係が成立したことの契機として想起されるのは、6世紀中葉～後葉にかけて行われた白猪屯倉の設定である。屯倉とは畿内政権の直轄地で、地方における政治的軍事的拠点とされる。そして屯倉には田地が伴うかどうか、またその田地は在地首長が提供するものと畿内政権自らが開発したものといったことをメルクマールとして、いくつかのタイプに分類できることが指摘されている(舘野1978)。白猪屯倉は、吉備における鉄の生産地をおさえる目的で設定された(弥永1956)といわれてきたが、『日本書紀』の内容からは水田農耕に関する「田部」の編成についての記述しか見いだせないことや、屯倉の名称である「白猪」が農耕予祝祭につながるといったことから、畿内政権が直接行う田地の開発に関する屯倉であったとされる(狩野2001)。白猪屯倉

が、鉄生産に関わる屯倉といった見解の根拠は、美作国大庭郡に白猪臣がいることであり、美作国が古代において鉄生産が盛んであったことによっている。しかし、平城宮木簡から備前国邑久郡と同国児島郡にも白猪を名乗るものが認められることから、白猪の名称は白猪屯倉を美作国に限定する根拠にはなり得ない。『日本書紀』の記述を素直に解釈すると、田地開発のための屯倉であったとすることが妥当と考えられる。

田地の開発は、各集落と身近に関わることであり、そのため屯倉が設定された地点やその周辺はもとより、屯倉を窓口として各集落と畿内政権との直接的な関係が成立しやすくなったのではなかろうか。欽明16年(555)～敏達12年(583)にかけて、白猪屯倉に関する記事が7ヶ所も認められるが、7世紀になると認められなくなる。このことは屯倉の経営が軌道に乗ったことを示唆しているとも考えられ、それが7世紀における吉備地域の集落の変化に反映されているのではないかと推測されるのである。

9．まとめ

5世紀～7世紀にかけての吉備地域における集落の変遷をみてきたが、6世紀後葉、もしくは7世紀初頭までは、在地における段階的な変遷によって理解できた。しかし、7世紀前葉に住居型式が竪穴住居から掘立柱建物主体へ変化するとともに、集落内部の建物全体が整然と配置されるようになった。これは課税を中心に編成されたと考えられる8世紀の集落の形態と基本的に共通することであり、内的変化の結果とは考えられない。畿内政権と直接的な関係が末端の集落へも及んだことを示しており、6世紀中葉～後葉に行われた白猪屯倉の設定が契機となった可能性が高いと推測した。このような集落は、かつて直木孝次郎氏が指摘した計画村落(直木1965)に通じるものである。

今回、他地域との比較は行えなかったが、7世紀初頭を前後する時期に、集落変遷の上で画期があることが畿内の集落でも指摘されており(広瀬1989)、汎地域的な現象であることも推測される。このことは7世紀における集落変遷上の画期を、施策的な面以外からも説明する必要があることを示している。また、集落を構成する単位とした竪穴住居群や掘立柱建物群については、竪穴住居1軒が最小単位である集落もあることから、これを血縁関係の最小単位である家族であったとすると、複数の家族を合成した複合家族ということになる(1)。しかし、竪穴住居の大きさの差などの意味を含めた詳細な実態については追求できていない。集落研究の課題はまだまだ多くあり、より多角的な視点からの分析を行い検討していく必要がある。

註

(1) 弥生時代後期になると同じ位置で繁茂に拡張する住居が極めて多くなる。これは中期と比べ、単位集団が安定してきているといえる。ただし、竪穴住居を拡張する際は、そこの住人が別の住居に同居している場合もあったと考えられる。それは単位集団内における竪穴住居間の関係が緊密であったことを示している。一方5世紀以降の竪穴住居については、竪穴住居1軒が単位集団に相当する場合も認められる。また、竪穴住居を拡張する場合は少なく、重複していても別個に建て替えた結果であるといえる。これは住居を新たにする際に、ほかの住居に同居する必要を考えなくてよい。つまり、竪穴住居1軒の独立性が弥生時代と比べてかなり強かったといえる。したがって、5世紀以降に竪穴住居がまとまって1つの単位を形成しているものを、弥生時代の単位集団と同じ用語でまとめるのは不適切と考えられる。より実態に即した概念や用語が必要である。

引用文献

浅倉秀昭ほか「矢部古墳群Ａ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　1993年
浅倉秀昭ほか「白逵古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117　1997年
石井克広「黒井峯遺跡発掘調査報告書」『子持村文化財調査報告』第11集　1990年
江見正己ほか「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1995年
江見正己「弥生時代の集落変遷」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150　2000年
大道和人「古墳時代後期の製鉄の一様相」『韓国より渡り来て－古代国家の形成と渡来人－』滋賀県立安土城考古博物館　2001年
小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第44集　1992年
尾上元規「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本と中心として－」『考古学研究』第40巻第1号　1993年
狩野　久「白猪屯倉の設備事情」『京都橘女子大学研究紀要』第二七号　2001年
亀山行雄ほか「二子14号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81　1993年
亀山行雄ほか「津寺遺跡」4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116　1997年
河上邦彦ほか『史跡・牧野古墳』『広陵町文化財調査報告』第1冊　1987年
木沢直子「古代における木材利用－ヒノキをめぐる考察－」『元興寺文化財研究所研究報告2001－増澤文武氏退職記念－』2002年
木下　亘ほか『斑鳩藤ノ木古墳概報』吉川弘文館　1989年
草原孝典『三手向原遺跡』岡山市教育委員会　2001年
草原孝典「８世紀における集落の一類型」『古代文化』2004年
河本　清「狐塚遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第2集　1974年
柴田英樹ほか「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999年
島崎　東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　1998年
下澤公明ほか「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105　1996年
高畑知功ほか「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　1976年
武田恭彰ほか「上竹西の坊遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　1988年
武田恭彰「奥坂遺跡群　鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15　1999年
武田恭彰「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15　1999年
舘野和己「屯倉制の成立」『日本史研究』1978年　1～30頁
田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ　1966年
谷本　進ほか『箕谷古墳群発掘調査報告書』八鹿町教育委員会　1987年
團　正雄「福吉丸山遺跡」『勝央町文化財調査報告』4　1993年
豊島直博「古墳時代中期の畿内における軍事組織の変革」『考古学雑誌』第85巻第２号　2000年
直木孝次郎「古代国家と村落－計画村落の視角から－」『ヒストリア』42　1965年
中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81　1993年
中野雅美ほか「津寺遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998年
中山俊紀「弥生集落」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社　1992年
新納　泉「装飾太刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号　1983年
西　弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原京発掘調査報告書』Ⅱ　奈良国立文化財研究所　1978年
根木智宏ほか「阿知境遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』135　1998年
畑中英二「陶邑ＴＫ43号窯跡の年代観に関する再検討－出土陶硯からのアプローチ－」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』1999年
花田勝弘「吉備政権と鍛冶工房－古墳時代を中心に－」『考古学研究』第43巻第１号　1996年
平井　勝ほか「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　1994年
平井　勝「岡山における弥生時代のムラとクニ（上）－投馬国から吉備国へ－」『古代吉備』第21集　1999年
平井　勝「岡山における弥生時代のムラとクニ（下）－投馬国から吉備国へ－」『古代吉備』第23集　2001年
広瀬和雄「畿内の古代集落」『国立歴史民族博物館研究報告』第22号　1984年

弘田和司ほか「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150　2000年
平岡正宏「大開古墳群大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第51集　1994年
福田正継ほか「西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109　1996年
藤井裕之「赤田東遺跡から出土した木材の樹種について」『岡山市埋蔵文化財センター年報2　2001（平成13）年度』2003年
藤原好二ほか「寒田窯跡群4号」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集　2003年
間壁忠彦ほか「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報』第14号　1979年
正岡睦夫ほか「百間川兼基遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　1982年
正岡睦夫ほか「道口遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　1988年
松本和男ほか「富原西奥古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83　1993年
水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本5　近畿』角川書店　1969年
村上幸雄「糠山遺跡群Ⅱ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1980年
村上幸雄ほか「水島機械金属工業団地協同組合　西団地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9　1991年
保田義治ほか「深田河内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第26集　1988年
弥永貞三「大化以前の大土地所有」『日本古代社会経済史研究』岩波書店　1980年
柳瀬昭彦「黒土窯・寒田窯跡〔広域営農団地能動整備事業（備南地区）に伴う発掘調査Ⅰ〕」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31　1979年
柳瀬昭彦ほか「原尾島遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106　1996年
山本悦世ほか「鹿田遺跡」Ⅰ『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊　1988年
行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第33集　1990年
行田裕美ほか「大畑遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第47集　1993年

参考文献

宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会　1995年
小郷利幸ほか「岡山市足守地域史研究（2）－古墳時代後期－」『古代吉備』第16集　1994年
神谷正義『西祖山方前遺跡・西祖橋本（御休幼稚園）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会　1994年
菊地芳明「東北地方の古墳時代集落－その構造と特質－」『考古学研究』第47巻第4号　2001年
甲元眞之「農耕集落」『岩波講座　日本考古学4　集落と祭祀』岩波書店　1986年
中野雅美「須恵器の編年・山陽」『古墳時代の研究』6　雄山閣　1991年
西川　宏『吉備の国』学生社　1975年
橋本博文「古墳時代の社会構造と組織」『現代の考古学6　村落と社会の考古学』浅倉書店　2001年
光永真一「製鉄と鉄鍛冶」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社　1992年
光永真一『吉備考古ライブラリー10　たたら製鉄』吉備人出版　2003年

4　弥生時代中・後期の遺構

弥生時代前葉の遺物が溝17などから数点出土しているが、まとまって出土しているのは中期中葉の菰池式、高橋編年Ⅳb期(高橋1980)に併行する時期からである。ただし当地における中期前葉から中葉の土器の変遷は、稚拙なクシ描文で、器壁も厚く、胎土にはやや大粒の砂粒が混じる段階(高田式)→流麗なクシ描文で、やや器壁が厚い感はあるものの、胎土も長石・石英に限定され、しかも細かい段階(南方式)→クシ描文とともに凹線文が認められるようになり、しかも器壁も薄くなっている。胴部下半や、高杯の脚部内面にヘラケズリが認められるものもでてくる段階(菰池式)に考えている。また、クシ描文の初源は、当地では前期における施文の発達が甕に遍重し、壺を中心とした中期とは異なることから、畿内地域にあったと考えられる。そのため、畿内との併行関係は先の編年観より新しくなり、菰池式は畿内第Ⅲ様式新段階併行と考えておきたい(藤田1992)。この時期の

遺物は、当遺跡の南にある百間川今谷遺跡でまとまって出土した土器群とよく似ている。その後、後期初頭、高橋編年Ⅶa～Ⅶb期(高橋1980)まで遺構が認められる。百間川今谷遺跡は、ガラス溶滓が出土していることから、工房と考えられている(山本1992)。

遺構の構成は、竪穴住居、掘立柱建物、土壙、溝であり、住居については、竪穴住居が主体といえる。同時期の近接した遺構である百間川今谷遺跡が掘立柱建物と井戸によって構成されているのとは、全く異なった様相といえる。

中期の集落は竪穴住居、長方形竪穴集居状遺構、高床倉庫がセットとなった構成とされており(中山1992)、該期の広範囲の調査例である久田原遺跡や加茂政所遺跡でも竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。したがって赤田東遺跡の様相は、一般的な集落であるといえる。

集落の形成とともに微高地の中央を掘削して、溝が何度も掘られている。結果としてのこの溝群を挟んで南北に２つの住居群が存在している図式といえる。この溝は水田開発に用いられたことは明らかであり、微高地中央を掘っていることから、より高位部の安定した水田獲得を目的としたものであろう。それはいくつかの住居が集まった小住居群(中山1992)のみの労働力では賄いきれないものであり、溝を挟んで隣接する住居群相互の広範囲の協業によっておこなわれたものであろう。中期中葉～後期初頭まで、そういった協業システムが維持・更新されていたといえる。

竪穴住居と掘立柱建物などがセットとなった小住居群が生産の最小単位、それが幾つか集まって１つの協業単位を形成した大規模な開発をおこなう。これが中期における当地の弥生社会の典型のようである。そういったなかで、百間川今谷遺跡はどのように位置付けすればよいのであろうか。百間川今谷遺跡の掘立柱建物は、その軸方向にいくつかの方向性が看取されることから、複数の時期の建物群がそれぞれにある程度規則的に並んでいたことは推測される(図270)。建物の床面積は11～12㎡前後のものが多く15㎡を越える大型のものも３棟認められる。桁行と梁間の傾向をグラフでみてみると(図271)、梁間は2.5m前後に固定され、桁行が３m前後、５m前後、７m前後にまとまっており、規模の大小は別として建物相互に規則的な関係もうかがえ、床面積の差は格差ほどに還元できないように思われる。ただし、これら建物群には、土器を多く投棄された祭祀的性格もうかがえる井戸が伴っており、規模の差を除くと、大阪府池上曽根遺跡の神殿とされる大形建物と巨木を刳り抜いた井戸とのセット関係にも重なってくる。

しかし、百間川今谷遺跡の建物群は、久田原遺跡などの例と比較しても、小住居群に伴う掘立柱建物の大きさとそれ程変わるものではない。もし、一般集落に存在する掘立柱建物を高床倉庫と考えるならば(中山2001)、それがまとまって複数存在している景観を想定するのが最も妥当ではなかろうか。そして井戸についてはその廃棄の有り様から、それら倉庫に関する祭祀に用いられたという可能性も想定される。この点についてはより多くの手続きが必要であるが、百間川今谷遺跡の性格を倉庫群と想定すると２つの解釈が考えられる。１つはある特定の首長が管理するというものである。しかし、これについてはこの倉庫群以外にそのような首長の存在を肯定する材料はない。吉備では弥生時代後期の首長から古墳時代の首長への発展段階(近藤1983)が比較的明確に把握されているが、中期段階では一部で周溝墓があるものの(近藤1991)、明確であるとは言い難い。したがって、中期の首長居館に付属する倉庫群の可能性は低いといえよう。

２つめは周辺の各集落が共同で管理する倉庫群というものである。これは本質的には異なるが、ニュアンスとしては古代の不動倉に相当するものといえる。建物の大きさは貯蔵量の差を示してお

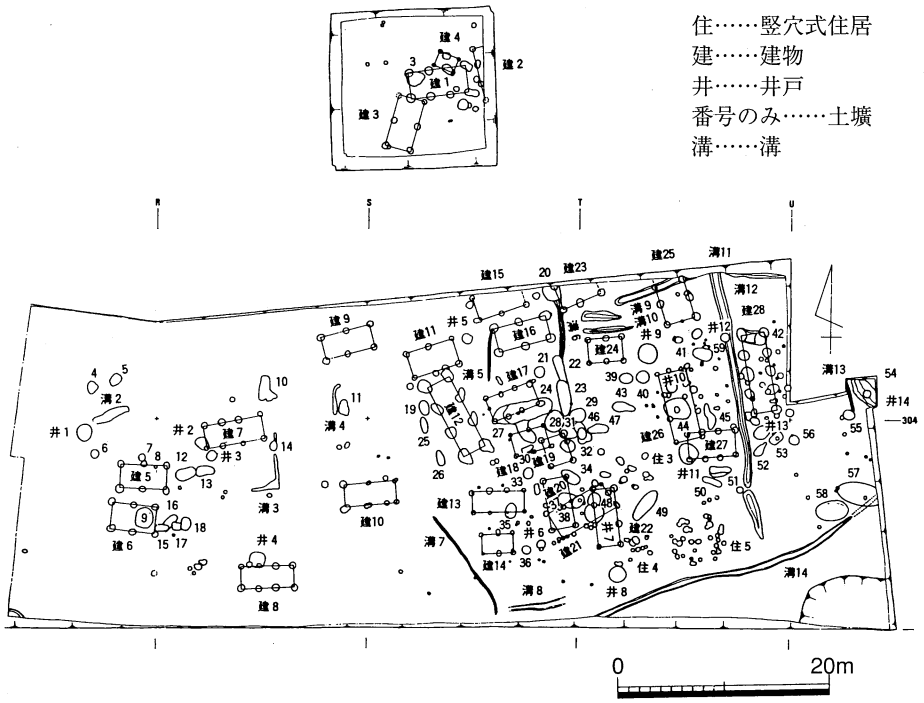


図270　百間川今谷遺跡　弥生時代中期遺構

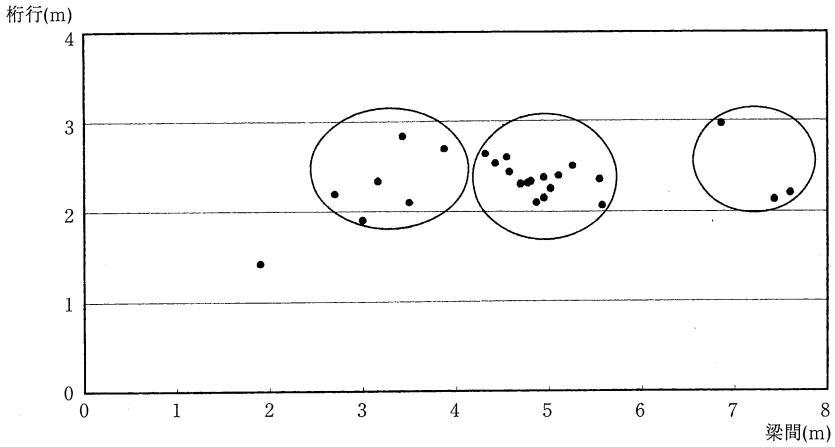


図271　百間川今谷遺跡　弥生時代中期掘立柱建物の規模

り、それはそれらの倉庫が帰属する集落の生産量に比例しているということになる。そういった様々な集落が、水路掘削などの直接的な協業作業に起因する関係をさらに越えた次元で、余剰米や種籾などを共同管理するようなシステムが、ある程度の地域ごとにまとまって形成されていたということになる。そのような社会が少なくとも吉備南部の平野では形成されていたこと、そしてそれが中期中葉であること。おそらくそういったバックアップが社会的に存在していたからこそ、赤田東遺跡の中期中葉における開発と集落の形成があったのであろう。そしてそれは、地域社会を安定させる一方で、そういったシステムを独占する首長を出現させる契機となる条件を準備したことになったのではなかろうか。

引用文献
高橋　護「弥生土器－山陽1～4」『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181号　ニューサイエンス社　1980年
藤田憲司「弥生中期の地域性」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社　1992年
中山俊紀「弥生集落」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社　1992年
近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店　1983年
近藤義郎「弥生墳丘墓の成立と展開」『岡山県史』原始・古代Ⅰ　山陽新聞社　1991年
中山俊紀「(1) 長方形竪穴住居状・遺構と掘立柱建物の分類と機能」『年報　津山弥生の里　第8号（平成11年度)』2001年
平井泰男ほか「百間川今谷遺跡」1『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　1982年
河合　忍ほか「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184　2004年
平井泰男ほか「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999年
山本悦世「弥生時代のガラス」『吉備の考古学的研究（上)』山陽新聞社　1992年

5　石　　器

1．赤田東遺跡の石器

赤田東遺跡の発掘調査では遺構および遺物包含層から石器が多数出土した。ここでは弥生時代を中心に、赤田東遺跡出土石器の内容について説明したい[1)]。最初に器種ごとに特徴を述べ、続いて遺跡内における石器の分布状況および接合資料について説明し、最後にまとめとして石器群の性格について述べることとする。

1）石器組成

石鏃（S10～S13・S17・S18・S30・S82～S85）　13点出土している。すべてサヌカイト製である。サイズから大型と小型に大別することが出来る。大型（S83）は1点のみで、6.0gを量る。他はすべて小型の石鏃である。小型の石鏃の中には、石錐の可能性のあるもの（S17・S18・S85）もあるが、石鏃として分類した。

打製石剣（S44・S62・S63）　接合により完形品となったものが1点（S44)、未製品が2点（S62・S63）出土している。すべてサヌカイト製である。S44はこの地域でみられる打製石剣とは異質である。2つに折れた状態で、それぞれ別の溝から出土した。器体中央付近に至るような剥離面は顕著にみられず、整形加工は器体周縁を中心に施されており、また先端部に研磨痕を確認することができる。石質は中部瀬戸内地域で広く流通する金山産サヌカイトのような質感ではない。この打製石剣のみ二上山周辺でみられるような漆黒で緻密なサヌカイトを用いている。S62・S63は未製品の可能性がある。両側縁から器厚を減じるように剥離作業が進行している。

打製石包丁（S22・S23・S46・S48・S50・S59・S58・S60・S61・S86）　完形品が2点（S23・S50)、未製品および破損品が10点出土している。すべてサヌカイト製である。S23は有抉、S50は無抉の石包丁である。破損品の中にも有抉の石包丁がみられる（S61・S86)。また、S60は刃潰し加工を施す前の未製品と考えられる。

磨製石包丁（S40・S87）　2点出土している。S40は砂岩製で、S87は頁岩製である。2点とも破損品である。同質の剥片等がみられない点から、遺跡内で製作された可能性は低い。

スクレイパー（S15・S69・S70）　13点出土している。すべてサヌカイト製である。図示した3点（S15・S69・S70）以外はすべて溝と包含層から出土した資料である。

石鏃（S7・S88）　2点出土している。すべてサヌカイト製である。大型打製石包丁の可能性もあるS7は刃部に磨滅痕がみられず、また両側縁にも新鮮な剥離面を残していることから、整形途中で失敗し折損したものと考えられる。背面に原礫面を残している。腹面には素材剥離面がみられ、分厚い横長剥片を素材としていたことが窺える。S88は中・近世の水田層から出土した。背腹両面ともに磨滅がみられ、剥離面の観察を困難にしている。磨滅した面には器体の長軸方向に線状の使用痕を確認することができる。また、器体両側縁には抉り状の加工が施されている。

石錐（S14）　1点出土している。サヌカイト製である。S14は一部欠くところがあるものの、錐部の作出が認められる。石鏃の中には石錐の破損品あるいは石錐と分類できうる資料（S18・S85）が含まれている。

楔形石器（S4・S19・S34・S71・S77）　10点出土した。全てサヌカイト製である。剥片の中には、楔形石器にみられるような裁断面を有するものが数多くみられた。上下両端に階段状の剥離面がみられるものを楔形石器に分類した。

石核（S43・S51・S52・S66・S75・S80）　6点出土している。全てサヌカイト製である。S43は小型の剥片の生産を目的とした石核であろう。その他の石核は、表裏に素材剥離面を残し、周囲は分割面で構成されている。

赤田東遺跡弥生時代石器石材組成表

	サヌカイト	ヒン岩	花崗岩	頁岩	凝灰岩	砂岩	結晶片岩	その他	合計
石鏃	13								13
打製石剣	1								1
打製石剣未製品	2								2
打製石包丁	12								12
スクレイパー	12								12
石鏃	1			1					2
石錐	1								1
楔形石器	10								10
石核	6								6
磨製石包丁				1		1			2
柱状片刃石斧								2	2
扁平片石斧							1	4	5
太型蛤刃石斧		4							4
環状石斧未製品		2							2
石錘			1		1				2
砥石								4	4
叩石			2						2
合計	58	6	3	2	1	1	1	10	82

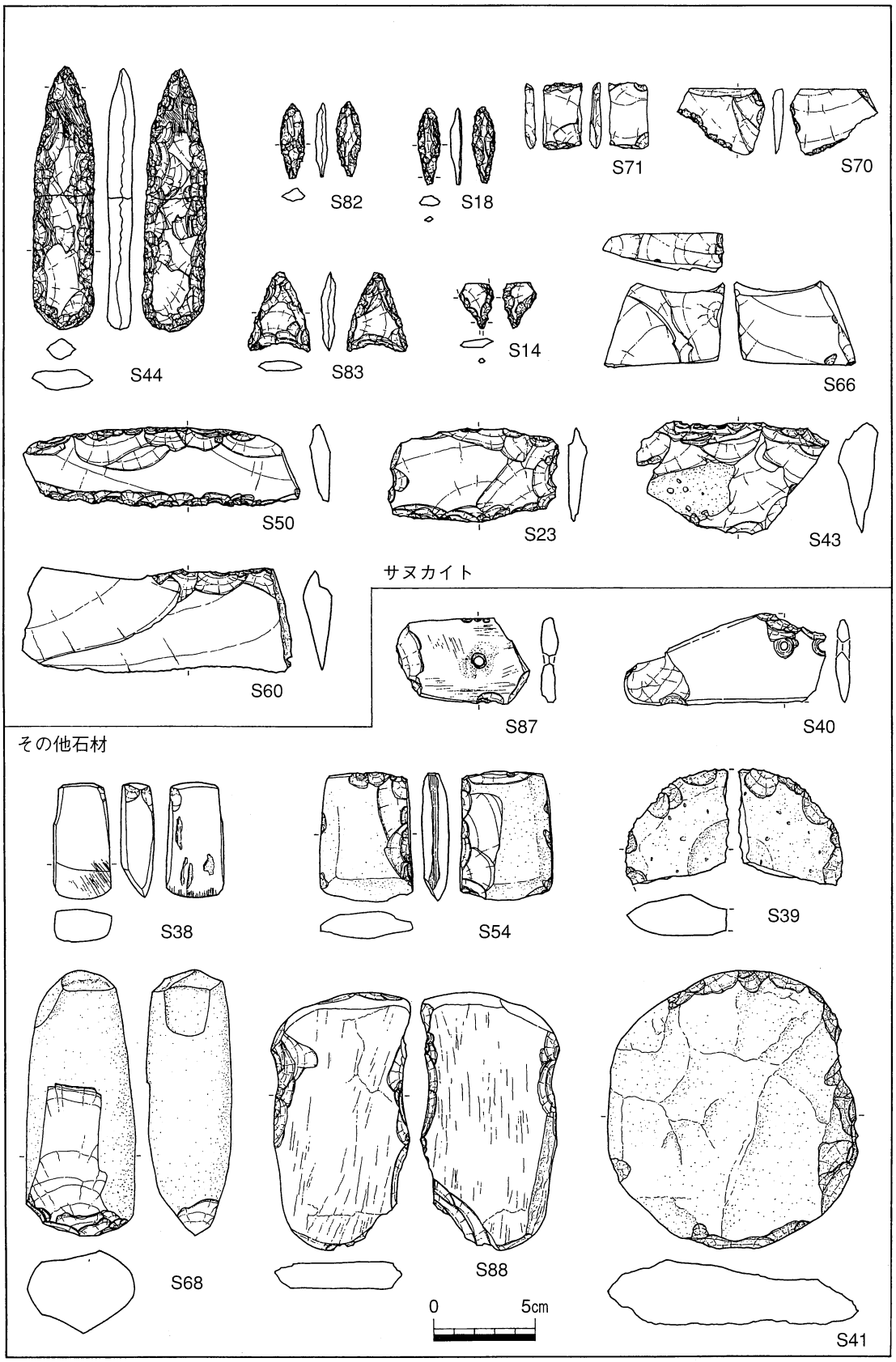


図272　赤田東遺跡の石器組成

柱状片刃石斧（S２・S９）　２点出土している。S２は破損品、S９は製作途中の破損品の可能性がある。

扁平片刃石斧（S３・S16・S38・S54・S55）　５点出土している。完形品はS38・S54の２点のみである。S54は他の資料に比べ、厚みがあり幅は狭い。

太型蛤刃石斧（S53・S67・S68・S89）　５点出土している。全てヒン岩製で破損品である。刃部を破損した資料がほとんどであり、S67は刃部のみである。このほか研磨痕のあるヒン岩の剥片（S37）が出土しており、これら剥片は蛤刃石斧の剥片であると考えられる。

環状石斧未製品（S39・S41）　２点出土している。２点ともヒン岩製である。S39は被熱により赤化した可能性がある。器体中央に穿孔を施す途中で破損している。S41は、全体に加工を施し、ほぼ円形に仕上げた段階で遺棄されている。

石錘（S１・S57）　２点出土している。S１は花崗岩製で、S57は凝灰岩製である。S１は、握り拳大の円礫の中央に浅い溝を一条めぐらせたのみで、ほとんど加工していない。小型のS57は、扁平な円形に全体を加工し、さらに溝を一条めぐらせている。

砥石（S８・S24）　３点出土している。S８・S24のような小型品と、図示していないが大型品が溝21から出土している。S24は柱状片刃石斧転用の可能性がある。

叩石（S25・S56・S65・S90）　４点出土している。S55は上下両端に敲打痕が明瞭にみられる。その他は磨製石斧の転用と考えられる。

石杵（S91・S92）　古墳時代の遺物包含層から、石杵が２点出土した。S91は安山岩製で、一部破損している。破損箇所はエッジに敲打痕をのこしており、破損した後も利用されていた可能性がある。

剥片・砕片　サヌカイトの剥片・砕片が非常に多く出土している。その他の石材の剥片・砕片はほとんど出土しておらず、ヒン岩の剥片がわずかにみられる程度である。サヌカイトの剥片は長さ・幅ともに５cm以下のものが中心で、石核の素材となりうる大型の板状剥片は出土していない。しかし板状剥片から剥離された剥片の接合資料を一組確認した。

剥片の多くはバルヴが平坦で、折れ面を有するものが目立つ。そのほか竪穴住居12～14・15の埋土から１cm以下の砕片がまとまって出土しており、サヌカイト製石器の製作および再加工が遺跡内で行われていたことは間違いない。

２）石器の分布

竪穴住居・ピット・溝から多くの石器が出土している。石器が比較的まとまって出土している遺構は、竪穴住居５・竪穴住居12～14・竪穴住居15・Ｐ1720である。竪穴住居から出土する石器は、石錘・石鏃など一部の器種を除き、未製品・破損品が中心である。また、竪穴住居12～14・15の埋土

から、多量の剥片・砕片がまとまって出土している。他の竪穴住居からも剥片・砕片は出土しているが、その量は極めて少数である。従って、サヌカイト製剥片石器は竪穴住居12～14・15で集中的に製作されていた可能性が高い。

3）接合資料について

2組確認した。打製石剣の折れ面で接合した接合資料1(S44)と、剥片2点の接合資料2(図273)がある。2組とも石材はサヌカイトである。打製石剣の接合資料1(S44)は器体中央で二分され、上半部が溝17で出土し、下半部が溝19から出土した。

剥片2点の接合資料2(S51＋S64)は、表裏両面に素材面を残し、厚みのある剥片であることがわかる。板状剥片に由来するものである。S51は溝17から、S64は溝21から出土した。板状剥片に伴う剥片と考えられる。

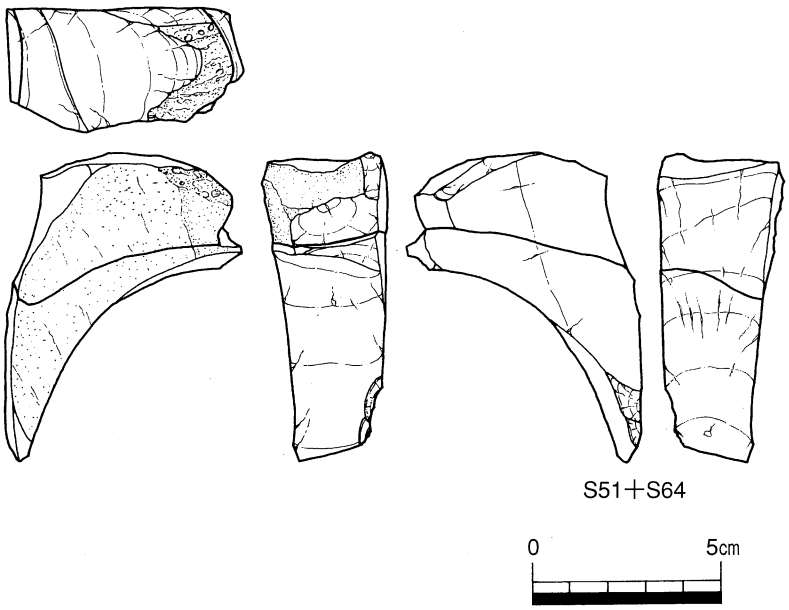


図273　接合資料2

4）まとめ

遺跡内における石器製作　赤田東遺跡では、サヌカイト製石器製作に伴う石核・剥片・砕片のみがまとまって出土しているため、磨製石器の製作の実態を明らかにすることができない。従って、ここではサヌカイトを用いた打製石器を中心に製作工程を探ってみたい。

岡山南部地域におけるサヌカイトの搬入形態が、打製石包丁と板状剥片であった可能性はすでに指摘されており(高田2001)、赤田東遺跡も同様の搬入形態が想定できる。また、サヌカイトの石核や多数の剥片・砕片が出土しており、遺跡内でサヌカイト製石器の製作が行われていたことは間違いないだろう。岡山南部地域において、板状剥片を搬入した後どのような剥片剥離過程によって素材剥片の生産が行われていたのかという点については、すでに高田氏によってサヌカイト製石器の製作工程復元がなされている(高田2001)。それを参考にしつつ、具体的に赤田東遺跡出土の資料でその過程を跡付けてみたい。

まず、石核の準備であるが、出土資料から板状剥片と、板状剥片から剥離された大ぶりな剥片が石核素材であったと想定できる。板状剥片から直接剥離されたと考えられる剥片はS5・S42・S58などである。いずれも背面に大きな先行剥離面を有しており、大型の板状剥片から剥離された剥片であることは間違いないだろう。これらの素材剥片は主に不定形な打製石包丁や、スクレイパーとし

て利用されたものと考えられる。なお、打製石包丁の未製品が1点出土している(S60)。背部に打製石包丁の特徴である入念な刃潰し加工は施されておらず、背部の整形に伴う粗い剥離面が残されている。他の剥片等と接合を試みたが接合関係は見出せなかった。未製品の段階で持ち込まれたと考えられるが、遺跡内で剥離された可能性も否定できない。

板状剥片からの素材剥片剥離とともに赤田東遺跡では表裏両面から剥片剥離が進行した石核がみられる(S43・S59)。これは本来、板状剥片から剥離された大ぶりの剥片であったと考えられる。板状剥片から剥離された剥片石核を用いて、石鏃やスクレイパーなど剥片石器の素材剥片を剥離している。剥片の背面が複数枚の先行剥離面で構成されているS21などの剥片剥離を意図したものであろう。それとともに、バルヴの平坦な小型の剥片も存在しており、楔形石器の出土から両極打法も行われていたようである。これら2種類の剥離技術から生産された小型の素材剥片は石鏃・石錐などに利用されたものと考えられる。

石核の準備と素材剥片の剥離過程は以上である。剥片素材の石核を用いる点は異なるが、板状剥片を母体とする剥片剥離技術である点は高田の見解と相違ないといえる。遺跡内では、板状剥片とその剥片という、2形態の石核から素材剥片剥離が行われていたのであろう。

赤田東遺跡の石器群の特徴として、石鏃の素材剥片となりうるバルヴの平坦な小型の剥片を除き、その他石器の素材剥片が多くみられない点を挙げることができる。

非サヌカイト系石材[2)]を用いた遺跡内の石器製作は低調であったようである。剥片がほとんどみられない点を考慮すると、遺跡内に原石を持ち込み、粗割や整形は行われなかったのであろう。ただし、砥石と研磨直前まで整形加工された未製品が若干出土しており、遺跡内では仕上げの研磨のみ行われているようである。

石器群の性格　赤田東遺跡から出土した石器は、多くが未製品・破損品で、完形品は石鏃など一部に限られている。そして他の岡山南部地域の遺跡と同様、サヌカイトを主体とした剥片石器と、おそらく近隣の河川などで採取されたであろう在地の石材を用いた磨製石器・礫石器で構成されている。石器組成をみると、サヌカイトとその他の石材には、器種による石材選択があったことは間違いない。このような、器種と石材の関係は岡山南部地域の多くの遺跡と同じあり方を示しているものと思われる。また接合資料の検討から板状剥片によるサヌカイトの搬入を指摘することができた。赤田東遺跡におけるサヌカイトの搬入形態は、板状剥片と打製石包丁であったと考えられる。このような搬入形態は岡山南部地域の各集落と共通するものであろう。従って、赤田東遺跡の発掘調査は岡山南部地域の一集落における石器利用の実態を知る上で貴重な資料を提供したといえるだろう。

以上の特徴に加えて、遠隔地石材を製品で搬入している点も重要である。S44の打製石剣は二上山に由来するサヌカイトを素材とし、形態も岡山南部地域において多くみられるものであるとはいえない。また、この打製石剣と同質の石材の剥片・砕片を出土資料の中から見いだすことはできなかった。岡山南部地域では、しばしば二上山産サヌカイトを用いた打製石剣が出土し、検討されている(高田2002、平井2003)。この打製石剣も同様に畿内で製作され、製品として遺跡内に持ち込まれたと考えたい。

2．赤田東遺跡からみた弥生時代岡山地域における石器石材の利用形態

赤田東遺跡から出土した石器は、一部遊離資料を含みながらも、住居・溝などいくつかの遺構からまとまって検出されている。その多くは弥生時代中期中葉から後期初頭という時期の中におさまる石器群である。そして、先述のとおり石器群の石器組成に特別な偏りは認められず、また、利用石材についてもサヌカイトと在地石材の併用が認められる。そして、板状剥片の存在からサヌカイト搬入のあり方も岡山南部地域の他の集落と同質なあり方を示しているといえるだろう。

ここでは赤田東遺跡の石器群をより深く理解するため、次の3点を掘り下げて検討したい。

第1に、赤田東遺跡におけるサヌカイトの搬入量を明らかにし、周辺遺跡と比較を行う。サヌカイトをどの程度持ち込んで石器製作を行っていたのかという点は、これまで十分問題にされてきたとはいえない。この点について明らかにしておくことは、岡山南部地域における石器製作の実態をより具体的に理解する上で無駄なことではないだろう。

第2に、板状剥片・大型石包丁など単体で重量のあるサヌカイト原材が岡山地域においてどのような広がりを持って分布するのか、どのサイズの原材がどれだけ搬入されたのかという点について確認しておきたい。それらの分布傾向はすでに検討されているが(高田2001)、ここでは少し視点を変えて原産地からの距離と重量の関係などを含めて検討する。

第3に、サヌカイト・非サヌカイト系石材の利用のあり方について石包丁をとりあげて検討を加える。弥生時代中期の岡山南部地域は、サヌカイト製の石包丁が穂摘具として卓越する。しかし、石包丁は他の剥片石器と異なり、サヌカイト以外の石材を用いた製品がしばしば出土しており、時にはサヌカイト製石包丁を凌駕する出土数がみられる。石包丁にみられる石材選択のあり方について岡山北部地域を含めて検討を加えてみたい。

赤田東遺跡の位置する岡山地域については弥生時代の石器に関する検討が行われており、石器組成の変遷(平井1996・安川1996) やサヌカイトを軸とした石器製作および石材流通の検討が試みられている(高田2001)。次項から、それら研究の成果をふまえつつ、石材の搬入形態と集落内における石材消費のあり方について周辺遺跡と比較を行う。分析は弥生時代中期の石器がまとまって出土した遺跡を中心とし、板状剥片については前期・後期の資料を若干含ませている。

1）　赤田東遺跡におけるサヌカイトの搬入量

岡山南部地域では、サヌカイトの流通形態の一つとして板状剥片による搬入が明らかにされている。赤田東遺跡では、板状剥片自体は出土しなかったものの、それに伴う剥片が接合資料として出土しており、板状剥片を遺跡内に持ち込み、剥片剥離が行われていたことは間違いないだろう。ここでは第1として挙げた赤田東遺跡に搬入されたサヌカイトの量を検討する。

赤田東遺跡の石器石材搬入量　赤田東遺跡から出土した石器は、石核・剥片・砕片を除いたサヌカイト製石器の総重量が1183.1ｇ、同じく非サヌカイト系石材を用いた石器の総重量は、11746.2ｇとなる。そして石核・剥片・砕片を加えたサヌカイトの全搬入量は3755.6ｇ、非サヌカイト系石材の全搬入量は12297.6ｇとなる。遺跡外への搬出や、調査区にかからなかった資料の存在もあり、実際はより多くのサヌカイトが搬入された可能性は否定できないが、調査によって出土したサヌカイトの量は、少なくとも概ね4kg弱となる。石材全体に占めるサヌカイトの重量は、器種の重量が約9％、

石核等を含めた全体の重量が約23%である。サヌカイトの全搬入量からその器種の総重量を求めたサヌカイトの利用率は、約32%となる。従って遺跡内に持ち込まれた全サヌカイトの内、約３割が器種として利用されていたと考えられる。一方、非サヌカイト系石材の利用率は約96%となる。搬入された石材の加工が遺跡内でほとんど行われていなかったといえる。この両者の数値を比較するとサヌカイトは浪費的な石材の消費を行っている印象が強い。

岡山南部地域におけるサヌカイトの利用状況　比較の参考として、石器がまとまって出土しているいくつかの遺跡について石材の重量比を検討してみた[3)](図274)。重量は器種のみカウントしているので、搬入された石器石材の実態を必ずしも反映しているわけではないが、少なくとも各遺跡における石器石材の利用状況はある程度把握することができるだろう。

赤田東遺跡のサヌカイトの重量は、次に少ない田益田中遺跡と比べても１kg近い差がみられる。しかし、数値の内容に目を向けると印象が少し異なってくる。例えば加茂政所遺跡の場合、出土した器種の点数は赤田東遺跡と大差ないものの、重量では大きな違いがみられる。この差の原因は、１点のサヌカイト製大型打製石包丁の存在である。この大型打製石包丁は1670ｇあり、これを除けば赤田東遺跡と同じような数値を示す。田益田中遺跡にしてもサヌカイト製大型打製石包丁が１点出土しており、それらを除けば赤田東遺跡と比べてサヌカイト製石器の総重量に大きな隔たりはみられなくなる。

器種に利用されたサヌカイトの搬入量を比べると百間川遺跡群などの遺跡で大きな違いがみられるものの、赤田東遺跡と同等と考えられる遺跡もあり、いくつかの遺跡を除けばその搬入量に大き

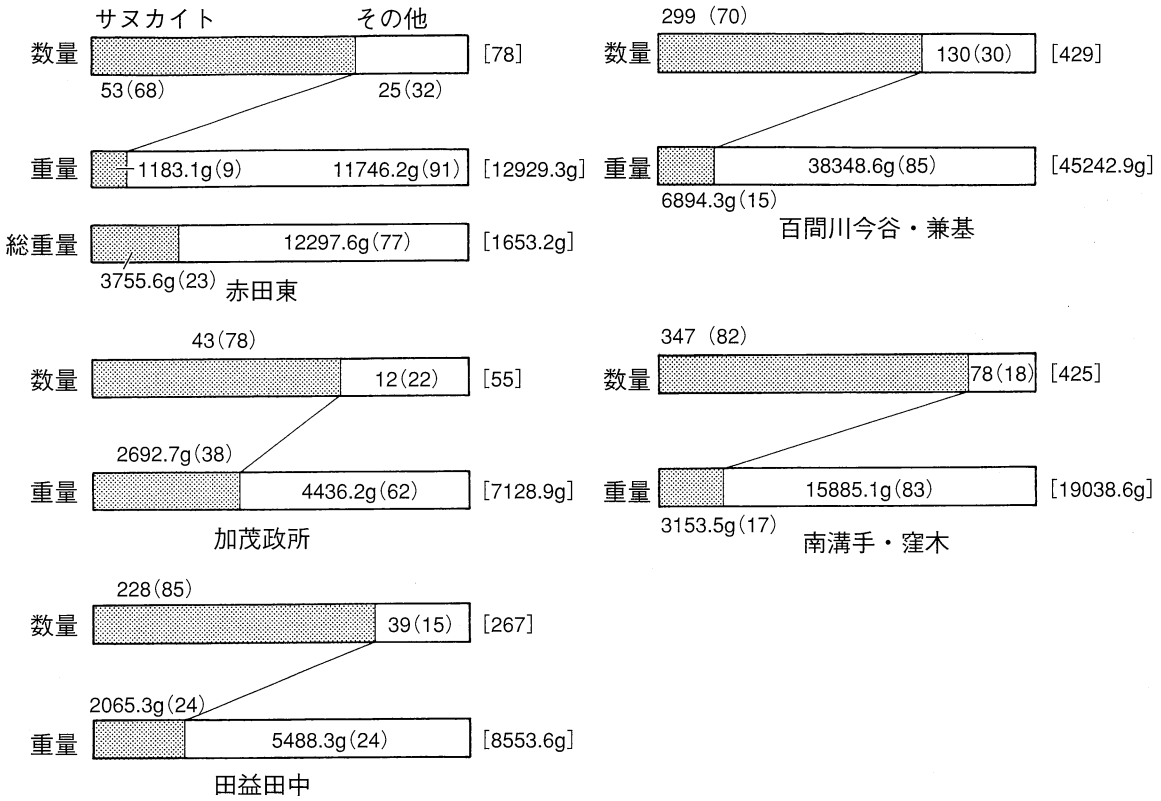


図274　岡山南部地域石器石材別の数量と重量

[　] は総数・総重量　（　）は%

な差があったとは言い切れないだろう。しかしここでは剥片等を含めた総重量の検討を行ったわけではないので、この点をふまえて再検討すれば、遺跡間のサヌカイト搬入量に大きな違いがみられる可能性は否定できない。次項では、板状剥片の検討を通して、各遺跡におけるサヌカイト搬入のあり方を探ってみたい。

2）サヌカイトの搬入形態について

岡山地域ではサヌカイトの搬入形態の一つとして板状剥片あるいは大型打製石包丁などが広く知られている。ここでは岡山地域における板状剥片・大型打製石包丁の出土状況を把握し、各遺跡におけるサヌカイトの獲得と保有のあり方について考えてみたい。

大型原材・器種の分布と出土状況

板状剥片・大型石包丁など単体で出土したサヌカイト製石器について、原産地からの距離と重量の関係を示した[4]（図275）。ドットの■は板状剥片・石核など原材、○は大型石包丁・大型スクレイパーなどの大型器種を表している。現在まで出土した資料のなかで、最大のものは菅生小学校裏山遺跡出土の石材で2750ｇを量る。それを除けば単体で２kgを越える石材は出土していない。大きくてもせいぜい1.7kg程である。仮に分割や剥片剥離が行われていたとしても、単体で２kgをはるかに越える原材の運搬は稀であっただろう。この範囲の重量が、板状剥片など原材の運搬・保有に関係する何らかの単位や基準になっていたのではないかと考えたい。

重量の広がりでみると、１kg前後を境にして大きく２つに区別できる[5]。１kgを越えるものは1.2～1.7kg前後に広がりを有し、１kg以下のものは、500g前後に重量が集中する傾向がある。重量分布の傾向として、薄手の板状剥片・大型打製石包丁・大型スクレイパーや剥片剥離の進行した石核あるいは残核が500ｇを中心とするのに対して、１kgを越えるものは、板状剥片の中でも厚みがあって剥片剥離が十分進行していないものや、一部の大型打製石包丁が含まれている。

遺跡ごとの出土状況についてみてみると、１遺跡につき１～３枚というのが一般的で、それ以上の集中保有がみられる遺跡は管見に触れていない。菅生小学校裏山遺

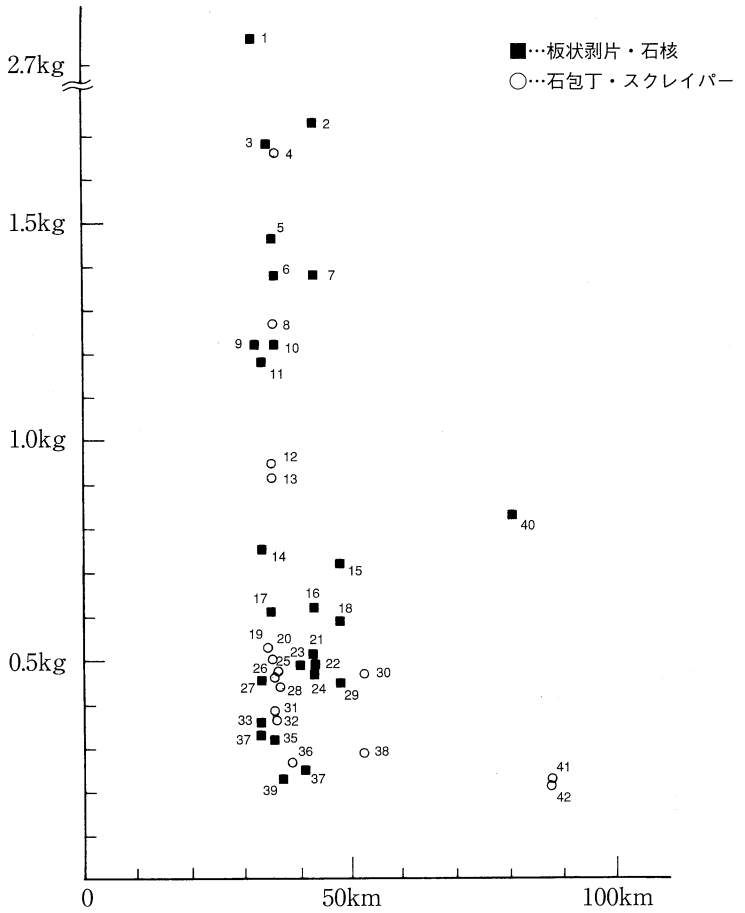


図275　大型原材・器種の原産地からの距離と重量分布

跡や南溝手・窪木遺跡では、４枚以上の１kgを超えるような原材がみられる。しかし溝や河道から出土した資料を含めた総数であり、一括性を欠く。従って、板状剥片は１～３枚の保有が一般的であったと考えられる[6]。

先述した赤田東遺跡のサヌカイト総重量は、板状剥片２枚～３枚に換算できる量である。赤田東遺跡で確認できた板状剥片は接合資料から想定される１点のみであり、サヌカイトが全て板状剥片の形態で遺跡内に持ち込まれたというよりも、打製石包丁と共に持ち込まれたのだろう。

原産地からの距離に着目してみると１kgを越える石材は概ね30～50kmの範囲で分布する。この広がりが、板状剥片の入手に直接関係する集落の範囲を示しているのだろう。一方、原産地から最も遠いのは、90km弱離れた久田原遺跡から出土した２点の大型打製石包丁である[7]。このほか岡山北部地域にいくつかの遺跡でサヌカイトの原材とみなされる資料が散見されるが、現在までの出土状況をみると、岡山北部地域に板状剥片のような原材を恒常的に入手する経路は見出しがたい。また、大型石包丁などの石器にしても出土数は少なく、岡山北部地域のサヌカイト搬入形態は、高田の指摘にあるように、石鏃・石錐など小型石器の素材となるような剥片あるいは打製石包丁が主体であったと考えられる。

サヌカイトの入手形態　岡山地域における板状剥片・大型石包丁の分布・出土状況からみたサヌカイト流通は、以下のようにまとめることが出来る。基本的な流通のあり方として、大型の原材は、原産地から30～50kmを中心に分布しており、岡山北部地域のサヌカイト消費地にはほとんど搬入されていない。この点から、板状剥片の入手に関与する岡山南部地域の集団は、専ら板状剥片を自家消費に当てていたことが分かる。それは先程検討した各遺跡のサヌカイト搬入量の検討からも推察される。そして、岡山北部地域へは打製石包丁や剥片などで搬入されるのが一般的だったといえる[8]。また、板状剥片の隔絶した集中保有の痕跡が認められない点から、サヌカイトは特定の集落を軸として流通するものではなかったと考えられる。以上の点はすでに高田氏が指摘している流通システムと矛盾しない(高田2001)。

３）石包丁の利用石材

岡山地域における弥生時代中期の石包丁の特徴は、サヌカイト製打製石包丁は岡山南部を中心に分布し、その他在地系と考えられる石材を利用した磨製石包丁は岡山北部で使用される傾向があるという点である。しかし、大局的にそのような傾向がみられる反面、岡山南部にも非サヌカイト系磨製石包丁は存在し、一方岡山北部にサヌカイト製打製石包丁が散見されることは事実である。赤田東遺跡ではサヌカイト製打製石包丁が多くみられつつも、砂岩と頁岩を用いた磨製石包丁がわずかではあるが出土している。特に岡山南部地域における非サヌカイト系磨製石包丁は幾つかの検討がみられるものの、絶対量の少なさから十分検討されてきたとはいえない。北部と南部それぞれの地域における出土状況について検討してみることは、当該期の石器利用のあり方を理解する上で無駄なことではないだろう。

石包丁の利用石材

図276は、石包丁全体に占めるサヌカイト製打製石包丁の比率を、原産地と考えられる金山からの距離と関係させたグラフである[8]。グラフのドットはサヌカイト製打製石包丁と非サヌカイト系石材

を利用した磨製石包丁が出土する遺跡を示してある。当然ながら原産地に近いほどサヌカイトの利用率は高く、離れるに従ってサヌカイトの利用比率が低くなることはこのグラフから明らかである。板状剥片を有する遺跡では、やはりサヌカイトの利用比率が高いものの、いくつかの遺跡では、多くの非サヌカイト系磨製石包丁を伴っている点を指摘することができる。また、津寺遺跡・加茂政所遺跡・高下遺跡は板状剥片の出土はみられなかったものの、多数の打製石包丁を保有し、大型打製石包丁が出土しており、安定したサヌカイトの搬入がみられる[9]。

岡山南部地域では非サヌカイト系石材を用いた磨製石包丁は、石包丁全体の比率の上で主体とならなくとも１～2点程度伴う遺跡がしばしばみられる。赤田東遺跡もこれらの遺跡と同様、サヌカイト製打製石包丁を主体としながら、２点の磨製石包丁を伴っている。同じ石質の剥片・砕片は出土していない点から、搬入品と考えられる。詳細な検討を行っていないが、少量の磨製石包丁を伴う他の遺跡も同様に製品段階の搬入が基本であり、遺跡内での生産は低調であったと考えられる[10]。そうした傾向がある一方、南溝手・窪木遺跡、田益田中遺跡、才地遺跡などいくつかの遺跡では必ずしもサヌカイト製石包丁が数量・比率の上で圧倒的とならないことをこのグラフは明らかにしている。

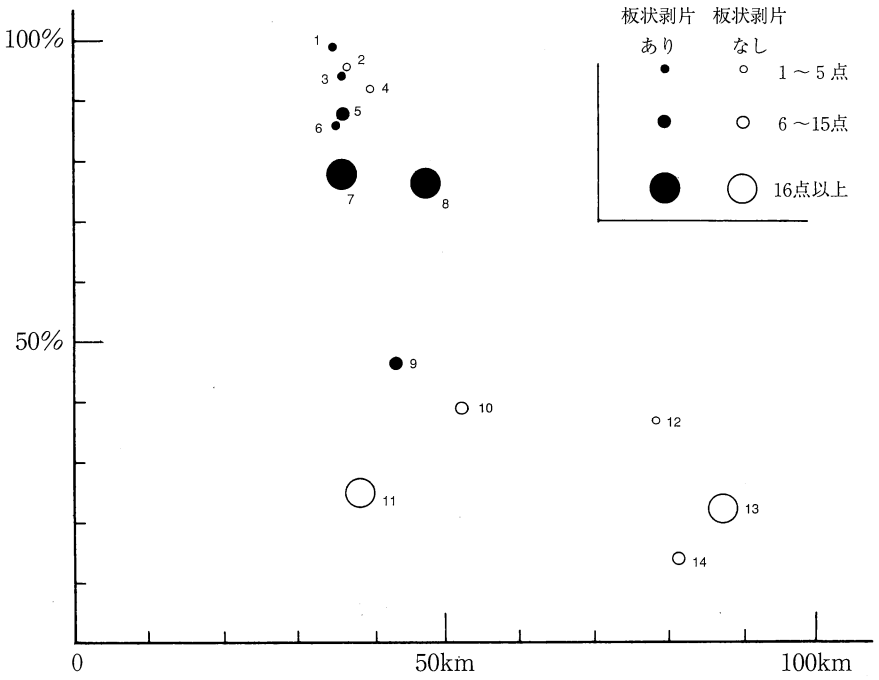


図276　石包丁のサヌカイト利用率と原産地からの距離関係

ドットのサイズは非サヌカイト系石包丁の数量を示す

岡山南部地域における石包丁の流通　以上、雑駁であるが、岡山南部地域を中心に石包丁の利用石材について検討してみた。当地域ではサヌカイト製打製石包丁が中期を中心に隆盛しつつも、いくつかの遺跡では非サヌカイト系磨製石包丁の利用が卓越する。そのような遺跡から、さらに赤田東遺跡のような小集落へも少量ながら磨製石包丁が流通したのであろう。非サヌカイト系磨製石包丁の製作跡は岡山北部地域で調査されており、集落内における石器製作の実態が明らかにされつつある（佐藤1998・米田2004）。岡山北部地域の集団が自給の規模を越えて磨製石包丁を製作し、一部が岡山南部に流通していたのかどうかは、石包丁の型式や石材等の検討が必要である。また、岡山南部地域における磨製石包丁の一定保有はすでに各報告書の中で指摘されており（久保1998・平井1999）、いずれも岡山北部地域の集団との関係を想定している。

才地遺跡では、磨製石包丁の他、一つの竪穴住居からサヌカイトの剥片が集中して出土している

（下澤・玉木編2004）。18点の剥片の総重量は約2795ｇとなる。剥片には接合関係がみられない点から、連続剥離によってこれらの剥片が生産されたと考えるより、剥離によって生じた剥片のうち、器種の素材として利用しうるものをピックアップして集積したものと理解したい。集積行為の目的が集落内における将来の石器製作にあった可能性がないわけではない。しかし、遺跡の位置と磨製石包丁の比率を考慮すれば、岡山北部地域から磨製石包丁の搬入と岡山北部地域へのサヌカイト搬出のあり方として、このような遺跡が想定できうるのではなかろうか。

岡山南部地域の各集落における磨製石包丁の製作の規模や内容は十分に明らかにされておらず、岡山北部地域と共に、隣接する播磨・備後地域を視野に入れた検討が待たれる。

4）まとめ

岡山地域の弥生時代中期を中心として、サヌカイトを軸としながら石材利用のあり方について検討を行った。ここでその内容をまとめておきたい。

岡山南部地域における石器石材の搬入状況について、各遺跡の重量比を比較した。赤田東遺跡では少なくとも４kg弱のサヌカイトを搬入して石器製作を行っていた点を明らかにした。その搬入量は、他の遺跡に比べて少ない傾向があるものの、石器群のあり方としてはこの地域の一般的な様相を呈しているものと思われる。

板状剥片は主として30～50㎞の範囲に濃密に分布し、持ち込まれる板状剥片の重量は、単体で２kgを越えない点を明らかにした。また、各遺跡から出土する板状剥片の保有のあり方に隔絶した違いを見出しがたい点から、サヌカイトの獲得と消費は基本的に各集落単位であった点を確認した。

サヌカイト製打製石包丁の比率は原産地から離れるほど低くなり、代わりに非サヌカイト系石材の利用比率が高まる傾向があり、そのような傾向を示しつつも、岡山南部地域のいくつかの遺跡では非サヌカイト系石材を利用した石包丁の比率が卓越することを指摘した。それらの遺跡を軸として、各集落に磨製石包丁が流通していたことが、磨製石包丁集中保有の背景としてあったと推測できる。しかし、弥生時代中期の岡山南部地域では、磨製石包丁を伴う遺跡は必ずしも多いとはいえず、ここでは流通網の存在をはっきり指摘することはできない。この点は資料の増加を待って改めて検討する必要がある。とはいえ、岡山地域の石器・石材の流通には、サヌカイトと磨製石包丁という、少なくとも２つの異なる流通網の存在が想定できる余地があり、赤田東遺跡の石器群もそのような流通網を背景として残されたものと考えたい。

以上、赤田東遺跡出土の石器を理解するなかで、岡山南部地域を中心に弥生時代中期における石器石材の利用・流通のあり方を検討してみた。分析がサヌカイト製石器に偏ってしまい、磨製石器の十分な検討に及ぶことができず、また、サヌカイトの原産地である香川地域の遺跡と比較することができなかった。これらの点を含めて、本章で挙げた課題は稿を改めて今後検討してみたい。

註

1）包含層などから出土した石器を含んでいるが、定形的なものについては弥生時代の石器として扱っている。剥片・砕片の区別は、1㎝未満のものを砕片とし、それより大きいものを剥片として扱う。

2）以下、サヌカイト以外の石材（ヒン岩・流紋岩・頁岩など）を非サヌカイト系石材と表現する。

3）搬入量のカウントは、文末に掲げた報告書・論文に依拠した。剥片・砕片の重量が記載されていないものは器種の重量の合計を搬入量として扱っている。

4）単体で200gを越える資料を便宜的に取り上げている。原産地からの距離は、直線距離を示してあるので、地勢等のコストを勘案すれば必ずしも流通の実態を反映しているとはいえない。グラフ中の番号順に出土遺跡を示す。

1・9・11・14・27・33・34菅生小学校裏山遺跡、2・5・7・16・21南溝手遺跡2、3・10・12・20・26百間川原尾島遺跡5、13・35百間川原尾島遺跡4、5・8百間川今谷遺跡1、4・6加茂政所遺跡、15・18・29用木山遺跡、17矢部堀越遺跡、19中撫川遺跡、22・24窪木遺跡2、23・37清水谷遺跡、25・31・32津寺遺跡2、28矢部奥田遺跡、30・38才地遺跡、36田益田中遺跡、39高松原古才遺跡、40高屋B遺跡、41・42久田原遺跡、

5）板状剥片の重量が1kg以上であるということは竹広が指摘している（竹広2003）。

6）板状剥片等の保有形態は、出土した資料を基に推定しているので、遺跡内で消費された板状剥片を考慮すれば、保有された板状剥片が実際はもっと多かった可能性は十分ある。

7）板状剥片の分布は岡山南部地域に限定されるわけではない。岡山北部地域の久米廃寺（栗野1978）や男戸嶋遺跡（安川1999）などで存在が指摘されている（竹広2004）。また、鳥取県青谷上寺地遺跡では金山産サヌカイトの可能性のある約1kgの板状剥片が出土している（湯村編2002）。恒常的な流通かどうかは別にして、板状剥片が広域にわたって分布していることは間違いない。

8）全ての石包丁がサヌカイト製打製石包丁または非サヌカイト製磨製石包丁のどちらか一方で構成される遺跡は除外してある。

グラフ中の番号は以下の遺跡を示している。

1百間川兼基2・今谷2、2津寺遺跡、3矢部奥田遺跡、4高下遺跡、5菅生小学校裏山遺跡、5加茂政所遺跡、6赤田東遺跡、7南方遺跡、8用木山遺跡、9南溝手・窪木遺跡、10才地遺跡、11大畑遺跡、12田益田中遺跡、13久田原遺跡、14一貫西遺跡

9）その他、用木山遺跡は比率でみると8割近くサヌカイトが占めているものの、実数をみると45点もの珪質頁岩製石包丁を保有している。その内19点は打製石包丁である。珪質頁岩の原石が出土している点から、遺跡内で石包丁を製作していたと考えられる。従って、岡山南部の遺跡では、非サヌカイト系石材を利用した石包丁をまったく製作していなかったということにはならない。しかし、現在まで、岡山南部地域において、磨製石包丁が出土した遺跡の多くで製作の痕跡が明らかにされてないということもまた事実である。

10）南溝手・窪木遺跡では、使用痕のある石錐が出土しており、遺跡内で石包丁の穿孔が行われた可能性が指摘されている（久保1998）。

参考文献

久保恵理子1998「南溝手遺跡・窪木遺跡出土の石器・石製品」平井泰男編『窪木遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124　岡山県教育委員会

佐藤寛介1998「第9章　考察とまとめ　2．弥生時代の石器について」　岡本寛久編『太田茶屋遺跡2　太田障子遺跡　太田大正開遺跡　太田西奥田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129　岡山県教育委員会

高田浩司2001「吉備における弥生時代中期の石器の生産と流通」『古代吉備』第23集

高田浩司2002「中部瀬戸内と畿内の打製石剣　－その経済的側面と観念的側面－」『考古学研究』第49巻第1号

竹広文明2003『サヌカイトと先史社会』渓水社

竹広文明2004「山陰日本海沿岸地域における弥生時代のサヌカイト原材　－鳥取県青谷上寺地遺跡出土石器類をめぐって－」『考古論集　－河瀬正利先生退官記念論文集－』河瀬正利先生退官記念事業会

平井勝1991『弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社

平井勝1996「岡山県南部の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成1　近畿（大阪・兵庫）・中国・四国』国立歴史民俗博物館資料調査報告書7　国立歴史民俗博物館

平井勝1999「田益田中遺跡のまとめ（３）石器の組成」柳瀬昭彦編『田益田中（国立病院）遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告141　岡山県教育委員会
平井典子2002「石製武器からみた弥生時代の吉備南部と畿内」『環瀬戸内海の考古学　－平井勝氏追悼論文集－　上巻』古代吉備研究会
松本和男・森田友子1983『福田Ａ遺跡・高屋Ｂ遺跡』落合町教育委員会
安川豊史1996「岡山県北部の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成1　近畿（大阪・兵庫）・中国・四国』国立歴史民俗博物館資料調査報告書７　国立歴史民俗博物館
米田克彦2004「山ノ奥遺跡における弥生時代中期の石器生産」山磨康平編『山ノ奥遺跡、池東・迫田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告180　岡山県教育委員会

遺跡
浅倉秀昭編1993『山陽自動車道建設に伴う発掘調査６』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82　岡山県教育委員会
江見正己編2004『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184　岡山県教育委員会
大橋雅也編1995『津寺遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98　岡山県教育委員会
神原英朗編1977『用木山遺跡』岡山県山陽町教育委員会
久保恵理子1998「南溝手遺跡・窪木遺跡出土の石器・石製品」『窪木遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124　岡山県教育委員会
亀山修一編1996『津寺遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104　岡山県教育委員会
栗野克己1978「久米廃寺」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査報告　補遺編』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24　岡山県教育委員会
下澤公明・玉木秀幸編2004「才地遺跡」『八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡・岡遺跡・小坂古墳群・才地古墳群・才地遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告178　岡山県教育委員会
高畑知功1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51　岡山県教育委員会
内藤善史1997「高下遺跡」『高下遺跡・浅川古墳群ほか・楢原古墳群・根岸古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123岡山県教育委員会
中野雅美1993「菅生小学校裏山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81　岡山県教育委員会
中山俊紀1982『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集　津山市教育委員会
平井勝・岡本寛久1995『百間川原尾島４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97　岡山県教育委員会
平井泰男編1996『南溝手遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107　岡山県教育委員会
平井泰男編1998『窪木遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124　岡山県教育委員会
平井泰男・弘田和司・柴田英樹編1999「加茂政所遺跡」『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138　岡山県教育委員会
米田克彦編2004『樋ヶ鼻遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告183　岡山県教育委員会
安川豊史編1999『有元遺跡　男戸嶋遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集　津山市教育委員会
柳瀬昭彦編1996『百間川原尾島遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106　岡山県教育委員会
山磨康平編2004『山ノ奥遺跡　池東・迫田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告180　岡山県教育委員会
行田裕美1990『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集　津山市教育委員会
行田裕美1993『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集　津山市教育委員会
湯村功編2002『鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡４』鳥取県教育文化財団調査報告書74　（財）鳥取県教育文化財団

附　章

附章１　赤田東遺跡出土サヌカイト製石槍の石材産地について

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

１．はじめに

赤田東遺跡出土の弥生時代中期のサヌカイト製石槍は、肉眼観察(1)で大阪府二上山産のサヌカイトを使用していることが想定されている。そこで、この石槍が二上山の原石を用いているか、理化学的な分析法により調べた。

分析は蛍光Ｘ線分析法で、サヌカイトに含まれている成分（元素）の定量値を測定し、その成分量の違いから石材の産地を推定する方法である。また、この分析法は黒曜石製石器では形状を変えることなく非破壊で分析することができるが、サヌカイト製石器では表面の風化状態により、正確で定量的な測定が困難な場合がある。今回の石槍は遺跡内での保存状態が良好だったのか、表面が非常に新鮮な状態であった。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計SEA2010L（セイコーインスツルメンツ株式会社）を用いて分析した。

２．分析結果

分析した石槍の成分値を第１表に示している。肉眼観察では石槍の表面が新鮮な状態であるが、実体顕微鏡により、できるだけ新鮮と思われる部分を４カ所選定し測定した。

産地推定方法は、測定できた10元素（Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P）の中からサヌカイトの原産地間で違いのある元素を用いて、ＸＹ散布図を作成し産地推定を試みた。その結果、特にTi、Fe、Kの各元素に違いがあることから、Fe／Ti比とK／Ti比をとり、散布図により検討した。

第１図 Fe／Ti－K／Ti散布図は、香川県の金山東・国分台・蓮光寺、広島県の冠高原、鳥取県の麻畑、大阪府二上山の大きく４つの地域のサヌカイト原産地の分布範囲を示している。そして、この原産地分布範囲図に赤田東遺跡出土の石槍をプロットすると、測定した４カ所の分析値は、二上山およびその付近に分布した。このことより、石槍に使用されているサヌカイトは二上山産と推定される。

蛍光Ｘ線分析法による非破壊分析は、試料の表面を測定するため、同一の石器でも表面の風化度合いにより分析値にバラツキがみられる。今回の石槍の場合、風化がそれほど進んでいなかったが二上山の分布範囲からはずれるデータもあった。肉眼では観察不可能な風化状態なのかもしれないが、原産地である二上山原石の分析データ数が10点と少ないことで産地の分布範囲が狭いことも十分考えられる。今後の課題である。

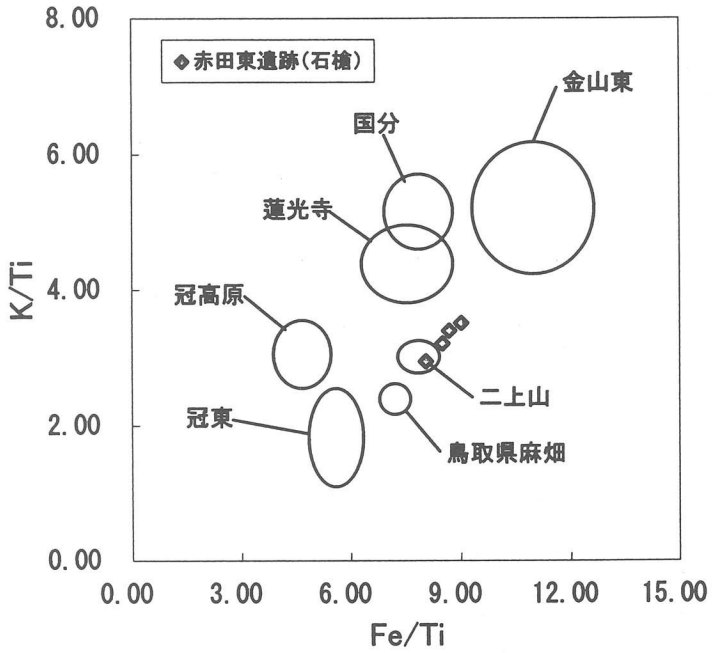
この分析の機会を与えていただいた草原孝典氏には、記してお礼申し上げます。

註

(1) 西田和浩氏の肉眼および石槍の製作技術の観察により二上山産と考えられている。また、次の文献でも二上山産と金山産のサヌカイトが識別が可能であることが述べられている。高田浩司　2002「中部瀬戸内と畿内の打製石剣－その経済的側面と観念的側面－」『考古学研究』第49巻第１号

測定箇所	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P
1	63.38	0.63	17.12	5.36	0.10	1.77	5.64	3.70	2.02	0.00
2	63.48	0.59	17.54	5.32	0.11	1.51	5.91	3.00	2.07	0.08
3	63.79	0.61	17.35	5.30	0.11	1.51	5.82	2.99	2.07	0.10
4	64.07	0.72	17.42	5.80	0.11	1.16	5.82	2.34	2.12	0.15

第１表　赤田東遺跡出土サヌカイト製石槍の分析値（%）



第１図　赤田遺跡出土サヌカイト製石槍の原産地推定

第２図　サヌカイト製石槍

附章２　柱根の樹種について

藤井裕之

赤田東遺跡から出土した柱根は、すべて掘立柱建物の柱材として使用されたものである。このうち、古墳時代後期の２例はカヤとコウヤマキ、古代の２例はいずれもヒノキ属の木材であった(1)。柱根の使用樹種と建物の構造や森林資源はどのようにかかわっているだろうか。赤田東遺跡の成果に加え、岡山県内の報告例についても検討してみよう。

県内の建物柱根出土遺跡（表）(2)

県内の原始・古代の遺跡において、建物の掘立柱の柱根が原位置で出土し、その樹種が判明している報告例は、４遺跡19例を数えることができる。縄文、弥生時代の例は、管見による限り見出せない。このうち、古墳時代の３例はすべて操山北麓に位置する百間川沢田遺跡の竪穴建物から出土した前期のものである。一方、古代の16例はすべて掘立柱建物の柱根であり、県南の津寺遺跡、窪木遺跡、県北の宮尾遺跡から出土している。また、県北の今岡廃寺ではトレンチ発掘の結果、何らかの掘立柱建物の一部と考えられる状況で、古代の柱根が５例出土している。さらに、発掘状況は明確ではないが、奈良時代の総社市秦原廃寺南門からも１例の出土が報告されている。

建物の柱材としては、以上のほかにも、高床建物の柱材に復原された津島遺跡出土の３例（弥生時代末～古墳前期、針葉樹あて材の１例を除きニヨウマツ類）(3)や、股木の部分に施された加工などを根拠に建築物の柱材として報告された二、三の例（コナラ、カシ類、カシワ、カツラなど広葉樹中心）があるが、原位置から遊離して出土しており、建物の構造を参照できないので、ここではとりあげない。

古墳時代

古墳時代の出土例は、赤田東遺跡を含め、操山北麓の狭い地域の２遺跡で出土したわずか５例にすぎない。時期や建物の種類のうえでも散発的であり、これだけで県内全般の様相を論じることはできない。しかし、この時期の集落における建物の柱材は、よほどの特別な事情がない限り長距離の移動は考えにくく、基本的には現地周辺で調達されている可能性が高い。柱根の樹種は、局地的な木材利用や、領有圏内における森林の蓄積状況を知る手かがりにはなるだろう。

操山北麓における古墳時代の柱根の樹種をまとめると、カヤ３点とアラカシ、コウヤマキ各１点が数えられる。このうち、カヤは前期の竪穴建物（百間川沢田）と、後期の掘立柱建物（赤田東）の両方で認められており、竪穴建物と掘立柱建物で柱材の使用樹種に区別があるようには思われない。柱根そのものの直径については、前者の柱根が著しく劣化しているようであり、比較しにくい。カヤは通直な幹を持つ針葉樹で、木材はやや重く硬いが、切削のしやすさや材の保存性は高く、水湿によく耐えるとされる(4)。掘立柱材としては、理想的な樹種の一つである。前期の竪穴建物で認められたアラカシは、切片観察による樹種同定の場合、アカガシ亜属と報告されるグループの樹木であるが、木材の耐朽性や切削加工のしやすさは、カヤなどに比べるとかなり落ちる(5)。竪穴建物の平面形をみると、カヤが出土した建物とアラカシが出土した建物はともに長方形プランであるが、前者が四本主柱、後者が二本主柱である点で異なっており、建物の部材架構のあり方が、柱材の樹

遺跡名	時代	樹種	出土建物の種類	直径(cm)	備考
百間川沢田	古墳(百・古・II)	カヤ	竪穴建物(四本主柱)	6	高縄手B調査区竪穴住居24 W 6
	古墳(百・古・II)	カヤ	竪穴建物(四本主柱)	9	高縄手B調査区竪穴住居24 W 7
	古墳(百・古・II)	アラカシ	竪穴建物(二本主柱)	23	横田調査区竪穴住居 4　西柱穴
赤田東	古墳後期(7c前半)	カヤ	掘立柱建物(側柱)	20	古墳建物 2　P 1010
	古墳後期(7c前半)	コウヤマキ	掘立柱建物(側柱)	12	古墳建物 9　P1387
	古代	ヒノキ属	掘立柱建物(側柱)	20	古代建物 6　P849
	古代	ヒノキ属	掘立柱建物(側柱)	20	古代建物 9　P1206
津寺	古代(前半)	ヒノキ属	掘立柱建物(総柱)	20-30	中屋調査区掘立柱建物22
	奈良時代	ヒノキ属	掘立柱建物(総柱)	15	中屋調査区掘立柱建物21
窪木	奈良ー平安前期	ヒノキ	掘立柱建物(総柱)	25-30	建物68-P12
宮尾	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30	建物 2 -No.5
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30	建物 2 -No.6
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30	建物 2 -No.9
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30	建物 2 -No.10
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30	建物 2 -No.13
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30	建物 2 -No.14
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30	建物 2 -No.16
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20前後	建物11-No.4
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20前後	建物11-No.9
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20前後	建物11-No.13
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20前後	建物11-No.14
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20前後	建物11-No.18
	7c-8c	ヒノキ	掘立柱建物(側柱)	20-30程度?	建物15-No.1
今岡廃寺	8c代	ヒノキ	掘立柱建物?	35	1区大形柱穴列P1
	8c代	ヒノキ	掘立柱建物?	32	1区大形柱穴列P2
	古代	ヒノキ	掘立柱建物?	18-20	1区柱穴列 5 -P1
	古代	クリ	掘立柱建物?	8-12	1区柱穴列 6 -P3
	古代	ヒノキ	掘立柱建物?	15-20	2区柱穴列 7 -P4
秦原廃寺	奈良時代	コウヤマキ	門	不明	南門

表　岡山県内の出土建物柱根一覧

種選択に影響している可能性もうかがえる。材の入手の点からみると、カヤ、アカガシ亜属は、ともに岡山平野周辺でごくありふれた樹種であり、身近な森から比較的容易に入手できたものと考えて差し支えないだろう。

古墳時代の柱根としてはあと１例、今回赤田東遺跡で出土した後期の掘立柱建物に伴うコウヤマキの出土がある。この樹種の木材も水湿に強い特性をもち、掘立柱材としては優れた材質である(6)。しかし、岡山県内の遺跡においては、弥生時代から古墳時代にかけての出土はこれまで散発的で、珍しい存在であった(7)。柱材のような現地性を強くうかがわせる状況でコウヤマキが出土したのは、県内では初めての例である。なお、赤田東遺跡のコウヤマキ柱材は、劣化が進んでいるが、観察した限りでは心去りの割材であり、規模も搬出に大掛かりな作業が必要なほどではない。

ヒノキは、古墳時代の柱根としては今回の集計に入らなかった。しかし、ヒノキもカヤなどと同様、弥生時代以来のありふれた樹種であり、岡山県内全体において、今後古墳時代の柱材として出土することが予想できる。

古代

県内の出土例は、津寺遺跡の建物に公的施設との関連が想定でき、宮尾遺跡の建物が郡庁の正殿および脇殿に比定されているなど、官衙寺院関連遺跡の例が主体である。

使用樹種は、秦原廃寺のコウヤマキ１例と今岡廃寺出土のクリ１例を除くと、すべてヒノキ（ヒ

ノキ属）である。いずれの樹種も、水湿に対する耐朽性には定評がある。このうちヒノキとコウヤマキは、どちらも通直な幹をもつ針葉樹であり、とりわけヒノキは木材の保存性や加工の容易さ、狂いが少ない点で材質的に優れており、コウヤマキの材質もヒノキと同等かそれ以上に位置づけられ、すでに述べたように水湿に対する保存性が非常に高い(8)。また、クリは比較的通直な幹をもつ広葉樹であり、切削加工はやや困難であるが耐朽性に非常に優れ、たとえば現在の鉄道枕木の場合、防腐剤を注入せず無処理のまま使用できる随一のものとされる(9)。

柱材の直径をみると、赤田東遺跡を除くと、おおむね直径20-30cm程度の円柱材が使用されているようであるが、今岡廃寺のクリ１例に関しては、同じ遺跡の中でみても、柱材の直径が他と比べて格段に小さい。建物の柱構成と樹種選択の関係はよくわからないが、官衙や寺院の場合、建物の規模によって使用樹種に違いがあった可能性も考えられるだろう。建物の規模の大きさが柱直径の大きさと結びついているとすれば、ヒノキの選択は、大木としての利用を期待されてのことかもしれない。コウヤマキもヒノキに準じて考えることができるだろう。

ところで、岡山県内の古代における掘立柱建物の柱材の樹種は、上記のクリの１例を除くと、主としてヒノキ、あるいはコウヤマキが選択されていたことになる。これは、都城遺跡で出土した柱根樹種の集計結果とも符合する(10)。都城官衙関連遺跡で出土した柱根の使用樹種は、地域ごとの植生を背景に、各地で樹種構成が変化していることが指摘されている(11)。岡山県内の出土例の場合、都城遺跡、とくに平城宮、藤原宮とその周辺地域の状況と掘立柱材の樹種選択が共通しており、加工技術や樹種選択に対する認識についての共通性もさることながら、入手可能なヒノキ、コウヤマキの蓄積状況についても、両地域でさほどの違いがなかったことを示しているだろう。

ただ、官衙や寺院の建設に要求される木材の寸法は大形で員数も膨大であり、その調達には比較的規模の大きい造営体制の介在を想定せねばなるまい(12)。調達の対象となった森林も、藤原宮周辺で資源が枯渇し、遠く滋賀県に求めねばならなくなったように、古墳時代集落の建物や古代の一般的集落における建物の場合よりも広い地理的範囲に及ぶ可能性に留意する必要がある。また、岡山県一帯では官衙や寺院の建設よりも先に製塩や製鉄が盛んになっており、燃料確保を目的とした森林収奪の進行も考慮すべき点である。とはいえ、奈良盆地周辺で律令期前後から発生するあまりに極端な建築ブームと同規模のことを岡山県内で想定できる状況にはないし、燃料として好まれた樹種と、建築材に適した樹種、または、それぞれの目的のために要求される材の大きさは互いに両立すると考えられる。岡山平野における弥生時代以降のヒノキに関する樹種同定結果や、一般的集落である赤田東遺跡で出土した古墳後期のコウヤマキ柱根の存在を重視すれば、いまのところ、出土遺跡から比較的近い範囲でも調達可能なほどのヒノキ、コウヤマキ資源の蓄積はあったと想定して差し支えないのではないだろうか。

コウヤマキの柱材は、2003年度に行われた岡山市賞田廃寺の発掘調査でも、掘立柱塀の柱として４本が出土している(13)。いまのところ、岡山県内における古代のコウヤマキ出土例は、寺院の外周施設を構成する柱材（５例）か、井戸枠材（５例）のどちらかとなる(14)。

さて、赤田東遺跡について振り返ると、古代の柱根はいずれもヒノキ属であり、１点が心持材、もう１点が心去りの割材であった。２点ともヒノキとすれば、上記の樹種選択状況の枠内で理解できる。ただし、一般的な集落と理解できる赤田東遺跡と他のヒノキ柱根が出土した遺跡とは、社会的性格の違いが明らかである。また、赤田東遺跡の柱根は、今岡廃寺のクリを除く県内の官衙寺院

関連遺跡の例と比べ柱直径が小さいようであり、どうしてもヒノキを選ばねばならなかった事情もあまり見えない。類例も少なく単純に比較できない状況にあるけれども、官衙寺院関連遺跡に見られる樹種選択のあり方が、技術的な要因よりも律令体制と深く関わっていたと仮定するならば、その影響が官衙や寺院の造営体制とも関連して、地域内での材供給方式の変化という形で一般集落の木材利用にも及んでいたという見方も可能であろうか。そうではなく、単に必要に応じて各集落で現地調達したという理解で済むのかどうか、出土例の増加を待って見極める必要がある。

まとめ

以上のように岡山県内の柱根出土事例を検討した結果、県一帯におけるヒノキ、コウヤマキの森林資源に関して、官衙や寺院が造営される前夜の蓄積状況を考える手がかりが得られた。しかし建物の構造と使用樹種のかかわりを知るには資料が少なく、掘立柱の用材におおむね水湿に強いとされる樹種が選ばれている点や、官衙や寺院では建物の規模によって柱材の樹種に違いがあった可能性を指摘できる点を除き、両者に特段の結びつきはみられなかった。

掘立柱の用材に水湿に強い樹種が選ばれる傾向にあることは、従来の全国的な集成研究でも指摘されてきた点であるが、岡山県内の出土資料からみても同様のことがいえたことになる。官衙や寺院の建物の規模によって柱材の樹種に違いがあった可能性については、根拠が今岡廃寺の例だけで全国的にも資料に乏しい。しかし、そこに木材の入手にかかわる造営時の個別の事情が反映されている可能性があり、樹種同定データをもって今後検討したい課題である。

さて、赤田東遺跡をはじめとする備讃瀬戸周辺地域や畿内などの一般的集落の建物は、7世紀前半ころに竪穴建物から掘立柱建物に急速に移り変わる。広瀬和雄氏は、畿内の古代集落におけるこの現象を説明するなかで、先学の見解を整理しつつ、その背景として多量の木材供給、建築技術の周知、掘立柱建物の居住傾向という3つの要因を挙げた(15)。今回検討した結果から、これらのうち木材供給の側面についてあえて言及すると、一般的集落に関連した古代の資料が2点に過ぎず、資料不足という一言に尽きる。

「多量の木材供給」が実態としてあったかどうかの検討を進めるためには、古墳時代および古代の、柱根を中心とした出土木材の報告例の増加を期待したい。その際、樹種同定結果の報告は基本的な項目として、併せて柱根の木口面（木材の繊維方向に対する横断面のこと）の断面形と年輪方向を観察記録することも必要だろう。木口面で観察できる年輪の方向は、柱材に使われた木材の原木の姿を反映しており、分割製材が行われいたかどうかも判断することができる。これのことが木材供給方式の分析にも、ある程度有効だと考えられるのである。また、ひとたび出土した柱根は取り上げて持ち帰るのが原則であろうが、保管場所の問題で出土した柱根を現場に残したままで撤収せざるを得ない場合でも、厚さ5㎝程度に輪切りにして持ち帰ることをおすすめする。現物が残り、うまく保管されていれば、樹種同定や木取りの証拠標本になるばかりでなく、丸木の表面が残っている場合には木の伐採時期の絞り込みや年輪年代の測定も可能な場合がある。数々の柱根がこのようにして網羅的に調べられることになれば、建物の建築の背景や個別の性格を考えるための興味深い材料も、同時にもたらさることになるだろう。

注

（1）藤井裕之2003「赤田東遺跡で出土した木材の樹種について」『岡山市埋蔵文化財センター年報２』pp.50-52

（2）県内の出土例に関する記載は、下記の報告書によった。
岡山県教育委員会1973『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第４集
岡山県教育委員会1985『百間川沢田遺跡２・百間川長谷遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第59集
葛原克人1987「秦原廃寺」『総社市誌』考古資料編pp.336-347
平井勝ほか1993『百間川沢田遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第84集
亀山行雄ほか1997『津寺遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第113集
平井泰男ほか1998『窪木遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第124集
佐藤寛介2002『今岡廃寺』大原町埋蔵文化財発掘調査報告第２集

（3）高畑知功ほか2003『津島遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第173集

（4）平井信二1996『木の大百科』朝倉書店

（5）注（4）文献

（6）注（4）文献

（7）注（1）文献

（8）注（4）文献

（9）岡田英男1984「古代建築に使った木」『普請研究』第８号pp.2-26
鈴木三男2002『日本人と木の文化』八坂書房
注（4）文献

(10) 島地謙・伊東隆夫編1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣
光谷拓実2004「柱根」『古代の官衙遺跡』「遺物・遺跡編pp.108-109

(11) 注（10）下段文献
注（9）上段文献

(12) 注（9）上段文献

(13) 岡山市教育委員会による発掘調査。樹種同定は筆者が実施。未公表資料。

(14) 注（1）文献

(15) 広瀬和雄1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集pp.29-110

附章３　赤田東遺跡と津島江道遺跡出土鉄関連遺物（製錬滓・鍛造剥片）の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己

概要

６世紀後半から７世紀初頭に比定される赤田東遺跡の住居跡と溝出土の３点の鉄滓を調査して、次の点が明らかになった。

３点の鉄滓は、いずれも鉱石製錬滓の炉底塊である。錆化鉄含みで、鍛冶原料鉄割出しの残滓の可能性をもつ。化学成分的には、隣接する原尾島遺跡出土の製錬滓に近似する。６世紀後半代は高〔Cu〕系、7世紀初頭は中〔Cu〕傾向にある。(注1)

同じく、６世紀後半の津島江道遺跡出土の赤熱鉄素材の表面より飛散剥落した鍛造剥片の調査を行なった。剥片の0.5mm以上の厚手は鉄滓皮の擬似鍛造剥片であったが、0.3mm以下の剥片は鍛造剥片に認定できる。被膜構成は、三層分離型で、外層ヘマタイト、中間層マグネタイト、内層非晶質のウスタイトとなり、鍛冶鍛打作業の後半段階の派生物である。また、擬似剥片の鉱物組成はウスタイト凝集で、鍛冶作業の沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓に分類できて、共伴遺物である。剥片出土の竪穴住居跡５は、焼土面の鍛冶炉を設けた鉄器製作遺構と見做される。平根・方頭式鉄鏃の出土は、現地製作品の可能性は頗る高い。

１．はじめに

赤田東遺跡は、岡山市赤田に所在し、弥生時代から古墳・古代・中世へわたる複合遺跡である。当遺跡は旭川東岸に位置し、律令制下の上道郡に属し、幡多廃寺（白鳳期創建）の母体となった集落と考えられて、各種の手工業的関連遺物の出土がある。そんな中の鉄滓（住居跡や溝床面直下）を通して、当時の鉄生産の実態を把握する目的から、金属学的調査の運びとなった。

一方、津島江道遺跡は、岡山市東津島の所在で旭川西岸側の三野郡となる。当遺跡内の５軒の検出竪穴住居跡の中の１軒から鍛冶炉と共に、羽口破片や小鉄滓、更には微細遺物の鍛造剥片などが出土している。このうちの鍛造剥片狙いの調査を行った。

２．調査方法

２－１．供試材

Table.１に示す。赤田東遺跡は鉄滓３点、津島江道遺跡は剥片６点などの調査である。

２－２．調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μと1μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）で、フェ

ライト結晶粒は５％ナイタル（硝酸アルコール液）で、腐食(Etching)している。

(3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）、：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果

３－１　赤田東遺跡出土品

（１）AKT－１．炉底塊（製錬滓）；６世紀後半

平面は不整台形を呈する炉底塊（製錬滓）破片で775ｇを測る。全体が黄褐色の酸化土砂に覆われるが、僅かに覗く滓の色調は、暗灰色地に緻密質な肌をもち、気孔は少ない。これに茶褐色の錆化鉄粒が散在する。更に30mm程の木炭痕を刻む。

Photo. 1の①～③に顕微鏡組織を示す。①②の灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）と微小白色粒状樹状晶のウスタイト（Wüstite：FeO）が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。淡灰色盤状結晶の硬度測定の圧痕が②である。値は817Hvが得られた。ファイヤライトの文献硬度値は600～700Hvの範囲が提示されている。(注2) 今回の測定値は大幅にズレていて風化による異常値である。③の淡灰色粒状結晶は、鉄粒の錆化物を示す。未凝集のフェライト（Ferrite：純鉄、α鉄）で該品は含鉄炉底塊である。鉄塊割り出しの残滓であろうか。ファイヤライト主体の鉱物組成の晶癖は、磁鉄鉱石の製錬滓の晶癖である。

Table. 2に化学組成を示す。鉄分が40%以下で製錬滓傾向をもつ。全鉄分（Total Fe）は39.10%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.13%、酸化第１鉄（FeO）20.91%、錆化鉄含みで酸化第２鉄（Fe_2O_3）32.48%と高い割合である。ガラス質成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は38.43%と高めで、このうちに塩基性成分（$CaO + MgO$）を12.16%を含む。酸化マグネシウム（MgO）の11.76%は希にみる高さである。高Mg傾向の要因は鉄鉱石の脈石に滑石類（$3MgO \cdot 4SiO_2 \cdot H_2O$）の影響であろうか。赤磐郡熊山町所在の猿喰遺跡出土の磁鉄鉱で９～13%MgOの数値が得られていた。ただし、製錬滓では＜2.0ｇMgOの変測傾向を呈した。(注3)

次に砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は0.10%、バナジウム（V）0.01%は少なく砂鉄原料は否定される。酸化マンガン（MnO）0.18%、銅（Cu）の0.16%は高め傾向で磁鉄鉱側の成分値を実証する。鉄に有害な硫黄（S）は0.02%と低めであるが、五酸化燐（P_2O_5）の0.54%は少々気になる数

値である。

（2）AKT－2．炉底塊（製錬滓）：7世紀初頭

こちらも平面が不整台形状で、少々小振りの炉底塊である。重量は204gを測る。上下面と隅丸状の側面は生きるが、残る側面の2面は直線状の破面となる。上面は茶褐色の酸化土砂に覆われ、鉄錆混じりで金属鉄の内蔵の痕跡だろう。破面からみた滓は、灰褐色で、中小の気孔が少量散存するが緻密質である。下面側は灰白色の炉床土と木炭の噛込みが2ヶ所に残る。

Photo.1の③～⑤に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は灰色盤状結晶のファイヤライト主体で、これに白色粒状樹状晶のウスタイトが少量暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。こちらも鉱石製錬滓の晶癖である。⑤は白色粒状結晶の硬度測定の圧痕で、値は479Hvとウスタイトの文献硬度値の範囲内（450～500Hv）に収まる。また⑥は灰色盤状結晶の硬度測定で653Hvが得られた。こちらも同じくファイヤライトの文献硬度値の中に入っている。

次に化学組成をTable.2に示す。前述したAKT－1炉底塊に比べると鉄分高めとなり、マグネシウムや銅は低めとなる。全鉄分（Total Fe）は47.87%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.15%、酸化第1鉄（FeO）54.58%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）7.57%の割合であった。ガラス質成分は35.57%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）を5.65%を含む。砂鉄特有成分も少なくて、二酸化チタン（TiO_2）0.21%、バナジウム（V）0.01%以下、酸化マンガン（MnO）0.14%などはAKT－1炉底塊と大差ない。銅（Cu）は0.05%と少なくて、有害元素の硫黄（S）0.01%以下、五酸化燐（P_2O_5）も0.38%留りであった。やはり該品も磁鉄鉱石を製鉄原料とした製錬滓に分類される。

（3）AKT－3．炉底塊屑（製錬滓）：6世紀後半

平面が不整三角形状で菱実（ひしのみ）程度の炉底塊屑（7g）である。全面が黄褐色から灰白色の酸化土砂に覆われる。局部的に茶褐色の錆化鉄痕跡を残す。なお酸化土砂には白色礫や淡緑色ガラス質状の異物を2次的に固着する。一見ガラス質含鉄滓に見誤る外観であった。

Photo.1の⑦に顕微鏡組織と硬度圧痕の兼用を示す。鉱物組成は灰色盤状結晶のファイヤライトと、右側淡灰白不定形の錆化鉄（ゲーサイト：α－FeO・OH）で構成される。ファイヤライトの硬度値は709Hvであった。文献硬度値は600～700Hvで上限を僅かに上回るがファイヤライトに同定される。該品は磁鉄鉱石を始発原料とした製錬滓の晶癖と見做される。前述したAKT－1炉底塊と同系の可能性が高い。

小結

赤田東遺跡出土の鉄滓3点は、磁鉄鉱石を原料とした製錬滓であった。鉱物組成はファイヤライト主体で占められる。また、化学組成的には6世紀後半代は高〔Cu：0.16%〕系、7世紀初頭は中〔Cu：0.05%〕系、この傾向は隣接する原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）出土の精錬鍛冶滓や精錬滓の成分値に近似する。なお、赤田東遺跡の住居跡から出土した炉底塊の存在理由は、含鉄痕跡から荒鉄（製錬生成鉄で表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の小割り、鉄粒（塊）抽出により派生した残滓の可能性が一つ提示できる。筆者は遺跡内出土の鉄滓の全体像を掴みきっていない。後日再検討の必要も生じよう。

3－2　津島江道遺跡出土品

（1）TSE－1．鍛造剥片 (注4)

TSE－1－1．擬似鍛造剥片：44×43×0.7mm

0.7mmと厚手で大きく彎曲した剥片である。表面は光沢質の銀灰色で肌は平滑、裏面は淡灰褐色の酸化土砂が広範囲に固着する。地は無光沢の黒灰色で微細な気孔が散在する。鍛冶滓の皮であろう。鍛造剥片は、赤熱鉄素材の酸化膜であり、これが鍛打によって飛散剥落したものを指す。該品は肉厚で平坦性に欠け、裏面に微細な気孔を発するなど、鍛造剥片の基本的区分から外れた剥片であった。

顕微鏡組織をPhoto. 2の①～⑤に示す。被膜構成は一応3層分離型を呈し、外層ヘマタイト（Hemartite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、内層ウスタイト（Wüstite：FeO）、となる。内層ウスタイトは粒状凝集して、王水腐食（etching）で結晶粒界がより鮮明化する。①の断面組織の厚みは0.3～0.6mmまでの変動をもち、鍛造剥片としての平坦性が認められない。

（2）TSE－1－2．擬似鍛造剥片：49×33×0.5mm

0.5mmと厚手で平坦度を保つ剥片である。表裏面共に微細な凹凸をもち、平滑肌である。色調は表面が光沢質の黒灰色、裏面は無光沢質黒灰色で、破面に微細な気孔を発す。該品も気孔の発生から鍛錬鍛冶滓の皮が想定されて、鍛造剥片は否定される。

Photo. 2の⑥～⑧に顕微鏡組織を示す。こちらも被膜は3層分離型で内層ウスタイトは明瞭に現れた。ウスタイト晶出状況は、沸し鍛接鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（3）TSE－1－3．擬似鍛造剥片：49×25×0.5mm

0.5mmを測る厚手で平坦な剥片である。ただし、厚みは0.2～0.5mmまでの片減りをする。表面は光沢質の銀灰色、裏面は淡茶褐色の酸化土砂を付着するが地は無光沢の黒灰色を呈する。また、外観写真でみられる割れ口側面は鋸の歯状のギザギザで、鍛造剥片特有の直線状を欠く。肉眼観察からは鉄滓の皮とみておく。

顕微鏡組織をPhoto. 3の①～③に示す。②の厚み方向全体を観察すると、全体がウスタイト凝集鉱物相で埋まる。③の表層拡大では、白色外層ヘマタイトの微厚層が切れ切れに点列する内側に中間層のマグネタイトは存在し、一応は3層分離型の被膜構成をとる。しかし、前述した外観観察のように鍛造剥片らしく見えるが、擬似剥片としておく。

（4）TSE－1－4．鍛造剥片：41×42×0.25mm

0.25mm厚みの平坦な剥片である。表面は微細な凹凸をもち灰白色、裏面は無光沢の黒灰色を呈し、平滑肌を有する。肉眼観察的に鍛造剥片と認定できる。

顕微鏡組織をPhoto. 3の④～⑧に示す。剥片の被膜構造は3層分離型であるが、風化を受けて局部的に侵食孔を生じる。王水腐食（etching）で3層分離型が明瞭化した⑧の組織について述べる。微厚白色外層ヘマタイトは、厚みが不均一ながら鮮明に観察されて、中間層のマグネタイトも黄変し、内層ウスタイトとの分離区分もしっかりと捉えられた。内層ウスタイトは、凝集から非晶質へと移行過程での被膜である。鍛冶作業は鍛打が仕上げに近い段階での派生物であろう。ただし、表面の波状凹凸を生じ、平坦性を欠くのは何故であろうか。

（5）TSE－1－5．鍛造剥片：39×23×0.18mm

0.18mmとやや薄手で平坦な剥片である。表面は平滑で光沢質の銀灰色を呈し、いわゆる酸化膜（テンパーカラー）を感じさせる。裏面は全面に淡褐色の酸化土砂が固着して基地の観察は不可能だった。該品は表面の色調と感触から鍛造剥片に認定できた。

顕微鏡組織をPhoto. 4の①～⑤に示す。被膜構成は3層分離型の鍛造剥片である。外層は微厚ヘマタイトがほぼ直線状に発達し、中間層マグネタイトは健全で、内層ウスタイトとの分離も鮮明に捉えられた。また、内層ウスタイトは非晶質となり、鍛打作業の後半の派生物に分類できる。なお、裏面の最表層は酸化土砂の固着により深く侵食されて鋸歯状の肌荒れを起す。

（6）TSE－1－6．鍛造剥片：40×33×0.13mm

0.13mmと薄手で平坦な剥片である。表面は光沢質の銀灰色、裏面は無光沢の黒灰色、両面ともに平滑肌を呈し、鍛造剥片の代表的色調をしている。

顕微鏡組織をPhoto. 4の⑥～⑧に示す。こちらも被膜構成は3層分離型である。外層ヘマタイトは明瞭に生成し、中間層のマグネタイトは薄く、内層ウスタイトは非晶質側に傾く。該品も鍛冶作業の後半段階で派生した鍛造剥片と認定できる。

小結

鍛冶炉周辺より微細遺物の鉄滓皮（0.5～0.7mm厚み）と共に、厚み0.3mm以下の剥片が採取された。鉄滓皮は鉱物相に凝集ウスタイトを晶出し、沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓の晶癖に分類できる。これに連動する鍛打作業では、赤熱鉄素材の酸化膜が飛散剥落する。この酸化膜外観は、平坦度を保ち、光沢質の銀灰色を呈す。また、被膜構成は鍛造剥片の3層分離型で、外層ヘマタイト、中間層マグネタイト、内層ウスタイト（非晶質化）で構成される。剥片は鍛錬鍛冶作業を実証する鍛造剥片と認定できる。

4．まとめ

赤田東遺跡と津島江道遺跡出土の古墳時代後期に比定される鉄関連遺物の調査を行った。各遺物の調査結果のまとめをTable. 3に示す。

旭川東岸に位置する赤田東遺跡の一帯は、沖積平野にもかかわらず鉄生産の痕跡を残す。赤田東遺跡出土の3点の鉄滓は、鉱石製錬滓の炉底塊であった。6世紀後半代に属する2点の炉底塊は、含鉄傾向を呈し、高〔Cu〕系、7世紀初頭代の炉底塊は、中〔Cu〕系であった。この組成傾向は隣接する原尾島遺跡から出土した鉄滓にも当て嵌まる。

旭川西岸側には6世紀後半代の津島江道遺跡があり、ここから鍛冶工房跡が検出された。微細遺物の調査をしたところ、沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓としての鍛冶滓の皮と鍛打作業で派生した鍛造剥片が確認できた。鍛造剥片は3層分離型の剥片で外層ヘマタイト、中間層マグネタイト、内層は非晶質ウスタイトで構成されている。鉄鏃など鉄器製作を実証する遺物の出土である。

前述してきた赤田東遺跡・津島江道遺跡・原尾島遺跡などから出土した遺物をFig. 1の鉄生産工程の流れの模式図に当てはめて提示しておく。当地域は古墳時代の中期から鍛冶作業の確認ができ、古墳時代後期になると確実に鉄生産が開始されたことが読み取れる。

最後になったが岡山県下の高〔Cu〕傾向をもつ鉄滓は、高梁川水系の窪木薬師遺跡の6世紀後葉のものの一部にも認められる。(注8)　そうして岡山平野では7世紀以降になると、中〔Cu〕系以下の鉱石に、更には砂鉄へと変化してゆく。これら鉄鉱石の産地同定も今後に残された検討課題となる。

注

（1）大澤正己「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139）岡山県教育委員会　1999　Table.2の化学組成は紙面の都合からカットされ掲載されていない。

（2）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968.
磁鉄鉱（鉱石）は530～600Hv、ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ（Al）が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

（3）大澤正己「猿喰池遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『猿喰池製鉄遺跡』（熊山町埋蔵文化財発掘調査報告）岡山県熊山町教育委員会　2004

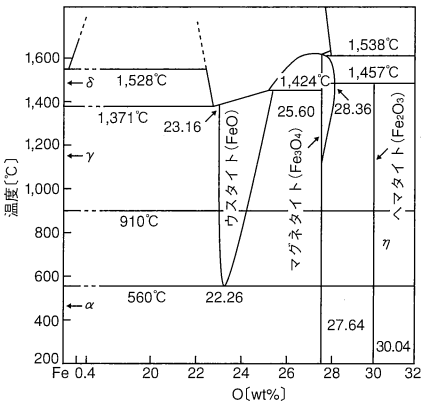
（4）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。更に鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗、選別、秤量により分布状況を把握できれば工房内の作業空間配置の手掛かりとなりうる。(注5)
鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ウスタイト（Wüstite：FeO）の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ウスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe－O系平衡状態図から説明される。
鍛造剥片を王水（塩酸3：硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）は黄変する。内層のウスタイト（Wüstite：FeO）は黒変する。
鍛打作業前半段階では内層ウスタイト（Wüstite：FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。(注6)鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。(注7)

（5）①大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告第13集）福岡県教育委員会　1991
②大澤正己「重留遺跡鍛冶工房跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『重留遺跡第4地点』～若園線住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告4～（北九州市埋蔵文化財報告書第303集）（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室　2003.3

（6）森岡ほか「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11　朝倉書店　1975

（7）大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘　年報15』（平成3年度）千葉県房総風土記の丘　1992

（8）大澤正己「窪木薬師遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『窪木薬師遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86）岡山県教育委員会　1993



Fe-O系平衡状態図

鍛造剥片３層分離型模式図

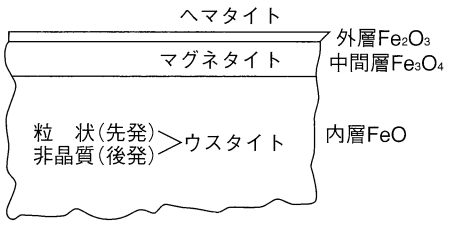
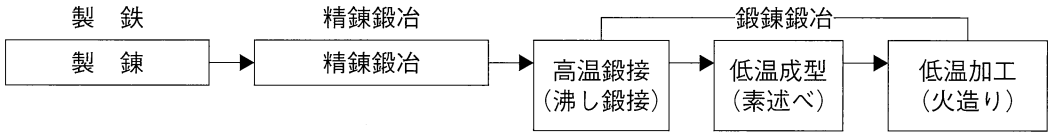


Fig.1　鉄生産工程の流れ一覧



鉄滓 鉱物相	鉱石	ファイヤライト	ウスタイト(マグネタイト)	ウスタイト	ファイヤライト	ガラス質スラグ
	砂鉄	ウルボスピネル※	ウスタイト(粒内Fe-Ti)	ウスタイト	ファイヤライト	ガラス質スラグ

※砂鉄製錬滓はTi含有により低い場合はウスタイト(粒内析出物のみ)、高い場合はウルボスピネル十イルミナイト、シュードブルーカイトなどが晶出する。

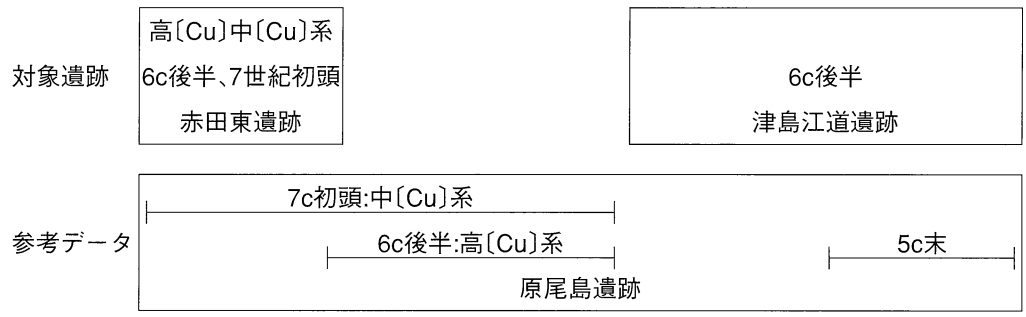


Table.1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回析	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
AKT-1	赤田東	住-1埋土	鉄滓	6c後半	126×88×78	755	なし		○	○			○			
AKT-2		溝10	鉄滓	7c初頭	71×56×40	204	なし		○	○			○			
AKT-3		住-5埋土	鉄滓	6c後半	26×20×14	7	なし		○							
TSE-1	津島江道	住5鍛冶炉周辺	鍛造剥片	6c後半	—	—	なし		○							

Table.2　供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第一鉄 (FeO)	酸化第二鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)*	酸化アルミニウム (Al_2O_3)*	酸化カルシウム (CaO)*	酸化マグネシウム (MgO)*	酸化カリウム (K_2O)*	酸化ナトリウム (Na_2O)*	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	造滓成分Σ*	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
AKT-1	赤田東	住-1埋土	鉄滓	6c後半	39.10	0.13	20.91	32.48	23.46	2.17	0.40	11.76	0.41	0.23	0.18	0.10	＜0.01	0.02	0.54	0.10	0.01	0.16		38.43	0.983	0.003	
AKT-2	〃	溝10	鉄滓	7c初頭	47.87	0.15	54.85	7.57	23.78	4.78	1.86	3.77	0.86	0.52	0.14	0.21	＜0.01	＜0.01	0.38	0.05	＜0.01	0.05		35.57	0.743	0.004	

原尾島遺跡出土遺物の分析

符　号	名　称	推定年代	T.Fe	Me.Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O	MnO	TiO_2	Cr_2O_3	S	P_2O_5	C	V	Cu	耐火度 (℃)	注
HRO-1	鉱石	7c	37.17	0.61	14.53	36.13	26.01	6.89	9.64	0.71	0.31	0.13	0.73	0.03	0.03	0.01	0.22	0.03	0.01	0.040		(1)
HRO-2	炉壁	7c	3.42	0.16	0.73	3.85	72.48	12.97	1.26	1.26	1.83	2.03	0.16	0.68	0.05	0.01	0.09	1.72	0.01	0.005	1230	
HRO-3	鍛冶炉炉壁	7c	4.39	0.13	2.35	3.48	64.44	17.17	1.64	1.81	2.06	2.27	0.16	0.81	0.04	0.01	0.40	2.12	0.01	0.005	1260	
HRO-4	炉底塊	7c	39.90	0.27	45.20	6.43	35.24	4.61	2.59	1.93	1.14	0.85	0.25	0.17	0.02	0.01	0.20	0.05	0.00	0.010		
HRO-5	製錬滓	7c	38.99	0.21	39.26	11.81	31.17	5.28	3.60	1.09	1.50	0.96	0.34	0.23	0.03	0.04	0.32	0.19	0.00	0.015		
HRO-6	羽口先端溶融物	7c	24.37	0.18	25.50	6.25	50.08	7.53	3.20	1.86	1.57	1.09	0.18	0.36	0.04	0.01	0.34	0.04	0.01	0.020		
HRO-7	羽口胎土	7c	4.46	0.18	0.59	5.46	64.62	19.64	0.45	0.47	1.85	0.40	0.05	0.55	0.06	0.01	0.38	4.62	0.00	0.001	1490	
HRO-8	精錬鍛冶滓	7c	41.13	0.23	35.25	19.30	26.77	4.97	3.22	1.53	0.95	0.54	0.49	0.26	0.02	0.03	0.32	0.13	0.00	0.015		
HRO-9	精錬鍛冶滓	7c	41.34	0.15	43.0	11.10	29.11	7.07	2.58	1.16	1.04	0.85	0.28	0.30	0.02	0.02	0.36	0.03	0.00	0.005		
HRO-10	精錬鍛冶滓	6c後半	43.46	0.18	42.09	15.10	25.39	6.05	2.05	2.28	0.92	0.73	0.29	0.28	0.03	0.04	0.43	0.08	0.01	0.130		
HRO-11	精錬鍛冶滓	6c後半	48.66	0.18	46.23	17.94	20.43	4.99	2.20	1.65	0.77	0.47	0.37	0.24	0.02	0.04	0.38	0.08	0.01	0.075		
HRO-12	鍛錬鍛冶滓	5c末	ガラス分の多い鉄滓……素伸延べ鍛接　鍛錬鍛冶滓　鉱物相：ファイヤライト(2FeO・SiO_2)主体に少量ウスタイト(FeO)の晶出																			

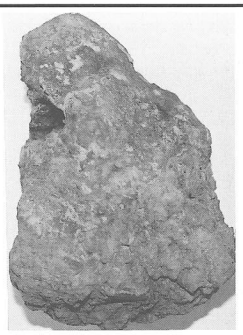
(1)大澤正己「原尾島遺跡(藤原光町３丁目地区)出土製鉄関連の金属学的調査」『原尾島遺跡(藤原光町３丁目地区)』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139)岡山県教育委員会1999。左の報告書には上記分析表の記載がない。

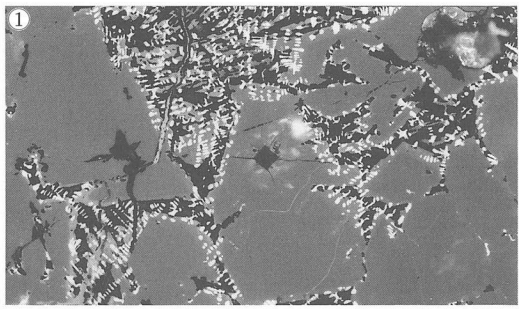
Table.3　出土遺物の調査結果まとめ

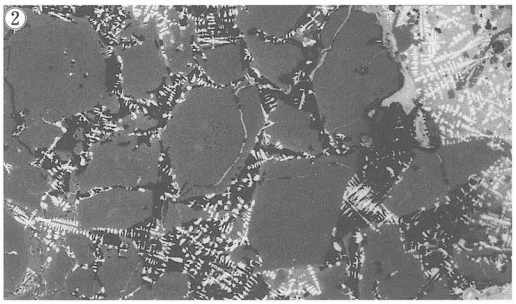
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成(%)								所　見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
AKT-1	赤田東	住-１埋土	鉄滓	6c後半	F十微小W十錆化鉄粒晶出	39.10	32.48	12.16	0.10	0.01	0.18	38.43	0.16	磁鉄鉱石原料の製錬滓(炉底塊)鉄塊割出し後の残滓か
AKT-2		溝10	鉄滓	7c初頭	F十微小W	47.87	7.57	5.63	0.21	＜0.01	0.14	35.57	0.05	磁鉄鉱石原料の製錬滓
AKT-3		住-５埋土	鉄滓	6c後半	F十錆化鉄	—	—	—	—	—	—	—	—	磁鉄鉱石原料の製錬滓(炉底塊)鉄塊割出し後の残滓か
TSE-1	津島江道	住5鍛冶炉周辺	鍛造剥片	6c後半	外層H、中間層M、内層W	—	—	—	—	—	—	—	—	0.5～0.7㎜厚手剥片：疑似鍛造剥片、 ＜0.3㎜の薄手剥片：鍛打後半段階の鍛造剥片

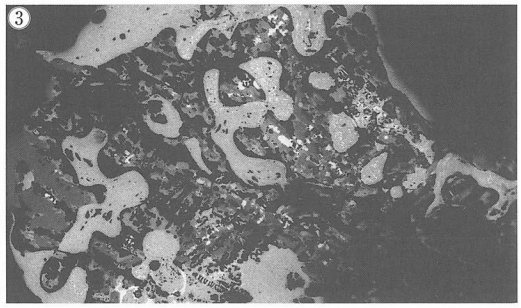
F：Fayalite(2FeO・SiO_2)，W：Wüstite(FeO)，H：Hercynite(FeO・Al_2O_3)，M：Magnetite(Fe_3O_4)

AKT－1
鉄滓（炉底塊）
①×200　硬度圧痕
ファイヤライト：817Hv
②×100
ファイヤライト+ウスタイト
③×100　錆化鉄

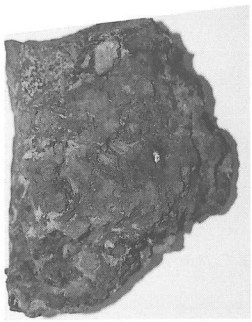


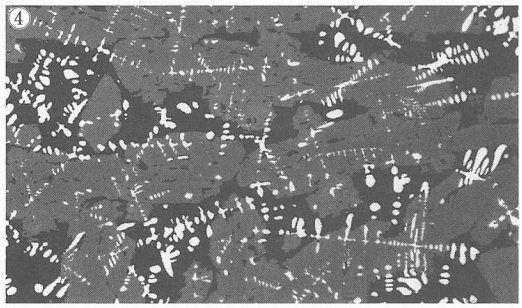


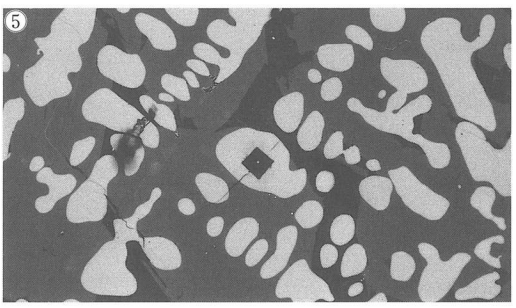


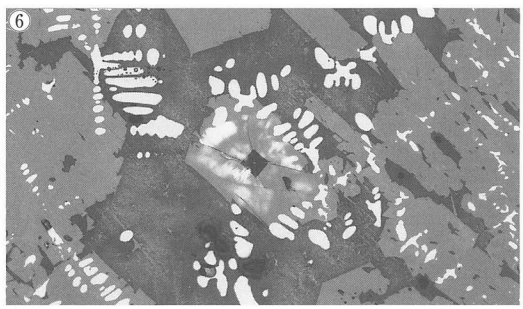


AKT－2
鉄滓（炉底塊）
④×100
ファイヤライト+ウスタイト
⑤⑥×200　硬度圧痕
⑤ ウスタイト：479Hv
⑥ ファイヤライト：653Hv

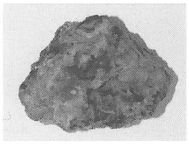








AKT－3
鉄滓（炉底塊屑）
⑦×200　硬度圧痕
ファイヤライト：709Hv
右側：灰色不定形は
錆化鉄



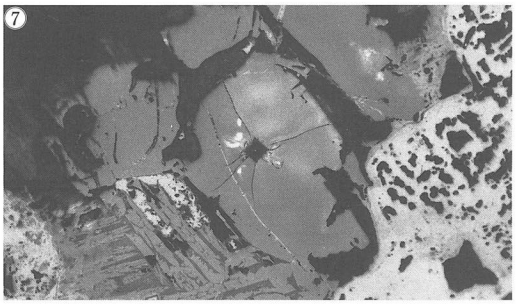
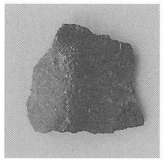
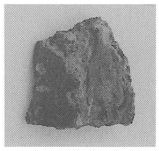
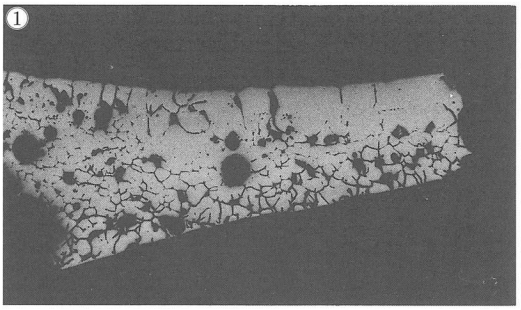


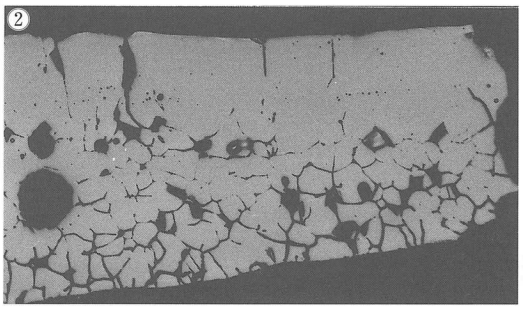
Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織

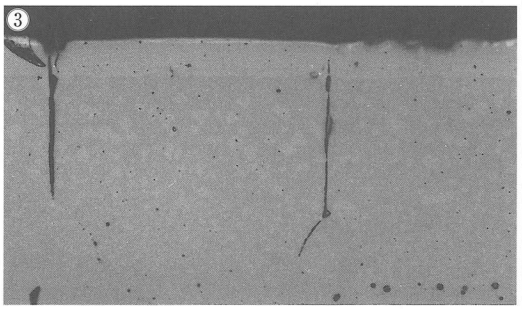
TSE－1－1
擬似鍛造剥片
①×50，②×100，③×400
no etch，ウスタイト
④×100，⑤×400
王水 etch
表層 ヘマタイト，中間層 マグネタイト，内層 ウスタイト
外観写真×4

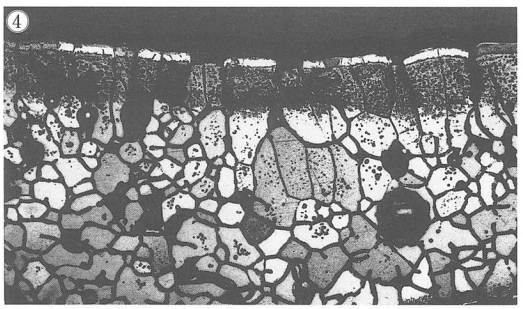


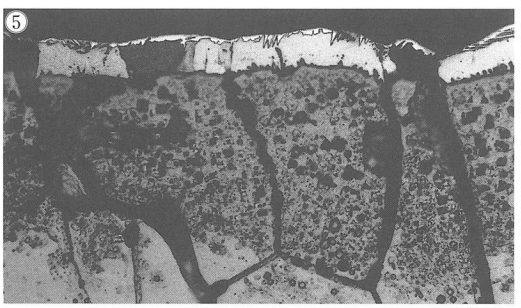




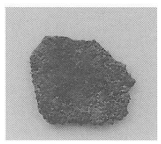


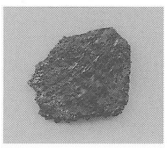


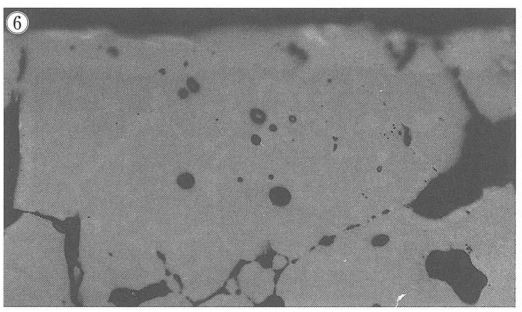


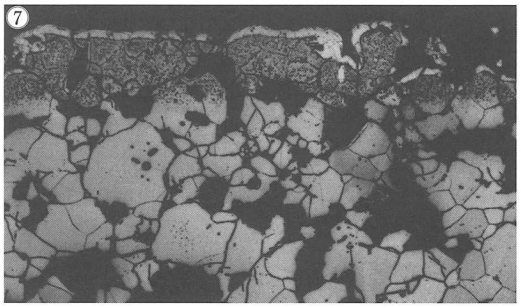


TSE－1－2
擬似鍛造剥片
⑥×400　no etch
⑦×100，⑧×400
王水 etch
表層 ヘマタイト，中間層 ヘマタイト，内層 ウスタイト
外観写真×4









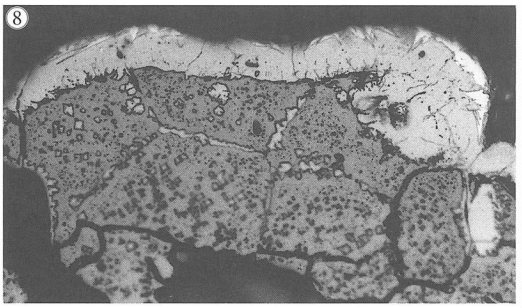


Photo. 2　擬似鍛造剥片の顕微鏡組織

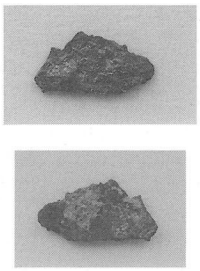
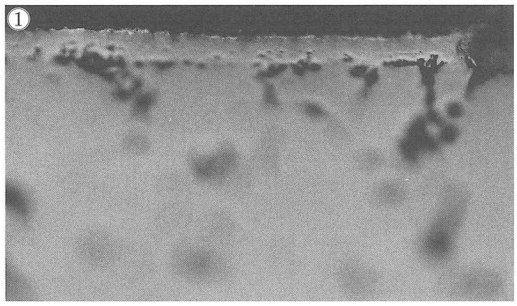
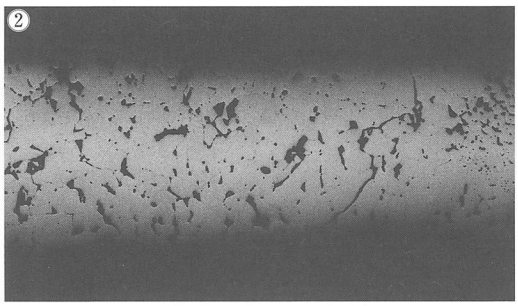
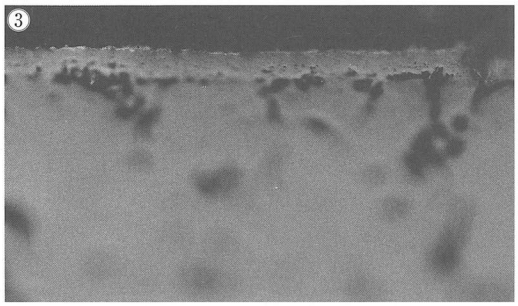
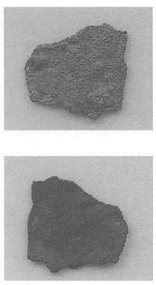
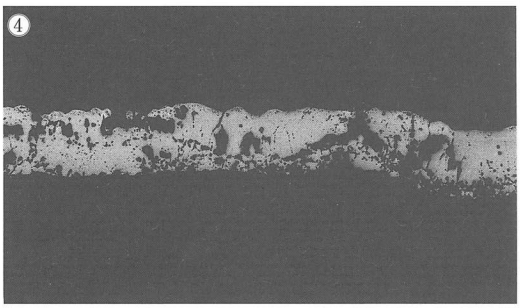
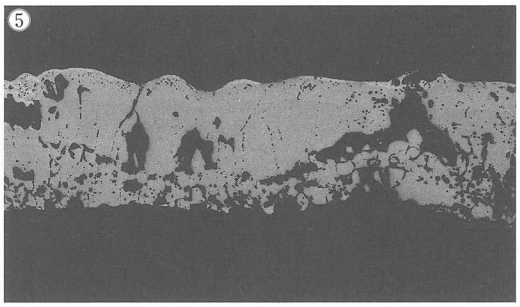
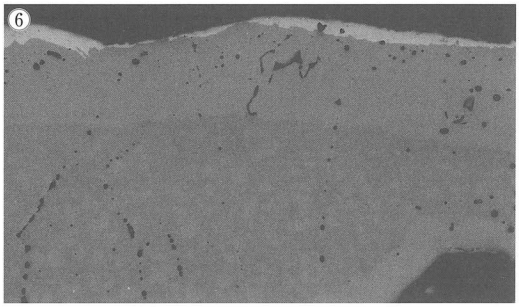
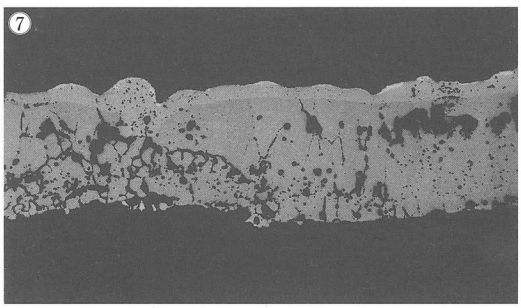
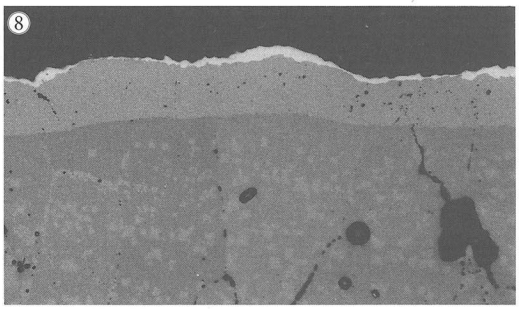
TSE－1－3 擬似鍛造剥片 ①×400　no etch ②×100，③×400 王水 etch 3層分離型の被膜構成，ただし内層ウスタイト凝集全面を占める。	 外観写真×4	
		
TSE－1－4 鍛造剥片 ④×50，⑤×100，⑥×400 no etch ⑦×100，⑧×400 王水 etch 3層分離型 (内層ウスタイト非晶質)	 外観写真×4	
		
		

Photo. 3　擬似鍛造剥片・鍛造剥片の顕微鏡組織

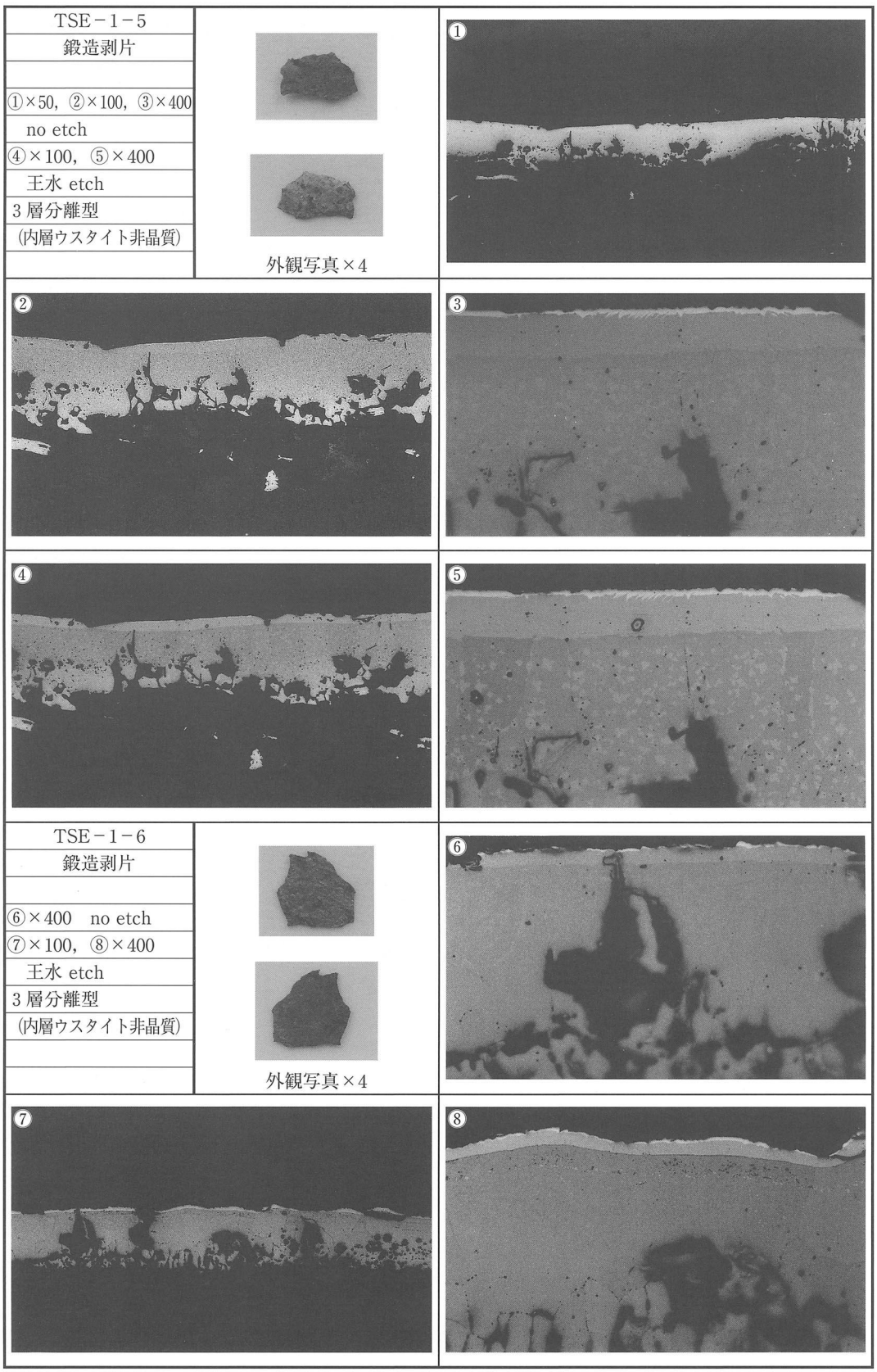


Photo. 4　鍛造剥片の顕微鏡組織